乃木大將景慕記念錄

下卷

鬼泣神

壯烈

大正二年夏題

尚敏書

遺墨淋漓泣鬼神李
公一意了天真休言國
亂忠臣見聖代看斯
壯烈人

青淵老生

乃木大將景慕記念錄下卷目次

乃木大將續篇

附錄

挿畫目次

目次畢

乃木邸内大將夫妻の靈祠

（華居の柱は夫妻の墓標を以て造られ石燈籠は門柱の石材を以て造らる）

明治六年金澤營所に在りし時の乃木少佐

愛兒兩典の寫眞を手にせる乃木大將

大將が寓居したる金倉寺客殿の入口と其居間及大將夫人より同寺住職に贈られたる臺灣製の珠子
（下圖は即ち居間にして右は寢室、左は客室）

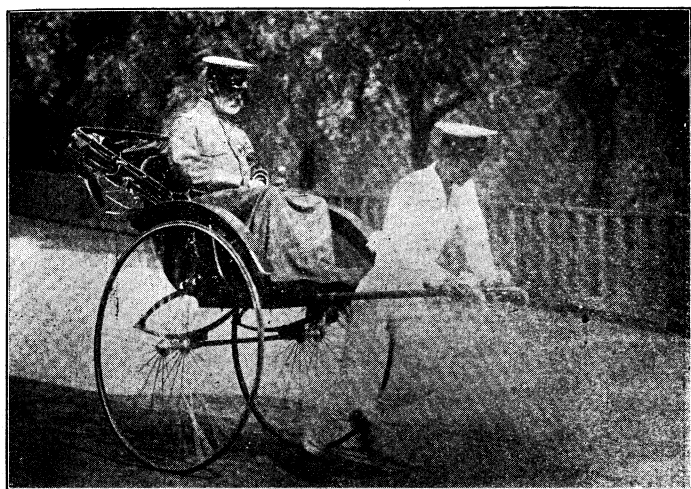
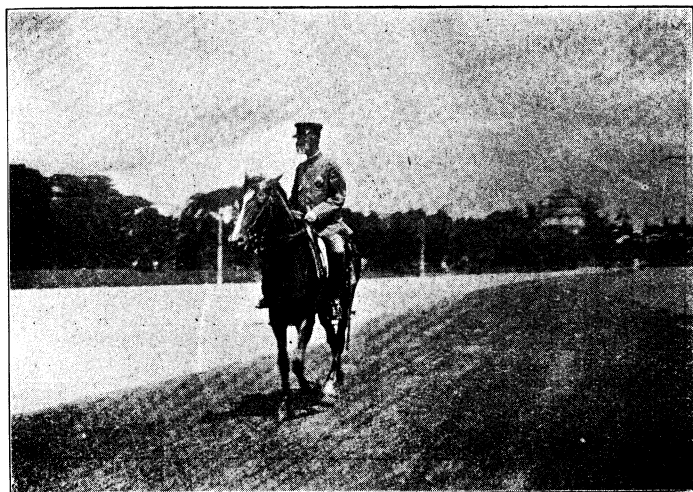
乃木家の祖先を祀ると傳へられたる近江國安土の
沙々貴神社本殿と同境内にある乃木大將手植の松

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ
我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ
我カ國體ノ精華ニシテ敎育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟
ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業
ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國
憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ
扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先
ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所
之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服
膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

源希典謹書

乃木大將謹書の敎育勅語

戰歿紀念
東雞冠山ニ於ケル砲煙中ノ突貫
Our men charging enemy on East Keekwanshan.
往事茫々
半如夢

大將陣中の書

大正元年九月七日大將殯宮參拜の途上

宮城坂下門を出でゝ自邸に歸りつゝある大將

乃木大將（續編）

碧瑠璃園著

靜子夫人の別居

（一）

東京鎭臺參謀長となつた頃も相變らず豪酒をした、時には料理屋の暖簾を潜つて、面白い遊びもした、給料を貰つて歸ると、靜子夫人に「今月の拂ひは幾許要るか」と問ひ夫人が心積りで「大抵これ〳〵あれば宜からうと思ひます」と答へると「ぢや之だけ遣る」と夫に相應したゞけを與へ、殘りの金を携へて遊びに行く、伴侶を誘ふ時もあるが、單獨て行く時もある。

藝妓も揚げる、下物も取る、けれど長遊びは決してせぬ、二三時間を騷ぎ散ら

して、さつさと歸る、勘定も聞かねば、書付も取らぬ、衣囊にあるだけの金を摑んで渡して「これで可いやうにして置け」と云ふのが例であつた、當時乃木大佐と云ふと、綺麗な遊びをする人で通つて居た。

負けず嫌ひの靜子と、若い時から數々の難苦を嘗て來た男優りの壽子とが、一しつくり合ふ筈はない、靜子も姑に事へる道を忘れるやうな人ではないが、一から十まで頭から壓へられては面白くない、そこへ良人の大佐は、自分が期待して居たやうな無頓着な人ではなくて、些細な事まで叱り付ける、乃木家の風として一家が笑ひ興じて樂むやうな事はない、何方を向いても苦い顏ばかり見ねばならぬ辛さ不愉快さに、堪忍袋の緒を切らす事もあつた。

最も軍服を着たまゝで行く、軍服で行けぬ處は無い筈だ、もし行けぬ處があれば、それは軍人の立ち入る處ぢやあるまいと云ふのが、立前である、何處かへ酒でも飲みに行く、大分筋の多い奴が來て居る、乃木ぢやないかと聞くと、果して爾うであつた、と友安豫備陸軍中將は語つて居た。

要り軍人に金錢の必要は無い、一文も殘さぬやうに使つて了ふと云ふのが、その頃からの主義であつた。

劍術の稽古を勵んだのも、恰どその時代であつた、家へ歸ると、すぐ竹刀と稽古衣とを持て、青山御所の前にあつた憲兵分隊へ行くのである、憲兵大尉であつた何がしが、劍術の達人であるので、勤務が終ん*

*でから有志の者へ劍術を敎へた、大佐もその有志の中へ加つて、盛んに武術を研いたのだ。

乃木希典妻 靜子

靜子夫人名刺

同じ年七月七日には、各營所巡視及び沿道地理實檢のため管下を巡廻し、十一月九日御用之あり、宇都宮營所へ派遣を命ぜられた。

大佐の孝心深かつた事は前にも記したが、壽子も追々寄る年ではあり、痼疾の貧血病が次第に不可くなる模樣があるので、成るべく心配を掛けぬやう、成

るべく意志に逆はぬやうつとめた、極寒の時などに、靜子が「お寒くはございませんか」と云つて、羽織でも被せかけると「そんな物は要らない」と叱り付けるが、壽子から、一言「さうぢやない、寒いからお召しなさい」と云はれると、否でも被るといふ風であつた。

同じ頃であつたらう、乃木家の家庭に面白からぬ事實があつた、それは壽子と靜子との間に、意志の衝突があつて、靜子は二人の子供（一說に勝典だけであるともいふ）と、勝典の乳母のお兼とを伴つて、谷中邊へ別居したのであつた。

（二）

谷中の別宅は何の邊であつたか定かに知れぬが、隨分山水な住居であつた事は四圍の事情で相像する事が能きる。

靜子にも、多少は非があつたに相違ない、何方かと云へば湯地家が順境になりかけた頃に成長して、物優しく、さうして何不自由なく思ふまゝに養育され

たのであるから、假し相當な敎育があつたにしても、假し夫だけの覺悟があつたにしても悲しい事には年が若い、世間の荒波に揉まれた事がない、他人を知らぬ世間見ずの娘である、最切豫期して居た事と、實際とは甚しい懸隔がある、殊に一年二年を過ぎる中には次第に遠慮が脱れて來る、爾うなると、三つに一位は口返答もしたくなる、口へ出して云はずとも、心に不平を抱くのが、何時となく現はれる、殊に勝氣な負けず嫌ひの氣質だけ、何歟につけて悲いこともあつたらう、堪へ難いこともあつたらう。

その頃の靜子夫人にはまだ〲圭角があつた、確乎した覺悟もなかつたであらう、壽子との間に面白からぬ事が重なつて來た、それで苦痛に堪へ難ねて、湯地家へ苦痛を訴へに歸つたこともあつた。

爾う云ふ場合には、毎時も壽子から人を遣る、適當な人の無い時は、自ら靜子の迎ひに行つた、それで生母の天伊子はもう歸つちや可けませんよ、今後は骨になつても、湯地家へ歸るといふ考へを起しちや可けませんよ、と警めて送り

返したのであつた。
其處で良人との間は何うかと云ふと、最初の通り打解けた樣もなかつた、別に冷淡と云ふではないが、世間の若夫婦を見る如な春めいた調子は無かつた。
されぱと云つて、湯地家へ歸る事は能きぬ、今のまゝで乃木家に居ては、身を殺がれるやうに思ふから遂に決心の臍を堅めて別居する事に爲たのである、勿論この事を良人へ申し出た時「お母樣さへ宜ければ……」と云ふのであつた、壽子へ相談を掛けた時「希典に異存さへ無ければ……」と同じやうな詞であつた。
それは、自分が靜子を十分に好いて居ない如く、大佐も又十分に靜子を好いて居ないだらうと、推量したからであつた、然し靜子には子供がある、正しい乃木家の血を傳へた嫡子がある、それを捨てて生家へ返す理には行かぬ、と云つて肝腎の大佐が好いて居ないらしい(實際餘所目からはさう見えたさうである)嫁を家に置くのは、雙方のために好くあるまいと合點して、さのみ別居に異

議を云はなかつた。

それで静子は可愛い子供と、お兼とを伴れて下谷の谷中邊へ別居した、大將遺書の中に「カネ女ヘ五十圓ト外ニ數點の品物ヲ與ヘル」との事が認めてある、それはこのお兼である、お兼は當時の事を奥様は眞個にお不憫さうでございました、彼の谷中に住つて在らしつた頃の事は、何んとも申すことの出來ない位でございました、その中からお子供衆の御教育を爲すつたのでございますものを」と涙ながらに語つて居る。

谷中住居は四箇月ばかり續いた、恰どその頃仲兄の定監氏が英國から歸つて、静子の假住居を訪ねたが、あまり質素にして居るので、是では思ふやうに子供の教育も能きまいと云ふので、芝邊へ轉宅させた、芝の宅は一寸した家であつた。

大佐はこの別居中も、同棲して居た時と、同じ程度の愛情を運んで居た、離れて居るから懐しいと思ふ樣子もない代り、同じ家に居ないから疎遠なといふ

風も見せない、靜子は妻として、子供は子供として、良人たり父たる道を盡した、一度も泊つたことはないが、晝餐の膳を共にした事は屢あつた、その度ごとに、いろいろ子供の事に氣を付けて、その成長を喜んだのであつた。

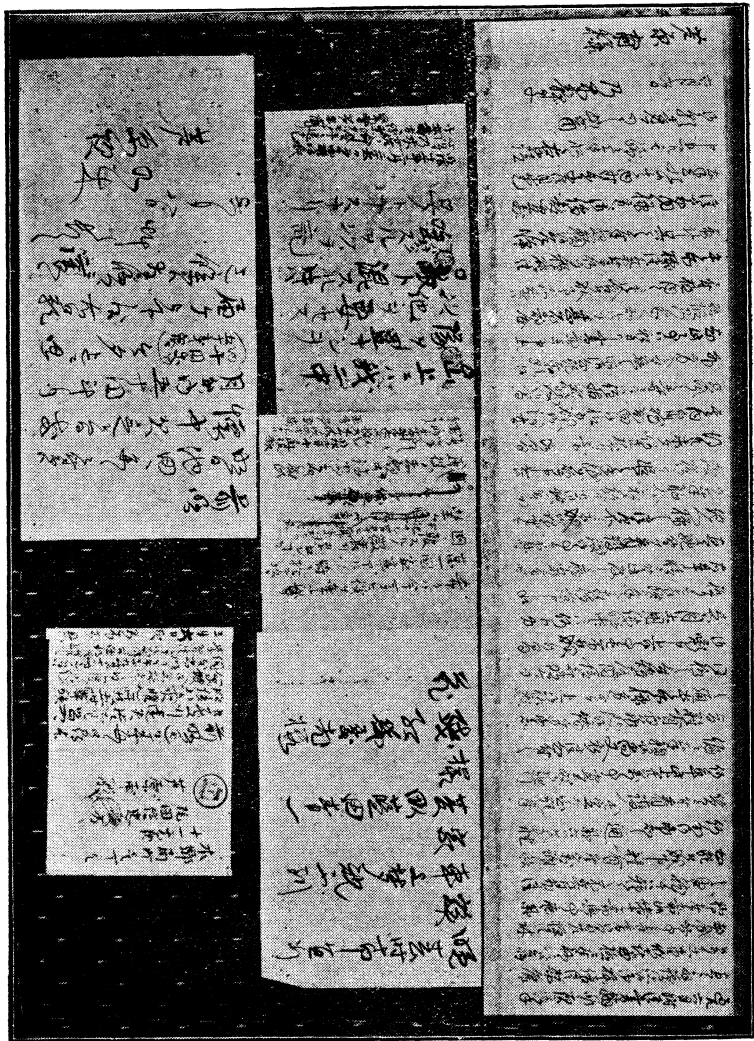
(三)

靜子夫人が別居した後の乃木邸は又以前の寂しさに歸つた、大佐と靜子との間が、世間の若夫婦を見る樣に行かぬのは、大佐が靜子を心から愛して居ないからだらうと信ずる壽子は、何うかして大佐を慰めようと思つて、美しい小間使も置いて見た、近所や親類の家庭にある美しい女の噂もして見た、けれど大佐は夫等に目を貸さうともしなかつた、耳を傾けようともしなかつた。或る時大佐の懇意にして居た人が、壽子の旨を受けたらしいさまで、

「靜子さんが氣に入らなかつたら、いつそさつぱり離緣しちや何うござるの」

と云つた、すると大佐は眞面目になつて、

大將手簡

（芦原甫氏に與へられたるもの）

中央は芦原氏の勤續願書に大將の加朱せられたるもの、又中央左山中云々は明治十年二月十六日（西南役）第十四聯隊長心得たりし乃木少佐の眞筆命令にして芦原軍曹は之を前方に傳達せり（唖するを以て暗號としたるは面白し）

「靜を離緣する日は彼女の死んだ日です、息のある間に乃木家から出すやうな事はしません」と答へた。

大佐は夫人を愛しなかつたのぢやない、寧ろ非常に愛して居たので、母と妻との間に、兎もすると面白からぬ形蹟のある事を、絶えず苦勞にして居たのであるけれど彼の氣象ではあり、家事に對しては餘り口を利かぬ流義であつたから、雙方の間に立つて十分に調和する事が能きなかつた、あらず、その面倒に堪へなかつたのである、譬へそれと心付いて居る事でも、母の氣に入らぬらしく見える妻の身に就いて話をするのは身を切るやうに辛く思つたのである。

されば靜子の別居中にも、機を見て訪ねはしたが、一度も泊ることはなかつた、一度も軍服を脫いだ事はなかつた、子供の教育方に助言する外、込み入つた話もしなかつた。

恁樣不祥な事に立ち至つたのは、靜子の罪であらうか、壽子の罪であらうか、或は乃木の家庭全體が可けなかつた爲であらうか、それをこゝに研究する必

要はない、冬の後には春が來、雪の下には梅が笑ふ、窮苦が極まると、いつかは歡樂の影がさして來るものである。

家庭の不和、子供を伴れての別居、これが人の妻として爲すべき事であらうか。

静子は淋しさの餘り不圖考へた、假し何様事情があつても、我身我心さへ殺して居れば、乃木の家庭は幸福である、太陽の恵みも障壁のある處へは屆かぬ、春風も雪で閉ぢられた山の頂は吹かぬ、姑の情を遮るのは、我自身の心である、假令自分が道に背いた事をせぬにしても、自分の徳が無ければ斯ういふ結果を招くに至る、と思ふ心が、春風の若芽を吹く如くに生いた。

私が惡かつた、私の眞が足りなかつた、私のために子供までを淋しい所に置いた、我を惡いものにして、有る限りの誠を注いで、お母様に大切に册けばさう無理ばかりを被仰る筈がない、厭な事ばかりを仕向けられる法はない、斯う考へつくと、一日も早く歸りたい、歸つて眞心が捧げたい。

そこで自ら乃木の邸へ來て良人にも姑にも、今までの心得違ひを詫びた、以來は氣を付けますから、やはり元の通り同居さして下さいと云つた、大佐の返答は前の通り「お母さんが好ければ」と云ふのであつた、壽子も同じく「希典に異存がなければ」と云ふのであつた、靜子は歡んで芝の假住居を引き拂つた、さうして子供と共に再び乃木家の家庭へ入つた。

大佐は十七年十一月二十日第二聯隊(佐倉)第三大隊の長途行軍演習目擊のため加納山地方へ出張し、十二月十三日步兵第十五聯隊(高崎)第一大隊が一泊行軍の演習をするので、目擊のため群馬縣へ出張した、獨逸からメッケル將軍を聘して陸軍獨式の硏究を始めたはこの當時であつた。

越えて十八年二月九日には御用之あり、神奈川縣相州三浦、鎌倉、久良岐及び房州館山地方へ出張した、四月七日勳三等に叙せられ、旭日中綬章を授けられた。

乃木の家庭は、靜子が己を殺す事に由つて、圓滿に、且幸福になつた。

第十一旅團長

(一)

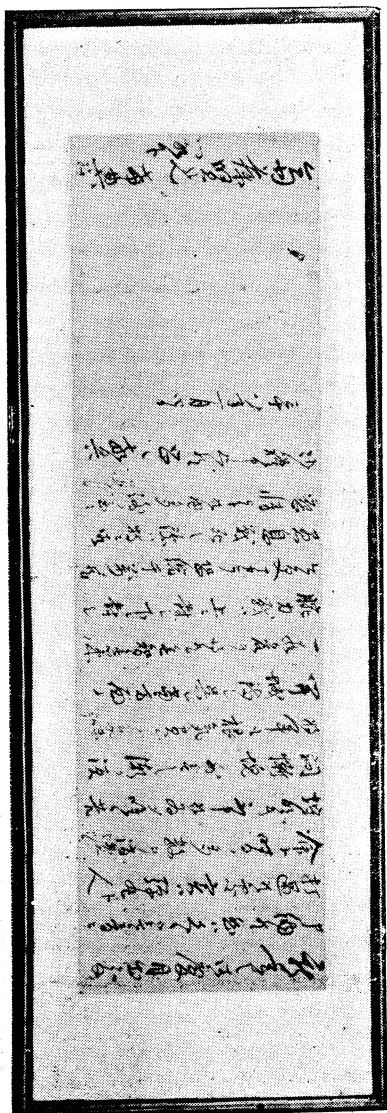
明治十八年五月二十一日隅田堤に花散つて、若葉の翠匂ふ時、大佐から少將に昇進して即日歩兵第十一旅團長(熊本)に任ぜられた、之と同時に熊本鎭臺司令官となつた三好中將は、二十六日横濱解纜の薩摩丸で赴任するので、少將も同船した。

その頃の乃木家には絶えず春風が吹いて居た、靜子夫人は自分を犧牲にして、姑、良人二人の子供及び弟の集作、玉木文之進(玉木正誼の遺子、祖父の名を繼いで文之進と云つて居た、今の正之中佐の前身である)の間に立つて、女の道を完全に盡した、自分といふものを犧牲にすれば、一家も圓滿に行き、家庭に風波も絶えて、毎時も春風駘蕩の中に暮らして行くことが能きると覺つた夫人は、總の圭角を取り去つて、誠心誠意壽子に仕へた、自分の心に入らぬ事も、柔順に

且つ親切に行つた、子供の教育、集さん(集作の事)や文様(文之進の事)の世話、一家内外の事、何から何まで手一つに遣て除けた「眞個に家の嫁ほど好い嫁はござらんよ」と壽子をして感嘆せしめたは此の當時である。

少將が熊本へ赴任する時は、母堂、夫人、兩子息をも同伴した、春風は東京から熊本へ吹き至つた。

その頃の軍人社會には亂暴な風儀があつた、大酒でも飮んで秩序のない遊びをする樣でなくば、人間でない如く云つて隨分甚い所行をした、最も大都會の鎭臺では追々風紀も改良されたが、熊本邊にはまだそんな氣風が殘つて居た、乃木將軍が赴任早々にも「旅團長一杯飮ませて下さい」などと深夜に遣つて來る青年士官もあつて、家族の困却一通りでなかつた。

由つて少將は何うかしてその惡風を矯正したいと思つた、何でも上に立つ者から行爲を改めて掛らねば、部下の風儀を良くすることは爲きまいとの考へから、好な酒も餘り飮まぬやうにして、一寸した間違も容赦なく嚴ましく云

旅順開城と乃木大將の書簡

乃木將軍は第三軍司令官として三箇師團と一箇旅團の軍を率ゐ旅順の堅塞を包圍すること半年餘、數萬の勇將猛卒を犧牲に供し前後三回の大攻擊を行ひ、九年前の正月元日遂に敵將ステッセル將軍をして開城の止むなきに至らしめたり、左は即ち開城當時の大將の書簡にして、其文左の如し（萩松本原東常吉氏藏）

新年の御慶目出度申納候然ば久々御無音に打過候處實は彈丸と人命と時日の多數を消費しつゝ埒明き不申候爲め唯々苦悶慚愧の外無之漸く須將軍も根氣負けの氣味にて開城致し吳れ當方面の一段落を得候無智無策の腕力戰は上に對し下に對し今更ながら恐縮千萬に候愚息戰死之際は特に御懇情被下候由多謝の至に御座候御禮申上候恐々敬具

三十八年一月四日

希典拜

齋藤賢兄閣下

つた、將軍一流の態度を以て部下に臨んだ。

それが若い亂暴な士官に歡ばれさうな筈がない「今度の旅團長はケチ〳〵云つて可けない」「何んだか横柄な面構へをして居る」「彼な長官を戴いて居ちや幅が利かない」「一度困らして遣らうぢやないか」などゝ、より〳〵相談して居る向もあつた。

將軍はその事を聞いて大いに考へた。

赴任後三月ほど經た或る日の事であつた、部下の大隊長、中隊長、小隊長等を招いて披露宴を開いた、それを聞いた青年士官等は「どうせ乃木樣の御馳走だ、美味い物のありさうな筈はない、例の鹽鰯か何んかで冷酒を飮ますのだらう、今日こそウンと困らせて遣らう」と申し合せて出掛けた。

すると一間に長い大卓子が一脚あつて、其上に一升德利が四五本も置いてある、御馳走は何もなくて、人數だけの盃が載せてある、客は「扨こそ」と云はぬばかりに卓子を圍んで坐ると、將軍は軍服のまゝ出て來て、「今日は無禮講ぢや、大

いに飲まう」と眞面目に云つて、卓子の上へのし上つた、機會に佩劍ががちやりと鳴つた。

「あア酌をしよう」と德利を取り上げて、卓子の上から酌をする、流石の青年士官も呆氣に取られて引き受けては飲み、又引き受けては飲んだ、少將は卓子の上を斡旋して、自分にも滿を引く、終には吟聲を遣る、劍舞を遣る、お客は呆れて顏を見合せるばかりであつた。

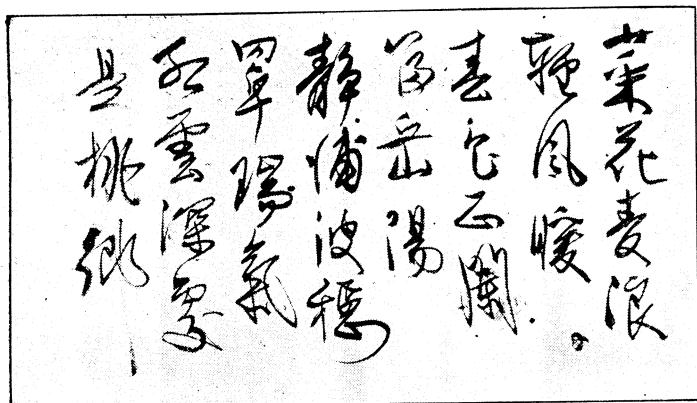
暫くすると少將は卓子を降りた「何うもこれでは面白くない、別間て飲み直さう、諸君此方へお來でなさい」と前に立つて襖を開けると、次の廣間に本膳が並べてある、山海の珍味も山の如く積まれてある「何うも今までは失禮した、これから寛いで十分に遣つてくれたまへ」と座蒲團の上へ招じてニコ〳〵笑ひながら酌をした。

一同は初めて少將の意を知つた、今日こそウンと困らせて遣らうと相談した當が外れ「何うも狡いことをするよ」位で默つて了つた。

少將はこれを手始めにして、今までの遣り方を全然更へた、夜が更けてから、聯隊長や大中隊長の宅を叩いて「おい飲ませろ」と促し歩いた、中には自宅へ如何しい女などを引き入れる者もあつたが「何日旅團長が來るかも知れない」と云つて多少謹愼するやうになつた、少將は豪酒と機智とで美事に部下を壓服したのであつた。

（二）

七月二十五日正五位に敍せられた。

第十一旅團長時代は、眞の一年四箇月ばかりの間であつた、青年士官の間に交つて、隨分亂暴な眞似もしたが、家庭では相變らず嚴格であつた、其頃置いてあつた堀清一（長州萩の出生）といふ書生が酒を飲んで玄關に横はつて居たのを見て、少年にあるまじき不作法な所業であると怒り「お前は私の家風に適はぬ、何處へでも行て勝手に職を求めよ」と金子五十圓を與へて、その場から放逐

大將咏及筆
（步兵第十二旅團長白水少將藏）

した。

十九年の一月三日であつた、熊本濟々黌の體操教師であつた沼田九八郎の家へ年頭の禮に行つたことがある、折から五六名の生徒が集つて盛に酒を飲んで居たが旅團長の入つて來たのを見て、一同が容を正した、究屈さうに坐つて「お芽出度うございます」と遣つた、少將は書生が好である、莞爾々々と笑つて

「こりや好い處へ來た、僕も御馳走に爲らうかね」と書生の間へ坐り込んで思ふまゝに滿を引いた、書生の中には、旅團長と同席するのを氣苦勞にして、多少遠慮する態度

も見えたが、少將は非常な上機嫌で、
「新年匆々から遠慮しちや可けない、僕の劍舞を見せて遣らう」と立ち上つて劍を拔いた、乃木家秘藏の名刀であるから、燒刃の匂ひ滿座に溢れる、朗々たる調子を張り上げて
磊落男兒拙〓厨政〓、幾看債鬼驚〓夢魂〓、雖〓然別有〓迎年策〓、貯得兵釀一大樽
と吟じ且つ舞つた、行儀作法に心得のある人であるから、颯爽たる風姿、不覺に古英雄を偲ばせた、並み居る人々何れも感嘆の聲を漏らす。
少將は暫く獻酬して後「君等米俵が擔げるか」と尋ねた。
書生も追々醉が廻つて來た、聲に應じて「我々も濟々黌の生徒です、米の一俵ぐらゐ何でもありません」
「諸し、それぢや力競べをしよう」
少將は眞さきに庭へ降りる、梅はまだ咲かぬが、新らしい春の日は長閑に廣い庭を照らした。

恰どその時沼田の宅に、米俵が無かつたので、この力競べは沙汰止となつたが、兎もすると年歯の若い書生に交つて、分隔もなく興じ遊ぶ將軍の氣風が想像される。

同じ頃であつた、玄關に表付の下駄が脱いであるのを見て「此の下駄は誰のか」と尋ねた、書生の岡村何がしが飛んで來て「私のでございます」と云ふ、すると「恁樣物何處にあつたか」と重ねて尋ねた。

「薪屋から貰ひました、盆の進物です」

少將は無言のまゝ、薪割を持て來て、一撃に打ち割つた。

靜子夫人は最も快活に最も圓滿に交際したので、隊での評判も善い方であつた、婚嫁後の荒波が夫人を玉に研ぎ上げた、我を捨てゝからの婦人は誰の前にも薫る菊の花であつた、少將が書生を愛したからでもあらう、書生の世話はつとめて善くした、さうして書生の歡び興ずる狀を見て、此上もない安慰とした、時々熊本特産の赤酒を取り寄せて書生に與へ、

「これは西洋舶來のお酒ですよ、隨分お高いんだけれど、今日は幾許でもお上りなさい」などと云ひ後で赤酒であることを語つて、大笑ひする事もあつた。

其の年五月二十九日勳六等瑞寶章を賜はり、十月二十八日正四位となつた。

歐洲派遣

(一)

少將が歐洲派遣を命ぜられたは、十一月三十日の事であつた。當時陸軍省へは多くの外國教師が雇つてあつた、夫等の外人には立派な邸宅も與へねばならず、高價な給料も呉れねばならず、更に相當の手當を要する場合が多いので、いつそ外國教師を解雇し、その費用を以て實地見習ひのため、有爲の將校を外國へ派遣しては何うあらう、との說が有力になつて來た、これには文部省の贊成もあつて、直ちに實行する事となつた、少將と川上操六(當時第二旅團長)とは實に最初の派遣生であつた。

十九年十一月命を受けて、翌年一月上旬萬里見學の程に上つた、留守中は云ふまでもなく靜子夫人が預かる、御用に由つて本國を離れる時は、一身一家の處理を付けるのが將軍の例であつた、國家の爲に一命を捨つる機會あれば、い

つでも難に殉じよう覺悟を有つので、毎時も用意を忘れなかつた、毎日も一家の處理を付けて出た。

壽子にも暇を乞ひ、親戚知己朋友にも別を告げ、醫學研究の志を抱いて居た玉乃市熊を伴つて、汽船ステッチン號(七百噸ばかり)に搭乘し、東風まだ寒き横濱を解纜した、一行は川上少將の外に通辯として大尉伊地知幸介、主計官野田豁通も加はつた、横濱から香港までは小さいステッチン號で乘り切つて、香港から獨逸汽船(三千噸餘の大船であつたといふ名は分らぬ)に乘り替へたのであつた、當時歐洲航路の船舶は、悉く香港から出たもので、日本から出ることは絶えて無かつた。

一行初めての歐洲行であるから、珍談も少くなかつた、軍人以外に香港から同船した人の中には、その頃内閣官報局長を辭して、東京株式取引所の頭取になり、歐洲の取引制度を視察する目的で、早稻田專門學校出身の高山圭三(現關西信託會社專務)を通譯に伴つた靑木貞三も居れば、英國ケンブリッヂ大學に

入るべき公爵二條基弘、東本願寺から佛蹟探究の目的で派遣した博士南條文雄も居た、されば若い通譯や、醫學書生や、漢學者肌の青木、坊さん出の南條博士、種々雜多の人が居るので、船中は大賑であつた。

いよ〳〵香港を解纜したは一月二十一日であつた、シンガポールへ着くまては、非常な暴風雨であつたが、此の間に乃木川上兩少將の性格に相違のある點が判然現はれた。

川上少將は例の如才のない交際上手、その上磊落な氣象であるから、士官や書生が船に醉て船室の片隅にうん〳〵と唸つて居る側へ行つて「何うだ苦しいか、假令苦しくても食事を爲ないぢや可けない、軟い物でも食て元氣を付けろ」と親切に心注けるが、乃木少將は些とも情らしい詞を掛けぬ、他目には傲慢さうに見える身體を船室に横へて、

「此くらゐの暴風雨が何んだ、恁樣浪に負けて食事の爲きないやうな者が、いざ國家の大事となつた時何の益に立つ、好い修業だ、苦め〳〵、船暈て死ぬ者は

決して無い」と豪語する、何樣に苦む者があつても、絕えて慰問らしいことを云はなかつた。

其ために川上少將は、船中の人望殊の外宜かつたが、乃木少將は甚く評判が惡かつた「川上さんは親切だね」と云ふ者があると、次には必ず「乃木さんは不親切極まる」と小言を云ふ「川上さんは愛嬌が可い、我々に分隔てをせぬ」と褒める者があると、一方には「乃木さんの無愛嬌は、何うだ、いつも苦蟲を潰したやうな顏をして、傲慢らしく構へてばかり居るぜ」と貶なす者がある、船中の日本人間では兩少將の毀譽褒貶で持ち切つた。

（二）

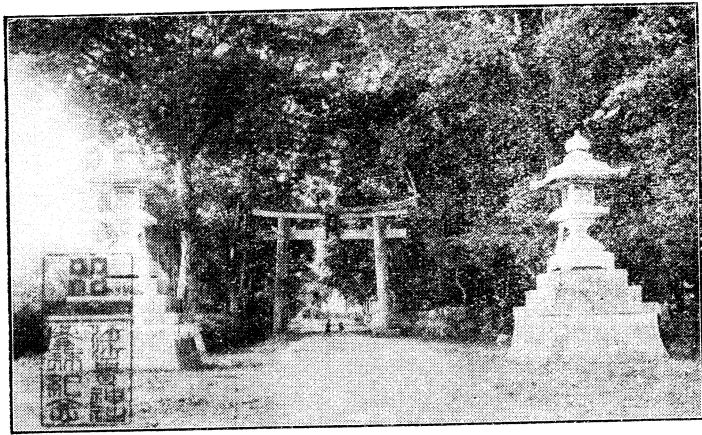
船が新嘉坡に着いたのは朝の四時頃であつた、燬けるやうな暑さであつたが、船の都合で朝早く上陸、市中を見物せねばならぬ事となつたので、朝の食事もせず乘合馬車に乘つて、一統市中の見物に出掛け、十一時頃ヨーロッピアン

ホテルへ入つて、晝飯の卓に就かうとしたが、暑氣と空腹とのため、大抵の者はふら／＼と爲つた、二條公の如きは眩暈のため卒倒した程で、一行の混雜一通りで無かつたが、乃木少將は少しも騷がず、公の介抱から食事の世話まで殘る處なく遣つて後、嚴とした口吻で

「これは萬一の場合、誰しも心得て置かねばならぬ事であるからお話しする、空腹も一度は容易に堪へられる、ウンと堪へさへすれば、暫くして平氣になるが、次に二度目の空腹が襲つて來る、此時は決して我慢しちや可けない、二度目の空腹を強て我慢すると、飛んでもない目に遭ふ、最初の空腹に卒倒しても、手當すれば直ぐ復るが、二度目に昏倒しては容易に恢復せぬ、これは予が實驗に由つて得た智識である」と話して聞かせた。

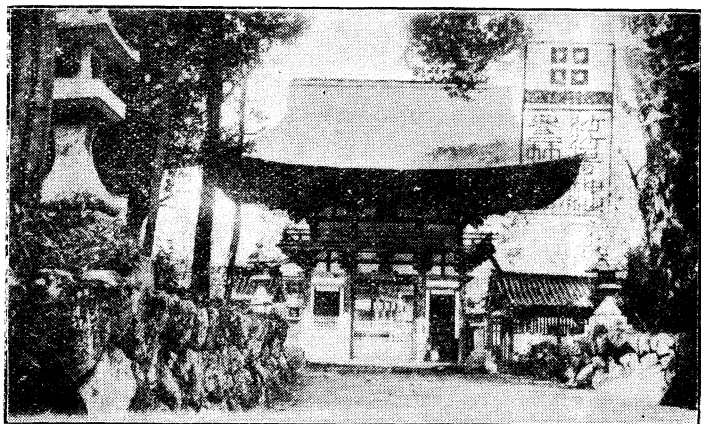
午餐はこれで終つて、一行は再び船中の人となつた、新嘉坡から錫蘭までは、云ふばかりもなく苦熱であつた、處が此の汽船の乘客に、體格の偉大な獨逸人が二人居た、久しく日本に在留して、日本語も巧く使へば、日本の事情にも通じ

て居た、青年士官や書生に向ひ、
「何うだ、日本角力を取らぬか、何日でも相手になるぞ」と毎日の樣に揶揄に來る、けれど普通の日本人に比べて、倍からも體格が違ふので、到底勝利を得る見込が付かぬ、詰らぬことをして恥をかいちや可くないと思ふから、誰一人相手

近江國安土沙々貴神社（大鳥居）

に爲らうとする者がない、獨逸人はそれを可い事にして「あなた角力取る宜しい、私負けません」と甲板へ引張り出さうとする、青年連中愈閉口する、こんな事が五日續いた。
その六日目であつた、乃木少將が聞きかねて、伊地知通譯を呼んだ「獨逸人蒼蠅くて可けない、乃公が取る

から爾う云つて來い、若い連中大勢居ながら、何故相手にならんのか」と云つた。

伊地知通譯からこの事を獨逸人へ通ずる、獨逸人は大得意で「日本人角力弱い、私勝ちます」と眞先に甲板へ踊り出た。

暑中なり船中であるから、乃木少將は襯衣一枚になつて現はれた、乘客から船員まで、悉く甲板上に集つて、この面白い晴の勝負を見物した。

乃木少將は中肉でも少し痩せた方、獨逸人は山の如き大男であるから、日本人は皆な手に汗を握つた「乃木樣詰らんことを云ひ出して、恥をおかきなさるやうな事はあるまいか」と危み思つ

近江國安土沙々貴神社樓門

た。

獨逸人は傲然として「さア來い」と云はぬばかりに立ち上つた。少將も應じて立つた。

暫時揉み合ふ中に、乃木少將は獨逸人を否といふほど投げ付けた、日本人は云ふに及ばず、外國人までがヤンヤと手を拍つた、今一人の獨逸人も襯衣一枚で飛びかゝつた。

乃木少將はそれをも美事に投げ付けた、山のやうな大男も鐵を壓することは爲きなかつた、體軀は小さうても少將は鐵であつた、滿身皆膽であつた。

乃木少將はそれから船中の花方になつた、日本人と聞いて輕蔑して居た外國人まで、急に敬意を拂ふやうになつた「橫柄」だの「不愛想」だのと蔭口を云つて居た者まで「國威を輝かすのは乃木少將に限る」と云つて畏服した。

その中に船は恙く錫蘭へ着いた、南條博士はこゝから蠻地深く入るのであるから、その前夜一行中で送別會を開いた。

乃木少將も無論列席した。

（三）

そこで南條博士（その頃は學士）の爲に送別會を開く、乃木川上兩少將が主催者であつた、船中の邦人に一個の不參もなく、食堂に小宴會が開かれた、やがて兩少將から惜別の意を表すべく、一口の短刀を護身用に餞した、當時印度內地に旅行する者は極めて稀で、又極めて危險な事業とされて居たから、兩少將の此の餞別は、そこに最も意を用ひたものと知れた、南條氏は有難く受けて、一旦宴席を退いたが、再び元の席に現はれて、錦の袋を恭しく捧げ「私は今度の旅行に付き、肌の守として法主から此の袋を頂戴した、此の中には釋尊の尊像が納めてある、僧侶の身としてこれ以上の護身物はない、假令猛獸毒蛇に遭うても、一たび此の尊像を指し示せば忽ち退治し得る、僧侶の身が短刀を持つて何んの用をか爲さう、折角のお心盡しではあるが、これは謹んで兩閣下へ御返納申

し上げる」と云つて兩少將の手へ返した、川上少將は勿論の事、取り分け乃木少將は南條氏の詞に感じて快く短刀を受けたといふ事である。（以上は當時の同行者高山圭三氏の談話に據る）

口にこそ云はぬが、少將は深く南條氏の說に感じた、刃よりも釋迦の像が大切である、釋迦の像を信じ賴めば如何な災害も除く事が爲きると云つた詞に、武士も及ばぬ安心が閃めく、宗教家に貴むべきは此の覺悟である、此の安心である、此の不動の態度である、僧侶が法のために蠻地へ入るも、武士が君のために戰場へ進むも、その志は一である、と滲々心に考へた、大將が佛家の說に耳を傾けて、南天棒を歸依する樣になつたも、恐らく此が動機であらうと或人は語つて居た。

洋行中の事蹟は餘り傳つて居らぬが、獨逸滯在中、專心軍隊の事を調査したのは事實であつた、その頃獨逸の參謀本部に、ジユヘーと云ふ大尉があつた、この人は大の日本贔屓で、日本人と云ふと好んで世話をした、ジユヘー氏ばかり

でなく、その母親も又日本人が大好で、乃木川上兩少將の一行を自分の家へ來た。賓客の如く待遇した乃木少將は母子の親切に感じもしたが、又此の人に由つて陸軍部内の眞相を究めたい希望があるので、殆んど毎日の如くジュヘー氏を訪れた、大尉の母は少將の謹嚴で禮義に厚いのを愛して、一日でも姿を見ぬと、自分で迎ひに出掛けるほどであつた、少將は邦人から畏敬されたばかりでなく、獨逸人からも畏敬された、ジュヘー氏母子との交情は後々までも續いた、ジ氏が中將で昨年日本へ來遊した時は、大將は英皇陛下戴冠式出發前一週日であつた、大將は折柄目の眩るほど多忙で居られたが、中將滯在中の接待法に就て、及きるだけ心を用ひられた、その中の重な事を擧げると、中將横濱到着の時は、吉田中佐と副官とを横濱まで迎ひに出し、東京では帝國ホテルへ交渉して滯在中の一切を囑託し、華族會館では中將を主賓とし、中將に關係ある將師を請待して歡迎の宴を張り、その席上で大將祕藏の繪卷物(日本四十八將の武者繪)を寄贈した、其の外時の陸軍大臣寺内伯、大山元帥等の請待宴に案内し、

陸軍大臣の宴席で、勳一等瑞寶章を授け、靖國神社及び遊就館は自分で案內して、詳細の說明を與へるなど、懇情至らぬ隈もなかつた。

その中に英國出發の時が來たので、特に伊知地中將と楠瀨中將とへ、一切の接待方を依賴し、獨逸「ウイスハーデン」で再會する旨を約して發足した。「ウイスハーデン」はジユーヘー中將の鄕里であるので、將軍は英國からの歸途獨逸へ立ち寄つて中將の住居を訪ね、そこに一泊して新雨舊交さま〲の物語に時を移されたさうである、ジ中將も東京滯在中は屢次新坂町の乃木邸を訪ねて、靜子夫人に對面し、將軍の留守を見舞はれたといふ事である。

痼疾の痔は屢次歐行中の少將を苦しめた、若い時からこの痼疾の爲には、何樣に苦められたか知れぬのであるが、遂に一度も痛いと云つた事が無かつた、又そのために職務を怠つたことも無かつた、痔の甚だしく起つた時は、患部に幾枚かの綿を重ね、その上へ油紙を置き、肩から臀部までを繃帶して、勇ましく軍服を着け、平生の如く馬に乘るのが例であつた、然し甚だしく出血する時は、

それらの用意から溢れて、ヅボン下靴足袋までを紅に染める事もあつた、少將が最も恐れたのは、もし鄭重な宴席に列した時、椅子を穢すことでもありはせぬかとの心配であつた。

獨逸では屢次皇帝陛下へ謁見した、我が皇室に對して純忠無二の眞心を捧げた如く、外國の皇室に對しても、又衷心から尊敬した、獨逸皇室に於ける乃木少將の評判は是までに例を見ぬほど好かつた。

乃木大將を知る者は、異口同音に「二十年の洋行後全然性格が變つて終つた」と云ふ、まことにこの洋行は乃木將軍を瑕瑾のない玉に磨き上げた礪であつた。

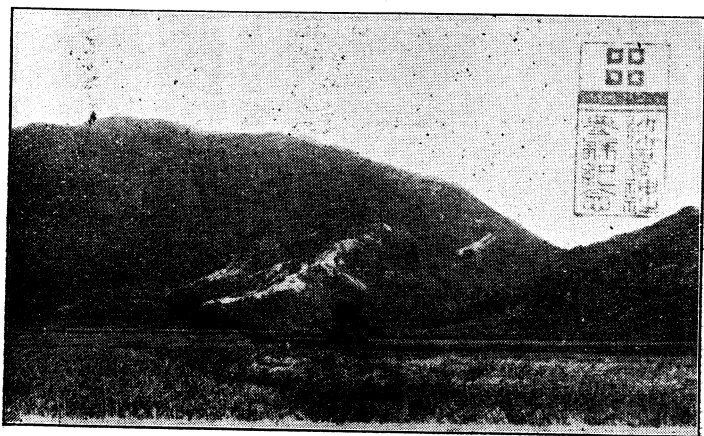
(四)

乃木將軍が外國を何樣に見たか、何樣風に感じたか、二十年十一月十一日伯林から、親友桂彌一に寄せた手紙がある、左にその全文を記す。

十月十七日ノ尊書拜讀愈ヨ御勇健ノ段欣喜ノ至リニ候小生儀モ益强健ニテ勤勉罷在候間御降意可被申候異國ニ參リ候テハ在日本中ノ想像トスレバ、ヨリ好キコトアリ又ヨリツマラヌコトモアリ多クハ嘆息ノ廉ノミト申樣ナル譯ニ御座候就中異人等ハ耐忍力（一口ニ申セバ）强キニハ我等ノ最モ恥ヂ且ツ恐ルル處ト存候異人ノ方ハ皆〱大開化ト存ノ外當國ナドニテハ「チヨンマゲ」ノナキ許リ中々ノ頑固物ト攘夷家ト勤王家ノ花盛リ一寸申セバ唐金火鉢デハ十ポンドヲ造ルトカ奥サンノ鏡モ臼砲位ニハシテ貰ヒタイト云フ趣キニテ町モ田舍モ人氣活潑ナルニハ生等ノグヅ〱懶惰生ハ殆ド物騷ト感ズル許ニテ候匆々

文中にある「唐金火鉢では十ポンドを造る」云々は、前篇の初めに書いた英佛聯合艦隊が、長府沖を砲撃した當時長府藩や萩藩で、家中から鐵火鉢や鏡を徵發し、それで大砲を鑄造した事情を追憶したのであつた、獨逸の人氣が恰どその頃の長府藩の事情に似て油斷なく外國に備へて活潑な態を報じて來たの

であつた。

「ヨリ詰らぬ事もあり多くは嘆息の廉のみ」とある一項に、將軍の意志は輝いて見える、將軍の眼には獨逸の軍人社會一般が浮華奢侈に流れ、若き士官は高價な煙草を吸ふ、高價な香水を付ける、女狂ひをする、酒精に中る、その風規の亂れて居る事は、殆ど豫

沙々貴神社鳥居前より舊佐々木城址を望む

想以上であつた、然も獨逸軍隊の名聲は世界に高く、獨逸陸軍は世界の模範を以て稱せられる、名は鐵の如くにして、實質が花の如く柔なのは、獨逸軍人の一部が、その名譽に醉はされて居るからである、國家の干城たる軍隊が斯の如き狀態ではならぬ、腰に燦爛たる劍を下げて、

心に多くの錆が見えては爲らぬと自ら深く警めたのであつた。

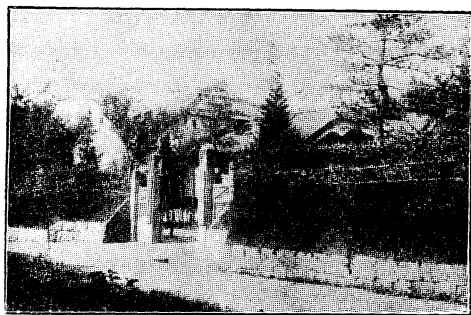
獨逸の軍隊に比べると、日本の軍隊は幼稚である、けれど心に錆はない、青年士官は酒は飲む、亂暴な所業もする、けれど香水を付ける者はない、奢侈に流れる者はない、日本魂は何處までも消磨せぬのである。

然し今のまゝに捨て置いては、何樣な結果に爲るかも知れぬ、亂暴な酒の隣には、必ず美しい女が住む、無禮講の壁一重彼方には恐しい不秩序の惡魔が潛む、軍人は秩序を第一とする、風紀を要とする、人の風見て我風直せ、とは昔の識者の云ひ殘した金言である。

歸朝の上は身を以て範を似し、軍隊の風紀秩序を維持せねばならぬ、と深く心に覺悟した、他は銃器彈藥の精華に驚いて形に見える物のみを研究して歸るが、乃木將軍は形に見えぬ物のみを觀たのであつた、機械は體操や、その他の研究には及ばぬ事があつたかも知れぬが、他の見ぬ處を深く見て、心に大覺悟を造つて歸つた。

一行は豫定の行動に由つて、歐洲軍制の模樣を視察し、佛國マルセーユより同國郵船サガレン號に搭乘して、二十一年六月十五日夕神戸に着し、同夜の最終列車にて大阪に來り、十六日第四師團長であつた高島將軍を訪ひ、午餐を共にして正午梅田發の汽車に乘り、神戸へ歸つて、再び同船中の人となり、恙なく横濱へ着いたは十八日の午後であ＊

沙々貴神社所在地安土尋常高等小學校

明治四十年大將夫妻沙々貴神社參拜の節此學校に立寄られ「祖先を大切にせよ」「お乳を飲んだ事を忘れてはならぬ」ふ警語を以て生徒一同に訓話せられたりと

＊つた。

將軍が最初の如く大酒をしなくなつたのは此の時からであつた、料理屋は勿論、苟くも藝妓の侍する宴席へ列せぬやうになつたのも、此の時からであつた、自邸にある時も、外出する時も、一切軍服を放さぬやうになつたも此の時からであつた、即ち將軍が最後まで武人の典型とし、千古の範となるべき第二の天性を造つた

ば、この時からであつた。

歸朝後は靜子夫人に對しても「愛する妻」とのみして遇せず「敬する妻」として遇したのであつた。

されば同僚友人間でも、將軍の性格の激變したに驚いて「乃木は洋行して耶穌敎に爲つた樣だ」と噂した程であつた。

近衛第二旅團長

（一）

同年八月三十一日第十一旅管各縣徴兵署の巡回を命ぜられた。

歸朝後は段々性格が變つて來た、從來も衣食住には無頓着な方であつたが、夫が次第に甚くなつた、衣服は前に記した通り、起きるから寢るまで軍服ばかりを着て、褻衣の外に日本服は持たなかつた、食物は子供の時から嫌ひな物が無いのだから何んでも食ふ、その中で多少好物かと思はれるのは南瓜と西瓜で、中にも西瓜は大好であつた、桂彌一が此の事を知つて、此の年から下總國三里塚の御料牧場に勤めて居る西瓜造りの名人辻正章といふに託し、年々西瓜を送ることとにした。

乃木家で第一の御馳走は七色汁で、珍客であると必ず作る、總じて將軍は斯ういふ風の食物を好んだ樣である、飯も米の飯よりは稗飯が好き、外にも蠣

飯、赤飯、加役飯などが好きであつた。

家へ客をする事があつても、軍服を着た人に上座を與へる華族であらうが、上役であらうが、平服で居る者は末座に置く、有名な煉瓦作りの廐を造つたは此の時である。

歸朝後其筋で旅費の清算をして、結局大藏省から六百餘圓を將軍に追給した、金錢に心淡き將軍は其樣物を受るを潔とせず「規則は何うあらうとも斯る物を受くべき筈なし、洋行中の費用は前に支給せられた中で償却した」と云つて斷つたが、規程による旅費であるから「受取つて呉れねば困ります」と云ふのであつた、そこで將軍は否々ながら受領したが「これは私すべき金子でない、何んでも正しい場所へ使ひたい」との志望から、遂に廐を建築することに決した。

由て直に大工に命じて、夫々に見積書を出させ、立派な廐を建築したのであつたが、作りかけて見ると、色々の贅澤が出て、豫算よりは二百圓餘りの不足を生じた、然もその頃の乃木邸は百姓家を見るやうな家であつた、將軍が廐のみ

を立派にしたのを見て「乃木も詰らん山をする、そんな見得は爲なくつてもの事ぢやないか」と惡口する者もあつたが、將軍の意志はさうでない「馬は武人の家に無くてかなはぬ器具である、刀劍や鐵砲を立派な土藏へ納れて、同じ武具たる馬ばかりを粗末な廐へ納れて置く法はない」との立前から、特に煉瓦造の廐を建てたのであると、眞鍋中將は語つて居た、取分け武器武具を大事にした將軍の事であるから、或は爾う云ふ考へがあつたのであらう。

歐洲へ同行した川上操六は近衛步兵第二旅團長を免ぜられて、參謀長になつたから、將軍はその後を襲つて第二旅團長になつた。

將軍は自分が父の十郎に育てられたと同じやうの筆法で、二人の子息を敎育した、乃木は武家故實の家柄で、將軍も幼少から小笠原流の有職故實を學んだから、行儀作法は最も囂かつた、勝典も保典も將來軍人として立つべき豫定を以て、嚴格に躾をした、これは子息ばかりでない、靜子夫人にも書生にも、隨分嚴しい叱言があつた。

「坐る時膝を崩しちや可かん、正しく坐れ」といつも命じる、本の讀み方、茶碗の持ち樣、何から何まで叱言が出る、二人の子息は云はれるまゝに遵守する、中にも保典は少しも父の命令に背くことをしなかつた。

時々二人の子供を庭の樹木の下に立たせて、突然空拳銃を打つことがある、それに由つて膽力を錬らうとするのである、兄の勝典は時に由ると喫驚するが、保典はいつも平氣で居た、將軍は常に保典を愛して居た「保典は立派に乃公の後を繼ぐだらう」と云つて居た。

將軍が子供を折檻する時、靜子夫人は沈と側に居ねばならぬ、空鐵砲で膽試をする時などは、顏の色も變るほど心配したが、それでも口を出すことをしなかつた、一寸でも庇陰ひ立てをしようものなら、それこそ何樣に叱られるかも知れなかつた。

(二)

・一日勝典と保典とが學校から歸つて來ると、將軍は突然として「家とお前の行く學校との距離が何米突あると思ふか」と尋ねたことがある、此勝典も保典も其樣事を知る筈がないから、異口同音に「知りません」と答へた、此の時は大した不機嫌な樣子もなく「知らなければ直ぐ實測しろ」と云ふのですんだ。

處がその後「家から二重橋まで何米突あるか」とか「青山御所まで何だけあるか」とか種々の事を尋ねる、その時少しでも曖昧なことを云ふと、恐しい相恰をして叱るが、眞直に「知りません」と云ふと機嫌克く「すぐ實測しろ」と命ずる、故に兩典は何處へ行くにも、必ず足數を勘定した、末には「家から芝公園まで何米突あるか」と問はれても、日頃諳んじて居る歩數に由つて明瞭に答へ得るやうになつた。

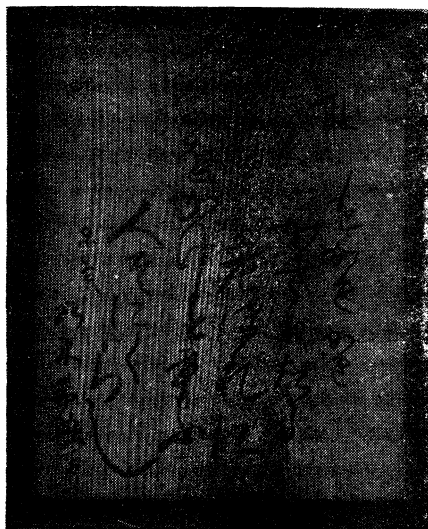
二人の子息へ外國の土産話としては、獨逸の子供の風儀を語つた、乃公が公園へ行つた時、二三人の子供が球投をして遊んで居た、その中に一箇の球が隣へ

飛んだ、隣の屋敷と公園とには鎖が一筋引張つてあるばかりで、入らうと思へば何時でも入れる、けれど獨逸の子供は斷りなしに鎖を越えることをしない、手を伸ばせば取れる處でも、決してそこへ手を入れない、巡査の來るのを待つて取つて貰つた、乃公は實に感心した、人間は何處の世界でも爾う無くちや爲らぬ、人の見て居る處では正直にするが、人の目の屆かぬ處では正しからぬ事をするやうで、一人前の人間とは云はれぬ、よく此事を服膺しろと云つた。

子息達へは好んで旅行させた、その場合には能きるだけ同行して、沿道の山川を說明した、殊に農作の事には深く〳〵氣を付けさせた、汽車の窓から農夫の働く樣を見ると、心から敬意を表する、そして二人の子息を顧盻つて「日本は瑞穗の國で農民ほど大切な任務を持つものはない、仇おろそかに見ちや可けない、眞心でよく見て置け」と云ふのであつた。

渡邊第三師團長が聯隊副官をして居る時、將軍(その頃は聯隊長)と共に地理の實查に出た事がある、すると途中で時々首を傾ける、さまか、馬上で立眠りす

るのぢやあるまいと思つて聞くと、この暑いのに百姓が田の草を取て居るのを見て、心から禮を云つたのである、百姓があんなにして心から働いて呉れるので、幾百萬の人が餓ゑも渇へもせず暮らして行くかと思ふと、自然に頭が下るでないか、と最も眞面目に答へたさうである、父＊の十郎も農事には淺からぬ趣味を持つて、深く百姓を尊敬して居た、將軍の生涯を通じて、十郎の精神を繼いだと思はれる事が極めて多い。

大將筆蹟

明治三十九年凱旋當時名將の墨跡蒐集を企てたる長崎重治氏が大將に色紙を送りて揮毫を依頼したるに色紙は其儘にして小包の箱蓋裏へ記して返されたるもの

或る時勝典が親類の家へ泊つて來て「今朝の手水に湯を呉くたからすぐ冷

水に取り替へさせた」と得意さうに語つた、すると將軍は色を正して「それは可けない、自分で實行する事は可いが、そのために他人の厚意を無にする事があつちや可けぬ、よく氣を付けよ」と云つて叱つた。

乃木の家庭には古くから好嫌ひがない、毎日の膳にも多少の魚類が無いではないが、南瓜でも大根でも、皆が舌鼓を打つて食ふ、少しでも否な顔をすると、何樣に叱られるも知れぬ。

食物を好惡する者は、得て人を好惡する、食物を好き嫌ひする結果は、人に對しても好き嫌ひをする、人に好き嫌ひがあつて、大事業を爲ることは能きぬ、と云ふのが將軍の主義であつた。

家では晩酌をせぬ、間食は絶えてせぬ。

時々聯隊區域を巡回して管内に清潔法を實施する、その仕方が甚だ皮肉で又甚だ奇拔であつた、正面や側面は當然整理されたものとして手を付けず、室へ入ると共にうしろ向きとなつて、白の手袋で鴨居の上をつるりと撫で、少し

でも塵埃が着くと、すぐ整理を命じる、聯隊一同これには頗る恐縮したのであつた。

（三）

將軍は一日軍隊の檢閲を行つた、處が四列に併んだ最後列の兵卒が踵の減れた豫備靴をランドセルに付け「これ程、後方に居るのだから旅團長の目につく氣遣ひない」と云ふやうな顏をして平氣で居ると、將軍は一巡ずッと見廻つて、さて講評の段になつて「今見ると、第何小隊の第何列に斯う〳〵した豫備靴を付けて居た兵卒が居たが、彼ではまさかの時に困ることがあるだらう」と細に不心得を說き聞かせたから、その一兵卒は額から膏汗を流した、將軍は何事にも注意深かつた、少しも油斷のない用意を以て、些細な點までに心を用ひた。

その頃乃木家に大吉といふ馬丁が居た、負ける事が大嫌ひで、隨分氣象の勝た男であつたから、叱言を食はぬやうに勉強もし、他に後を取らぬやうに働い

た、それがいつも「旦那には協ひません」と云つて兜を脱いで居た、何故かと聞くと「まアお聞きなさい、小可が幾許早く起きても旦那の方がよつぽど早い、昨夜はお客樣で、お寢みが遲くなつたから、今朝はお目覺めになるのも晩からうと思つて起きると、もうちやんと起きて在らつしやる、前夜に井戸の水を汲んで置くと、手桶に二杯おかゝりなさる、此だけは誰方でもなさる事ですが、いかな極寒中でも、その後を浴衣一枚で平氣で在らつしやる、こればかりは協ひません」と答へた、まことに將軍の精勵忍耐には誰一人も感服せぬ者なかつた。

何うかすると、さほど懇意でもない人から物を貰ふことがある、その時は大吉が返しに行く、これは當時に始まつたことではないが、一たん包を解いて靜子夫人が叮寧に押戴き、贈り人の厚意を謝して後厚く禮を述べて返しに遣る、懇意な人や親類から貰つた時は、まづ自分が食べて夫から家族一統へ分ける、下女も書生も同じやうに賞玩し、剩餘は親類に分けて遣る、何樣物を貰つても、心から歡んで家內中に厚意を分けるのが平生であつた。

厩へは朝夕二度づゝ見分に行く、尻毛一筋落ちて居ても拾ひ取つて机の上に載せて置く、大吉が「旦那そんな物を何うなさいます」と云つて聞くと「馬は我々のために恩がある、これに乘つて軍人たる本分を盡すことが爲きる、毛一筋でも徒にしては濟まぬ」と答へた、この事でも將軍の平生を推察する事が爲きるのである。（以上は山本第三師團法官部長の談に據る）

佐々木豫備陸軍中將(直)曰く「たしか明治二十二三年頃であつたと思ふ、立見將軍が第三聯隊で自分が第一大隊長であつた、ある日旅團の將校一同集會所に集つて會食した事があつた、その當時乃木將軍は一同に對つて「どうだ、此頃は上野も向島も櫻が滿開で、白雲の間を逍遙するやうだ、乃公は昨日の日曜日に行つて見たが、非常な群集であつた、處が陸軍の將校は一人も行つてない、軍人だからとて花見をしちや可けない理はないから、ちと風流に遊んぢや何うだ、なにも其樣に謹愼して居るには當らない」と云はれた、すると側に居た一將校が「それは閣下が御存じないからです、將校も隨分行きます」と云つた、將軍は

變な顔をして「いや、私は昨日彼方此方氣を付けて見たが、一人も認めなかつた、やはり風流を知らんからだらう」と重ねて云はれた。

某將校は笑つて「閣下のお目に入らんのです、和服を着て行く者が多いから、一寸知れないのでありませう」と云つた、此時將軍は色を正して「それや可けんぢやないか、昔の武士は何處へ行くにも必ず刀を帶んで居た、無刀で往來へ出ようものなら、夫こそ身分にかゝはる大事が出來する、今の軍人も昔の武士に變りはない、軍服さへ着けて行けば、何處へ行つてもさし支へない、軍服を着て行かれぬ處は軍人として足踏みはならぬ筈だ」と云つたので一同非常に感激した。

將軍はその以前から毎朝五時に起床して、喇叭の鳴る前に出頭し、直ちに兵營を一巡し、兵舍の模樣を視察して置くから、兵士作業の全部を知つて居た、それで何處からも間違つた報告をすることが能きなかつた。

第五旅團長

(一)

明治二十三年七月二十五日近衞步兵第二旅團長を免ぜられて、步兵第五旅團長(名古屋)に轉じ、第五旅團長であつた黑木少將が、乃木將軍の後任となつた。當時の第三師團長は桂中將(今の大將)であつた、桂中將は乃木將軍と同時に少將となつたのであるが、軍人としては先輩であるべき將軍は、後輩たる桂中將の下に屬かねばならぬ運命であつた。

洋行前の將軍は、陸軍一方の花形として、上下の信用極めて厚かつたが、洋行後性格が一變して、何事にも嚴格の態度を取るやうになつてから、次第に人氣が沈んで來た、部下からは神の如に尊敬されながら、上長には餘り好い受でなかつた、進級の沙汰に外れる事が多くあつた。

二十五日轉任の命を受けて、翌日直に東京を出發した、急な事であるから誰

も知らない、又誰へも知らせようとしない、新橋出發の時見送りに立つたのは、川上將軍と、同郷の舊友梶山鼎介ばかりであつた。
そして名古屋に着いたのを見ると、公用行李を三五箇持つて居るばかりで荷物らしい物は一つも無かつた、荷物はと聞くと「いや此れだけぢや」と平氣で居た。
家は取敢ず仲之町邊の士族屋敷を借りたが、蒲團もなければ、着換へもない、副官が心配して「夜具は何うします」と訊くと「此中にある」と行李を指した「後で馬丁に開かせて見ると、毛布が四枚入つて居た、下に二枚敷いて、上に二枚着る、褻衣は洗ひざらした久留米絣の單衣一枚のみであつた。
「これおや足りなくはありせんか」と付添た者が又聞いた。
「ちつとも足りなくない、これで十分だ」
「然し、何だか足りないやうに思ひますが……」と重ねて聞くと、將軍は色を正して、

「心配するな、此だけあれば何日動員令が下つても、すぐ間に合ふ」と答へたので副官は遂に口を噤んだ。

第五旅團に勤めて居た間は、從卒と馬丁とを使つて、その古屋敷に住んで居た。

翌年の秋*であつた、管内へ徴兵検査視察に出かけた、濱松へ着いた時、郡長の代理が尋ねて來て、

「此邊には好い宿館がありませんから、氣賀町の素封家氣賀半十郎と申すへ申し附けて置きました、何うか御遠

大將寄贈の振鈴

右は黒井海軍大佐より乃木大將に贈りたるものなるを大將より更に長府町豐浦小學校に寄贈したるものにして同校にては校堂に吊し式日或は訓示の場合に之を振りて共始終を報ずるなりと

慮なくお泊り下さい」と云つた、すると將軍は何日になく聲を荒らげて、「乃木は其樣馬鹿ぢやない」と大喝した、郡長代理は驚いて顏の色をかへた、將軍は常に復つて、

「こんな惡い習慣の行はれるのも、詰らん奴が好い加減の事をするからだ」と呟いた、郡長代理はそこ〳〵に引き退る。

「金滿家なんぞに泊るのは嫌だ、何處かに好い宿がありさうなものだ」將軍は困つたやうな顏をした。

然し宿館の無いのは事實だから、遂に秋葉山の半僧坊に泊る事となつた、半僧坊には閑靜な座敷もあるから、將軍の宿館には宜からうとの事であつた、將軍が半僧坊の一室へ通ると、住僧はけば〳〵しい袈裟を着て挨拶に出た、將軍は其樣事が大嫌ひであつた、住僧はさうとも知らず、得意になつて

「桂中將も毎度お越しになつて、御揮毫なども戴いて居ります」

云ふ詞の終らぬ間に、將軍はつと立ち上つた。

「今夜の宿はお斷り申す」云ひ捨てゝ出て了つた、副官も後からついて出ると、將軍は門前の木賃宿へ入つた、木賃宿の主人は身に餘る光榮と歡んだが、待遇の仕方もないから貧乏德利に楢の葉を挿して持て出た、副官は家人に命じて便所や床下に石灰を白く撒かせた。

將軍は大滿足で、好物の濁酒と湯豆腐とを命じて一夜を送り、翌朝十圓紙幣二枚を遣つて出發した、將軍の木賃宿泊りと云ふと名高い話だ。

（三）

將軍は子供の時から齒が惡かつた、齒痛と痔疾とが、何樣に將軍を苦めたか知れぬ處が二十四年の夏、甚く齒痛が起つたので、療治のため東京へ出た、齒を患つた者は誰でも知つて居るが、拔くにも、入れるにも、容易にはして呉れぬ、今日も來い、明日も來い、といふので段々引張る、夫では職務を全うする事が能き

ぬ。

そこで或る日醫者の家を訪ねて「面倒だから全部拔いて貰ひたい」と云つた醫者は驚いて、

「そんな亂暴な事は能きませんから、一日に一本づゝ拔くとしませう、それでも普通は二三週間も費る事です」と斷つた。

けれど將軍は承知せぬ「一日に一本づつ脫いて居ちや、何樣に時日を費すか分らん、少しも關はぬ、一所に拔いてくれ」と又賴んだ。

將軍の忍耐强い事は、以前から知つて居るが、一本の齒も通常では堪へ難ねる、それを全部一時に拔き取ては、いかに忍耐强い將軍でも、堪へる事は能きまいと思つて、さま〴〵に止めたのであつたが、將軍は何うしても肯き入れぬ「關はんから拔け、あなたが拔かなければ他の醫者に賴まう」と云つた。

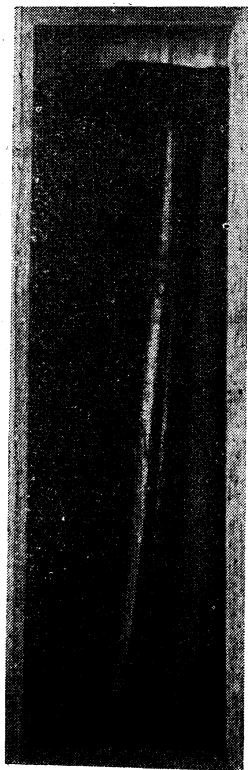
醫者は據なく承知したが、斯くと聞いた知人は皆な心配した、もし夫れがため身體に障る樣なことがあつちや可けないからと云つて止めたが、遂に誰の

意見も肯き入れず、一時に有りつたけの齒を拔いた、齒醫者界空前の事と云ふので、其頃非常に評判であつた、

將軍は總入齒になつて名古屋へ歸つた、將軍四十三歳(靜子夫人は三十三歳)の時であつた。

翌二十五年二月三日將軍は休職となり、大島大佐(久直)が少將に昇進して第五旅團長に補せられた。

此休職に就いては、陸軍部内でさまざまの說が傳へられた。

赤穗義士杉野十平次が夜討に携へたる鎌に大將の箱書せるもの

(長府町 口羽三吾氏藏)

乃木將軍は西南役に於て、稀有の驍名を博した人である、特に洋行から歸つた後は、嚴格自ら持する好軍人である、第五旅團長となつて後も、部下の風儀を矯めようとして努力した人である。

それに年齡がまだ若い、軍人社會には無くてならぬ大人物である、それが突然休職になつたは、軍事進歩の上から惜むべき限りである、そも何のために彼樣事になつたであらうと、心ある人々は皆な怪んだ。

中には、一時に齒を拔いてから、非常に健康を害したので、病後の養生をするため、鹽原の溫泉へも入浴したが、その中に腦を惡くして、遂に自ら辭表を出すの止むを得ぬに至つたのであらうと云ふ者もあつた、不幸にしてそれを信ずる人も出た。

けれど此の評は間違ひであつた、將軍の休職はそんな單調な事情ぢやなかつた。

洋行後の將軍は、兎角進級が後れ勝てあつた、以前同輩であつた人はずんず

んと出世する、現に桂中將は自分よりも後進であるのに、進んで中將となり、第三師團長になつて居る、然も桂中將とは趣味も違へば性格も違ふ、第五旅團長としての將軍が、心中に多少の不平あつたのは想像に難からぬ。

それが二十四年の暮、馬上で軍隊を指揮した時、總入齒が落ちて、馬の蹄に碎かれた、之を見た青年將校が思はず大笑ひしたのを怒つて、直ちに辭表を出したのであつた。

著者の調べた處では、これが辭職の眞相らしい、然し或る將校は「そんな事があるものか」と打ち消した。

總入齒の落ちた事が、大切な職を擲たねばならぬ程の大事でないのは知れて居る、けれど將軍はその事が軍人の面目に關する事として、辭表を出した、日頃から忍びに忍んで居た憤懣が暴發したのであらうかとも推量される、世を擧げて皆な濁る間に將軍のみ澄んで居た當時の情態を考へると、此の間の消息がおぼろげながら解し得られる。

那須野

（一）

此年（二十五年）の事であつた、靜子夫人のためには、生の母よりも深い因緣のある叔母品子の良人吉田清皎が死んだ、清皎は十三年まで東京府技師を奉職して居たが、三島子爵家で野州那須野原を開墾する事になつたから、耕地監督の事を賴まれて、辭職の上同地へ出掛けた、此の時自分の貯蓄金三百餘圓を投じて、狩野村字石林に原野を求め、三島家の開墾地を監督する傍、熱心に所有地の開墾をした處が事業漸く成ると間もなく、主人が死んだので、品子の手一つで何うする事も能きなかつた、其處へ乃木將軍が休職となつて、閑地に就く事となつたから、品子の手から宅地、田畑に馬三頭を添へ、一千三百圓で乃木家へ買ひ取つた、此時品子は「可愛いお靜さんに上げるのだから、無代でも可いけれども私も食べて行かねばならぬから」と云つたさうだ。

即ち子供の時から、吉田夫婦に愛せられて育つた靜子は、こゝに吉田夫婦の事業を繼承する事になつたのである。

將軍は口にこそ出さなかつたが、色にこそ見せなかつたが、多少胸中に不滿もあつて、夫人の前途を顧慮すること深かつた。

「もしこゝで乃公が突然死んだら何うするか」と時々問ひ尋ねることもあつた、その時夫人は、

「百姓でも致しませう」と答へるのが例であつた、將軍が那須野の開墾地を買ひ取つたには、深い意味もあり、又深い愛情の籠つて居たのを推量する事が爲きるのである。

夫で話は容易に進んで、悉く夫人の名義に切りかへ、六月初旬夫人を伴うて實地視察に出掛けた、此時は六百坪ほどの廣き宅地中に、小さき一軒の藁葺家と、一棟の納屋があるばかりであつた。

將軍は淸く靜かな前途有望な土地を得た上に、最も實貞な老僕を得た、此老

僕はその名を内垣政吉といふ、弘化三年生れで信濃國下伊那郡喬木村の人である。

乃木家の祖とも云ふべき乃木傳庵の妻おそめは、信州の出であるから、信州の者と云ふと、將軍には云ひ知れぬ懐しみがある、殊に年久しく三島家の開墾事業に從つて、その道に少からぬ經驗を持て居るから、將軍は深く深く喜んだ、極めて實直で、又極めて勉强家であつたから、將軍は二なき者に信用した。

此の政吉は將軍の最後まで、那須野石林の別莊に仕へて忠勤を勵んだ、今年六十七、壯いものも及ばぬ程に壯健である、得意氣に他に語つて、

「私も大將さんには親に優つた大恩を受けましたよ、大將さんを大切に思ふ心から、何日ともなく形までが似たと見え、お前は大將の弟かと聞かれる事がありますよ」と云ふ、將軍の偉大な感化は、この質朴な老農夫の形までを替へたと見える。

御大喪の當日は、大將から態々手紙が來て「お前も拜觀に來るが可い」とあつ

たから、有難く嬉しく開墾地に生きた南瓜などを土産に持つて上京したが、乃木邸は折柄來客で大將の目通りはなかつた、然しそれは今日に限つたことぢやない、後でゆつくりお目に掛る事として、靜子夫人にのみ面會したが「そんな事をして居ちや可けない、殊にお前は老人だから、早く行かぬと拜觀が能きぬかも知れない」と心付けられ「それでは失禮を致します、何れ今夜御挨拶致しますから」と一人の書生に伴はれて、拜觀所へ出て行つたが、お蔭で悉く拜觀して乃木邸へ取て返し、今夜こそ大將さんのお談話を承らうと思つた甲斐もなく、門の敷居を跨ぐと共に

「大將御夫妻殉死」との事に腰を拔かすばかりに驚いた、座敷へ驅け入るまでは、何處を何う奔つたかも知らず「おうおう」と聲を放つて「大將さんや奥樣がお死になさるなら私がお供をする筈だ」と地團太踏んで座敷中を狂ひ廻つたといふ、これは後の話なれど序だから記して置く。

二十六年四月十一日正四位に叙せられたが、それでも休職中閑暇であるので、折々那須野の閑居へ出かけた、然し家宅が餘りに狹いので、此の年普請に掛り、別に瓦葺一棟を建てる事にした、この工事の終らぬ中に、日清戰爭が始まつたのであつた。

（二）

著者は此頃那須野の閑居を訪ねた、那須野の狀態が何樣であつたかを語るは記者の光榮のみではない。

日本鐵道線那須野驛を下りて、太田原街道を南に十四五丁も行くと、左手へ入る路がある、路と云つても平地に小芝の生え茂つた眞黑な土が泥土の樣に涅ね返された徑である、それを五六丁も東して、更に細い村道へ出て、更に向つて四五丁進むと、そこにあるのが所謂乃木家の別莊である、廣さ六百餘坪、北と東に大木の繁茂した森があり、南の方には小藪が見える、入口には二基の柱が

立つて、その中間に鎖が一本渡してある、鎖を跨いで中に入ると、右手に柱の歪んだ藁屋葺の納屋(二十四坪)がある、この納屋は吉田家に所有された頃、作男の住つて居た處だといふ、一半には二頭の農馬が繋がれ、中央を土間にして、一方南縁に小さな座敷がある。

その前にある小さな釜場で、馬の飼料を炊く様にしてある。

母屋は四十坪ばかりの瓦葺(平屋)で、中央に小さな玄關口がある、其右手は土間への入口、左手が座敷の廻り緣、總の造作がいかにも將軍の尺らしく爲きて、何の曲線美もなく、又何の裝飾も施してない、平凡な百姓家で、入口を中へ入ると、そこに廣い土間がある、臺所は悉く板敷、それがぴか〳〵と光つて居る、板の間の中央には五尺四方に深さ二尺ばかりの大きな圍爐裡、上から自在鍵を吊して、よく磨かれた眞鍮の藥罐が一つ掛けてあつた、土間の片隅には大きな棚があり、その上に五六十の立派な南瓜が陳列されてあつた、鍬もある、鎌もある、蓆もある。

座敷は床の間が十二疊、次の間が十疊、それに八疊と六疊、別に夫人の寢室、炊事場(コレは落間になつて居る)がある。

著者が尋ねて行つた時は、彼の政吉老人が淋しさうに圍爐裡の側で煙草を燻らして居た、よく肥えた黑斑の小犬も居た、大將が東京から連れて行つたといふ小猫も居た、然し此等凡ての生物は頼みにする主人を失つて勢ひなく愁然として居た。

(三)

政吉爺やは著者を案内して、板葺の廐舍へ伴れて行つた、そこには將軍が旅順から連れて歸つた「殿」といふ白馬が居た、老馬ではあるが將軍は深く不便がつて居たといふ、裏手には十二坪ばかりの土藏があつた。

夫から裏の森の中を潜つて東の方へ出ると、清冽な泉があつた、一口に淸冽と云へば夫までだが、著者は從來に此の泉ほど淸冽な水を見た事がない、恁様

大將揮毫の花瓶

明治四十五年六月東京にて伊勢二見神陵園淸水石仙氏の求に應じ揮毫されたるもの其味に曰く「遠くとも花ある道をたどりなむ人にまたるゝ身にしあらねば」

水が凝結したら、何樣に美しい水晶が生きるだらうと思はずも思ひ浮んだ。爺の話に由ると、水は滾々と湧き出して盡きる時がない、夏になると一分時も手を浸けて居る事の爲きぬほど冷たく、冬になると浴沐をしても可いほどに溫くなる、將軍は此の閑居へ來るごとに、此の泉の水を汲んで番茶を煮た、將軍の心はこの水の如くである、此の水は將軍の心と同一である、あらず此處の泉の盡きる時はあつても、將軍の英名の消える時はないと思つた。

將軍は二十六年の大半をこゝに暮

らした、村の老夫などを呼んで、無邪氣な談話を聞くこともあつた、然しその後は餘り行かなかつた、行くことは行つても、十日と逗留した事なかつた。

世には將軍が拗ねてこゝに隱遁したやうに云ふ者もあるが、夫は大きな誤りである、殊に將軍が自ら鍬を取て開墾したやうに云ふが、夫もやはり間違である、乃木家へ買ひ取られた田畑は、舊い田で疾の昔に開墾されて居た。けれど鎌や鍬を提げて、時々野に出る事はあつた、茄子や南瓜の成て居るのを捥ぎ取つては「おい、これを煮いてくれ」と政吉爺に渡すことはあつた、圍爐裡の側に胡坐をくんで、政吉の手料理に舌皷を打ち「お前も一ぱい遣らんか」など手づから酌をして遣ることもあつた。

村の百姓は乃木家へ雇はれるのを歡んだ、將軍は何處に居ても稗飯ばかり食て居たが、雇人には米の飯と相當の賃金と與へ「御苦勞だね〳〵」と自ら勞ふので、誰も勇み進んで出かけた。

時には村の青年を集めて爲になる話をした事もあつた。

勝典も保典も、時々こゝへ來て遊んだ。

將軍が少佐時代から祕藏の大瓢に冷酒を容れて、自分も飲み、客にも侑めた事は幾度も記したが、その瓢は別莊の中の間に吊されて居た、大さ八升ほども容るべく、長さ二尺五六寸もある、立派な日本瓢であつた。

去年の春「洋行の土産だ」と云つて、石林の農家百餘戸へ國旗を配つた、袋にはそれを掲揚すべき祭日が自筆で認めてある、それまでも村人へ「祭日には國旗を揚げるやう」と諭したが、片田舍の事で十分に行き渡らなかつた、將軍の國旗施與は、深くその邊の事を思はれた故であらうと察しられる。

將軍の休職中に廿七年は來た、日清大戰爭の序幕は成歡、牙山の戰ひに由て開かれた、八月一日大詔の煥發となり、九月十三日大本營を廣島に進めさせられた。

此役に於ける將軍の活動は實に目覺しいものであつた、こゝに將軍を中心とした日清戰記を作つて見る。

日清役

(一)

將軍の休職中に獨眼龍將軍山地元治は第一師團長となつた、將軍は山地中將の大の知己であつた、將軍が第一旅團長になつたのは、その後間もない事であつた。

日清役は將軍が第一旅團長時代であつた、二十七年九月二十四日出征の命に接して、直ちに東京を出發し、二十六日廣島に到着した、恰ど大本營で第二軍を編成し、旅順半島の攻擊を開かうとした時であつた。

第二軍の編成に手を看けたのは九月二十一日で、黃海大海戰勝利の吉報に接した日であつた、この準備悉く成つて、陸軍大將大山巖に第二軍司令官の命下り十月三日戰鬪序列の達しに接した。

之よりさき、山地中將の統率する第一師團は、八月三十日動員令を發し、後備

諸隊は九月七日、野戰諸隊は翌八日を以て出征準備を完結したから、山地中將は九月五日旅順半島攻擊に關する內訓を受け、十六日平壤の捷報到着した時から輸送を始めて、十月一日全部隊廣島に集合した。

將軍は此間廣島の宿舍に滯在して忙しき軍務に從ふ餘暇、時々詩歌を樂んだ、その時の吟に

肥馬大刀尙未酬、　皇恩空沾幾春秋
斗瓢傾盡醉餘夢、　踏破支那四百州

といふのがあつた、第五旅團長を辭してから、胸中に多少の不平もあつた、いつか一度は二とない命を捨て、十年役に於ける軍旗喪失の罪を償はんとする心もあつた、由つて今度こそは最も好い死所を得て皇恩の萬分一に報いんとする雄々しい覺悟を定めたことが、この二十八字に仄見える、又折にふれての歌に

數ならぬ身にも心の急がれて

夢安からぬ廣島の宿

といふのがある、この滯在中に集童場時代からの友人桂與一から西瓜を送つた、その西瓜は蔓で辮髮樣の物を作つて、支那兵の首級に擬へ、西瓜の表面を地球儀に見立て、東西大陸の圖を書き、やがて收容すべき遼東半島を日本の領土中に入れて送つた、西瓜は將軍の最大好物であつた。

將軍は深く桂氏の厚意を謝して禮狀を送つたが、その一節に「御厚意の西瓜は忽ち軍刀で二つに割て食た、その美味は今に至るまで忘られぬ、殊に遼東半島の所が旨かつた」とあつた。

斯くて第二軍は、當時聯合艦隊司令長官伊東祐亨の假根據地になつて居る大同江口に着し、同艦隊の援護に由つて、貔子窩の東方五海里の地點に上陸する事となつて居たが、海軍の地圖と陸軍の地圖とに相違の點があつて、一時異議を生じたため延引、十月十六日横濱丸に搭じて宇品を出發し、二十二日大同江口漁隱洞錨地に到着し、二十三日同地を拔錨して、二十四日奉天半島の南岸

花園口に上陸した、將軍は此航海中玄界洋を過ぎるとて

皇の我大君のいくさ船　向ふ舳さきに波風も無し

との一首を詠じた。

將軍は花園口に着くと共に、上陸掩護に任ぜられたので、即夜司令部を李家屯に置き、上陸地點一帶に兵を布いて警戒し、無事に全部隊の上陸を終らせた。二十八日は山地中將の命に由つて貔子窩に向ひ、師團の前衞となつて前進したが、十一月五日金州方面に銃聲の起るを聞いて急進し、十時過ぎ劉家店に達し金州街道支隊長の齋藤少佐に會し、前日來の戰況を聞いて後、自ら偵察の任に當つて、案外敵兵の少數なのを知り、獨力擊攘することに決して、その趣きを師團長に報告した上、直ちに部下へ前進の命を傳へた。

(三)

處が山地師團長はその前に敵情や地形を偵察して、正面攻撃の不利な事を見て取つたから、將軍に歩兵一聯隊を授けて、柳家屯近傍から復州街道に向ひ、師團の左側を掩護させる事とし、その命令を傳へたが、此の時已に遲く、將軍は部下の諸隊に命じて、攻擊運動を開始した後であつた。

けれど師團長の命令を無視する事は能きぬ、直ちに諸隊に急傳して、それそれに戰機を轉へさせた、即ち破頭山に向つて進み、午後二時半初めて敵と交戰して、まづ勝利を得、逃ぐる敵を追ひかけながら、その夜金州に到着した、この前進餘り急であつたので、山地中將は乃木隊の所在をも知り難ねた。

されば本隊から糧食を送る事も能きぬのであつた、將軍は交戰第一乃木式を發揮したのであつた、迅雷耳を掩ふに遑なきほど機敏の行動を取た所に、將軍の面目躍如として居る。

即ち將軍は傳騎を馳せて、破頭山附近の戰況を本隊に通じた、此時師團長は、十分に敵情を知らぬ關係から、乃木軍が別働隊となつて急進するのを不利と

（長野縣　關口宇之助氏藏）

認め、急ぎ本隊に合すべき旨を傳へた、將軍は卽時塚田副官を本隊に遣はして御命令ではあるが、矢張現狀に由つて前進するを利益と認めます」との理由を報告し、更に前面に於ける敵の情況地形を陳述させたから、師團長は直に將軍の意見を納れ「本隊の行動に應じて動作すべし」との命令を授けた、塚田副官は六日拂曉、この命令を齎せて乃木隊に歸つた。

さらばといふので直ぐ前進する、乃木軍の精銳な攻擊に會うて、潰走せぬ敵はなかつた、乃木軍の任務は本隊と力を協せて金州城へ進擊する側、全軍の左翼を警戒するのであつた、斯くて午前九時半金州の東南角に達して、盛んに砲擊を始めた結果、敵は次第に退却を始めたが、それでも尙頑强に抵抗した、將軍は例の如く陣頭に立つて號令する、それに全軍の士氣振ひ立つて、十一時頃各所から進入した、金州城を占領したは乃木軍の功である。

すると午後一時四十五分、大連灣方面の敵情を詳に報告して來た斥候があつた、味方に取つて大事の報告であるから、直ちに山地師團長の許に通知した、

本隊ではこれに由つて大連灣攻擊の方向を定めることが爲きた、その夜本隊は金州城に入り、將軍は命に由つて和尙島へ進發した、同島海岸砲臺及び大孤山半島の諸砲臺を占領する爲めであつた。

卽ち將軍の指揮に屬する枝隊は、その夜高家窰といふ所まで進んで、和尙島の三砲臺及び諸兵營を略奪すべく計畫を定めた、乃木軍の計畫はいつでも直ちに決して了ふ、それは乃木式攻擊に由つて、只一擊に敵勢を碎く外ないのである。

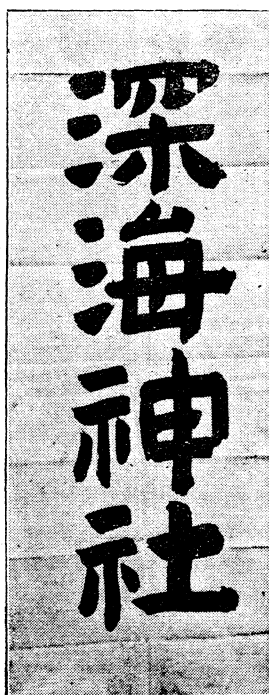
七日午後二時宿營地の南方に集合して各部隊を輕裝させ、目標にする砲臺兵營に對つて肉薄した、吶喊の聲天地を撼すばかり、銃劍を閃かして我一に進入して見ると、これはいかに、敵兵は影も無かつた、鬼神と云はれる乃木軍が大擧して肉薄すると聞き、敵は恐れを作して、逸早く遁竄したのであつた、されば將軍は一兵だも傷けずして和向島の三砲臺を占領した、乃木軍の威力は戰はずして敵の陣地を陷いれた、將軍に取つては拍子拔の感があつたかも知れぬ

が、山地師團長はこの報告を得て意外の勝利を歡んだ。
金州大連は斯の如くにして、第一師團の占むる處となつた、之より陸海軍力を協せて、旅順の要塞を略取せねばならぬ、第二軍司令部では着々作戰計畫をする。
此時最も利益であつたのは、大連灣が我有に歸したことであつた、大連灣占領には、乃木軍直接に干與して居ないけれど、將軍から傳へた斥候の報告は、その攻擊の基礎になつて居る、大連灣に由つて、出征軍は容易に上陸することが能き。

（三）

旅順攻略は諸種の調査に由つて、第一師團の外に、混成第十二師團及び臨時攻城廠で十分なことを確めたから、第二師團の招致を見合せて、徐々に進發すべく命じた、二十一日總攻擊の時、將軍は西少將の率ゐる攻擊部隊の右翼とな

つて前進し、自ら歩兵第一聯隊を率ゐて、二百三高地の西方より谷間傳ひに南行し、鴨湖嘴附近で少數の敵に出會ひ戰鬪中、野砲兵が九時四十分に到着したので、直ちに同地東側の高地に陣を布き、猛烈に敵を砲撃した。

この勝敗未だ何れとも決せぬ中、師團長から命令が來た、曰く「乃木少將は諸隊を率ゐて、案子山に來り、師團の總攻撃に加はるべし」乃木軍は切角開いた戰線を取纏めねばならぬ、數時間の後には見事に勝利を得らるべき戰鬪を中止して、師團の本隊に合體せねばならぬ、將軍當時の心情は蓋し云ふべからざる苦悶もあつたであらう、けれど止むを得ねば直ちに戰鬪を中止して、まづ野戰砲兵のみを案子山に急進させ、暫く歩兵聯隊を止めて敵と對峙させ置き、十

大將筆の深海神社之扁額

一時四十分將軍親しく案子山の本營へ驅け付けて、鴨湖嘴方面の戰狀を報告し、今は少しの危險だもない旨を語つた、すると師團長は「それなら步兵聯隊中適當の部隊を案子山に集合させよ」と云つた、將軍は委細を了して、直ちに此事を聯隊に通ずべく引き返したが、間もなく鴨湖嘴方面の戰況に變化が起つた、それは將軍の殘して置いた步兵聯隊と敵兵との間に衝突があつて、旅順の各砲臺を占領した、即ち事實に於て的確に旅順を占領したのであつた、由て案子山に步兵を集合させる理に行かぬから、舊陣地に據て敵と對峙するの止むを得ぬに至つた、此の中に日は暮れた。

處へ金州方面から急電が來た「敵の逆襲あり、前の占領地に肉薄し來る」とあつた、續いて師團長から「乃木少將は步兵第十五聯隊第三大隊及び騎兵半小隊砲兵一箇中隊を與へ、金州にある守備隊を指揮し、敵を擊攘すべし」との命令が來た。

命令又命令、轉戰又轉戰、將軍は一刻も息を休むる隙もない、けれど一死以て

皇恩の萬分一に報いんとの誠心の外、何物もない將軍は、終日の疲勞を事ともせず、直ちに金州へ出發しようとしたが、右の諸隊が黄金山附近に敗餘の敵勢と戰つて居たので、急に取り纏めることが能きぬ、由てその夜は水師營に一泊し、二十二日午前十一時土城子に兵を集めて、こゝから出發する事に決した。

一方河野隊長(大佐)の率ゐる金州守備隊は、敵の大集團に逆襲され、非常の苦戰に陷つて居た處へ我が軍が旅順を占領したとの報が來たので、士氣忽ち振ひ猛烈に敵を撃つて、思ひの外の勝利を得たから、今は應援を乞ふ必要も無くなつた、けれど將軍は前記の諸兵を纏めて、二十二日土城子を出發し、沿道の敗兵を掃蕩しつゝ、二十三日三十里堡に達し、同夜一泊二十四日金州城に入つて、漸く守備隊に合する事を得た。

金州城附近の殘兵を悉く追ひ拂つて、金州一帶の地を確實に占領したは、乃木軍到着の後であつた。

將軍の希望としては旅順に打入つて花花しい戰闘がしたかつたてあらう、

多年修錬し工夫した戰術を、遺憾なく應用して見たかつたであらう、けれど師團右翼の固めを命ぜられた上、夫からそれへ種々の命令を受けたから、花々しい戰爭をすることが能きなかつた、將軍としては定めて遺憾であつたらう。

斯くてある間、普蘭店にあつた敵兵が、再び金州へ進行して來るとの情報が達した、金州及び貔子窩を掩護するためには、何うしても普蘭店を占領して了はねばならぬ、これは守備隊一統の決議であつた、由て電報で師團長に指揮を乞ふと師團長からは「その計畫を中止して、後命あるまで、三十里堡に駐止せよ」との命があつた。

時は十一月の末、滿洲の寒氣は日ごと夜ごとに迫る、將軍は雪紛々と降る間を、防寒具も着せず三十里堡へ引き返した。

(四)

恰ど此の時であつた、內地から防寒具を送つて來た、幕僚はその中の一箇を

將軍の前へ出した、將軍は沈と見て、
「これは何かね」と尋ねた。

大將詠及筆

東西南北幾山河春夏秋冬
月又花征戰歳餘人馬老
壯心尚是不思家
希典

（美濃赤坂　清水石僊氏藏）

「防寒具であります、日本內地に居ても、今頃は寒くて堪りません、況して此方は非常な寒氣です、他の將校へも差し上げますが、まづ旅團長からお召しなす

つて下さい」周圍の人は斯う云つた、すると將軍は

「兵士の防寒具は何うなつて居る」

「兵士の分はまだ着きません」

「兵士が着ないものを、將校ばかり着て何うする」

將軍は手にも觸れなかつた、此の事を聞いた兵士は涙を流して、將軍の志に泣いた。

山地中將は將軍が防寒具を斥けて、零度以下の寒中に、年の壯い兵士同樣、薄着をして居ると聞いて、立派な支那外套を二枚送つた、一は淺黄繻子に臘虎の皮を着けた物で、一は純子に白狐の毛皮を着けたものであつた。

「好い物を送つて下すつて有難うございます」

將軍は押戴いて中將の厚意を受けた、さうして直に筆を採つて、外套の裏へ『山地閣下よりの贈品、更に患者用に寄附す、乃木希典』と書き附けて、自ら野戰病院へ持つて行つた、事務員が「何うしますか」と云つて聞くと、

「山地閣下から贈つて下すつた寒防具ぢやが、私一人溫うなつても仕方がない、どうか患者用にして下さい」

聞く者、見る者、皆な泣いた、此の將軍の爲めに死ぬのは惜しくないと覺悟した。

將軍は遂に防寒具を着けなかつた。

旅順の占領全く終つて、大山第二軍司令官は全軍に令し、冬季駐屯に便にして、且つ將來の作戰に有利なる方法を執るべく命じたが、十一月二十九日山地師團長は旅順から金州城へ着いて、將軍に會見した、此時將軍は一應の挨拶を終ると共に、再び普蘭店占領の必要を說いた、今度は師團長も同意して、すぐ進軍すべき旨を命じた。

由て將軍は三十日午前十時、中佐隱岐重節に支隊長を命じ、十二月一日金州城を出發させた、隱岐支隊は急行前進二日普蘭店へ着いて見ると、もう敵兵は居なかつた、普蘭店も又我軍の手に入つた。

五日將軍は普蘭店支隊司令に任ぜられ、七日金州を出發して、九日三官廟といふ土地へ着き、直ちに支隊の指揮を司つた。

それからその年の終るまで、兵站の充實、宿營地の清潔等に意を用ひ、專ら營口方面の警戒を嚴にした。

大本營では、陸海軍が聯合して、威海衞を攻取することに就いて、樣々計畫を立てゝ居た。

兎角するほどに年は暮れる、將軍は滿洲冱寒の中に恙く四十七歳の春を迎へた、近く蓋平方面に大戰の起るべき狀報が見える、一月一日部下の將卒と遙に東方を拜して「天皇陛下萬々歳」を三唱し、續いて「陸海軍萬々歳」を連呼した、屠蘇に替ふる冷酒を酌み交して、陣中の試筆に長歌を作つた。

明治二十八年一月盛京の省なる普蘭店の陣にあつて、新年の試筆にとてものす

あら玉の年立ちかへる大空に　朝日まばゆくさし上る　光りぞ皇の

御稜威なる　唐人も高麗人も　大和心の萌え出でゝ　我が日の本の民草と　同じ惠の露に逢ふらん

まことに好い正月であつた、朝日きらきら照る下に、此の作歌を書き記して本國の知友へ送つた。

(五)

これよりさき十二月十三日、第三師團の精鋭が海城を攻撃占領したのであつたが、後方の蓋平には尚多くの敵が居る、それが何時逆襲するかも知れぬから、第二軍の一部に由て掃攘せられたし、との電報が雨の如く大本營へ降つて來た。

そこで大本營から、第二軍へ傳達する、大山司令官から山地中將へ沙汰があつた、山地中將は同月三十日普蘭店の將軍へ對して「蓋平附近に敵團あり、三日その地を出發し、凡そ六泊にて蓋平方面に着し、第三師團と連絡して、必要の場

合は援助の任に當るべき旨を達した。

當時第一軍に屬して居た第三師團は、大弧山から上陸し、岫巖を經て海城を陷いれ、こゝに一旅團を殘して前進した、海城の守護は最も手薄である、然し清軍中で鬼と呼ばれた宋慶將軍は、本據を田庄臺に置いて、雄勢を持して居る、海城の南に當る蓋平には無慮四五千の敵が密集して居る、のみならず北の方遼陽には一萬五六千の敵が居て、南の方海城に下るべき形勢がある、第三師團の殘部隊は、三方に大敵を受けて、最も苦痛の境に立つて居た。

將軍はこの援助に當るべき任務を受けた、將軍の率ゐるのは、步兵第一聯隊同じく第十五聯隊、それに騎兵砲兵で組織した混成旅團であつた。

この時第二軍の司令部は柳樹屯にあつた、そこから蓋平までは日本里程にして五十餘里もある、將軍はまづ偵察中隊を送つて、敵情を探らせる、途中には大した困難もないらしい、由つて全部隊を率ゐて三日出發、本道の復州街道を北へ〳〵と前進した、途中は隨分困難であつた、普通の辨當は凍り付いて食べ

る事が能きなかつた、防寒具は第一の要具であるけれど、それさへも携帯することが能きぬから、遂に宿營地へ殘さねばならぬ破目になつた。

七日熊岳城に着き、八日はやゝ前方に進んで一日の休養をした、すると前進した秋山少佐から「敵は蓋平を死守せんとするものゝ如し」といふ報告が來た、將軍の意氣は忽ち昂る「諾しその敵兵を鏖にして吳れう」

由て九日本隊は蓋州本道を進み、隱岐大佐の率ゐる右側支隊は間道を取つて進んだ、さうして敵の戰線を距る二千メートル餘の楡林堡に達した時、彼我の尖兵此處彼方で小衝突をした、豆殼を煎るやうな小銃の音は間斷なく響いて來た。

その日の午後二時半、秋山少佐から詳細な報告が來た、それで敵の砲力が意外に微弱である事が知れた、將軍は天の與ふる處と歡んで、直ちに自身偵察に出かけ、具に敵情地形を視察して、再び楡林堡に歸つた。

偵察の結果、敵を攻擊するには、成るべく拂曉前に戰線へ近づきおき、天明を

待つて大擧肉薄するの得策なるとを知つた、由つてその夜九時半、各部隊に詳細な命令を傳へた、將軍得意の舞臺である、即ち自ら第一聯隊の三大隊、第十五聯隊の一大隊、それに砲兵工兵を率ゐて正面より打ちかゝる事に定め、第一聯隊長隱岐大佐は敵の左翼を、第十五聯隊長河野大佐は敵の右翼を牽制し、且つ攻擊する事に定めて、それ〴〵に用意を調へた。

この命令と共に各部隊背嚢を宿營地に殘し置き、只口糧三日分を携帶すべき旨を沙汰せられた、乃木式吶喊の下拵へとは知れた。

時は一月十日午前零時二十分、諸隊は銃劍を取つて起つた、折からの滿月は昨日の雪に映じて、壯快云ふばかりもなかつた、將軍の命令は凍るが如き寒氣の中に行はれて、忽ち集合地に向つた。

(六)

集合が終ると、將軍は直ちに攻擊部署を定める、總攻擊に着手したは、それか

ら一時間餘の後であつた。

蓋平城には、蓋平河が滔々と流れ、東方千三四百メートルの所に鳳凰山が聳えて居る、敵はその河の左右岸一帶の地に陣を布き、山の頂に騎兵二千餘、我が軍を瞰下して射撃を開始しようと構へて居た。

將軍は進軍の號令をかけた、本隊支隊共に面を觸らず進行する、敵は前面凡そ六七百メートルの位置にあり、蓋平河の後に半月形の掩堡を築き、その中から砲撃する、それが中々巧妙であつた、流石の乃木軍も何うかすると打ち縮められる、けれど中央軍の第一聯隊第三大隊は猛烈に應戰した。

この間に隱岐大佐の右翼隊、即ち第一聯隊の第一第二の二大隊は、荒涼たる畑の中を前進し始めた、鳳凰山の頂にこの機會を待つて居た敵兵は、こゝを先途と射撃した、勇敢な隱岐大佐は事ともせず、第一大隊長竹中少佐を其方に向はせ、二大隊附の香川少佐を蓋平城に向はせた、竹中少佐は勇戰して山上に肉薄する、敵兵に敗色が見えて來た、香川少佐は蓋平河を渡つて城に薄つた。

その結果、午前八時十分頃、聯隊旗手小川少尉は、高さ二十七尺の蓋平城壁を攀ぢて、蓋平城の一角に日章旗を樹てた、まばゆき朝日は正面に旗の中央を射る、全軍の士氣は揮ふ、隱岐大佐もつゞいて城中へ進み入つて、驚き騷ぐ敵兵を南門外へ追ひ拂つた。

それと同時に、左翼の前方營に當つて、優勢の敵兵が現はれた、同時に掩堡内から討ち出す敵の射擊が、雨の如く中央軍に注ぎかゝる、隱岐隊は眞魁かけて殊功を樹てたが、本隊は云ふべからざる苦境に陷つた。

然も將軍は森嚴な態度を以て陣頭に立つた、敵兵を追擊するには、何うしても蓋平河を渡らねばならぬ、河には氷が張つて居る、氷の上に雪が降つて居る、それを越えるには、必死の困難を冐すのであるが、諸兵は將軍の犯し難い號令に勵まされて、一齊に河を渡つた、蓋平城の西南部落へ到達するまでには、幾度乃木式を發揮したか知れぬ。

射擊の止んだのは夜の九時であつた、乃木軍は豫定の動作に由つて、確實に

乃木大將筆

御製

夏の夜もねさめかちにそ明かしける

世のためおもふことおほくして

源希典謹書

殉死前三日陸軍士官學校教師和田純氏に謹書して贈られしもの

蓋平城を占領した、同十一時三十分各隊に宿營部署を示し、更に海山塞の北方から攻め寄せる敵兵に備へる爲、それ〴〵に兵を配置した。

戰爭が終つてから氣附くと、將軍は外套に三箇までも彈丸を受けて居た、敵兵がいかに頑强であつたか、その死傷四百五十を算したのでも知れる、我軍でも三十六の死者と、二百九十八の負傷を出した、砲彈を費すこと五百七十七、小銃彈を費すこと、實に十二萬千五百發餘に達した、將軍の馬が斃れたるは此時であつた。

我が軍は暫く蓋平に駐屯して兵力を養つた。

すると十七日に至つて「五千有餘の敵兵、遼陽、中社城の兩方面から我軍の占領して居る海城へ逆襲して來た、之に由つて營口方面の敵を牽制する必要がある、速かに出陣せよ」との急電が桂第三師團長から乃木旅團本部へ達した。

由つて直ちに準備を整へて、十八日大平山に向ひ前進した、處が翌日になつて「敵を悉く北方に擊退した、安心せよ」との電報が着いた、今は大平山へ進む必

要もない、それも物資が十分にあれば、幾尺の積雪と、幾多の艱苦を犯して前進するのであるが、同山附近の物資は悉く清兵のために掠奪せられて、今は一物も止めぬ旨の報告が來て居る、そこへどん〳〵雪は降る、兵卒は步行に苦む、困難云ふばかりもないので、宋家屯、碼虎咀子間の要害に陣地を占めて、こゝを暫時の宿營地とした。

處が二十四日突然として飛報が來た、一萬有餘の大敵、俄然として大平山に襲來したとの事であつた、今は猶豫ならず諸隊を集めて前進の準備を命じ、自ら陣頭に立つて馬を進めようとすると、力の入れ甲斐もない、敵は間もなく退却したとの知らせがあつた。

（七）

同じく二十五日以後は營口方面の敵情を偵察させて居たが、二十九日營口に三萬の敵ある旨の間諜を得、敵軍の膨大せる事を知つて愈〻警戒を嚴にした、

悃様情態で二月に入つたが、七日頃敵の大勢次第に逼迫し來る旨の知らせを得たので、將軍は午前七時朱家屯から前碼虰嘴に亙る高地に據り、攻勢防禦を爲す事に決し、弗々前進を續行したが、十日金州に居る山地第一師團長から、應援軍を送る、との報が來た、戰機は日ごとに迫つて來るが、それでもまだ大交戰を開くに至らなかつた。

斯る間に第一軍は四日牛莊城を占領した。

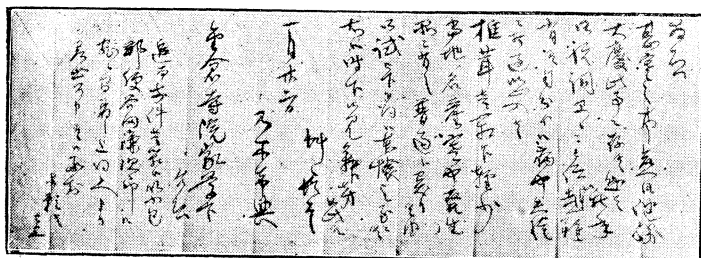
第一師團長山地元治は三月七日を期して、營口を攻撃する事に定めた、將軍の任務は左翼隊の司令であつた、右翼の司令は西少將が司る。

敵勢は一萬二千餘人あつた、清將馬三允は中央隊、宋慶は二道家、徐邦道は老爺廟に據て居た、大砲十門、小銃の中には獨逸式の銃もあつた、無煙火藥もあつた、敵の防備は十分であつた。

乃木軍は二十四日の午前三時半、降り頻る雪を冒して行進し、太平山の麓、太子窩から射撃を初めた、敵は殊勝にも暫時の間應戰したが、幾程もなく敗色見

せて、次第々々に退却した、乃木軍は勝に乘じて其處から東七里溝を砲撃した、この方面に當つたのは、松本砲兵大佐であつた、忽ち敵兵を撃退して、山の如き積雪の間を、更に西七里溝を砲撃した、されど敵は極めて頑強であつた。

そこで山地師團長は急遽乃木軍に「西七里溝の敵壘を蹂躙すべき」旨を命じた、將軍は河野十五聯隊長

金倉寺住職に宛てられたる大將の手簡

をして、敵壘の正面と左翼とを突かしめ、自ら第一聯隊第三大隊を以て右翼に當つたが、敵は頑固に抵抗した、例の乃木式も容易に效を奏しなかつた。

齋藤少佐はこの時第十五聯隊第一大隊長であつた、眞先に立つて指揮刀を揮ひ〳〵眞先に進んで敵壘に肉薄した、部下の兵も之に續く、同聯隊の或る小隊では、携へた彈丸を射盡

し、その補充をする事さへ能きぬので、空しく地上に匍匐して居るばかりであつた。
將軍は斯くと見て、自分の率ゐて居た部隊から二中隊を援兵に送つて、正面及び背面から射撃させた、この二中隊は銃劍を揮つて敵壘に薄つた、吶喊の聲天地も覆へるばかりであつた、齋藤隊もそれに勵まされて勇奮する、そのためにさしもの敵も屈服した。
これで戰爭は終つたが、十分な宿舍と飲料水とを持たぬ乃木軍は、これから寒氣と飢渴とを敵とせねばならぬ、雪を解かして飲んだ者もあつた、長時間を雪中に佇立したため凍傷に罹つた者が澤山あつた、將軍は一絕を作つて本國の知友に送つた。

稀有柳楊無竹梅　滿洲春色又奇哉
飛雲塞下尙氷雪　何日東風渡海來

次は營口の攻擊である。

横着な宋慶は、何んと思つたのか、三月四日一隊の兵を派して、我軍へ奇襲を試み、その隙を窺つて、營口へ脱れ去つた、山地第一師團長は、乃木軍及び西軍に命じて、營口を攻擊させた。

將軍は左翼隊を擔當した、隱岐大佐の前營は忽ち敵と衝突して、逃げるを追ひつゝ營口の市街へ亂入したのが、我軍勝利の光りであつた、乃木軍はまづ田莊臺に通ずる門を閉ぢて、敵の退路を絕つて置き、徐ろに戰ひを挑んだ、敵は見る〳〵中に敗北して、遼河の氷上を一直線に田莊臺へ逃走した、我軍は續いて田莊臺を屠る事となつた。

我軍は營口の占領に由つて、第一軍との連絡を取ることになつたから、田莊臺の攻擊は第一第二軍の協力任務であつた、將軍は例の通り步兵第十五聯隊を率ゐ、步兵第二旅團戰線〳〵の右翼に添ひ前進し、三月九日午前九時二十分西長立科の北方、遼河の左岸に達したが、乃木軍の手を着けるまでに、田莊臺は西少將の手に落ちた、將軍の屬する第一師團が、

其ノ軍ノ一部、曩ニ蓋平ヲ占領セシ以來能ク冱寒ニ堪ヘ來襲ノ敵ヲ撃退シ今又鞍山站牛莊地方ニ轉戰スル第一軍ヲシテ後顧ノ憂ナカラシメ遂ニ之ト協力シテ營口地方卽チ盛京省重要ノ地點ヲ略取ス、朕之ヲ嘉ス

との勅語を拜戴したは此時である。

我軍は此時直に田莊臺へ火を放つた、數百の人家は忽ち猛火の中に包まれる、將軍は部下の將校を率ゐて小高い丘の上に登り、遙に東方を拜して「天皇陛下萬々歳」を三唱した、折から初春の朝日は、曈々と山の端を軋り出た。

將軍が兩の耳に凍傷を病んだはこの時であつた、けれどその位の事は何とも思つて居なかつた、十日田莊臺を引き揚げて蓋平へ歸つた、蓋平滯陣中は練兵と清潔法とに日を送つた、杜牧の「淸明時節雨紛紛」の詩に和韵して

の一首を作つた。

干戈朔北事紛々　一望渾無↘不↘斷↘魂
節及↢淸明↡風物冷　垂楊綠淺刧餘村

四月五日、陸軍中將に進み、卽日第二師團長に補せられた。

さうして其月八日まで蓋平に滯在し、軍の英氣を養つて居たが、四月二日日淸兩國に休戰條約成つた旨の電報に接したから、卽日蓋平を出發して營城子に着し、五月十五日まで滯在して、同地から金州に着し、同十八日金州方面の守備隊司令官になつた。

平和條約成り、批准の終つたのは五月二十一日であつた。

八月二十日軍功に由つて特に華族に列せられ、男爵を授けられた、恩賜金二萬圓、功三級金鵄勳章、年金七百圓、旭日重光章を賜はつた。

臺灣守備

(一)

夫から盛夏炎熱の間を乾燥無味の金州に送つたが、更に臺灣平定の任務を帶んで、九月八日金州を出發し、大連から乘船して、十二日基隆港に上陸、臺北に入つて約一箇月間滯在、十月三日出發して、翌日澎湖島馬公港に碇泊、十日出發、十一日枋寮に上陸、直ちに臺南に向つて進軍した、此役は下關に於ける媾和條約に基き、同島が我邦の領土に編入せられて後、屢次土匪蜂起の事があつたから、特に將軍に命じて、征伐の任に就かせたのであつた。

斯くて將軍は、加冬脚、大庄頂、交水、鳳山、二層行附近の土匪を掃除して、二十二日臺南に進入した、當時の臺灣は道路全く成らず、交通機關に何の設備もなかつたから、其行軍には一方ならぬ苦酸を嘗めた、中には道路が險惡で、輜重車を運ばせる事が能きなかつたから、遂には背嚢までを捨てさせて、二日分の精米

のみを持たせ、辛うじて行進を續けた所もあつた「乃木將軍でなければ、恁樣事は爲きやしない」との評判が至る處に聞こえた。

同じ二十七日南部臺灣守備隊司令官となつた。

臺南の北方十五里の嘉義街に司令部を置いた時の事であつた、乃木司令官はまだ到着せぬ、幕僚連中蚊の甚いのに閉口して、さまざま退治法を講じたが役に立たぬ、その中には蚊の螫口からマラリヤ熱に感じて、入院する者さへ生きて來た、これでは爲らぬと思ふから、或る寺院の山門を占領して、そこに祀つてあつた佛像や木像を悉く取りおろし、大工を賴んで大修繕を施し、天井や壁に赤毛布を張り、疊までを仕かへて、そこを當座の司令部に宛てた、寺院は高見にあつたから、蚊の襲來も大に減る、將校の健康も餘程好くなつた處へ、將軍が恙く到着した。

將校連は例の氣質、きつと機嫌が惡からうと思つて居ると、將軍はじろ〳〵と室內を見廻して、

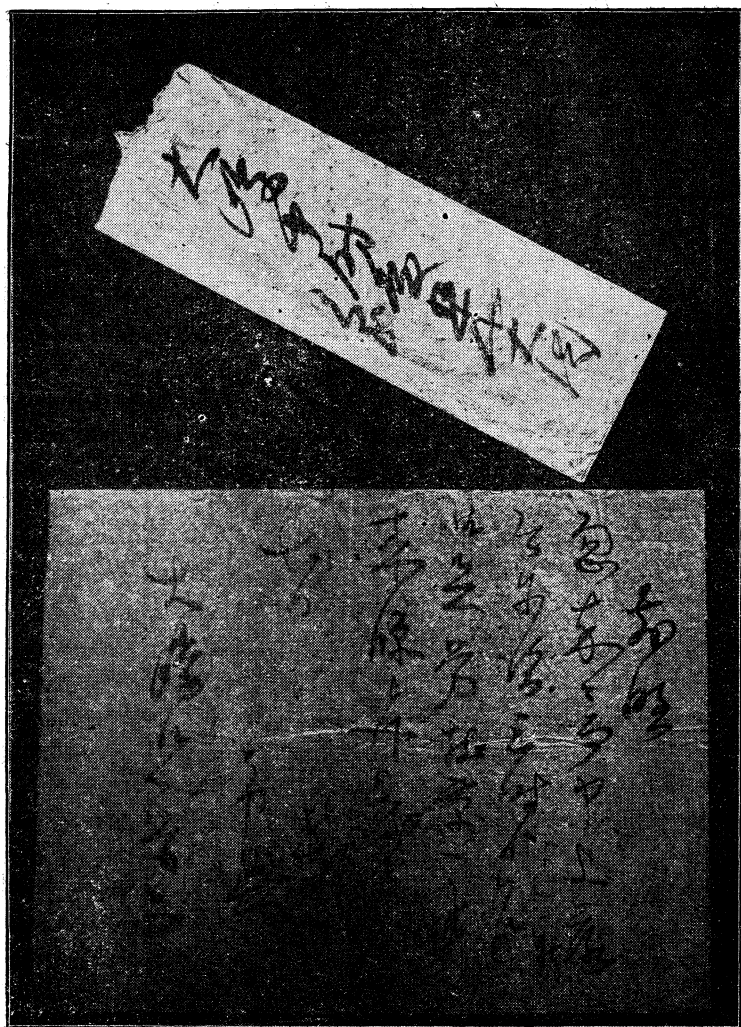
「何うも非常に贅澤だな、幾許ほど費つたか」と尋ねた、幕僚の一人齋藤中佐は答へて、

「五六百圓も費つたでせう、然し贅澤なことはありません、司令部の者が病氣にかゝつて、そのために補充をしたと思へば廉いものです」と云つた、將軍も強ては云はず、

「さうか」と云つたまゝ、山門に起臥して居た。

（二）

將軍はその頃も一菜限であつた、誰が勸めても、兵士以上の物を食はなかつた、ある時齋藤中佐が麥酒を調へて、將軍の前へ持つて來た、將軍は極めて不愉快らしかつた。

「兵士は麥酒なんぞ飲んでやしなからう」と獨語のやうに云つた、中佐はすかさず、

大將(大佐當時)手簡

(高知市 山本輝實氏藏)

「これは齋藤の御馳走です、何うか一盃だけ召し上つて下さい」と云つたので、やつと洋盃を把た。

凡て兵士と苦樂を倶にしたいといふ希望は、何日の場合にも將軍の胸の底を流れて居た、部下の將校下士兵卒が、將軍を敬重し、將軍に歸服して居たのは、將軍が謹嚴な爲ばかりでない、將軍が精勤な爲ばかりでない、部下全體に對する火の樣な同情が、間斷なく將軍の心に燃えて居たからである。

二十八年は臺南守備の中に暮れて、二十九年の春は蠻風瘴雨の中に來た、將軍は極めて健全であつた、部下も比較的健全であつたけれど乃木家には大きな不幸があつた、卽ち靜子夫人の生母天伊子が、初春匆々逝去したのであつた。

天伊子は女の鑑と呼ばれる程の賢夫人であつた、交際が上手で、坐談が巧で、加之に慈悲心に富んで居た、名譽ある二子息を敎育しただけでも、普通の婦人には及び難き手柄である、況して長女の貞子も、季女の靜子夫人も、人に勝れて好い地位に居る、好い心掛で居る、靜子夫人を生んでから、病身には爲つて居た

が、それでも湯地家の家庭の中心人物たるを失はなかつた。
然もその年忽ちに蘭は碎けた、忽ちに花は散つた、將軍は夫人からその知らせを得た時、妻や義理ある兄姉やの心の中を察し遣つた。
臺南守備の事終つて、四月十二日臺南安平港を出發、御用船豐橋丸に搭乘して、十六日宇品に着し、直ちに廣島に向つて、泊り付けの吉川旅館に入つた。
廣島では、乃木將軍の凱旋と聞いて、市民は狂するばかりに歡んだ、有志者は歡迎場を停車場の南側に設け、事務所を長沼支店に置き、殆んど官民總出で車を迎へた、中には大幟を樹てゝ出かけた者もあつた。
將軍は翌日廣島を立ち、十九日午後三時大阪驛を通過した、時の山澤第四師團長は停車場へ出迎へて、滲々と出征中の勞苦を犒つた、將軍はいつもの如く機嫌克く笑つて居たが、頰の肉は落ち、鬢髮のあたり深く霜を抽んずるのを見て、出征中の難苦を偲ぶこと多かつた。
「遼東以來とう〳〵今になりました」

これが將軍の挨拶であつた、東京へ着いたのは翌日の朝であつた。
諸將校は雨の日を停車場へ出迎へた「祝凱旋」の大小旗は新橋の春風に飜つた。
乃木將軍は斯くして日清役から凱旋した、東京に一兩日を逗留し、直ちに第二師團に赴任する豫定であつた。

第二師團長

第二師團長として仙臺に居たのは眞の僅の間であつた。

四月二十日の朝東京へ着いて、誠意ある東京市民及び友人將校の出迎ひを受け「祝凱旋」の大旗小旗に送られて赤阪の邸へ入つた、靜子夫人兩子息は門前、母の壽子刀自は玄關へ出て、限りなき歡びと、限りなき芽出度さとを籠めて迎へた、將軍はまづ壽子刀自の無事を祝し、先祖の靈に挨拶して、夫から出征中の大略を物語つた。

年を越えて萬里の異域に轉戰し、滿洲から臺灣へ渡つて、數へ限れぬ程の苦勞を經て來たのであるから、切て一二週間は休養せらるべきものと、家人は原より友人親戚誰も彼も思つて居たが、翌日は天伊子の墓詣と、湯地家の弔詞等に暮れ、その翌二十二日にはもう仙臺へ赴任すると云ひ出した、壽子も靜子も本意なく思ふのであつたが、云ひ出した事を後へ退いた例のない將軍の氣質

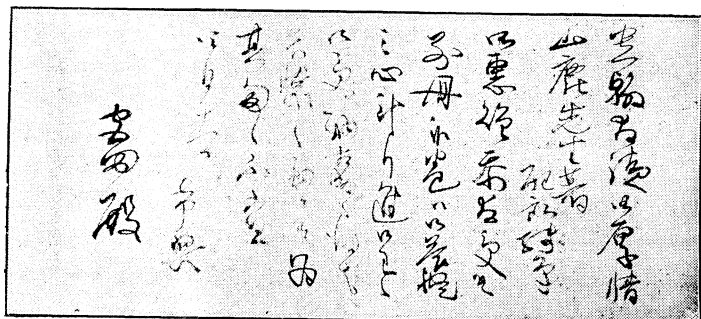
を知るので、直ちに出發の用意にかゝつた。

將軍は去年九月二十七日征清の命を受けて東京を出發してから、この日芽出度く凱旋するまで、自宅へ向けて一通の私信も出した事がなかつた、滿洲から臺灣へ入つて、彼地の守備に任じて居る中も端書一通送らなかつたから、家人は東京到着の時刻もよく知らなかつた、勝典が新聞で將軍凱旋の時日を見て「お母樣お父樣お還りですよ」と知らせたので、漸く知つたのであつた、もし新聞に出なかつたら、將軍の家庭では、將軍の凱旋を知らずに居たであらう。

その以前から、將軍が仙臺へ赴任せられる時は、官民連合の大歡迎會を開くべき催しのある事も通知されて居たけれど將軍は大袈裟な宴會を好まぬから出發の前日、仙臺へ書を飛ばして「生還者を歡迎する費用を節して、戰死者の靈を慰める企畫せよ」と云つて遣つたが、仙臺市民は此名譽ある戰勝將軍を、土地の師團長に迎へる事が、いかにも嬉しく本意であつたので、將軍の意見を用ひず盛大な觀迎の準備をした、將軍からの書面は見たが、世に例ある一片の挨

拶に過ぎなからうと思つて居た。

將軍は二十二日午前十時東京を出發して仙臺へ直行した、停車場から師團への沿道は、軍隊、縣官、有志者、學校生徒が雲の如く集つて、狂せんばかりに「乃木師團長萬歲」の聲を浴びせかけた、將軍は一々擧手の禮をして過ぎた、師團司令部へ入つて一應の挨拶を終ますと、時の知事勝間田稔

丹後峰山町宮田澄助に宛てられたる大將の手簡

から「出征將校歡迎の園遊會を開くべきに付き、御出席下さるやう」との申出があつた。

勝間田知事は有名な風流家であつたから、その日の園遊會には仙臺藝妓の粹を拔いて、酒間の興を幇けさせる企てもあつた、又その計畫もいつとはなく將軍の耳へ聞えて居た、將軍は劈頭第一に、

「賤業婦は居ないぢやらうねえ、御厚意は受けるが、賤業婦の居る宴席はお斷りする」と云つた、知事は驚いたが止むを得ず、

「勿論です」と慌てゝ答へて、急に豫定の趣向を變更し、縣會議員や、縣吏郡吏が酒間を周旋することにした、將軍は更に第二の注文を出した。

「生きて還つた者よりは、まづ戰死者の靈をお慰めなさい、王事のために斃れた忠勇義烈の士の靈魂をも祀らんで、私等が前へ御馳走になる筈はない、招魂祭の終んだ後なら歡んで出席する」と云ふのであつた。

知事は快く第二の注文に應じて、盛んな招魂祭を擧行した、次に開かれた歡迎會へは、將軍も莞爾〳〵として出席した。

將軍は十月山形縣米澤で秋季機動演習を行つた、演習中に小高い處で煙草を喫つて居ると、百姓の爺さんが「もし旦那、火を貸して下さりませ」と眞鍮張の煙管を出した、嚴格ではあつたが、田舍人でも懷く平和な長閑な態度のあつたは、此一事でも知る事が能きる。

この演習中(十月十三日)突然出京を命ぜられた。

臺灣總督

(一)

米澤附近の演習地から、召に應じて上京した將軍は、桂太郎に代つて、臺灣總督たるべき旨を命ぜられた、蓋し當時の臺灣はその治績を善くする上について、將軍の嚴正な手腕に期待する所が多かつたのである。

將軍が臺灣總督に任ぜられたとの報が傳はると、多くの御用商人が星の如く門に集つた、反物、菓子折、書畫骨董の類が「御見舞」とか「御祝ひ」とか云ふ名稱の下に、玄關へ運び入れられた、重要な地位を得た人の家庭に、此等の品が山を作すのは珍らしくない、金銀物品の力には、何物をも抗することが爲きぬやうに、信じて居た、無智大慾の御用商人は、將軍を同じ手段で掌の中に丸めようとしたのであつた。

けれど將軍は石であつた、鐵であつた、反物や菓子折を見る目を持たなかつ

た、夫等多くの到來物は、一々書生と馬丁とに命じて、贈り主へ返付させた「此樣物はお貰ひする理由がない、以來も斷じて謝絶する」

さうして一方に渡臺の準備を急いだ、當時母堂の壽子刀自は、六十九の老齡で、さなきだに貧血で苦んで居たのが、二三年前から腎臓病を併發して、月の半分は褥に就いて居た、この母堂を臺灣へ伴ふべきか、又は東京に殘し置くべきかについて、孝心深い將軍はさま〲に考へた、臺灣へお供するのは容易でない、母樣もさぞ御困却遊ばすであらう、さればとて明日知れぬ御老體を、東京に殘し置くも心縈りであると云ふので、何うしよう斯うしようと思案した末、遂に母堂の意志に任し參らせようと心を決め

「お母樣は何うなさいます」と訊いて見た、すると壽子は

「斯う年を取て、お前さんの側を離れるのは望みでない、何處に居ても壽命に關係はないと思ふから、一緒に臺灣へ行きますよ」と云つた、その詞の裏には「彼の地の土となつても關はぬ、母子一緒に居たい」との心が包まれた。

「然し、臺灣は陽氣が惡いのですからなア」と將軍も一時は躊躇したのであつたが、壽子が强て同行を望むので、是非なく同道することにした、それは當時臺灣の人情風俗が、最も頽廢して居るのを聞いて居たから、おのれ奉養の範を示して、風紀の幾分を矯めようとの希望があつたのかも知れぬ、壽子刀自にしても、おのれ其の道具になつて、我子に光りを添へたい慈悲があつたらしくも推量された。

皇后陛下(今の皇太后陛下)此の事を聞し召され、深く御感の餘り、乃木一家出發の前日、特に壽子刀自へ拜謁を仰せ付けられた、刀自の光榮云ふばかりもない、靜子夫人同道して、やがて御所へ參內した、陛下は直ちに御前へ召されて「老體の身が、幾百里の波濤を超えて遠く臺灣へ渡航する健氣な覺悟」を御嘉賞あらせれた、刀自は難有さに涙を溢して、滲々御暇乞ひ申し上げた、時の人々、誰とて刀自の光榮を羨まぬ者はなかつた。

將軍はその月二十四日仙臺へ歸つて、將校の送別會に臨み、事務の引繼を了

して後、すぐ歸京、二十九日午前十時二十五分新橋發の列車で、母堂、夫人、山本副官、横澤事務官外十二名と共に出發した、壽子刀自は海老のやうに曲つた身へ、紬の被布を着、銘仙の着物を着け、靜子夫人に扶けられて、大儀さうに汽車へ乘つた、見送りの人達は、刀自の姿を見るにつけて、不覺に涙を浮べたのであつた。

將軍夫人は母堂を勞はりながら、その夜は濱松に一泊、翌日は江州八幡へ下車して、祖先墳墓の地へ入り、沙々貴神社へ參拜して、其夜京都へ入り、三條小橋の大津屋旅館へ着いた、刀自は三十五六年も前、將軍十歳の時、一家を擧げて東海道を長州へ下つた古き昔を偲びつゝ、東山の秋に對しながら眠りについた。

(三)

大津屋では好いお客樣と思ふので、丁寧に取扱つたが、將軍夫妻は絹夜具を近けなかつた、宿屋へ着いて、一風呂、さつぱりした浴衣を着て、膳の上で一杯始めるといふが普通の旅情であるけれど、將軍は少しも軍服を身から離さぬ、風

呂を出ると軍服、膳に着くも軍服、汽車では十五錢の辨當以外に、何物をも口にしなかつた。

翌日(三十一日)は朝夙く母堂を奉じて、まづ御所を拜し、北野の天神に詣で、それから名所舊蹟を案内して、午後二時十五分出發、神戸へ着いて西村旅館へ入つた。

その夜は夢安からず神戸に一泊して、十一月一日午後二時旅館を出で周布知事に見送られて、中税關構内より水上の小蒸氣船に乘り、定期船薩摩丸に乘つた處が當時臺灣にペストが流行して、災に罹るものが多くあつた、將軍が西村旅館へ入つた時、臺灣からペスト流行の模樣を報告して來た、大體の者なら逡巡する處であるが、將軍は平氣で居た、すると出發の間際になつて、時の總理大臣松方伯から、

「臺灣ペスト流行す、出發を見合す方宜しからん」との電報が來た、將軍は夫でも平氣であつた、副官や事務官が心配して、

二時お見合せになつては如何です、萬一の變があつてはなりません」と諫めたが、將軍は頭を揮つて、直に總理大臣へ返電した、その主意は

「不肖ながら總督の職を穢す上は一時も惡疫流行の手當を急ぎます、場合に由つては、家族を殘し置き、單身赴任の覺悟であります」と云ふのであつた、總理大臣からは押返して

「强て見合せよ」との電報が來た。

然し此時は已に船中の人であつた、薩摩丸が今しも黑煙の中に錨を解かうとする時、西村の番頭が總理大臣の電報を持つて來た、將軍に少しでも身を厭ふ心があれば、ランチへ乘り移る餘裕はあつた、けれど將軍は動かなかつた。

大將咏及筆

（第九師團參謀　新井少佐藏）

「斷じて初志を飜へさず」と返電して後「お母様はお殘りなすつちや如何でございます、職務のために倒れるのは止むを得ませんが、お母様に若しもの事があつちやなりません、すれば私だけが參ります」と云つた。

千軍萬馬の間を往來、硝煙彈雨の前に身を曝らした戰場の危險な狀態に比ぶれば、ペストの流行位は何んでもない、惡疫のために斃れるも、砲彈に命を失ふも、君の爲に盡す心は同じてあると、深く覺悟を極めたのてあつた。

壽子刀自も我子の心は善く知つて居た。

「なに大丈夫でござるよ、お前さんと一緒に出たからは、生死を共にしようぢやござらんか」と淋しげに笑つた、それで壽子刀自も靜子も同行の事に決した。

さうして四日朝馬關へ着いて、阿彌陀寺町の常六に入つた、朝餐を濟ますと共に、鄉里長府町へ行つた、同町民の歡迎會に臨む爲である。

將軍の長府入は眞に二十餘年振であつた、歡迎會には有らゆる階級の人が出席して、質素な歡迎會を開いた、此時である、將軍は昔を偲んで橫枕の舊邸を

訪れた、同行したのは舊友桂彌一、日原昌造、祕書官の横澤次郎であつた。

將軍はその頃已に他人の手に渡つて居た舊邸へ入つて、昔汲み慣れた古井の側へ立ち寄つた、一もとの柹の木と、一樹の老梅とが朽ち果てた井桁を守る、水は舊の如く底淸く澄んで、鏡の如く將軍の英姿をうつした、將軍は手づから細繩を結び付けた振釣瓶を取つて、滿々と水を汲み上げ、笑を湛へて掬ひ呑んで、更に餘れるを人々に頒ち與へた、將軍は事に當つて東京を去る時、必ず死を期して居た、再び生きて還らぬ覺悟を以て、遠く新領土の任に赴く序、故鄉の水を汲んで心を洗ふ、あはれ當時の情、あはれ當時の心の中。

歡迎會が終つて馬關へ歸つたは、その日の夕暮れであつたが、風波が荒かつたので、船の出たのは五日の午後二時であつた。

（三）

斯くてその月十六日午後基隆に入り同地に一泊、十七日午前十一時五十分

汽車で臺北に着き、直に總督の官舍に入つた。

二十八年日清役から臺灣の土匪討伐を命ぜられて、當地へ來た時、いかにも道路が不良であつたから、軍資を以て修繕改造し、そこから軍を進めた事がある、臺灣の交通は此のために多大の便利を得た、こんな緣故で人民一體將軍の赴任を歡び迎へた、將軍の手に由つて、始めて新領土の上を掩ふ惡雲を拂ふ事が爲きようとの期待もあつた。

臺灣總督の官舍は二箇あつた、一は桂伯爵(今の公爵)の總督時代に新築した日本風の立派な家屋で、一はその前に使用して居た西洋造の假屋めいた粗末な家であつた、將軍は無論立派な日本建へは入らなかつた、粗末な洋館で例の嚴格質素な生活を送つた。

何うかと思つた壽子刀自も、案外に元氣で、

「仙臺は寒くて困つたが、此方は溫で大層好い、今年は六十九の厄年だが、此の調子なら無事に過すかも知れませんよ」と歡んだ。

大將筆蹟

（美濃赤阪　清水石僊氏藏）

壽子は將軍夫婦の誠意ある孝心に慰められて、病ある身を忘れるほどに、恙く暮らした、晩餐の膳の上で、例の如く一合の酒を傾ける、お給仕は靜子夫人で、時とすると將軍も相伴する、壽子はそれに慰められて、何方を向いても知らぬ他郷他國の天地にありながら、さのみ淋しくもなく送つた。

處が瘴癘の氣、遂に壽子刀自を襲うて、秋の初め頃から重き枕についた、痼疾の腎臟病が重くなつたのと、風邪から肺を冒したのとで、老體の起居も自由ならぬやうになつた、最初暫時の間曾根民政局長官々舍の一室を借りて、療養を加へて居たが、それでは不便でならぬので、程なく總督の官舍へ入つて療治した。

その病氣の間、將軍は壽子刀自の橫臥して居るベッ

ドの枕頭に椅子を置いて、軍服のまゝ端然と腰を掛けて居た、誠心誠意を以て看護するのである、靜子夫人も亦た木綿の紋服に袴を穿けて、ベッドの裾の方に付き添つて居た、用のある時は、忠實しく働くが、それでない時は、夫婦とも低く頭を垂れて、幾晝夜に亙る看病にも、絶えて形を頽すことを爲なかつた、夜も晝も同じやうに椅子にかゝつて、一睡だもせず看護したのは珍らしくなかつた。

總督府でも、奏任以上の者や、總督附の官吏は、輪番に定めて、代り〳〵に看病の手助けに出たが、母堂の看病に人手を借りるやうな事はない、大小の事、悉く將軍夫婦で賄つて、少しも人手を借りぬのと、比類なき嚴格の態度に打たれるのとで、一日一夜を忍耐する者がなかつた、終には半夜交代に定めて、僅かに窮屈を遁れる事にしたのであつた。

さしもの看護も効を奏せず、將軍夫婦の誠心も屆かず、壽子刀自は眠るが如き往生を遂げた、實に明治二十九年十二月二十七日の事であつた。

、壽子刀自の凶報を聞く者は、知るも知らぬも皆な泣いた。刀自が乃木家へ嫁いだ時は、季十郎翁が得意の時代であつた。江戸の定府として、銀姫（後に毛利公爵の夫人となつた）のお傳役として時めいた時であつた。夫婦の間は極めて睦じく、將軍、眞人、集作それに二人の女の母として、婦人の模範となるべき生活を送つた。婚嫁後十數年にして良人季十郎は本國長府へ歸る事となつた。それには諸種の事情が纒綿して居る。或は長府へ着くと共に、切腹せねばならぬ運命が來るかも知れぬとの恐れもあつた。此の時の壽子の覺悟は、男も及ばぬものがあつた。良人が切腹するとなると、家祿は勿論沒收である。女の手に四人（その頃集作は生れて居ない）の子供を抱いて、いかに生活を立て行くべき歟、いかに子供を敎育すべきか、いかに良人の忠節を顯すべき歟、それ等の心配と苦勞とに、夜も眠らぬことが幾許あつたかも知れぬ。

この難關を切り拔けると、次には貧苦といふ敵が來た。然もその陣頭に立つて戰ふべきは壽子只一人であつた。

（四）

長府時代の乃木家が、何様に悲酸な生活を送つて居たかは「乃木十郎」の條に詳しく説いた、十郎は疎末な手張の屏風に「うはべには襤褸の衣を纏ふとも心錦の花を飾れよ」といふ自筆の歌を書いて張り、來客あるごとに「之でなくては爲りませぬ」と誡めて居たほど嚴格で、無慾で、生活に無頓着な人であつたから、家計の事は總て壽子一人の肩に擔うた、表高は八十石でも實收は二十餘石に過ぎなかつた、そこへ外面の交際にケチ〳〵云ふ事が嫌ひなので、自然目に見えぬ入費も要る、お上から戴く御扶持ばかりでは、暮らして行くことが爲きぬので、涙ながら鹽煎餅を内職にした事もある、砧巻を作つて賣つたこともある、その悲酸な家庭情態が、將軍の人格を造る上に、何れほど有力な土臺になつて居るかも知れなかつた。

將軍は一度も幼時の事を口にした事がなかつた「乃公の幼い時には恁様苦

勞をした事もある」と遠き昔を偲び語るのが普通の人情で、又誰でも遣ることであるが、將軍は絶えて舊い泣言を云つた事がなかつた、殊に長府時代に於ける家庭の狀態などは曖氣にも口へ出さなかつた、口には出さぬが、自分もその苦酸の幾分を嘗めて居るから、母親の辛勞はよく知つて居る「お母樣は彼までにして私共を育てゝ下すつた」との心が念頭を去つた事はなかつた。

それだから母堂の死――殊に臺灣瘴癘の地で、永い眠りに就かれた悲しさには、いかな將軍も腸を絶たれたに違ひない。

壽子の遺骸は、城外三板橋の內地人共同墓地に葬つた、誰あらう、總督母堂の葬儀として、最も質素であつた事は、心ある者に深い感動を與へた。

共同墓地には今も壽子の墓がある、將軍が總督の任を罷めて內地へ歸つてからこの墓地を如何にすべきか、と云ふ事について多少議論があつた、總督府でも、日本內地へ移した方が宜からう、との說があり、將軍も不同意ではなかつたやうであつたが、遂に此事は行はれなかつた、そこで現神奈川縣知事の大島

久滿次が、四五年前東京へ來た時、親しく將軍の許を訪ねて、母堂の墓の事を云はうとすると、將軍は「その前にお賴みがある」と云つて、千圓の包をさし出し「あなたは親切に亡母の墓を守つて下さる、のみならず、命日にはそれ〴〵祭祀をして下さるやうに聞いて居る、御深切の段深く御禮を申す、どうか以後も今まで通りお世話下さい、これは些少であるが、命日々々の祭祀料にさし上げ置く」と云つて渡した。

大島知事は今に始めぬ將軍の厚誼に感じ、又將軍の言葉以外に深い意味があらうとは心も付かず、委細を承知する旨答へて引き取つたが、今になつて考へると、その頃から時機を見て、一身を擲つべき考へを持つて居られたのかも知れぬ。

その千圓の金は、大島知事の手に由つて、臺灣の確實な銀行に預けられ、今日に至るまで祭祀を續けられて居る、今後幾百千年の後までも、確に續けられる事と信じる。

總督時代に於ける總督の逸話極めて多い、こゝに五つ六を拾つて見よう。

當時臺灣土民は、まだ日本の政府を信用しなかつた、そのため紙幣の流通が不活潑で銀貨ほどに通用しなかつた、故に民政廳では、毎月一二度づゝ紙幣の引換へをすることにして居た、その時は前方から「何月何日午前何時より何時までの間に於て之を引換ふる者也」との張紙を門の四方に掲げるのが例であつた。

けれど悠長な臺灣土民の事であるから兎角指定の日に來るものが少い、大體は後れ走に驅け付けて「もう時間過ぎだから可けない」と刎ねられる、人民は自分の悠長な事を棚へ上げ「民政廳は不深切だ」と小言を云ふ、ある時將軍が民政廳の役人に向つて、

「引換へは圓滿に行はれますかね」と尋ねた、すると役人は此の時と云はぬばかりに口を尖らせて、

「いや何うも、時間の觀念が無いに困ります、何奴も此奴も時日を正確に守る

者はありません」と答へた、將軍はそれを聞いて、「此方へ日本暦は何れほど渡つて居るだらうか」と獨語のやうに強く云つた、當時はまだ日本暦の渡つて居るのが少いから、大體は清暦を用ひて居た、清暦を用ひる者に、日本暦の月日を示しても、正確に行はれる筈のない事を、夫となく諷したのであつた。

（五）

當時の臺灣官吏は、比較的給料が高かつたから、生活も從つて贅澤であつた、將軍は何うかしてその惡風を矯めようとして、隨分苦勞をした、結局自らを標準として、他の覺醒を待つ外ないと思つたから、嚴格の上にも嚴格な態度を以て、模範的生活を送つて居た。

けれど將軍の用意も、何うかすると徒勞になつた、將軍の前でこそ皆が堅い顏をして居るが、外へ出ては隨分怪からぬ行爲もした、それで時々臺灣の烟華

場として名高い艋舺の町へ出かけ、部下の將校其の他が賤しい遊びをして居るやうな事はないかを視察した。

されば「今度の總督は嚴格に過ぎるぞ、彼樣に融通が利かなくつては困るぢやないか」との評判が至る處に聞えた、それが嵩じては「これぢや民政が軍政に壓迫せられて了ふぞ」と騷ぎ立てた俗吏もあつた。

大將咏及筆

（丹後峰山の芦原市氏の所藏にして床の軸及楣間の小幅共に大將の筆なり）

將軍は公用で、折々上京する、さうして臺灣へ歸つて來ると、民政長官や、軍務局長や、其他の高等官が續々訪問すると將軍は嚴正な態度で屹立して、まづ「東京に於ては兩陛下とも御機嫌克くあらせられる、お互に慶すべき事であります」と報告し、終つて用件に移るのが例であつた、常に人に對つて、「昔徳川時代には、公儀から知己親類へ手紙を出す時、冒頭に公方樣にもお變りなく芽出度く奉存候と書くのが例であつた、眞に宜しい習慣であつた」と語つて居た、これでも將軍用意のある處を知る事が能きよう。

臺灣內地の各知事が臺北へ來ると、必ず總督の官舍へ挨拶に來る、すると將軍は自ら知事の旅宿へ就いて答禮をするのが例であつた、よく／＼差閊えのある時でなければ、副官や祕書官を代理に出す事はなかつた、これも將軍にのみ見る美風であつた。

將軍が晝食の辨當は、砂糖の付いた食パン(四半斤)であつた、日々の生計も之に準じて、能きるだけ質素にした、來客でもある時は、臺所に肉類の匂ひもした

が、常は至つて粗末であつた、總督府から官邸へ歸ると、上衣を脱いで洗ひざらした白の上衣に着かへるばかりで、和服は殆ど用ひなかつた。

久しく將軍の祕書官をして居た三十四銀行支店長木村匡の話に「第二師團長から臺灣總督に任ぜられた時、事務引繼として仙臺へ行かれた時、僕も隨行した、歸途は時間の都合で、宇都宮に一泊する事となつたが、軍服のまゝ轉りと寢て、翌朝一番で出發し、上野の靜養軒で朝食を食べられた、將軍の質素簡易を旨とせられたのは之でも知れる」

これも同じ人の話である「將軍御夫婦は極深切であつた、予のシミ〴〵感じた事は、或る時淡水館の宴會に隨行して、歸りに官邸まで大將をお送りした時もあつた、すると一杯飲めといふので、再び御酒を下すつた爲、殊の外酩酊した、其ため官邸に泊めて戴いたが、翌朝は宿醉の氣味で頭痛がする、氣分も甚だ宜しくない、然し酒のために職務を怠るのは意氣地がないと思つて出勤した、多分將軍からお叱りがあるだらうと思つて居ると、平生よりは丁寧にして下す

つた、それに甘へる理ではないが、午後は官邸へ歸つて休養をした、すると靜子夫人が御自身にお藥を持つて來て下すつた、無論深切なお詞も添つて居る、その夜は總督の官邸に晩餐會を催される筈で、予もお招きを受けて居たが、苦しくて行かれないから、宜しくお斷り申し上げると、今度は將軍御自身でお迎ひに來て下すつた、その御深情は到底他人の想像にも及ばぬ所です」

將軍は個人に對して深切なばかりぢやない、公に對しては更に深い深切があつた、明治三十五年臺灣神社の鎭座式に列するため、特に渡臺せられた事があつた、その時共同墓地にある母堂の墓へ參詣せられた、處が當時は墓地の掃除が行き屆かぬため、彼處此處に雜草が生ひ繁つて居た、將軍は母堂の墓參を終つて後、他人の墓へも參詣して四邊の雜草をむしり取た、その樣を見た人々は、何れも崇高の念に打たれて感涙に咽んだのであつた。

（六）

その頃總督府の守衞をして居た安藤元節といふ人が、ある時歸省して少ばかりの漬物を土産に持て來た、これは安藤の知人が手づから漬けたのだといふので、將軍へもその事を傳へた、すると將軍は非常に歡んで、心から受け納めた、誠意で呉れる物は花一輪蜜柑一箇でも歡んで納めるが、賄賂の意味あるものや、華麗を主とした物は絶對に近づけぬ、木村匡が、赤坂の邸を尋ねた時「久し振によく來た」と云つて手づから正宗の壜を拔いて振舞つた、その時の馳走は、邸内の畠で生きた生大根に鹽を付けたものばかりであつた。

將軍は何事にも深い注意を持ち、何事にも趣味を持つて居た、中にも農作が好きで、手づから鍬を持つことも少くなかつた、自分の邸内で生きる大根と隣邸で作つて居る大根とを食ひ競べ「家で生きたのは辛味が少い、これは地質に由るのだらう」など語ることがあつた。

將軍が質素であつた事は、こゝにも一つ例がある、總督府の參謀をして居た藤井少將が內地へ轉任する時「今夜は私の家で送別宴を開くからお來で下さ

い」と云つて來た、藤井少將は委細心得て定めの刻限に行つて見ると、將軍自身に玄關まで出迎へて、やがて奥の座敷へ伴ひ「洋刀を取つて胡坐をお組みなさい」と云つた、座敷にはさし對ひに膳が二つ並べてある、一つは少將の膳部で一つは將軍の膳である、御馳走は燒鳥と魚の煮浸しと、外に野菜物が一皿、正宗の壜詰が添へてあるばかりであつた、手づから酌をして「さア送別の酒を喫でくれ」と云つた。

將軍は軍人が洋刀を玄關の刀架に懸けるのを嫌つた「武士の魂を其樣處に置いて何うする」と警めた、將軍が臺灣へ着任した時、同地に勤務して居た仲木少將が挨拶に行つた、少將と將軍とは同縣出身で、日頃から心安うして居たから、玄關で帽を脱ぎ、洋刀も取つて應接室へ入ると、將軍は儼然して「劍と帽子とを何うなすつた」と訊いた。

將軍がいかに臺灣內地の實況を知らうと苦心したかは、殆ど他人の想像に及ばぬ處があつた、臺灣に長く居た者と云へば、何樣身分の人でも歡んで對面

した、又地圖を見るのが極めて上手で、地理の研究には一種の眼光を持つて居た、總督府の應接所には、臺灣地圖を備へて置き、來客のあるごとに、その地圖で話をするから、地方長官などが來て、返答に窮る事も折々あつた、將軍は武人一遍の人のやうに思ふ者もあるが、政治上にも立派な意見を持つて居た、たゞ漫に口外せぬばかりであつた。

臺灣人の教育については、殊に深く意を用ひた、臺灣人は將軍の大恩を記憶せねばならぬ、植民地に於て、その土地の文學歴史を疎外すべからざるは勿論である、將軍は此點に心を止めて、龍山寺に釋典の禮を擧行した事もある、その時は自ら進んで出席し、もし費用に不足を生ずる時は、必ず自費を以て補助をした、又臺北、臺中、臺南に師範學校を設置すべき計畫を立てたのも將軍である、この計畫は段々面白くない結果になつて、遂に悉く廢校となつたが、それでも將軍の蒔いた種は、美しい實を結んで居る。

臺灣在任中にその年は暮れて、三十年の春を迎へた、畏き邊から金千圓を恩

賜せられたは、其年の四月一日であつた。

前總督時代には不品行其他の事情で勳章を褫奪せられる者が多くあつた、けれども將軍は「勳章は他の物と違つて、大きな働きから得た物であるから、些細なことで取り上げるのは好くない」と云ふ意見を持つて居た、その爲めに一たん奪はれかゝつた者も格別の詮議を以てそのまゝにせられたのが多かつた、それが動機で品行を改めた者もあつた。

六月二十二日勳一等に叙し、瑞寶章を賜はつた。

（七）

その年七月靜子夫人が麻剌里亞熱に罹つた、將軍は公務に遑が無い、手づから妻の看護をする樣な氣質でも無い、官舍では何うしても療治が爲きぬので、心ならずも臺北赤十字病院へ入院した。

恰ど比志島中將も、同じ病院に入つて居た、比志島夫人雪子とは心安くして

居たので、雙方から往來もした、互に身の上話もした、夫人は愼やかな氣質であつたが、それでも許し合うた人には、何事も祕さず打ち開けた、夫人は竹を割たやうにさつぱりした人で、ちッとも城府を設ける事がなかつた、靜子夫人に對して話をして居ると、恰ど芝蘭の室に在るやうで、何處からともなく懷しい心の香りが薰つた、殊に臺灣に居る間は、誠實を以て良人の事業を幇助ようとの希望があつたから、內外の人に對して及ぶ限り深切を盡した、夫人入院中に看護をして居た看護婦などは、何日までも夫人の情に感じて居た。

夫人が全快して退院したのは、一月ほども後であつた、夫人が歸ると共に、將軍はすぐ內地へ歸るやうにと命じた、此の時夫人は三十九歲であつた、將軍の心では「お母樣がお逝去になつた後は、强て夫人を留めて置く必要はない、東京には二人の子供(勝典は十九、保典は十七)も殘してある、敎育盛りの靑年を他人の手にのみ任せて置くのは宜しくない」との考へがあつたらう。

夫人も亦た家と子息とを殘して、遠い處に住つて居るのは面白くないと、心

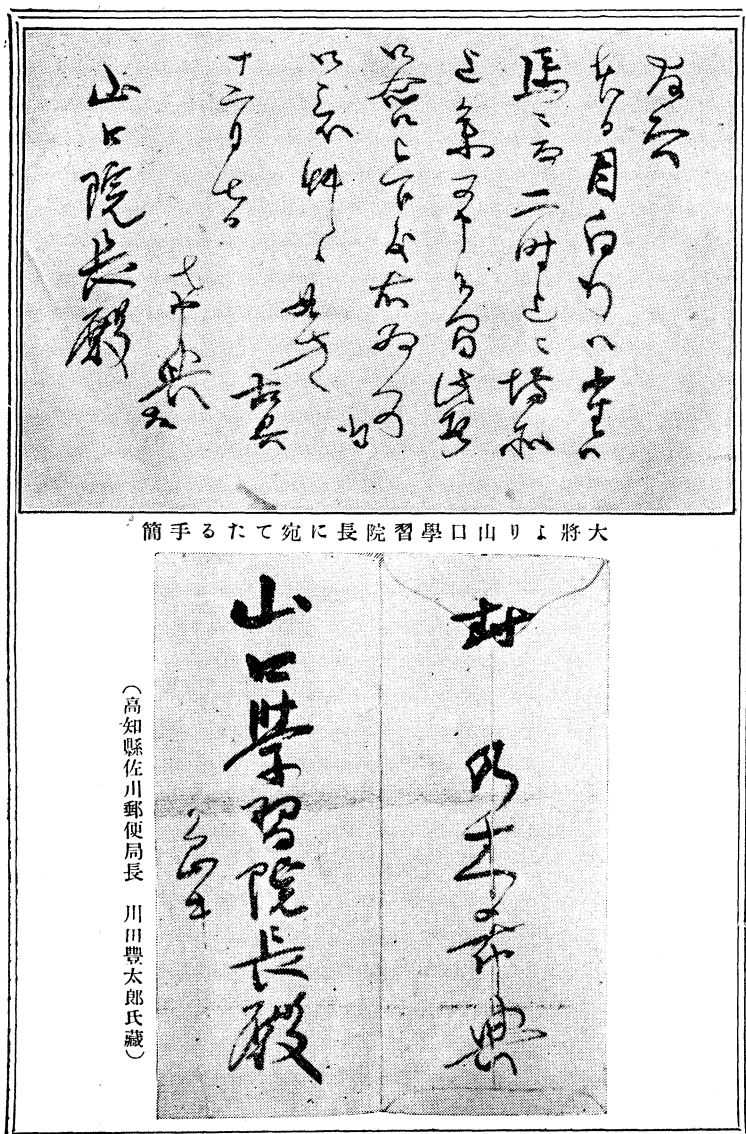
付いて居た時であるから、直に同意して退院後間もなく内地へ歸つた。

「ぢや歸ります」「ぢや歸れ」といふ樣な簡單な挨拶が交された限り、他目には冷淡な別離であつた、夫人が內地へ歸つた後は、將軍一人淋しい生活を送つて居た、然し淋しいといふのは、將軍の心事を知らぬ他人の想像で、忠義奉公の外に何もない將軍は、夫人が居ようが居まいが、些とも平生に變る事なかつた。

將軍は臺灣で總督の事務に勉勵し、夫人は赤坂新坂町の自邸に歸つて、專ら兩子息の敎育に從事した、その頃の乃木邸は平屋建の粗末な茅屋で、門の柱も歪み勝であつた、門前を通行する車夫や馬丁が、時々門の中を覗き込んで「うむ、これが臺灣總督の屋敷か、大風が吹く時は氣を注けなきや可けないぜ」と嘲りながら通るのを夫人はいつも聞いて居たさうである。

夫人が東京へ歸つた後は、一切の會計を木村副官(騎兵中佐、新九郎)に任せて置いたが、交際好きの將軍は、金錢の有無に拘はらず、每日の樣に客をする、貧書生や弧獨賴る處のない者やへ、どんどんと金を遣る、おまけに「機密費は交際費

大將より山口學習院長に宛てたる手簡

（高知縣佐川郵便局長　川田豐太郎氏藏）

ぢやない」と云ふので、一厘もそれらの費用に使はず、凡て總督の俸給から支拂ふ事にして居るので、毎月の收入(八百圓內外)では足らぬ勝であつた、木村副官は心配して、

「どうも閣下のお手許のお苦しいのがお氣の毒です、こんなに毎月足りなくつては、何うなるかと思つて心配します」と語つた事もあつた、ある人がその事を將軍に物語ると

「臺灣で頂戴した物は臺灣で使ふ覺悟だ」と答へた、東京の宅は月に五六十圓で遣て行く、それ等の費用は外に支出の道がついて居たから、總督の俸給は一文殘さず臺灣で使用さるゝのであつた。

これでも將軍の金錢に淡白であつたのが知られる、將軍が俸給の全部を使ふのは、眞は一文も殘さず使ふので、その中で衣服を作るのでもなければ、道具を買ふのでもない、些末の物も身につける事なく、全部を擲つのである。

翌年一月九日臺北を出て澎湖島に渡り、南部各地を經て東海岸に出で、紅頭

嶼に上陸して、普く蕃界事情風俗を視察したが、この旅行中內閣から急遽上京せよとの電報が來た。

（八）

此の上京の電命は、臺灣總督府改革の第一步であつた、改革は强ち惡い事から善い事へ移るとも極らぬ、その時の總督府改革は何方であつたか知れなかつた。

將軍は政治家でない、曾根民政長官が例の當世風の長羽織式で差配して居るに對し、將軍は武斷と嚴正とで遣り切たから、總督と民官との間に渠が生きた、將軍を何日までも總督として置いては、臺灣の治績が進步せぬ、いかに武士的精神が貴重であるからと云つて、餘り保守に傾いては取り返しの付かぬ事となる、今の中に施政の方針が改めたいとは、將軍に對する感情的の評であつた。

然も此の評判が勝利を得たいつの世にも水晶で家を作るのは少い、將軍に東上を命じたのは、將軍の現職を罷めさせようといふのであつた。

將軍はこの命令を得て、二月十三日臺北を出發し、福岡丸に搭乘して、十九日神戸に着いた、曾根民政長官も同行した、然し、長官は上京の命を得たのおやない、將軍が上京すると聞いて、急かに思ひ立つたらしかつた、心ある者は皆怪んだ。

將軍は神戸に着いた時或人に物語つた。

「臺灣の治績を擧げようとするには、大に官吏の精選を要する、人員は能きるだけ儉約して、小使や給仕に土人を用ふることにすれば、よほど政費を節約することが能きる、今の臺灣官吏は手當が好いから贅澤をする、任に臺灣に赴くのは、只贅澤がしたいためで、一人も永住の心を持つて居る者がない、眞の腰掛同樣であるから、從つて親切な情を持たぬ、親切の無い者が、何うして新領土の民心を治める事が能きよう、臺灣に多額の費用を要するのは、偶此の輩の贅澤

を助けるに止まる、粗末な大和魂は臺灣土人の利慾心だにも及ばぬ」

此の一語で將軍の胸中を察する事が能きる。

斯くて二十一日午後七時六分新橋着、赤坂の自邸へは足も踏み入れず、直に帝國ホテルに入つた、何故自邸へ入らなかつたか、その事情は詳かでないが、公用に由つて上京した身が自邸へ入るのは道で無いと云ふ例の嚴格な心からであつたらうと推測される。

さうして二十四日午前十時、桂陸軍大臣を官舍に訪ねて、二時間ほども會談したが、翌日は桂と井上大藏大臣とが打ち伴れて伊藤總理の官邸へ行き、そこへ曾根民政長官を招いて、長時間密議を凝らした、一部の政海は何となく波立つた、將軍が「依願免本官」の辭令に接したは、その翌二十六日であつた。

臺灣總督の後任としては兒玉總督が任ぜられ、同時に將軍は休職仰せ付けられた、將軍が赤坂の自邸へ入つたのは、その辭令を受けた後であつた。

翌月二日曾根民政長官も又職を罷められて、後藤新平が後任となつた、その

改革については局外者から種々な說を立てたが、將軍の人格を知り、將軍の平生を知り將軍の主義を知る者は、皆眞相を捉へて居た。臺灣統治は將軍に適當した仕事ではあるまいと云ふ者あつても、將軍を非難する者は一人も無かつた。

將軍の高潔の思想は、當時一般の人が認めて居た、乃木將軍の前途が何うなるであらうかとは、一部の問題になつて居た、今さら元に復つて師團長の地位を與へることも能きまい、樞密院顧問の閑職に置くは惜い、さりとて他に適當な地位はない、中には那須野へ隱れて光風霽月を友となさいと勸める者もあり、山川男爵などは、今度の辭職を非常に惜んで、寧そ勅選議員にしては何うだらうかと、頻に奔走して居たが、將軍は「予は軍人である」と云つて人々の好意を歡ばなかつた。

閑居

(一)

臺灣總督を止めてからは、專ら閑地で靜養をした、靜養と云つても他の人を見る樣に、溫泉や別莊で遊び暮らすのではない、暇あれば書物を讀み、親戚知己を訪問して舊交を溫める、よつぽど奮發した所で、夫人同道那須へ行く位である、二人の子息の敎育方に就いて、滲々と意注けたは此の時であつた。

勝典は去年中學校を卒業して、士官學校へ入學した、中學時代には成績が可からうが不可からうが、成るべく放任主義を取る樣にして來たのを、士官學校へ入つてから、急に家庭敎師を雇つた、此は主に靜子夫人の差配であつた、中學時代には成績が何うあつても、深く懸念するに足らぬが、高等學校へ入つて後、試驗に落弟するやうの事あつては爲らぬとの遠慮に由る、家庭敎師に選まれたは、今の水澤電燈取締役芹澤登一が、陸軍の某校に敎鞭を取つて居た時であ

つた、一週間に三度づゝ出張して、勝典に英語を教へた。

今日は先生がお來になる、といふと夫人は自ら教室に充つべき四疊半の座敷を掃除して、疎末な卓子一脚を置く、教師が來ると自ら迎へて茶菓子を饗應すなど心から敬意を表し「どうも御苦勞樣でございます」と挨拶し、勝典を呼んで對ひ合せに坐らせる、授業の間は夫人も謹んで傍聽する、月々の謝禮は月初に奉書包みどして、必ず教師の家へ屆ける、將軍夫婦は當時師弟の間が兎もすると輕薄に流るゝ傾きあるを慨いて、自身の家庭では爲きるだけ鄭重に扱つた、勝典も兩親に躾けられて、教師を尊敬することが深かつた、從つて教師も心を入れて教授した。

「閑地に居ながら、恁樣廣い邸に居る必要はない、こゝを賣り拂つて、何處か狹い所へ引き移らうぢやないか」と將軍は時々思ひ出したやうに云つた。

夫人は夫が不同意であつた、良人の命と云へば何樣事にでも從ふが、住み馴れた屋敷を賣り拂ふ事だけには反對した、然し將軍が幾度も同じ事を繰返し

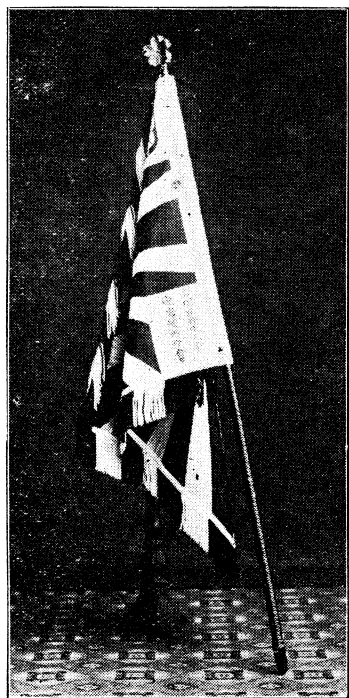
て「屋敷を賣らう〳〵」と云はれるので、夫人は氣が氣で無かつた、或る時懇意にする某將軍が遊びに來て、折から良人が不在であつたから「あなた良人に意見して下さいよ、これ〳〵で此の屋敷を賣ると云ひますから眞個に困つて了ひます」と訴へた。

すると其將軍は頷いて

「宜しい、私にお任せなさい、私から乃木樣にお話しませう」と云つた、此＊の話の中へ將軍が歸つて來た、某將軍は見るより改まつて

「貴下は貯金がありますか」と突唐に問ひかけた、將軍は何事とも知らず莞爾〳〵して

「少しも無い」と答へた。

大將筆の富山縣東岩瀨帝國在鄉軍人分會旗

大將は明治四十五年一月八日此會旗の隅に「帝國在鄉軍人會東岩瀨分會」の十三字を書せられたり

「それぢや此の屋敷をお賣りなさるな、貴下の財産としては、このお屋敷が第一ぢやありませんか」

將軍は二の句を繼がなかつた、暫くして

「財產が無くちつや可けないかなと笑つて云つた、これで此の話は廢になつた、何う云ふ心で將軍が屋敷を賣らうと云ひ出したか明瞭せぬが、その金を以て國家有用の途に使はうとしたに違ひない、當時の將軍邸は、荒れたいまゝに荒れて、緣は朽ちる、柱は歪む、室內には古椅子と古卓子とがどつさりと置いてある外、少の裝飾もしてなかつた。

夫人はそれから將軍がその事を云ひ出さぬやうになつたのを歡んで、深く某將軍を德とした、すると又一方には、それと反對に家屋の新築を勸める人があつた、將軍の顏を見る度に

「貴下には此の屋敷が廣いのですか、貴下は男爵陸軍中將ですよ、そのお宅としては餘りに狹い、さうして見苦しい、新築なさい〳〵」と勸める、將軍も最初の

間は默つて居たが、餘り執拗く云ふので、ある日

「金がない」と斷つた、するとその人は押返して

「貴下男爵にお爲りなすつた時、二萬圓の恩賜金があつたぢやありませんか、そのお金を何うなすつたのです」

（二）

將軍は聞くと共に目を睜つた。

「そりや有る、恩賜金は彼のまゝ保管してある、追て宮内省へお預けしようと思つて居る、それを建築などに使ふことが爲きるか」と以ての外の氣色であつた。

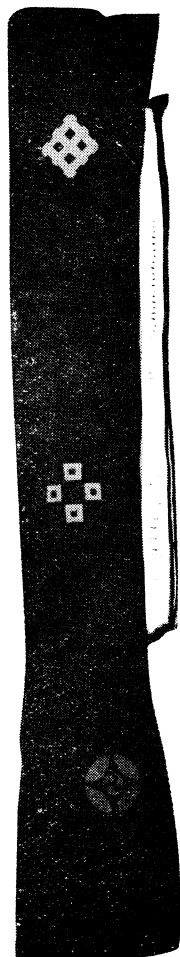
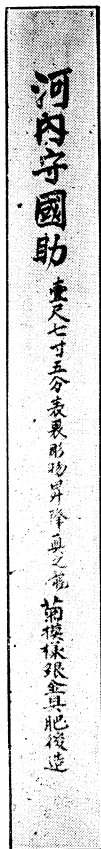
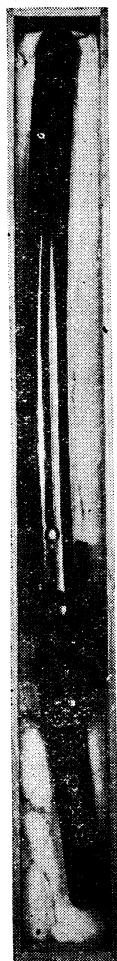
「お說は御有理ですが、恩賜のお金を其儘にしてお置きなさるよりも、一部を割いて御普請を爲すつちや如何です、すると日夜皇恩の厚きに裹まれて居るも同じぢやないですか、恩賜金でお住居をお建てになるのは、一層深く皇恩を

思召すに當ります」

此の詞は意外に將軍の心を動かした、大きく頷いて

「こりや一理ある、早速建築に取り掛らう」

將軍は直に恩賜金の半額一萬圓を以て、西洋家屋の建築に掛つた、今も保存されて居るのが夫である、元來將軍は總に趣味を以て居た、同時に不言實行の人であつた、自分に行ふことの爲きぬ事は、決して口外しなかつた、一たび口外した事は必ず實行しなければ止まぬのであつた。

書畫にも趣味があつた、骨董にも鑑識があつた、取り分けて刀劍は好であつた、親父の十郎が、刀劍は武士の魂である、假し家に一物の飾なくとも、魂のみは立派にせねばならぬと云つて、餘裕の有りたけ刀劍を買ひ込んで、まさかの時の用に供へようとした、夫を幼少から目前に見て、自然に鑑識を高めて居たので、他の趣味よりは刀劍の趣味が深かつた、或る年長府の桂彌一が新らしく手に入れた刀劍の鑑定を賴んだ事がある、すると將軍は「こんな物を玩ぶやうな

乃木大將より親友桂彌一氏に贈りたる河内守國助の銘刀にして箱書は大將の筆なり、尚袋の裏には一首の和歌を書かれたり袋の紋は乃木家の定紋なり

ら、乃公が好いのを進上しよう」と云つて、秘藏の名刀を送つて來た、肥後作の業物で、出目貫は赤銅に金銀の菊彫、柄は片手卷、木香形の鐵の一枚鍔、鞘は清漆の磯草塗、緣頭は銀の菊彫、鐺は四分一銀の菊に蜻蛉の模樣、繰肩は四分一銀の菊の散し、ヒイルは銀の菊彫、目釘は赤銅、何れも將軍が自ら好んで東京在住の名工に作らせたものである、箱には「河內守國助」と大書し、長一尺七寸五分、表裏彫物昇降眞之龍、菊模樣金銀具肥後造、明治四十三年五月贈桂彌一仁兄、辱交乃木希典」と添書してある、さうして刀を包んだ紫袋の裏に

くはしほこ千足の國の丈夫の
あらみたまこそ劒なりけれ

との一首が書き付けてある、この一刀を見ても將軍の趣味が窺はれる。

家屋の建築についても、中々深い趣味があつた、何日何處でしたのか知らぬが、古代からある神社、佛閣、宮殿、城郭等に關して、專門家も舌を卷くほど種々の研究を重ねて居た、然し自分に立派な家屋を建てようとするのではないから、

家人に物語つたことはない、他から尋ねられる事があつても「此人なら少しは研究もするだらう、將々は立派な家を建てるだらう」と見込のついた人でなければ話さない、假し問はれても、普通の返答で濟まして置く。

されば今の家を建築する時も、最初は技師に圖を引かせたが、大體は自分の理想通りに遣つた、いざ建築となつて、技師が大工に木材を扱はせて居る時など、折々自分で見廻りに來る、床柱は成るべく節の無い上等の物を選めと云ふので、其の用意をして置くと、將軍は機嫌が惡い。

「そんな物を用ふるにや及ばん、もつと疎末な物で宜い」と云つて、切角探して來た好い木を捨て、節だらけの木を用ひさせる事が屢々あつた、技師もこれには閉口して、折々頭を搔いたそうである。

故に乃木家の柱は節だらけの材木で、少しも曲線美のない眞四角な陰氣な建築である、他には餘り類の無い一種の地下室で、玄關が二階になつて居る、然もその玄關は往來と庭と平面になつて、三階が普通の二階、茶の間や臺所は地

下室になつて居る。
この普請が成き上つた時、ある人が「これぢやまだ眞成ぢやないでせうね」と尋ねた。

（三）

他人の目からは、まだ半製らしく見える家も、將軍には滿足であつた。
「いや此で好い、絨氈も何もないが此で乃公の家だ」と答へた。
斯う答へた後で、徐ろに說き諭した。
「家は兎も角だが、人は土臺さへ確乎して居れば、後は何の樣にでも爲きる、いくら奇頂面に坐つて居ても、腹が曲つて居ては何も爲らない、何ぼ橫に寢て居ても腹さへ眞直で居れば、立派な物で、家を作るばかりでは無い、人を作るのも同じ事だ」
書生や馬丁も滅多に叱る事はなかつた、知識の程度に由つて人を躾ける、內

所で陰徳を施すのは、將軍の天性といふ程であつたが、寄附金や義捐金を出す時は、必ず他の振合を見るのであつた、自分より地位の好い人が百圓を出して居れば、假ひもつと出したいと思つてもその以下を付ける、何事にも分を守つて、さうしてそれを實行するのが將軍の平生であつた。

然し、行ふべき事は何處までも行ふ、その場合には人も戒め、又た自らも艱難を排して、目的を遂げなければ止まなかつた。

「家は丈夫を主とせよ、便利を主とせよ、決して粧飾を主とするな」といふのが立前であつた。

將軍が休職で居て、名望の隆々たるを見た或る御用商人が、ある時、將軍の家を尋ね

「今度これ〳〵て最も有利な會社を起します、當時は休職の將軍方が、顧問にもお爲りなさるし、社長にもお爲りなさる、どうか御賛成下さることは爲きぬでせうか、報酬もどつさり差し上げます、將來の御利益も圖ります」と牡丹餅で

頰を撫でる樣に云つた、御用商人の目からは、男爵陸軍中將の肩書から、御光が映す如く見えたのだらう。

此の時將軍は默つて硯を取り寄せて、彼の

もの丶ふは玉も黄金も何かせん

命にかへて名こそ惜しけれ

の歌を書き、それを御用商人の前に置いて、物も云はず坐を立つた。

將軍は絕えて滋養物を取らなかつた、牛乳なんぞは大嫌ひであつた、常に曰く「人が身體を善くするのは、滋養物にあるといふか、昔の名僧を見よ、油揚ぐらゐを最上の食物として、八十九十まで長命をした例がいくらもある、衞生は精神の鍛錬に伴ふ、甘い物ばかり食て健康になるものなら、料理屋の主は百歲以上生きなけりやならぬ、精神に蟠ることがなくば、大根蕪で十分に養はれる」

壽子刀自の存生中は格別の取扱ひであつたが、將軍と子息とは、いつの食事も盛切で、白湯を用ひず冷水を用ひる、普通なら湯呑茶碗に茶の煎花を添へる

所を洋盃に冷水を盛るのであつた、戰爭の時の用意と、一は冷たい物を飮むと、心が冷靜になつて、氣に緩みが出ぬからといふのであつた。

將軍は水を疎末にしなかつた、毎朝顏を洗ふのも、洋盃に一ぱいと極めて居た。

將軍の部屋になつて居た八疊間の廊下の壁際に、軍服その他を入れた用簞笥が置いてあつた、この簞笥には將軍の必要品が容れてある、必要な物があれば將軍自身に行つて出す、決して人手を借りることがなかつた、靜子夫人にさへ手傳ひを賴まぬ位で、止むを得ぬ時は書生を呼んで命じるのであつたが、それも極めて稀であつた。

これは將軍自身で實行したばかりでなく、將軍一家を通じての美風になつて居た、最も深く將軍の感化を受けた靜子夫人も、又將軍同樣、人に物を賴むことがなかつた、夫人は非常に髮を大事にした人であつたが、衣服の事から一家内の事、總て自分の手一つでした、束髮は云ふに及ばず、夫人の好きな丸髷も必

ず自（みづか）ら結（ゆ）ふのであつた。

第十一師團長

(一)

三十一年十月三日第十一師團長に任ぜられた。

つい近くまで臺灣總督をして居た人が、夫よりも官等の低い師團長を拜命したについては、世間に種々の評があつた、けれど將軍は「軍人が軍職に就いて御奉公申し上げるに、官等の高下などを云々する筈はない」との立前から直にお受した、高級副官は葦原中佐(甫)であつた。

葦原中佐と將軍とは最も深い關係があつた、中佐の語る處に據ると「自分が乃木將軍を知つたのは、明治八年將軍が第十四聯隊長心得になられた時で、自分は聯隊書記を勤めて居た、將軍は近江源氏の後裔で、自分の舊主京極子爵(丹後峰山の藩主、舊高一萬千四百四十四石)と同家である、殊に紋所が他の京極家で用ふる四目とは異つて、隅立四目といふのであるから、舊主に事ふる心を以

て事へた、その眞心が屆いたのか、我ながら不思議に堪へぬほど打解けた御好誼を辱うした、自分が滿期で兵營を出ようとする時、まアもう少し勤めろ、とお勸め下すつたから、すぐに、勤續願書を認めた、すると將軍自ら筆を取つて、文句を改訂して下すつた、一書記の勤續願書に、聯隊長自らが筆を把て文句を書き直して下さるやうな事は、その頃は原より今の軍隊にもまづ無からうと存じます」と云ふのである、同中佐との關係を明かにする爲め、同中佐の談話を紹介する。

「その後自分は戶山學校に入つたが、程もなく西南戰爭となる、急行歸隊の命を受けて、明治十年二月二十三日南の關の聯隊本部へ着くと、槇峠聯隊副官から命があつて、直に久留米の旅團本部へ使した、當時は自分が下士であるから、旅團長の前へ出ることが能きぬ、そこで武司裁判主理を介して、旅團長へ書面を出して貰ひ、自分は襖の外に待つて居ると、野津少將であつたか、三好少將であつたか、よく判りませんが、銳い聲で

「乃木、青山(名は朗、大隊長心得)は死んだか、活きて居るならこんな事を云つて來る筈がない」

と尋ねて居られた、自分の持て來た聯隊副官の手紙は、十四聯隊が大苦戰に陷つて居るから、少しも早く援兵を送られたいといふ意味が書いてあつたと思はれる、これは聯隊旗喪失の事あつた後で、乃木軍の狀態は最も悲慘を極めて居る時てあつた。

二十九年十月二十三日大將が第二師團長より臺灣總督に轉任の砌之を見送りたる大館區裁判所檢事中目尙彥氏が日本鐵道線大河原桑折間に於て汽車進行中に揮毫を乞ひ王陽明子の肖像に王子の語錄を揮毫せしもの(中目氏藏)

旅團長の詰問が餘り鋭かつたので、武司主理は、返答をしかねて居る、自分はそれを聞いて襖越しに

「その書面は乃木も青山も知つて居るのぢやありません、南の關にある槇峠聯隊副官が前方の戰況を察して認めたものであります」と申し上げた、すると旅團長は

「諸し、分つた、然し援兵は遣らぬ、乃木、青山に戰死しろと云へ、然し明日の朝まで南の關を敵に渡すことはならぬと傳へよ」との命令を與へた。

自分は委細を了承して、直に三人輓の人力車を急がせ、二十四日の夜半南の關へ着いた、恰ど乃木聯隊長が少しばかり生き殘つた兵を率ゐて、本部へ歸つた處であつたから、自分は挨拶を述べる間もなく、旅團長の命令を報告した。

幾晝夜に亙る苦戰を經て、僅に身を以て免れた處で、悲慘の狀目も當てられぬ程であつた、疲れてぐた〳〵になつた兵士が、ぼつり〳〵歸つて來るが、勞れて居るから上へ昇ることも能きず、庭頭に倒れてそのまゝ睡眠を貪るものもあつた。

そんな間で自分の報告を聞いた聯隊長は決然として、

「今から進軍」との命令を發した、疲れ切つた兵士は、天の明け切らぬ雪天を再び敵陣へ肉薄せねばならぬ、中には馬から川の中へ轉げ落ちた下士もあつた、然し急に起き上る勇氣もなくて、ヅボンと水と一所に凍つた奇談もあつた、自分は日頃の聯隊長にも似ず、こんな疲勞兵で何うして敵に當る心であらうかと氣遣うた。

（二）

葦原中佐は將軍が小倉聯隊長心得であつた頃からの知人で、自分も舊主に事ふる心を以て事へて居たと云ふほどであるから、談話にも骨がある、事實は極めて明瞭である。

乃木聯隊長が、其樣疲勞兵を率ゐて、何故進軍したか、自分は怪疑に堪へなかつた、それで其事が終つてから、將軍に理由を聞いて見ると「いや敗に行つたのだ」とお云ひなされた。

敗ける爲に軍を進めるなど云ふ事は、ずッと古い兵法にもない、自分はいよいよ不思議に思つて「それは又何う云ふ理です」と聞くと「明日の朝まで南の關を死守せよ」と云ふ命令を實行したいためからだ、南の關は、今度の戰爭に最も大切な場所であるから、何様犧牲を拂つても守護しなければならぬ、然も彼の疲勞兵では一支へも能きぬ、乃公が敗に行つたのはこのためだ、二里でも三里でも前進して戰へば、その間だけでも南の關の安全が保たれる、その中には旅團からの援兵も來る、乃公はそれを考へて敗に行つたのだと語られた。

さうして二十五日高瀨へ着いて、敵軍と戰つて居る處へ、彦坂大尉が東京鎭臺の一中隊を率ゐて、三人挽の人力車で遣つて來た、これは乃木軍の援兵である、彦坂大尉は將軍に面會して「大急行で來ました、先鋒をさせて下さい」と請求したが、將軍は斥けた「十四聯隊はまだ何れの旅團にも屬して居ない、從つて旅團長の命令を聞く義務を持たぬ、こゝの戰鬪は當聯隊で引き受ける、あなたは後方勤務に當つて下さい」

彦坂大尉は折角三人挽の人力車で驅け付けたのであるから「是非先鋒をさせて下さい」と繰返し〳〵賴んだが、聯隊長は少しも動かぬ「聯隊長の活きて居る中はお世話にならぬ、私が死んだらあなたお代り下さい」と云つて、遂に彦坂

旅順表忠塔に刻せられたる碑文の下書

夫日出之鄕陽氣所發地靈人傑食饒兵足上之人以好生愛民爲德
下之人以一意奉上爲心至於其勇武則皆根諸天性此國體之所
尊嚴也抑所謂勇武者非惟勁悍猛烈以逞其威蓋亦必發於[illegible]
之至誠
明治四十三年十一月二十六日　源希典謹書

（明治四十四年一月大將より第三十五聯隊附井上步兵中尉に惠與せられたるもの）

大尉の兵を先登に立たせなかつた。

二十六日は玉名川（一に間川といふ）を渡つて敵兵に渡り合ひ（此の時の戰爭狀況は前篇「西南役」の條に詳しく說いた）午後になつて上木葉を取り返した、此の時將軍は附近の百姓を多く集めて、懷中から一圓紙幣數十枚を摑み出し「赤

い筋があつて周圍に紫の房のある旗を探せ、探して持つて來た者へは、此の紙幣を何枚でも遣る」と云つて一枚宛渡して居た、自分は此時始めて聯隊旗喪失の事を知つた、世間には自分が聯隊旗を護衛して居たやうに思ふ者もあるらしいが、聯隊旗の喪失は二月二十二日で、自分が戸山學校から派遣を命ぜられ、南の關へ着いたのは翌二十三日であるから、軍旗喪失の事を知つて居さうな筈がない、もし自分が護衛の任に當つて居て、不幸喪失の難に遭うたのなら、自分は軍人として生きちや居ない。

然し誰の手からも軍旗は出なかつた、河原林少尉が斃れて居る時、一兵卒が驅け付けて聯隊旗を受け取らうとしたが「兵卒に渡すべき者でない」と云つて渡さなかつた事が知れた、將軍の失望は云ふばかりもなかつた、その後の戰爭に於て、幾度も戰死を期せられたのは、自分も確に感じた處であつた。

翌二十七日は又極めて苦戰であつた、敵は天のほの〴〵と明けた時、玉名川を涉つて、押寄せ我軍を包圍しようとする三好少將まづ傷き、戰鬪員に非ざる

所在の下士卒も又銃を取つて立つた、自分は乃木聯隊長が僅かに二十四名の兵を提げて、宇宮山を攻擊すると聞き、喇叭兵太田軍曹と共に驅けつけると、聯隊長は傷を受けて山の半腹に倒れて居た、見ると山上に敵兵が集つて居る、何事を捨て置いても、まづ聯隊長を扶け下さねばならなかつた。

（三）

由て直に聯隊長の側へ驅け寄つて「葦原です、お下りなさい」と云つたが聯隊長は「捨て置いて早く敵を追ひ拂へ」と敦圉き被仰る、自分は何うかしてお助け申さうと思つて、さま〳〵にお勸め申したが、遂には兩手で樹の幹を抱へて、自分が引張り下さうとするを御防ぎなさる、そこで自分は「もう大丈夫です、敵は已に退却しました、兎も角葦原の云ふことをお聞きなさい」と云つて、漸く引き下し太田軍曹と共に、宇舟島の旅團本營へ運んで、吉雄軍醫にお渡し申した、此の時聯隊の外套劍鞘等に十一箇所の彈痕があつた、自分は之れから又敵に當

つて、再び旅團本部へ歸つて見ると、聯隊長の手當が終んで居た、けれど誰あつて後方へ送つて行く者がない、太田軍曹はまだ戰線から歸つて來ぬ、何うしようかと思つて四邊を見ると、前に旅團司令部員の乘つて來た空俥があつた、これ幸と聯隊長を助け乘せて、自分に挽いて行かうとすると「捨てゝ置け〳〵」とお怒りなさる、强て挽かうとすると、俥の上で地團太をお踏みなさる、自分も俥を挽くのは初めてであるから、隨分困難を極めたが、やつとのこと石貫村まで來ると、二三の敵兵が入込んで、頻りに人夫を徴發して居る、すると聯隊長は早くも見て「乃公は關はん、俥を捨て置いて此狀を岡本旅團參謀長へ報告せ」とお云ひなさる、けれど夫等の事情は、途中から殘らず報告してあるので、自分は聯隊長の命令を肯かなかつた、聯隊長が負傷して入院なさるのに際し、一軍曹が隨行するは當然の事であります、と云うたのである。

聯隊長は此時大喝一聲して「貴樣恐いか」とお云ひなすつたその聲の恐しく物凄かつた事は、今もまだ忘れぬ、自分はもう命令に背く勇氣がなかつた、涙を

大將詠及筆（明治四十五年六月書）

王師百萬征強虜
野戰攻城屍作山
愧我何顏看父老
凱歌今日幾人還
希典

爾靈山嶮豈難攀
男子功名期克艱
鐵血覆山山形改
萬人齊仰爾靈山
希典

（伊勢二見　清水石仙氏藏）

呑んで俥を捨てようとする時、そこへ一人の車夫が來た、自分は天の佑と歡んで「賃錢はいくらでも遣る、このお方を久留米病院へ伴れて行け」と云つて渡した、車夫は心得て俥を受け取つた。

然し自分はまだ心安からぬので、五六歩も俥の跡を追かけ、聯隊長の姿が夕靄に隔てられるまで見送つた。

されば大將は、毎年二月二十二日には、摺澤中將を(これは大將が敵の重圍に陷つて已に命を失はうとしたのを助けた人)二十七日には自分を正客として饗應される事になつて居た、相伴は宇佐川中將、御母堂御存命の間はお手製の五目鮓を下されたが、後には西洋料理屋などへ案内せられるやうになつた。」

葦原中佐の談話はこれで終る、將軍が第十一師團長に任ぜられた時、斯した深い因緣のある葦原中佐が、當時少佐を以て高級副官となつた、中佐が山口參謀長(圭藏、今の豫備少將)と共に準備のため先發しようとする時、靜子夫人は中佐を呼んで

「會計はあなた爲すつて下さい、乃木にお金を渡しては幾許あつても足りません」と云つて頼んだ、故に第十一師團長の間は、月給も旅費も中佐が預つて、總てを出入したのであつた。

將軍は二三日後れて讃岐へ渡り、多度津の花菱屋（旅館）に宿り、翌日新築の師團司令部へ出勤した、處が師團長室に新調の絨氈が敷きつめてあつた、將軍は入口まで行つて急に立ち止り「彼を片付けよ」と命じた、側に居た中佐は驚きつゝ「これは普通の設備であります、別に贅澤な物ではありません、殊にこれは靴の音を防ぐ利益もあります」と斷つたが「いや、靴の音は注意次第で何うでもなる、兎も角引き放して了へ」と斷乎たる詞で云つた。

命令であるから止むを得ぬ、直に絨氈を取り除けると、將軍はすぐ師團長室へ入つた、師團長がそれであるから、參謀長室にのみ絨氈を敷いて置くことが爲きぬ、由つてこれも取り除けて收容つておいたが、後に皇太子殿下行啓の時

御用に立つたさうである。

（四）

第十一師團の開廳は四十一年十二月一日であつた、將軍赴任については適當な住居を定めて置かねばなるまいといふので、某御用商人の別莊を借り受け、その旨將軍へ通じると「御用商人などには近付きたくないから、寺の座敷か何か、閑靜な處を借りて呉れ」と云つて來た、そこで葦原中佐や軍隊の人々が奔走して、善通寺と丸龜との中間にある金倉寺の客殿（書院、奧の間、次の間の三室）を借りて置いた、將軍はそこが甚く氣に入つた。

其月十一日葦原副官のみを伴つて管下を巡回する事にした、師團長の初巡回といふと、少くも五六名の隨行員を伴ふのが例であるのに、將軍は副官只一人を伴ふ事にした、さうして副官への命令は「乘馬で隨行せよ、宿泊地等は豫報するに及ばぬ」と云ふのであつた、その頃は多度津松山間に人力車が通ぜぬの

で、必ず海路を取るのであつた。

けれど馬糧その他の要務があるので、副官一人では何うすることも爲きぬ、由て副官から「書記一人を同道せらるゝやう」と懇請した、すると將軍は「諾しよし」と頷き「私と君とは乘馬、書記を人力車としては既定の旅費に不足するだらう、その不足額は自分から支出する」と云ひ添へた、將軍がいかに深く部下を愛したかを知る事が爲きる。

斯うして午前九時金倉寺を出で、川の江の旅店で午餐を喫し、その夜は宇摩郡の土居村に泊つた、宿は土地の豪農の家であつた、往來から一丁程も距つた處であつたが、新に新道を拓いたらしく、通行は便利であつた、將軍は副官を招いて

「何故恁樣家に泊るのか、此の村に宿屋はないか」と聞いた、副官は答に困つたが、何氣なく

「宿屋も一軒あると聞きましたが、多分泊り客が多いのでせう、それで止を得

ず此方へ定めたのであらうと察します」と云つた、將軍は顏を窘めながらまづ廐へ行つて見た、何處へ泊つても、第一に廐を檢分するのが、將軍の例であつた。廐は意外に綺麗であつた、馬糧も立派なのが山の如く積んであつた、將軍は莞爾くと笑ひながら

「好い秣だ、どうして恁樣秣があるのか」と尋ねた、副官は再び答へに窮つたが「此邊での豪農ですから、平生貯へて居るのでせう」とお茶を濁した、特に廣島邊から取寄せたのであらうと察したからであつた。

夫から座敷へ通つて見ると、下へも置かぬ優遇である、縣官も來て居れば郡長も來て居る、村長や村吏が五六名も詰め掛けて居る、膳部調度田舍には珍らしい設備であつた、將軍は餘り好い機嫌でなかつた、然し他の厚意を反古にするのが嫌ひであるから、座について盃をあげて居ると、十七八の美人が二人と、十三四の少女が一人、その日を晴と飾り立てて給仕に出た、將軍はつく〴〵と見て居たが、やがて

「御主人、御主人」と呼んだ、主人はずッと膝行り出る、將軍は極眞面目に「令孃はよくお揃ひだね、御同年ぐらゐに見受けられる、何方が姉樣でお在でかね」と尋ねた、側に居合せた縣官は主人の袖をぐつと引く、主人は慌てゝ
「いや、娘ではございませぬ、他から參つて居る者でございます」と額の汗を拭ひながら云つた、將軍は立掛けて
「すると御親類のお孃さんかね」と問ひかけた、主人は
「いや」と答へたまゝ、後に續く詞もなく極り惡氣に退いた、三人の美人もそこ〳〵に座を立つたが、再び顏を見せなかつた、此の美人は將軍を饗應する心で特に廣島邊から呼び寄せたのであつた。
夫から寢所へ入ると、立派な絹蒲團が敷いてある、絹蒲團は一度も用ひたことがないから、すぐ木綿蒲團に取りかへさせた、將軍はいかな場合にも、夜具は必ず自分で敷く、下女や書生が床を取らうとすると「いや其處に積んで置けば宜し」と云ひ、翌朝も又自分で上げ、嘗て人の手を煩はしたことがなかつた。

(五)

十二日朝夙く出發すると、將軍は馬上から聲かけ、
「葦原君、昨夜の拂ひは何うしたかね」と尋ねた、將軍は何う云ふ場合にも無意味な御馳走になるのが嫌ひであつた、中佐はその事を知つて居るので
「彼の家は度々行軍等の本部になりますから、行軍實費てなければ受け取らぬさうです、外に下女へ一圓遣て來ました」と答へた、すると
「ぢや、茶代を何うした」と重ねて訊かれた。
「茶代は出しても受け取りません、行軍本部同樣になつて居ますから、實費の中には無論廃代も籠つて居ます」といふと、將軍は苦い顏をして
「君は爾ういふ事をするから困る、昨夕の御馳走を見たまへ、我々の外に縣官郡長村長等多勢の人が居たでないか、雜用をざつと積つても、二三十圓は掛つて居るだらう」と云つたが、後に高松へ行つた時、彼地名物の文綺堂で、菓子器硯箱

等三十圓ほどの物を買ひ求め、彼の豪農へ對する茶代の代りに贈つた。

十三日は曇天で遠山に雪を見るほど寒い上、道路の險惡云ふばかりもなかつたが、將軍は怯む氣色なく馬を進めた、小松町に入つた時は、午後三時頃であつたらう、里數から云ふと、この邊に宿泊される筈とでも思つたのか、大きな呉服商人(土地の豪家)の店頭に大幔幕を張つて、將軍を待ち受けた、出迎人の中には、官公吏も數名居た、將軍はその前にさし掛ると、嚴肅に一禮したまゝ、馬脚を早めて行き過ぎた、出迎へた人々が失望して立つて居る處へ、葦原中佐が將軍の名刺を出して「今日は有難う」と挨拶した。

二十七八年の役廣島舍營中の作(向西旅人の文字に注意せよ)

(山口縣長府町　梶山鼎助氏藏)

その中に將軍は歸鄕中の黑川中將邸へ入つた、暫く談話をして立ち出ると、郡長、警察署長その他の官公吏が俥で追ひかけて來た、今夜の宿泊地まで見送らうとするのである、將軍は馬を駐めて

「御厚意は厚く受けます、どうか之からお歸り下さい」と云つて、又さつ〳〵と進みかけた、郡長も署長もまだ尾いて來る、將軍は副官に命じて「夫には及ばざる旨」を云はせた、けれど彼等は縣廳の命に由つて、郡境まで見送る心らしかつた、副官は、その趣きを將軍に物語る、すると將軍は馬から下りて、

「先刻あれほどお斷り申して置くのに、まだお見送り下さるのか、いや、夫なら宜しい、君等は君等の行く處までお越しなさい、私は此處で御免を蒙むる、君等は夫々公務もあらう、速かに歸つて始末したまへ、私を見送つて下さるのが、何の利益にもなりません」と云つて動かなかつた、流石の公官吏も止むを得ず引き返した、將軍の儀式立たことを好まなかつたのは之でも知れる。

その夜は中川村大字來見の粗末な旅館に泊つた、合客も多くあつた、然し豪

商の絹夜具よりも、將軍は此方が滿足であつた、此途中西條の中學校を一見したい望みがあつたが、時間の餘裕が無かつたので、殘念ながら素通りして町を出放れさうとすると、中學生らしい青年四名、草鞋二足を腰に付けて、路傍に立つて居た、將軍は早くも認めて

「中學生徒らしい、尋ねて見たまへ」と云つた、副官は青年に近づいて聞くと、果して西條中學校の生徒であつた、そこから四里餘りを距つた高松村から通學するので往復に二足の草鞋が入りますと云つた、往復八里以上の道を徒歩で通學すると聞いた時、副官はまづ感じ、四人の姓名を書き記して將軍に復命した、將軍も深く感じて、後日四青年の成績を中學校へ問ひ合せると、何れも中以上の成績であつた。

翌日は落合村の西方、危險の高地を行くのである、將軍が乘馬で進まれる危さを見かね、

「閣下危くはありませんか」と心付けると

「なに、重荷を着けた馬や牛も行くぢやないか」と云ふ、道は愈々險惡になる、副官はこれぢや可けぬと思つて
「閣下馬が不慣さうぢやありませんかね」と云ふと、今度は
「うむ、さうだ」と答へて漸く馬から降りた。

（六）

此の邊は櫻樹村字鞍瀨といふ處で、彼の櫻三里の峠である、三里の間悉く櫻の樹で、ずッと前に源太といふ男が道を拓き、且つ櫻を植ゑたのだとの傳說がある「櫻三里は源太が仕置き花は咲けども實は生らん」の俚謠は、後に源太が罪あつて處刑せられた意味も含まれて居る、將軍は昔を偲びながら道を急いだ。

それから數丁行くと千馬ヶ嶽の麓に達する、寒はいよ〳〵加はり、霰交りの雨は烈風に吹かれて、横ざまに面を打ち、步行の困難云ふばかりもなかつたが、將軍は少しも怯まず、大聲に詩を吟じながら峻阪を登る、將軍は何樣困難に遭

ても何樣苦痛に會ても、會て「苦しい」と云つた事がない、餘所目に「さぞ苦しからう」と思ふ時は、必ず詩歌を作る、さうして大聲にそれを吟じた。

將軍は此時も大聲に詩を吟じた、途中には橋の落ちた處もあつた、路の崩れた處もあつた、普通ではとても通行の爲きぬ大風＊

大將筆蹟

＊雨の中を、將軍は徒歩で川上村へ出た、そこには一軒の酒屋があつた、將軍は店頭で大茶碗に冷酒を二杯飲んだ、副官も一杯飲んだ。

そこから松山へは人力車の便があつたが、將軍は平井驛から汽車に乘る豫

定て亦歩みかけた、川上から平井まで三里餘りもある、停車場へは着いたが、田舍の事で一軒の茶店も無い、漸く驛長室で冷飯(午餐)を食て飢を凌いだ。

將軍は先發の者などを出さぬ、宿泊地も豫報せぬ、只書記をさきへ遣つて、廐舍と馬糧とを周旋させ「宿は何樣に狹くとも宜しい、合客があつても宜しい、何處でも便利な處に取つて置け」と命令する、それだから副官から後刻鐵道で松山へ到着せられる旨を通知した時、非常に驚いたといふ事である。

その夜は松山に泊つて、十四十五の兩日、松山聯隊の兵舍、練兵、學科等を點檢し、十六日雨と雪とを冒して高松へ出發し、終日險道を進んで久萬町に一泊、翌日も又進行を續けたが、寒雨は歇み間もなく降り頻る、道の惡さは、泥濘が馬の第二關節にまで及んだので想像される、將軍は馬の蹄に雪が塊つて歩行に困難するを憫み、時々下りては小石などで割て遣る、末には人家から鎌を買ひ求めて、馬丁に取り除かせ、爲きるだけ乘馬の苦痛を減ずることに力めた、此の鎌は當時の記念物として、葦原中佐の許に藏められて居る。

久萬町方面の土人は、玉蜀黍を常食とするので、將軍も晩食に替へられたことがある、幾度か舌の頭に試みて「至極宜しい」と云つた、將軍は總ての料理法に趣味を持つて居た。

土佐の國境からは、道路の修繕が行き屆いて居る、將軍は「縣官の注意が行屆いて居る」と賞めた。

十八日夜伊野村の宿屋に泊つた時である、將軍は奥の間、葦原中佐は次の間の床に入つた、中佐は用があつて手を拍くと「あいあい」と答へた女の聲がいかにも優しく美かつた、何樣美人が現はれるかと待つて居ると、十一二の少女が入つて來た、暫くして又手を叩くと、今度も同じやうな優しい聲で返事をしたが、出て來たのは前の少女であつた、中佐は飽き足らぬやうに「返事をしたのはお前か」と尋ねると「いゝえ」と答へた「それでは返事をしたものを出せ」といふと、今度は七十位の皺くちや婆さんが出て來た、中佐は驚いて「お前ぢやない、返事をした女を出せ」と云つた、すると婆さん澄ました澄て「私が返事をしたのでご

ざります」と答へた、中佐は太く失望して「別に用はない、そちらへ行け」と叱り付けた。

この應答を奥で聞いた時、滅多に笑つた事のない將軍が思はず吹き出した。後で聞くと、土佐は言語が極めて優秀で、言格の正しい事海内第一と稱せられる、七十近い老婆が「十八九の美女かと思はれる美音を出すのは、この宿屋の老婆のみで無かつた、將軍もこれには深く感じた樣であつた。

高知へは十九日の午後到着して、延命館に投宿した、高知では兵事上の事ばかりで、別に變つたことも無かつたが、土地人の約束を守ることの堅いのには、さすがの將軍を一驚させた、それに面白い例がある。

（七）

十九日朝倉の兵營から高知まで俥に乘つたが、葦原副官はその車夫に「これを兵營まで屆けてくれ」と云つて一封の書類を出した、車夫が承知の旨を答へ

るので、銅貨二錢を出し、これを増賃に遣ると云つたが受取らぬ、少いので不服なのだらうと思ふから、更に五錢を出して與へると、車夫は艴然と怒を發し「私は車夫こそして居るが、まだ乘車賃以外の金錢を戴いたことありません」と云つて突き返し、書類だけを以て出て行つた、又翌日縣廳から二三箇所を巡るので、宿屋から或る橋までと約束して俥に乘つた、すると車夫は橋の中央で梶棒をおろして「何うか降りて下さい」と云つた「いや、此處ぢやない、此の橋を渡つた處だ」と云つても「橋までと云ふことで受合ひました、此の以外は行かれません」と頑張るので「それなら俥賃を増して遣る」と云つたが「金のためにお約束は替へません」と云ひ捨てゝ立ち去つた、これでは將軍の驚くのも無理はない。

二十三日高知を出發した、前夜來の烈風に雪を交へて、寒氣滲々と身にしみる、山路にかゝると道が凍つて居るので、兎もすると、馬が滑る、徳島縣へ入つては道路の嶮惡云ふばかりもない、殊に大步危小步危の難路は、古來馬に乘つて越えた者がない、さすがの葦原副官も馬上の中心を保つことが爲きぬので、中途

から馬を下りたが、將軍は始終驅足で通過した。
二十四日も又烈風に强雨を交へる、將軍は午前三時宿を立て、有名な曼陀羅越にかゝる、山の直立七百メートル、鵯越の嶮も斯くやと思はれたが、將軍は馬上のまゝで過ぎた、朝の三時から午後の一時頃まで難路惡道を通つて來たので、一方ならず空腹を覺えたが、午飯すべき人家がなかつた、やつとの事で砂交の饂飩に有りついて、僅に飢を凌いだのであつた、副官は「實に十年以來の困難でありました」と云ふと、將軍は「ハヽヽ」と一笑したばかりであつた、午後四時頃多度津に着いた。

此巡廻日數は都合十四日間で、松山と高知とに四日間滯在したのを除くと、十日間は風雨寒氣雪霙と戰ひつゝ旅行したのであつた、里程は大凡百二三十里もあつたらう、隨分の强行軍であつた、師團長初めての管下巡廻といふので、途中には國旗を出したものもあつた、赤十字社員や小學校生徒が途上に迎送したのもあつた、將軍はその度ごとに馬を止めて、叮嚀に挨拶した、此の旅行中

にも特筆すべき逸話が澤山ある。
　ある旅館に泊つた時、澤庵漬が出た、副官は漬物に醬油は付きものと思つて居るので、早速取り寄せて掛けた、すると將軍は「葦原君、この澤庵は甘いか」と聞いた、副官は「いや甘い事はありません、隨分辛うございます」と云ふと、「それにナゼ醬油をかけるかね」と詰問した。
　副官は怪しみつゝ「漬物に醬油をつけるのは普通ぢやないですか」と云ふと「新漬の菜の葉か何かなら知らぬが、澤庵は糠と鹽とを適宜に鹽梅して、當時者が旨いやうにと骨を折つたのだから、醬油を掛けては却て味を損ずる、夫のみならず贅澤に過ぎやせぬか」と注意した、又ある旅館で枕に就く時、副官は「洋燈を持つてつて行燈に替へて來い」と云つた、將軍はかくと聞き「徹夜行燈を點して置くのは君に似合ぬことだね」と云つた、副官は押し返して「而も寢室に燈火を點けて置くのは好みませんが、今度は閣下の隨行ですから、一は護衞のため、一は新聞を讀む必要があるためです」と答へた、將軍は眞面目になつて「護衞と

は」と問ひ返した。

「護衞とは何か異變のあつた時、又は盜難を防ぐためにです」と答へた「成るほど異變に備へるのは格別だが、盜難を防ぐとは受け取れぬ、燈火が點いて居ると、盜賊は障子に穴を穿けて、時計は彼にあるとか、懷中物は枕の下にあるとか、十分見定めて、都合よく盜むものだ」と戒めた、將軍は始めて旅館に着いた時は、まづ盜賊の入るべき所と、大小便所と、異變の時立ち退く處とを見て置いて、然る後枕に就くのが例であつた。

將軍は小さいことにも深い注意を怠らなかつた、醬油の敎訓も行燈の戒も、皆人の心得て好い事である。

(八)

或る旅館で、副官が起きて出ると、女中が金盥に微溫湯を持つて來た、副官は冷水主義の人であるから「これは可けない、冷い水と取替へて來い」と命じた、隣

の室に居た將軍は斯くと聞いて緣へ立ち出で「いや、その湯は私が貰つて置くと云つた、副官は異んで「閣下は湯をお用ひにならん筈ですが」と問ふと「君にも似合はぬ、湯でも水でも面を洗へば好いぢやないか、折角持つて來たものを捨てるには及ばんだらう」と云つた。

金倉寺の客殿を借りた事については色々話もあるが、最初渡邊(小太郞)參謀大尉が此の邊へ借家を探しに來た時、寺の門前に干鰯問屋をして居た山路健雄が周旋をした「寺の事だから便利は惡からうが如何でせう」と間取なんぞを云つて遣ると、將軍から「夫で宜し」との返事が來て極つたのである、山地健雄は發句に趣味を持つ風流人であつたが、師團長が金倉寺へお移りになつたら此邊もさぞ賑かになるだらうとの考えで、土地繁榮策の爲め新らしく料理屋の建築にかゝつた。

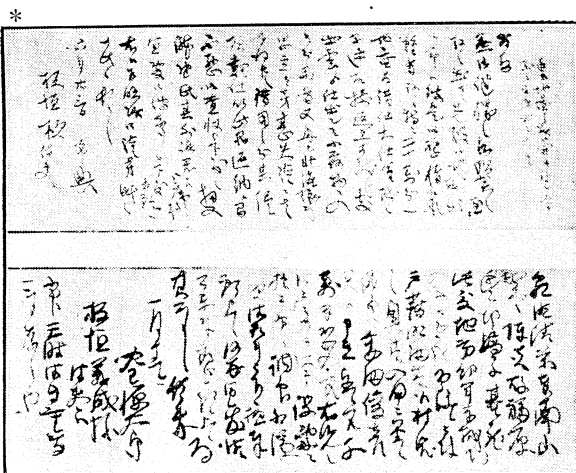
將軍の借りた客殿は、十五疊、十疊、十疊、五疊の四間であつた、從卒は一人づゝ附いて居たが、朝七時頃に來て日暮にかへる、後には信州から關口卯之助(その

頃十五)といふ書生を呼び寄せて、手廻の用をさせた、食事は最初から「寺で飲食する物を」との條件で、寺の賄を出すことにした「精進物でお口に適ふまいから」と辭退したが「何でもよろしい、特に私の爲に御馳走をして下さるやうならお斷をする」と云はれたので、寺の食事をそのまゝ分つことにした。

朝は味噌汁と豆腐又は芋大根の煮付、晝は菓子椀と一菜、晩も同じこと、夫に酒が三合つく、將軍は取り分け食事に無頓着であつた、或る期間、東京から來て後に將軍の馬丁頭釜田鎌次郎の妻になつた野村うめといふ女が、將軍その他の食事を引受けた事がある、常に「閣下のお賄よりは馬丁の方が面倒だ、馬丁さんは飯が剛いの柔かいの、菜が甘いの辛いのと不足を云ふが、閣下は只の一度もお食事にお小言を被仰つたことがない」と云つて居た。

將軍は食事の如き些事を頭に置いて居なかつた、小僧が例の食事を持つて行くと、自分で盛つて(茶碗に一ぱいの盛限り)默つて食ひ、終むと鈴を鳴らして知らせる、酒も自分で燗をして、三合を一氣に飲む、成るべく人に世話を掛けぬ

やうにするのが將軍の立前で、床も自分で敷き、自分で上げ、座敷の掃除　從卒の來るまでに方付ける、時間が來ると、靴を穿いて中門(俗にお成門といふ、客殿に附いた門)の扉を開く、馬丁はそれまでに用意して馬を門外に繋いで置く、將軍はそれに乘つて出勤、歸つて又自分で門を鎖して、その身の居間へ入るので＊あつた。

長州萩町板垣義成氏に宛てられたる大將手間

暇があると、地圖を見る、書物を見る、よくよく所在の無い時は、老僧(松田俊良)と碁を圍む、葦原副官と老僧と將軍とは同じ樣なザル碁で、吉永(狂義)大尉、大川(盛行)中尉(何れも副官)が二三目强かつた。

此の外には月の清んだ夜などに、縁側で高聲に詩を吟ずることがあつた、よ

くよく氣分の爽かな時であつたらう。
將軍は他に優れた精勤家で、毎朝天のほの〲明けかゝる頃に起き出で、二頭の馬を責めてから食事を終り、食後直に出勤するのであるが、まだ小使も出て居ない、師團長室に火の氣もない、そこの椅子に腰を掛けて書を讀み始める、小使は甚く恐縮して「どうか少しく御勘辨下さるやうに」と葦原副官へ訴へて來た。
そこで副官から「定時間のある場合に、餘り早く御出勤なすつては、下々の者が困ります、宜しく御斟酌下さるやう」と云つた、將軍は「諾し〱」と答へて翌日から師團長室に入らず、練兵場へ行つて、書物を見たい、いかに寒い風が吹いても厭はなかつた。
當時は日清戰役後間もない事で、人心が浮華に流れて居た、善通寺も丸龜も淫靡の風が漲つて居た、從つて師團の將校も攀柳折花の興に耽る者が多くあつた、將軍は兼てより此の噂を聞いて居たから「何うかして惡い風儀を矯正し

たい」と考へて居た。

（九）

赴任後始めての檢閲の時であつた、ある兵士のゲートルの釦が外れて居た、齋藤聯隊長見て「お前の釦が外れて居る」と意注けた。

すると側に居た中隊長が執成顏に口を添へ「今棘に引きかゝつて外れのだ、直して置け」と一同へ聞こえるやうに云つた、この中隊長は要らぬ事に、要らぬ言辭を弄ぶ癖があた。

將軍は默つて聞いて居たが、檢閲終つて解散となつた時、中隊長を前に呼んで

「さつき中尉は兵卒の釦の外れて居たのを、荊棘に引かゝつて外れたのだと云つたが、何うして其樣事を知ることが能きたか」と眞面目に尋ねた、中隊長はそれでも押して

「夫は私が見て居ました」と云つた。

「ぢやその荊棘は何處にある」と將軍は少しも恕さぬ

中隊長は無論それを實見したのではなかつた、例の癖で餘計な事を云つたのであるから、將軍から問ひ詰められて、頻に答へに窮しながら「つい其處にあります」と又僞つた。

「其處とだげぢや分らん、荊棘のある所まで行つて見よう」と云はれ、中隊長はいよ〱困つたが、今さら「僞言でございました」とは云ふことが能きぬので、將軍を案内して練兵場の周圍を廻つたが、荊棘らしい樹は一つも無かつた、將軍は「何處にある何處にある」と詰問する、中隊長は據なく

「眞個私の思ひ違ひでありました」と云つたが、將軍は容易に恕さなつかつた、いかにもして軍隊の風紀を矯め直さうと思ふ心があるから、遂に中隊長から待罪書を取つた。

將軍は總てが此の調子であつた、何樣些細な事でも「惡い」と認た事は、飽くま

でも追究して、本人にその「惡かつた事」を詫びさせねば置かぬ、もし相手が淡泊に「惡うございました」と謝罪すれば、直に免し、又叱言も云はぬが、詞巧に非を掩はうとする時は、實際顔の色まで變へて怒るのであつた。

又或る時、兵器庫を巡視した事があつた處が某中隊にある筈の十五梃の豫備銃が無い、早速中隊長を呼んで「何うしたか」と尋ねた、中隊長も有るべき銃の無い理由を知らなかつた、けれど多分銃工長の方へ修繕に行つて居るのだらうと思つて

「銃工長へ修繕に廻してあります」と判然答へた、普通の人なら「爾うか」と頷く處であるが、將軍は中々濟まさぬ、其場では默つて置き、他の巡視を終つた後、わざ〳〵銃工長の許へ出かけて「お前の處に、何大隊何中隊から豫備銃十五梃修繕に來て居る筈だ、間違ひはなからうな」と尋ねた、銃工長は少しも知らぬ事であるから「いゝえ、そんな事はありません」と答へた。

將軍は直に中隊長を呼び付けて、その不都合を詰責して「物品も金錢も同じ

である、出納を嚴にしなければならぬ事は私が說明するまでもない、殊に軍隊に於ける銃は金錢よりも大切である、何故預けもしないものを預けたと云つた、何故斯くまでに疎略にした」と諄々不心得を諭した、中隊長は深く恥ぢ入つて「私が惡うございました、以來は十分に氣を注けます」と詫をして漸く宥恕を得たのであつた。

軍隊では來年度の豫算を請求する關係上、さまで古くもない物まで廢棄して新しい物品を使用し、さうして來年度の豫算を本省で削られぬやうに工夫する習慣がある、これは軍隊のみでなく、何處の官公衙にもある宿弊であるが、將軍が師團長となつてからは、廢棄物の調査を嚴密にし、掛り員が廢物として取り除けた物の中から、破壞の程度と、現に使用せる物とを對照し、少しでも現に使用し居れる物が、廢物よりも古いやうであると「ナゼ之を廢物にせぬか」と反つて反對に皮肉な責問をする、軍服、靴は云ふに及ばず、小さい物品に至るまで一々に目を通して「ナゼ廢物にしたか」と云はず例の皮肉な詰問をする、中隊

長などが答へに窮してもぢ〳〵するを、下士などが見かねて、側から口を出さうとすると「お前達は默つて居れ」と叱りつけ、中隊長が心から謝罪るまで、ぐん〳〵と責め立てるのであつた。

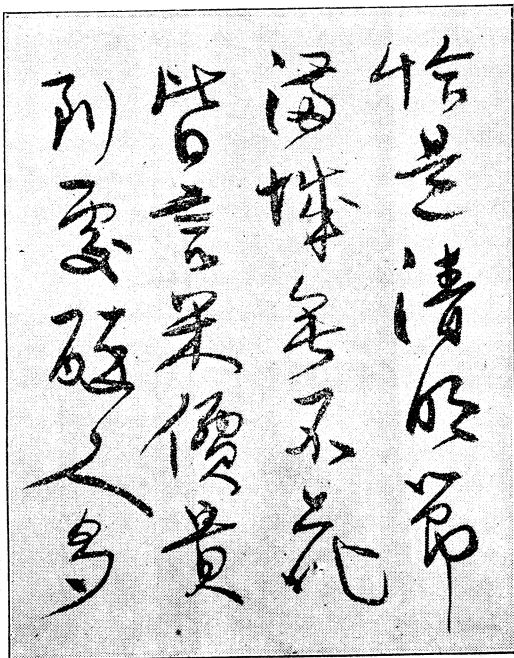
（十）

讃岐丸龜の第十二聯隊は廣島師團に屬して居たが、善通寺に十一師團が出來てから、同師團に屬することゝなつた、丸龜は何方かといふと、餘り風俗の好い處ではなかつた、取り分け日清戰役後は淫靡の風が瀰蔓して、到る處に白粉の匂ひがする有樣であつたから、聯隊附の將校中にも、纎い手に魂を握られて居るものもあつた、將軍は此の體を見て矯正法を考へて見たが此といふ適切な工夫がなかつた、そこで將軍一流の奥の手を出し、或る寒い夜、比較的風儀の好い善通寺四十三聯隊の兵を引率し、丸龜に急行して、聯隊營舍の周圍を取り卷き、喇叭卒に命じて、悲壯な曲を吹奏させた、營舍內に居た當直の士官は、何事

が起つたかと驚き慌てる、その夜も紅燈綠酒の影に怪しい夢を結んで居た人人は、此報を聞いて膽を消し、取る者も取り敢ず歸營する、潮の湧くやうな騷ぎの中に、將校は漸く纏つた、すると將軍は一同を寒風の吹き荒む兵營の庭に立たせて、諄々と軍人の心得を說いた、それが動機で聯隊の風儀が一時に善くなつた、是は將軍の聯隊夜襲と云つて名高い話である。

將軍が師團長として赴任した時は、練兵場も單に地域が劃せられて居るのみで、畑地などは其まゝになつて居た、將軍は速かに完全な練兵場を作らうとしたが、種々の障害があつて思ふやうにならなかつた、そこで附近村落の有志を集めて、地ならしの工事を賴んだ、此時率先して將軍の希望に應じたのは、西多度郡筆岡村の人民であつた、茶だけは師團から支給するので、鍬と辨當とを持つて出て地均をするのである、將軍は司令部へ出勤する途次立ち寄つて馬上から檢分し、村民に對して心から感謝の意を表するのであつた、さしもに廣い練兵場も、斯くの如くにして數日の中に工を卒へた。

將軍の喜悦は一通りでなかつた。「お禮のしるし」と云ふので、白木綿に軍旗と國旗とを交叉し、それに櫻の花を配して、上端菱形の中に「美擧」その左の端の上方に「第十一師團練兵場」「地平均執勞之報酬品」と記したるを染め拔き、手拭地として一筋づゝを頒與した、無論將軍の自費である。

その中に年が暮れる、明れば三十二年、將軍五十一歳であつた、一月元日平生の通り軍服を着て、朝早く齋藤丸龜聯隊長の家を尋ねた、齋藤家ではまた雜煮を祝つた處であつた、將軍は快よく一盃の年酒を傾けて後「飯野山へ登つて

乃木大將筆蹟（步兵第十二旅團長少將白水淡氏藏）

見ようと思ふが、勝手を知つた兵はあるまいか」と云つた。
飯野山は俗に讚岐富士といふ名山で、高さ二千二百四十尺ある、聯隊長は笑を含んで
「勝手を知つた者はいくらも有ます」と答へると
「それぢや案内が頼みたい、差支はなからうか」といふ。
「無論差支へありません、直に中隊に申し付けて調べさせます」といふと
「いや、その兵は私の手で調べてある、聯隊長の許可さへ得れば宜しい」と云つて飄然と出て行つた、一兵士が案内に立つ。
すると途中で、正裝した將校が三四名やつて來た、年賀の爲め將軍の僑居を訪はうとするのであつた、將軍は近う寄つて「おゝ」と勢ひよく聲掛け「これから飯野山へ登らうと思ふ、どうだ一所に行かぬか」と云つた。
正裝した將校連は、いかに將軍が物好でも、正月匆々飯野山へ登られる筈もあるまい、多分戯言だらうと思つて「參りませう」と一人が答へた、將軍はそれと

聞いて「さア行かう」と歩みかけた。

正裝將校も今さら否とは云はれぬ破目になつて「飛んだ處で見付けられた」と呟きながら、てく〳〵と從いて行つた、折から大雪で三四寸も積つて居る、將軍は略服であるから無頓着で歩行するが、正服で嶮しい雪道を行くのは困難一通りでない、然し五十の阪を越えた將軍が驅歩で登つて行くのに、若い將校が苦しい顏も爲きぬので、息もから〳〵絶頂まで攀ぢ登つた、すると將軍は「これを記念にする」と云つて、重い石を二三箇も拾ひ取り、少しも休まず「さア歸らう」と云つて歸つた、青年將校は「ひどい正月に遇つた」と呟いた。

（十一）

その翌日のことであつた、將軍は新年宴會を象頭山の上に開いた、厭と思ふ者は來なくても可いといふ命令であつたが皆な行つた、山は頗る急峻で、高さ六百九十メートルある、午前八時三十分琴平停車場に集合し、驅歩で登山する

豫定である、樹木が繁つて居る・上、奥の院までは道もない嶮路、中には長靴の將校もあつて困難一通りでなかつたが、將軍はいつも先登に立つて居た、一同が指揮刀を拔いて、猿の如く林の中を驅け上るのであるから、全隊が一列に進むことは能きぬ、草を分け樹を傳ひして、やつと上ると、頂上に立派な平地がある、瀨戸內海を一目に見下して、此上もない絕景であつたが、寒風が砭の如く骨を刺す、驅歩で浸潤み出た汗が、忽ち凍るやうに覺えて、血氣の青年將校まで一方ならず閉口したが、將軍は平氣で、まつ喇叭を吹けと云つた。

すると何日の間に準備したものか、前に記した山地健雄の經營して居る料理店陵西館から重箱に料理を詰め、酒樽までを添へて擔ぎ上げた、將軍はそれ等に目も掛けず杉浦騎兵聯隊長に向ひ、

「杉浦君こゝで分列式をしちや何うか、大層平垣な好い場所だが」と云つた、杉浦聯隊長は「へえ」と云つたまゝ答へなかつた。

夫から各自〳〵に携帶して來た辨當を開いて食事をする、陵西館から持つて來

た御馳走は全部他へ遣つて、自分は竹皮包から握り飯を出して食ひ始めた「諸君はすつかり遣りたまへ、私はこれが御馳走だ」といふのであつた。

食事が終むと、將軍は手づから竹皮や紙片等を持つて來て火を燃き始めた、側に居た葦原副官が、竹皮を拾つて來て「閣下こゝにも一枚あります」といふと、將軍は手を振つて「いや、夫は私のだ、持つて歸つて他日の用に供しなければならん」と云ひ「皆が考へて置け、こんな食ひ方をすると、狐や狸に笑はれるぞ」と云つた。

他の竹皮包には、飯粒や肴が殘つて居たのだらうと思はれた。

將軍或る日高松縣廳を訪問すると、恰ど擊劍の稽古をして居た、將軍は麻布聯隊長時代にも擊劍の稽古をして、これに深い趣味を持つて居たから「私も一番」と籠手を付けた、相手は書記官の子息だとかいふ十二歲の童であつた、一二合すると將軍は滑つて轉んだ、次には七十餘の指南番と立ち合つたが、これは勝負が付かずに終んだ、後少年の劍術に筋の好い處ありと褒め「併し自分の倒

れた時、打ち込んで來なかつたのは何ういふものであるか」と問はれた、少年は默つて居たが、老指南番は赤面した。

將軍は謠曲にも趣味を持つて居た、さうして自分にも謠つた、曾て靜子夫人と子息とを伴れて、萩の杉家を訪問した時、杉家から土地の名所越ヶ濱へ案內した、越ヶ濱は萩町を距る二里餘の處にある、以前は毛利公の別莊になつて居て、嚴島神社が祀つてある、社前の大池は自然に潮水の滿干があつて、鯛や鱸がよく釣れる、將軍も靜子も大鯛を二三尾づゝ釣つて、非常に興に入つた時、大聲で謠を諷つて、人々を驚かしたこともあつたと聞いたが、高松市の海岸田中旅館に泊つた時も「葦原君、一つ壇の浦を聞かさうか」と云つた、副官は何事かと思つて「壇の浦とは」と問ひ返すと「いや、船辨慶だ」と笑ひながら云つた。

「市は謠は解りません」と云ふと「ぢや此を見たまへ」と云つて謠本を出して吳れた、副官は早速開いて見て居ると、聲朗かに謠ひ出した。

隣の室に居た縣官は、乃木師團長とも知らず、非常に感心したとの事である。

序に記すが、山地健雄の饒西館は師團長を憚つて、誰一人遊びに來る者がなかつた、山地は案に相違して、程なく饒西館を叩き毀した、然し乃木將軍の德には深く感じて、昨年死亡するまで、將軍の事のみを云ひ續けたさうである。

將軍は非常に敎育熱心で、旅行その他暇ある時は、必ず附近の中小學を訪問した、その場合には、第一番に大小便所を實見する、便所の掃除の行き屆いた學校は必ず成績が好いと云つて居た。

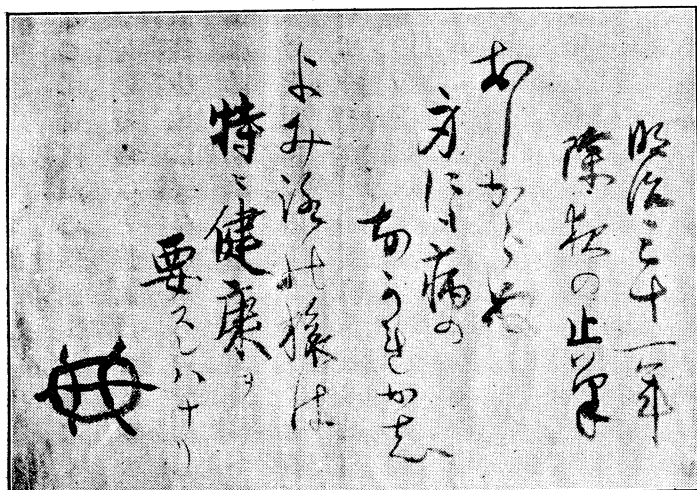
（十二）

將軍の寓居へは、餘り將校が尋ねて來なかつた、山地健雄の新築した饒西館も一向にお客が無いので打ち毀して了つたのでも、いかに將軍に來人の無かつた事が思はれる、將軍も不思議に思つたかして、或る時葦原副官に對ひ「師團の將校が遊びに來ない、何ういふものだらう」と云つた、そこで副官は「そりや其の筈です、閣下の態度が餘り嚴格に過ぎますから、將校連中閉口して居るので

す、閣下が軍服で嚴格になすつて在らつしやる前へ、飛白の單衣や浴衣がけて來ることは能きませんと云つて居た將校もあります、切て夜間だけでも、小倉袴位になすつては如何です」と云つた、すると將軍は「私が軍服で居るから、他の將校も軍服で無ければならぬ筈はない、略服で可いから來て呉れりや可い、然し軍人は成べく軍服を着るが可いね」と云つた。

　葦原副官は押し返して「薄給の將校にはそれが苦痛です、浴衣なら五六十錢て濟みますが、軍服は六七圓も掛ります、六七圓の衣服を平生着にする餘裕はありません」と云ふと、將軍は「いかにも」と頷いたが、「然し、私の着て居る軍服は恰ど今年て七年目になる、今捨てた處て馬丁にでも遣れば、また三年は着られるから、格別高價ではないだらう」と笑つた。

　將軍は必ず肋骨附の軍服を着て居た、戰爭中も戰時服(肋骨のついて居ないもの)などは決して着なかつた、日露戰役の時、奉天て寫した記念繪端書にも、將軍ばかりは黒の肋骨附である、日露戰役中を黒の肋骨附軍服て通したのは、畏

大將筆蹟

明治三十一年十二月三十一日夜大將が金倉寺住職等と年忘れの話中筆を執りて記されたるもの

れ多くも明治天皇と乃木、大島(久直)兩大將であつた、露兵は軍服と勳章とを目標にして、將校にのみ銃頭を向けたから他の將校は悉く勳章を外して居たが、將軍と大島大將とは、いつも勳章を下げたまゝで戰線を往來して居た。

序に記すが、將軍第一旅團長の時、其筋で軍服改正の議が起つた、此の時も葦原中佐は友人の東條少佐(今の豫備中將)と共に、赤阪の寓居を訪ねて、軍服改正の話をすると、將軍は「士官も兵卒も一様の服装にして、成

るべく目立たぬやうにしたいものだ」と云つた、葦原中佐はかくと聞き「然し、さうなつては階級の區別が付かなくなつて困る」と云つた、將軍は「それは何とか印を付けるのさ」と眞面目で云つた。

東條少佐は笑ひながら「いや、同じものなら士官、下士、卒と區別を立てゝ、將校には極めて立派な服を着せる、例へば僧侶が阿彌陀如來を立派にする如く、服裝だけを見て頭の下るやうにせねばならぬ」と云つた、すると將軍は眞面目になつて「それは可かん、金箔付は駄目だ」と云ひ更に笑つて「然し將校全體が、淺草觀音のやうに、假令一寸八分でも金無垢ならよいがねえ」と云つた、これには深い意味が籠つて居た、將軍の議論はやがて行はれて、今では元帥も兵卒も同じ服裝になつて了つた。

讃岐白峰山には崇德天皇の御陵がある、白峰神社がある、處が風雨の激しい夜には、何處からともなく、二十餘の兵士が來て、御陵の周圍を警戒する、それが一度や二度の事ではない、大暴風雨の時には、必ずその兵士の姿が見える、白峰

寺の住僧が不思議に思つて聞き糺して見ると、將軍が特に師團の兵を派遣して御陵の萬一に備へたといふ事が知れた、將軍がいかに皇室に對して忠實であつたかは、此の一事で想像される、住僧はその事を聞いた時、將軍の心掛けに泣いたといふ事である。

將軍の馬丁であつた山瀧八郎の話に「閣下の馬を愛したまふのは、涙の溢れる程であつた、馬に病氣の氣味でもあると、夜中でも廐へ來て撫で擦をせられる、或る時伊豫方面に演習があつた時、副馬の「雷」が何も食ぬやうになつた、其處で鹽水を作つて飲ませて居ると、閣下は一寸待て、と其の鹽水を指のさきにつけて舐め試み、これなら可い、飲ませろ、とお云ひなすつた、」

(十三)

將軍が平生軍服一貫であつたことは、誰知らぬものもない、或る時、東讃岐に演習のあつた時、統監部を大川郡長尾村に置いた、當時の參謀長であつた山口

大佐は、軍務の餘暇に宿屋の褞袍を着て、近所の散髮屋へ髭を剃りに行つた、參謀長の心では、將軍が統監部へ來るのは、まだ後の事だらうと思つて居た、處が將軍は香川郡佛生山町にある西軍の陣地から馬を飛ばして遣つて來た、統監部で聞くと「參謀長は居ない」と云ふ「何處へ行つたのか」と疊みかけて尋ねたが、誰れも「床屋へ行つて居ます」と答へる者がなかつた。

そこで將軍は統監部の附近を彼方此方して居た、不圖見ると床屋の鏡に參謀長の髭を剃て居る姿が見えた、將軍はすぐ統監部へ歸つて「參謀長を呼べ」と命じた、參謀長は髭もそこ／＼に驅け付けると、將軍が儼然と控へて居る、その前へ褞袍姿で出る事は能きず、着物を着かへる餘裕もないので、一方ならず恐縮した、すると將軍は、其處に併居る將校に向つて「演習中は實戰の時の心得を要す」と云つた、さうして他に一言も云はなかつた、その後は演習中假ひ夜間でも宿舍中でも、將校の和服姿が後を絕つた。

將軍は嚴重に公私の別を立てた、部下の將校が軍服を着て居る時は、座敷の

中でも階級に從つて、席順したが、和服で來た時は、城壁を設けず笑ひ話をしたその溫情は又頗る掬すべきものがあつた、村長などが公務を帶んで將軍を訪問すると嚴格な態度で接して、公務以外の事は決して語らぬ、先方から雜談などを持ちかけると、將軍はまづ

「用件は終みましたか」と念を押すので、大體の者はそこ〱で歸つて了ふけれど村長その他が私用で訪問した時は、前の態度と打て變つて、打ち解けて、四方山の話をしたのであつた。

將軍は常々軍刀を大切に扱つた、或る日一軍醫を側近く呼んで、

「私は軍人として甚だ恥づべき事を仕出來した、決して他言して下さるな、只今事情をお話する」と云つた、その面色が普通ならず見える、何か一大事件でも起つたやうに、頗る憂の色を帶んだ、軍醫は謹んで「誰へも他言せぬ」旨を誓つた、

すると將軍は聲を祕めて、

「他ぢやないが、軍人の魂とも云ふべき軍刀に一點の銹が生きた、如何にも殘

念至極である」と長大息をした、軍醫は「兎も角も拜見いたしませう」と云つて、その軍刀を拔き放して見ると、鍔元から一寸ばかりの處に、胡麻粒ほどの汗錆が出て居た、それも熟く見ぬと分らぬ位の錆であつた、軍醫は將軍の心に感じながら

「御心配には及びません、すぐ研がして差し上げませう」と云つて、退いた、その時も將軍は念を押すやうに

「決して乃木の軍刀である事を云つてくれるな」と云つた、數日を經て、軍醫は綺麗に研ぎ上げて持つて行つた、將軍は美しく研ぎ作された刀をつく〴〵見て、初めて笑顏を漏らされた。

恁樣調子であるから、青年將校などが、指揮刀を引きずつたり、杖につきなどすると「軍人の魂を疎末にしちや可かんと戒めるのが常であつた。

將軍は將校の階級に由つて、取扱を區別するやうな事はなかつた、宴會の席に、幾百十人の將校が居ても、自ら盃を持つて一々乾盃し歩くのであつた、上は

旅團長より、下は少尉に至るまで、一人も漏らすことがない、又人と階級とに由つて、口上と態度とを變へた事がない、酒量は何れほどとも知れぬが、將軍の醉態を見た者は一人もなかつた。

將軍は優れて健康であつた、師團長時代に一度激烈なマラリヤ熱に罹つた外、風一つも冐かなかつた、佛生山演習の時、馬に左の足の小指を踏まれた、それが原で脚部に腫脹を生じたから、軍醫は冷罨法を施した處が翌朝軍醫を呼んで「靴を穿く邪魔になるから繃帶を取れ」と云つた「いや、夫ては可けません、そんな事をしては疵が癒りません」と云ふと「少しも關はん、靴が穿けなくつては馬に乘れぬ、馬に乘れなければ演習が見られぬ、これしきの疵に演習が見られぬのは殘念だ、速に除れ」と命じた。

(十四)

金倉寺の中門外に、ヒョロ〳〵とした一株の稚松がある土地の人はこれを

「妻返しの松」と呼んで居る、此には懐しい由來がある。

三十二年の一月末で、寒い〳〵風の吹き頻る日であつた、靜子夫人は良人の僑居を訪ふべく、下女の野村うめ(その頃三十二三)を伴れて、金倉寺へ尋ねて來た。

同寺の住職松田俊雄は「奥さんからは三十一年の暮頃から毎日將軍へ手紙が來ました、何ういふ御用であつたか夫れは知れませんが、四國には名高い琴平神社もあり、弘法大師の出生地と聞いて居る善通寺もあるから、あなたの御赴任中に、是非參詣したいと思ひます、どうかお許し下さるやうに、といふ婦人としては有理な御希望もあつたらうと推察します、けれど將軍からはお許しがありません、何日の事でありましたか、將軍が私に向つて、近頃は妻が神經を起して、色々な事を云つて來るには困ると、被仰つたことがありました、將軍からも御返事はお出しになつて居たやうですが、御存知の御氣質ではあるし、演習や何かで御多忙な時は、御返事を爲さらない事もあつたらうと思ひます、奥

様がお越しになりましたは、私が將軍のお話を承つてから程のない事でありました」と語つた、讀者はまづ此の談話を記憶して置く必要がある。

乃木大將筆蹟

（佐藤學士藏）

普通の婦人であつたら、良人の住つて居る客殿の事であるから、假令許可は受けぬにしても、すぐ通つて、挨拶をする處てあるが、謹み深い靜子夫人の事て

あるから、お成門を横切つて、厨裡の庭へ入らうとした、そこへ折好く馬丁頭の谷田鎌次郎といふのが出て來たから「私の來たことを申し上げておくれ」と頼んだ。

此の鎌次郎の事について、一通り語らねばならぬ事がある、少し岐路へ入るが序だから記す。

鎌次郎が將軍の家へ仕へたのは、日清戰役以前の事で、無論日淸役にも從いて行つた、頗る心掛けの好い忠義者で、懸命に奉公するのを、將軍は深く愛し且つ信じて居た、戰鬪中にも、兵卒に不自由する時は、傳令その他に使用せられた事があつた、中にも田庄臺の戰ひに塚田副官(今は豫備大佐)が自らも傷つき、馬も傷つき、戰線を退くの止むを得ざるに至つて、例の如く眞先に進む將軍の周圍に從ふ者が一人も無かつた時、鎌次郎は副馬に乘つて、傳令の任務に服し、一かどの軍人に恥ぢぬ程の功勳を樹てた。

されば戰役の終つて後、副官其他から「鎌次郎に勳章授與の申立をしては如

何ですと申し出た事さへあつたが、將軍は頭を掉つて「馬丁は陪臣である、假令功勞の嘉すべきものあるとも、其筋へ申し出すのは宜しくない、主たる自分から年金を遣ることにしよう」と云つて、以來年々百圓づゝを別途に與へて來たさういふ經歷のある男であるから、將軍の信用も厚い、靜子夫人も目を掛けて居た、その頃は馬丁頭をして、將軍の雜用を勤めて居た。

鎌次郎は圖りなく靜子夫人の來着せられたのを見て、驚きながら老僧の俊良(俊雄の師僧)に斯くと告げ、將軍の居間の外に手を支いて

「奧樣がお越しになりました」と執次いだ、すると將軍は見る〳〵中に顏の色を變へ

「來いと云はぬに何故來たか」と銳い聲で云つた、鎌次郎は將軍の機嫌の克くないのを見て、一縮みに縮み上つた。

「追ひ返して了へ、逢ふことは爲きない」と再び云つた。

鎌次郎は二の句を返すとも爲きず、悄々と退つて、俊雄に將軍の樣子を語つ

た。

「何うしませう、閣下の御樣子が大變です、さりとて折角遠方をお越しになつた奥樣へ、そんなことは申し上げられません」と當惑のさま面に現れた。

（十五）

夫では私がお願ひしよう」と今度は老僧が出で、將軍へ賴んで見た、將軍が心強く夫人を追返さうと爲られるのは、當寺が戒律の嚴しい眞言宗であるのを斟酌せられた爲かも知れぬ、もし夫なれば決して御遠慮なさるに及ばぬ事を、滲々申し上げようと思つたからであつた。

然し、將軍は老僧の詞にも動かなかつた、諄々として說いて見たが「良人の許可も受けず、良人の任地へ來る法はない、乃木は此方へ遊びに來て居るのぢやない」と云つた。

老僧も力なく庫裡へ退いた、將軍がお逢ひにならぬと云つて、奥樣を追ひ返

すことは能きぬ「何うして在らつしやるか、一度御樣子を見て來い」と命令けた、其處で俊雄は茶の間から外へ出て、塀の端から覗いて見ると、夫人はヒヨロヒヨロとした稚松の下に、悄然と立つて居た、日は斜に傾いて、象頭山の頂から吹きおろす寒風に、雪さへも交つて居た、夫人はその下に沈と佇んで居る、出家の目にも憐れさが滲み渡つた。

「奥樣は斯樣風で在らつしやいます、さぞお寒い事でせう」と驅け戻つて話をした、鎌次郎は挨拶のしようが無いと云つて、涙含むばかりになつて居た、老僧は暫く考へて、

「一たん云ひ出した事を、後へお引きになる閣下ではないから、餘り執拗く申し上げるのも宜しくない、さればとて折角お出でになつた奥樣を、此儘お返し申すのは人情でなからうから、裏座敷へお通し申せ、澁茶でも獻上しよう」と云つた。

由て俊雄からその事を通じる、お梅は夫人の心を推量つて、袂のさきを濡ら

して居た、夫人は老僧の親切を歡んで

「それぢや御厄介になりませう」と丁寧に禮を述べて、裏の乾淨房へ入つた。

お梅は「花菱屋（多度津の宿屋）の主が不可いのですよ、奥樣は葦原樣にお願ひして、閣下の御機嫌を見計らつて戴かうと被仰るのを、花菱屋の主が、ナニ夫には及びません、閣下はいつも私方へお泊りになります、私が申し上げりや御機嫌はすぐ直ります、一足さきへお出でなさい、お後から參りますと云つたものですから、奥樣もついその氣になつて、不躾にお入來遊ばしたのですよ」と語つたが、此時ばかりは靜子夫人に恨みの色が見えて居た、老僧が茶を侑めてさまざまに慰め云ふのを聞きながら、

「許可を受けずに參つたのは、私が惡かつたに違ひありませんけれど家政の事について、手紙には書けない事がありますから、態々尋ねて參つたものに逢はないと被仰るのは何故でございませうか、歸れなら歸りは致しますが、乃木は何ういふ考へで居るのでございませう」と唇の慄ふまでに激して居た。

「閣下に深い思召しのある事と信じます、奥さまのお心は、私からよくお傳へ申して置きます、遠方をお入來になつたのでありますから、切て今夜は寺でお泊め申したく思ひますが、閣下の御氣質に背くのは良くありません葦原樣とも御相談申して、尚よく閣下のお心の解ける樣に致しますから、今夜は多度津に御一泊なさいまし、明日は私が參るか、又は葦原さんにお出を願ふかして、よく御相談致すことにしませう」と語つて居る處へ、鎌次郎は將軍の口上を齎せて入つて來た。

「閣下の御立腹一通りぢやありません、速かに歸れ、多度津へ行つても花菱屋に泊るな、花菱屋は乃公のよく泊る處だとの御命令です、折角お入來になりましたものを、こんな殘念なことはありません」と云つた。

靜子夫人は垂頭いたまゝであつた。

「どうも止むを得ないから、それでは多組屋(多度津の宿屋)にお泊りなさいまし、今夜の中に葦原さんのお力を借りて、もう一度將軍へお願ひ申して見ます」

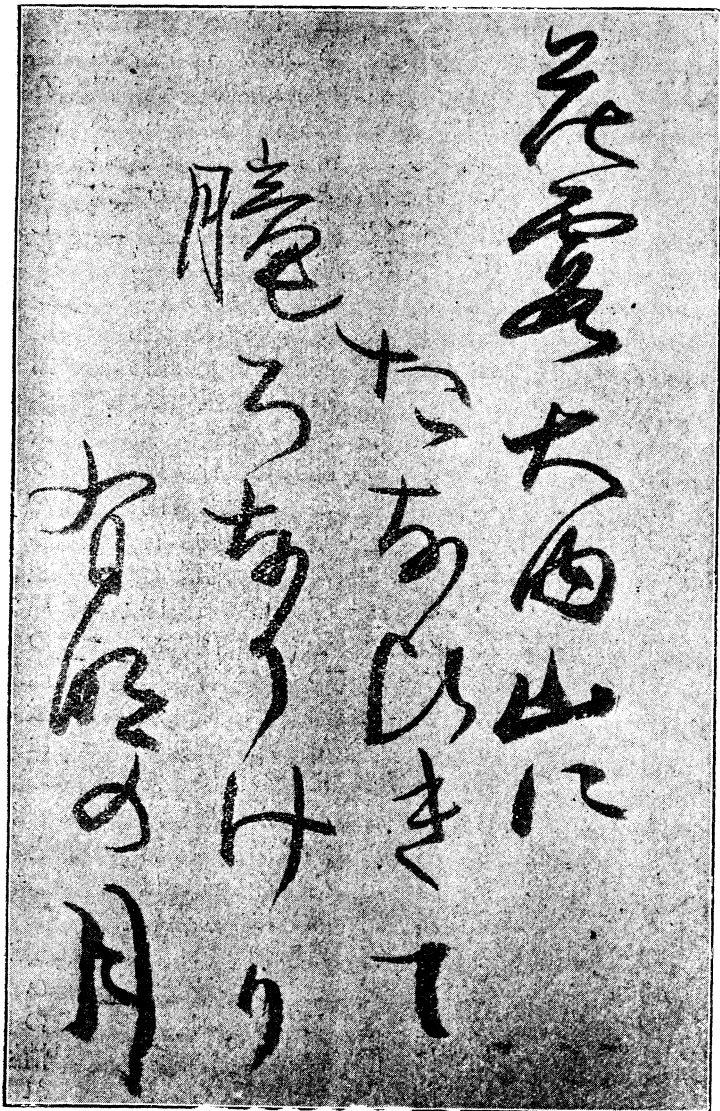
と老僧は悲しさうに云つた。
靜子夫人はその詞を力にして、日の暮れ頃悄々と金倉寺を立つた。

（十六）

鎌次郎は靜子夫人に同情する事深かつた、いかに嚴格な御氣質でも、遙々遠い處をお越しになつたお方へ、一言情ある言葉も掛け給はず、すぐ歸れと御命令あらせられた、お不憫さうとも何んとも申し上げようがない、切ては多度津までお見送り申したいと思つたが、其樣事を願ひ出て、お叱りを蒙つてはならぬとの遠慮から、自分にも行き得ず、寺男を案内に從はせた。
靜子は門を出ては見返り、一歩行つては見返り、裹むに裹まれぬ心細さを、袖に疊んだ、境内に茂る松の緑が、良人の幸福を守るであらう、夕陽に照る棟の下に、良人は恙なく在らせられる、身は此のまゝ歸つても、心は良人の側に殘つて、良人の將來を幸あれと祈らねばならぬ。

大將詠

（明治四十五年四月櫻花の候早朝宮城參内の砌大内山の櫻を眺めて詠ぜられたるもの）

（兵庫縣　內藤濱治氏藏）

靜子は斯うして多度津へ去つた、多組屋の座敷に、お梅とさし對ひの悄れた姿が置かれた。

靜子が去ると共に、老僧は葦原副官を呼びに遣つた、副官は何事かと驚きながら驅け付けた、老僧は一伍一什を物語る、副官は心に「奥さん、私に最初から御相談があれば、こんな事はお爲せ申すまじきを」と思つたが、今は何うする事も能きぬ、老僧と共に段々將軍へ詫をした、靜子のために心から執成をした。

將軍も最初のほどは「何うしても逢はない」と云つて居たが、副官と老僧とが交る〳〵詫を云ふ、その心盡しを無にするのは心ないと思つたのか、遂に前言を取り消して「明日の朝逢つて遣る」と云つた、老僧も副官も我身の事の如に歡んで、天の明けるのを待ちかね、直に靜子の許へその趣きを知らせて遣つた、靜子は一時に雲が晴れた、靜子の胸は一時に開けた。

そこで改めて金倉寺へ來た、今度は鎌次郎の案内で、すぐ將軍の居間へ通る、靜子は良人の恙ない樣を見て、嬉しさが面に漲ぎる、將軍はまづ「唐突に來ちや

可かん」と云つたが、強て叱言を云ふでもなかつた。

靜子は老僧や葦原副官に向つて、昨夕から世話になつた禮を述べた、將軍は別に込み入つた話をするのでもなかつた、時間が來ると例の如く出勤した。

その日の晩餐には、靜子の手料理が膳部に上つた、精進ではあるが、襷掛になつて庫裡へ下りて「今日は皆さんへお鮓を御馳走しますよ」と自ら割烹の衝に當つた、將軍は靜子夫人が居るからと云つて、それに給仕をさせるでもなければ、又平生の主義を枉げて床を敷かせるでもない、總てを自分で遣つて除けるので、夫人は料理を膳の上に載せて置くばかりであつた。

其樣鹽梅て、他所目からは夫婦間が水の如く冷なやうに見えるが、眞の愛情は雙方の胸に燃えて、それが自然に照らし合ふ、將軍が國家の事、忠義の二字を夢寐の間も忘れなかつた如く、靜子夫人は良人に對する貞實を片時も忘れなかつた、將軍は忠君愛國の精神を神とも日とも尊んで居た如く、靜子夫人は良人たる將軍を神とも日とも尊敬して居た、雙方の眞情は求めずして一致した、

他所目に水の如く見える心の底に、熱い情が通つて居た。

靜子夫人が來た三日目に、將軍は小豆島へ演習に行つた、その時「私が演習から歸つて來るまでに、お前は東京へ歸るんだよ」と云ひ置いて出發した、夫人は如何な事にも、將軍の命を背いた事がない、柔順に「はい」とお受けをした。けれど折角四國の土を踏んだのであるから、噂に聞いて居る琴平神社へ參詣したい情が切にあつた、由つて老僧にその事を話すと、「神參りをなさるに、お叱りはあるまい、もしお叱言があれば、愚僧からお詫をします、琴平へは是非參詣なさい」と云つてくれた。

良人の許可を受けぬ神參りは、靜子夫人として忍び難き大惡事の樣に思つたが、老僧の保證に力を得て、その日琴平へ參詣した、さうして夕暮に歸つて老僧の前へ出た、夫人の顏色は驚くほども變つて居た、老僧は何うした事かと驚いた。

（十七）

老僧は眉を顰めて「夫人、御氣分でもお惡いのぢやありませんか」と尋ねた。
「何うも氣分が好くございません、乃木は神經だと云ひますが、夜分眠られなくて困ります、眠られぬについては、又種々の事を考へますし、終には身體に障る事があらうかと案じられます、お蔭で今日琴平樣へお詣りもします、又弘法大師に緣故の深い善通寺へも參詣して、大さう快よく感じますが、兼て他樣のお話に、護摩の有難いことを聞いて居ります、護摩の力に由つて、神經を鎭める事が能きたら、何樣に幸福でございませう」と靜子夫人は滲々云つた、老僧は聞いて
「それぢや護摩を燒かせませう、私は病氣で精力が續きませんから、俊雄に遣らせます」と云つてすぐ俊雄に命令けた。
俊雄は用意に掛る、靜子夫人は謹んで本堂へ參詣する、お梅も側に扈從した。

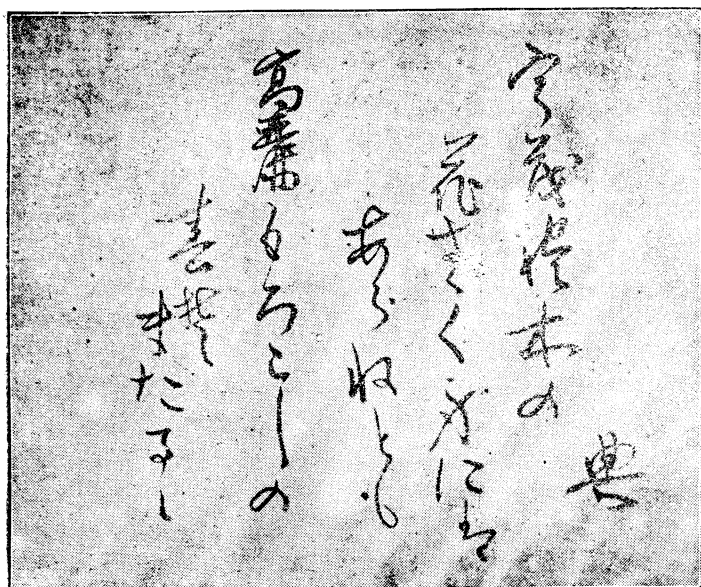
護摩の間は、一心不亂になつて居た、鈴の音は澄み、香の煙は黒く白く棚引いて、夫人の鬢に流れ入つた、二時間の中に護摩は終つた、夫人は厚く禮を述べて枕に着いたが、その功德でよく眠れた、東京を出發する前から、强い不眠性に罹つて居たのが、忘れるやうに快くなつた。

「恁樣有難い事はございません、お蔭で昨夕はついにない快い眠りをしました、乃木が歸りますと、何樣に叱るか解りませんから、私は明日の朝東京へ歸らうと思ひます、何うか護摩のお札を二枚お分け下さい、これほど功德のある有難いお札を、二人の伜に持たせたいと思ひます」と云はれた。

靜子夫人は、他に對して將軍の事を語るごとに「乃木」とも「希典」とも呼ぶのであつた、俊雄は心得てお札二枚を參らせる、靜子夫人はそれを唯一の土產にして、翌日東京へ出發した「妻返しの松」は今も靑々と茂つて居る、けれど護摩の烟は絕へた、夫人は長に歸らぬ人となつたのであつた。

將軍は豫定の如く演習地から歸つたが、夫人の事は絕えて聞かなかつた「何

大將詠及筆

（芦原少佐寄贈丹後峰山尋常高等小學校藏）

日歸つたか」とも「私の立つた後に幾日逗留して居たか」とも聞かなかつた、夫人の事は悉く忘れて居たやうであつた、もし聞かれたら、無斷で琴平神社へ參詣せられた事を語つて、序に宥恕を受けようと思つて居た老僧の用意も徒になつた。

靜子夫人は護摩の功德で、その後もよく眠ることが爲きるやうになつた禮にと云つて、東京へ歸るとすぐ臺灣製の珠數を送つて來た、その珠數は今も

金倉寺の寶物になつて居る。
將軍はその年の晩春から初夏へ掛けて激烈なマラリヤ熱に冒された、此時も夫人は悲しい目を見た「妻返しの松」の跡を遺した前の訪問よりは、一層深い悲嘆を見たのであつた。
將軍のマラリヤ熱は、臺灣時代から傳はつたので、一時は危篤の報さへ傳へられた程であつた、四十一度の高熱が三日三晩も續いた時は、主治醫も頭を傾けた程であつた。
然も將軍は病中一度も女の手に掛らなかつた、病室へは嚴重に人の出入を禁じて、金倉寺の客殿に横臥して居た、日頃意氣適であつた老僧も、弟子僧も、敷居の内へは入れなかつた、看護には專ら森江福松といふ巡査が當つて居た外に衞戍病院から村上唯次(看護卒)と云ふが出張つて居た、然し此人は將軍が平熱に復すると共に病院へ歸つたから、始終看護の任に當つて居たのは、森江福松一人であつた、將軍の枕頭には、日清戰役へ携帶した雙眼鏡と、定紋の付いた

懷中時計、それから三方の書物棚が置いてあつた、醫者は嚴しく讀書を禁じたが、それでも肯かず、少し快いと抽き出して讀んだ。

（十八）

將軍はこんな大病中も、やはり軍服を着けて居た、醫師や看護人から、熱があるから、お着換へになつては如何です」と勸めても、諾々と云ふばかりで脫がなかつた、けれど四十一度の高熱が三日も續いた時、漸と黑の看護服に着かへた、白の手拭で鉢卷をして、時々詩を吟じる事があつた、普通の人では堪へ難からうと思ふほど餘所目に見えても、將軍は絕えて苦痛を訴へなかつた、將軍が高聲で詩を吟じる時は、苦しくて堪らぬ時である、次の間に詰めて居る人達も、將軍の吟聲が始まると

「大分お苦しさうですな」と云つて眉を顰めるのであつた。

此の時は將軍も、全快は覺束なからうと思つたのか、某將校に向つて「もし私

が死んだら、歯でも髮でも何でも好い、臺灣の母の墓へ埋めてくれ」と云つた、遺言らしい事は此外に何もなかつた。

主治醫は半井(英輔)軍醫正で、醫學士山田弘倫も折々診察した、藥は大武一等藥劑官が引き受けて調合し、副官が交替で看護をした、體溫器は自分で見ねば承知せぬ、四十一度から段々降つて、三十八度位になると、床を放れて軍服を着る「他の物を着て居ると、身體に締がないやうだ」と云ふのであつた。

或る時大川副官が見舞に來て、四枚の襖の端を開けると、將軍は褥の中から「其樣處を開けちや可けない、中央をお開けなさい」と云つた、又或る時、看護人の森江が、看病疲れで横になつた、雷の如な大鼾が病室へ聞こえるので大川副官が心配して「これ大きな鼾をかくな、止むを得なければ遠くへ行て休め」と云つたけれど將軍は知らぬ顏をして居た、副官が餘り囂しく云ふと「まァ捨てゝ置くさ」と笑つて居た。

將軍大病の報が東京へ聞えると、靜子夫人は長男の勝典を伴れて見舞に來

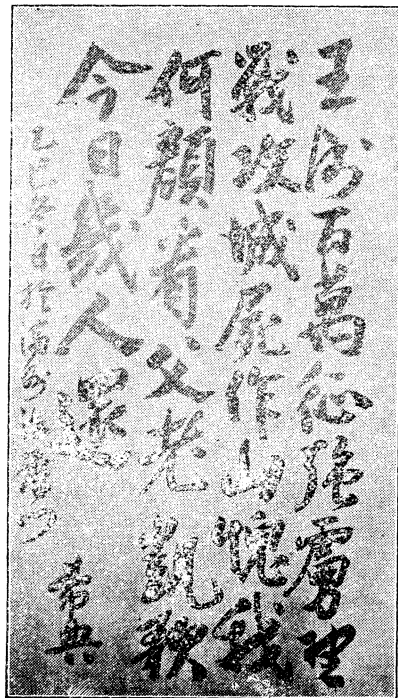
た、枯野を見る様な寺院の座敷で、むくつけき男の手に看護されて居る將軍の淋しさを思ふと、片時も沈として居られなかつた、夫人は汽車の走るのさへ懊惱しいやうに焦慮て、金倉寺へ着いた、馬丁頭の鎌次郎は、庫裡の入口からさし覗く靜子を見て

「奥様、閣下が大變です、四十一度のお熱です」

勝典は氣を揉んで

「何うか、少しは好いか」

「まだお宜しくはありません、只今は誰方もお越しになつて居ませんから、お二方お着きの事を、閣下へ申し上げて參りませう」鎌次郎は靜子の來たのを心から歡んだ。

乃木大將筆蹟　（步兵第十二旅團長少將白水淡氏藏）

「お前、病室へ行かれるか」勝典は尋ねた。
「いゝえ、私は行かれません、病室へお入りなさるのは、二人の看護人と、お醫者樣と、それに副官の方ばかりです」
「夫ぢや何うして執次ぐな」
「看護人の森江さんに願ひます、森江さんは閣下のお氣に入つて居る樣です」
鎌次郎は云ひ捨てゝ奥へ去つたが、程もなく悄々と出て來た、靜子は良人の上を案じながら、茶の間で番茶を饗應されて居た。
「何うかね、すぐ行て好いのかね」勝典も早く將軍の容體が見たいのであつた。
「へえ」と鎌次郎は頭をかいて「若樣へはお逢ひになりますが、……夫人はお許しがございません」
斯う云つた聲は、いかにも苦しさうであつた、優れてよく光る目の中が、自然に濕んで來た。
「お母樣に……」と勝典の聲は機んだ「對面しないと被仰るのか」

「まことに困つたことでございますが、森江さんから種々お執成を願つちや見たのですけれど、何うしても御承知がございません」と鎌次郎は垂頭き勝に云つたが「然し、此の前にも斯ういふ事がありました、葦原様にお願ひ申しても、夫人を此まゝお返し申す事はしませんから、まづ若様だけ行らしやいまし、お次まで御案内致します」

静子は始終無言であつた。

（十九）

勝典は母の失望と心淋しさとを後に残して、自分一人父の側へ行くのは望ましくなかつた。

「お母様、何うしませう」

「私の事は何うでも可いから、早くお目に掛つて來らつしやい」静子は平生の調子で云つた、然し、汽車の走るをさへ焦思しく思つて驅け付けた氣も挫けて、

今度も又素直にお目に掛る事なるまいかと思ふ心配が胸に充ちた、彼女の眼は流石に濕んだ。

「ぢや」と勝典は立ち上つた。

鎌次郎は靜子の心を推量しながら、勝典の案內に立つた、老僧も慰める詞なく時々思ひ出したやうに茶を侑めた。

勝典はそつと父の居間へ入つた、將軍は熱氣に責められながら、白毛布の上に橫臥して居た。

「お父樣」と勝典は窶れ果てた父の顏を覗き込んで「只今着きました、お母樣も一所てす」と云つた。

將軍は頷いたばかりであつた、家事の狀態も問はねば、病氣の容體も云はぬ、されぱとて學校の成績を聞くでもない、一言二言詞を交へて、將軍は默つて了ふ、勝典も無言、一時間ほど坐つたまゝて居ると

「彼方へ行て逗留せよ」と云つた、勝典はそれで引き退る、二百里の道を遠しと

せず、父の大病を見舞に來、久し振にあつた父子の對面としては、まことに淡泊したものであつた。

將軍の嚴父季十郎は、將軍が陸軍省の召に由て東京へ出る時「親が危篤と聞いても、看病に歸るやうな事はせぬだらうな」と訓戒したほど、嚴格な家庭に成長し、軍人の模範たるべく期待して居た將軍からは、父の病氣と聞いて驅け附けた勝典の擧動が嬉しくなかつたかも知れぬ。

靜子は勝典の出て來るのを待ち兼ねた、望んで遂げらるべき願ひではないが、勝典の次に自分への對面を許されはしまいかと樂んで居た、然も勝典は力ない狀であつた、投げるやうに坐つて

「駄目だ〳〵」と諦めた聲で云ふ。

「御容體は何樣なの、東京で聞いたやうにお惡いのかね」靜子は心ならぬやうに視上げた。

「私共の目には何方だか分りません、醫者に聞いて見ませう」

「私、行つちや可けないのか知ら」

「夫を聞かうと思つたのですが、又叱られちや可けないと思つて、何にも云はず引き退つたのです、今夜は何處に泊りますか」

靜子は餘所ながらでも、良人の容體が見たかつた、次の室迄も行きたかつた、滿腔の眞を提げて、看護の勞が取りたかつた、けれど許可のない病室へ入ることは能きぬ、次の間へ行くことも爲らぬ、云ひやうのない淋しみに裹まれながら、暫く厨裡に坐つて居たが、さうして居ては限がないから、一時門前の鐐西館まで引き取つた。

副官にも看護人にも逢て、將軍の容體を詳しく聞いた、昨日あたりから少しづゝ熱の降下を見たと聞いて、やゝ安心はしたものゝ、目前に一目見ぬのが返すぐも悲しかつた。

此の前に來た時は、護摩の力で不眠症が全然治つた、人の力で及ばぬことは神佛の加護を乞ふ外ないと思ふので、夜と共に良人の病氣平癒を祈つた、同時

に良人の心解けて、明日は對面を許さるゝやうにと念じた。
將軍の病氣は次第に快い方に向つて行たが、靜子第二の願望は遂げられなかつた、今日はお許可があるか、明日は對面を許されるかと待つて居たが、遂に何んの沙汰もなかつた。
將軍の容體は日ごと〳〵薄紙を剝ぐやうに快くなる事を、老僧や、副官から聞くのが切ての歡びであつた、けれど折角尋ねて來たのであるから、沁々御容體が見て去りたいと思ふ念が止まなかつた、老僧も副官も靜子の心中を思ひ遣つて、同情の涙にくれるのであつたが、いかに執成しても將軍の心を動かすことは能きなかつた、勝典ももう一度お目にかゝりたいと願つたが、それさへも許されなかつた。
良人の九死一生と聞いて、驅け付けた甲斐もなく對面を許されぬ、目と鼻との間に居ながら、聲を聞くことさへならぬ悲しさを胸に疊み「何分よろしくお願ひ致します」と人々に賴み置いて、一週間の後東京へ歸つた、靜子夫人の心の

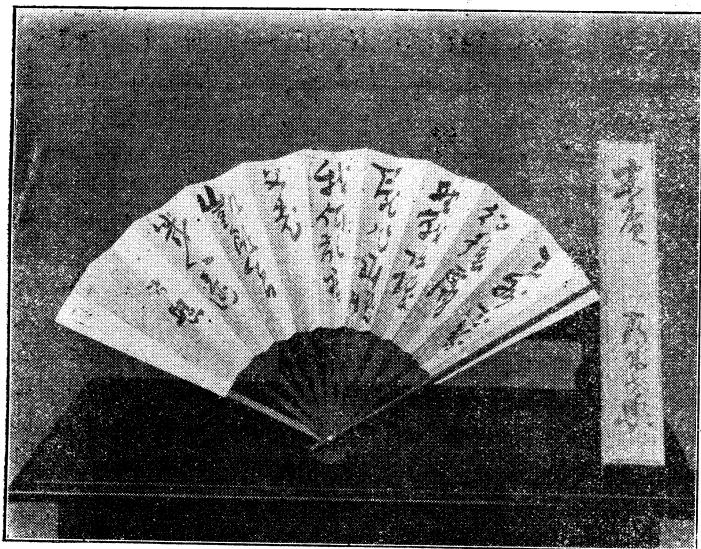
中は何のやうであつたらう。

(二十)

何ういふ主意で、折角尋ねて來た夫人を、一歩も病室へ入れず、一目も對面を許さなかつたかよく分らぬ、或は女の手に掛つて、死ぬやうの事があつては爲らぬと思はれたのか、或は公私の別を明かにしたい立場から、公職中に病んだ身を、妻の手に介抱されるのは面白くないと感じられたのか、將軍の周圍には種種の下馬評があつた。

將軍の病氣中、最も誠意ある看護をしたのは、例の葦原副官であつた、朝起きるとすぐ平服で訪問する、それから師團への出勤掛と退廳時とに軍服で見舞ひ、晩餐後と就眠時とに又平服で尋ねる、毎日五度づゝ往訪して、心から平癒を祈つた、將軍に事ふること、宛ら君父に仕ふる如くであつた、人々は皆な感じた、將軍も深く厚意を歡ばれたやうであつた。

大將筆扇面（明治四十五年六月書）

（伊勢二見　清水石仙氏藏）

病中は多く無言であつたけれど四十度以上の熱氣ある時も、細い事にまで氣を注け「看病人に湯札を遣つたかね」と訊ねることが屢次あつた。

平熱に降つた時、扇面に筆を走らせた、西の内らしい紙に歌を書いた事もあつた、四十一度の熱を有ちつゝ、詩を書いて副官等に見せた事もあつた。

いかに苦惱のある時でも大小便は他人の厄介にならぬ、歩行の自由も爲りかねる程に見ゆる時

も、ちやんと起きて圍へ入る、これには看病人も一方ならず閉口した。見舞品は隨分多くあつたが、商人からの送り品は悉く返却した。

さしもの病氣が平癒したのは、梅雨晴れて、麥浪天に連る時であつた。

日淸戰爭に旅順を攻擊した時、外套に三箇の彈丸が中つて、乘馬の斃れた事がある、將軍はその當時を追懷する爲、年々一度づゝ「馬の法事」を營んだ、その日は部下の將校を招いて、平生になく立派な御馳走をするのであつた、將軍が昔を偲ぶ床しい心は、こんな事にも現はれた。

將軍は生物を斷つのが大嫌ひであつた、人間に害を與へぬ物は、昆蟲一疋も徒に殺さぬ、樹一本も伐らぬ、ある時、多度津の花菱屋から大鯉を三尾持つて來た事がある「こりや珍らしい、好い物をくれた」と歡び受け、厚く禮を云つて歸した後、鯉は前の池へ放した。

將軍は金錢に無頓着であつた、將軍の手紙に「途中で旅費を無くして、東京へ金を取りに遣つた」といふやうな事の記されたのが折々ある、用意深い將軍が、

旅費を少く持て旅立ちする筈はない、途中に贅澤をされる事もないに、恁様事の度々あるのは、廢兵や、戰死兵の遺族や、困難して居る老人などに出會ふと、惜氣も無く金を與へるから、やがて豫定の金に狂ひを生ずるのであつた。
第十一師團長時代にも、演習などで出張する時は、いつでも五圓紙幣を十數枚づゝポケットへ忍ばせる、會計全部を受持て居る葦原副官へ向け、時々金の無心を云ふのは此の必要からであつた、
途中で病氣に原因した除隊兵や、滿期兵の貧困者やに出遭つた時は、その五圓紙幣に羽が生える、もし除隊兵の傷病者でも見ると、將軍はすぐ馬から下りて、まづ姓名を問ひ、所屬隊を問ひ、懇に慰撫した後、五圓紙幣を取り出して與へるのであつた、又衞戍病院檢閲の際にも、傷病兵に對して、懇切に詞を掛け、親兄も及ばぬ眞心を以て慰め、病室を巡つては、一々手を握つて「國家の爲め十分に養生せよ」と云ひ聞ける、病兵の中には感極まつて泣くものもあつた、然し、花柳病の患者のみは大嫌ひ、その病室の前まで來ると、眉を顰めて素通りをする、花

柳病は當人の不品行に原因するのであるから、將軍は最も憎み且つ爪彈きした。

將軍は衛生に心を用ひた、自分の使用する物は勿論、各將校の使用する湯呑茶碗や食器類は悉く姓名を燒き付けさせ、毎日一つ所に集め、大釜に入れて煮沸させるのであつた、獻盃はいかな場合にも禁止、毎朝師團へ出勤する前、各兵營の周圍を一巡し、道路溝渠等に不潔な處があると、軍醫部に注意を與へ、軍醫部長から町役場へ交渉させ、各隊付の軍醫に命じて、取除けさせるのであつた、時の軍醫部長嘆息して「僕は町役場への使ひ掛りさ」

(三)

將軍が第十一師團長であつた頃、中尉副官であつた大川盛行(今は歩兵中佐)の談話を聞く。

「乃木將軍の人格の崇高な事、又奉公の念の強かつた事、此は今さら云ふまで

もないが、取分けて將軍が嚴格であつた事も、歸する處は忠義奉公の念から割出されて居るので、普通に云ふ嚴格一遍とは、少し意味が違ふと思ふ。

三十三年の事であつた、高知へ機動演習に行つた、此の時は人家に宿營しても決して寢具を借らぬ事に定めて、その事を縣廳へも通知したから、縣廳からは一般人家へ觸れて置いた、けれど人情は爾うも爲らぬ、多くは立派に寢具を準備したから、その厚意を無にするのも好くないと云ふ意見もあつて、宿主の情を被た人も少くなかつたが、將軍は始めに決めた通り、決して寢具を用ひなかつた、宿舍に着くと、軍服のまゝ床の框を枕にして眠られるのである、其處でその家の主は、將軍の熟眠された處を見計ひ、そッと布團を着せなどしたが、將軍は眼を覺まして「それでは勿體ない、どうか構うて下さるな」と斷る、主人は押返して「お風邪を召してはなりませぬ、粗末な物ですがお召し下さるやう」と云つても、將軍は飽くまで謝絶して、始終初めの約束通りを實行された。

將軍は神社佛閣へよく參拜せられた、誰の居る前でも管はぬ、參詣すべき神

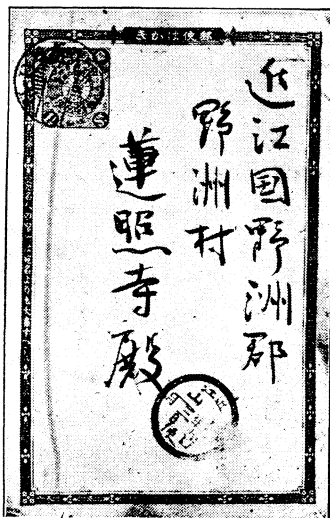
社と思ふと、柏手を打つて叮嚀に禮拜された、彼のマラリア熱の當時、私などが見舞に行くと、お前は副官といふ公職があるぢやないか、病氣見舞は公職ぢやない、こゝに付いて居てはならぬ、何うか早く歸つてくれ、と云はれた凡そ將校の數も多いが、將軍ほど公私の別を嚴守された人はあるまい。

當時の宴會は、偕行社や將校集會所で催すのが例になつて居た、將軍はいつも愉快に青年將校等と一所になつて、旗奪もすれば軍歌も謳ふ、將校の誰かが軍歌を謳ふと、將軍は音頭取になつて、極めて無邪氣に遊ぶのである、最も將軍の宴會場に於ける態度は飽くまでも武士的で、婦人の給仕などは絕對に受けられぬ、將軍の立前は、公務は眞率に熱心に從ひ、宴會等に臨んでは、面白く快活に遊び樂め、といふのであつた」

將軍が兵卒と艱苦を共にしたのは、演習行軍の時ばかりでない、日常の起居飮食總て兵營生活と同じやうにして居た、朝は兵營で起床喇叭の鳴る前に起き、夜も臥床喇叭を聞いて寢る、食事も一杯の盛切り、汁も一椀限りであつた。

將軍は何處へ行くにも馬であつた、馬でなければ徒歩であつた、乘馬の時も滅多に馬丁を從へぬ、乘馬隊の兵卒同樣、行たさきで馬の始末は自分にせられた。

時間を嚴守する事も、將軍の平生を飾る鮮かな

大將自書の端書

色彩であつた、丸龜聯隊の檢閲に行く時など、幕僚に「午前五時立ち寄いてくれ」と云つても、幕僚が五時に行くと、もう馬を控へて門外に立つて居る、七時にと云つたら七時前に待つて居る、今度こそはと思つて早目に行つても、やつぱり門外に待つ

て居た。

副官と同行の場合にも、大體は副官の迎ひを待たずに出勤する、突前師團長の姿が見えたので、衞兵の狼狽したことが度々あつた、整列喇叭の吹奏などて、衞兵に面倒を掛けちやならぬと思ふ時は、そつと裏門から入るともあつた。

將軍は終夜起きて居られるかと思ふほど、一時が二時急用で訪問する者があつても、すぐ軍服で出て逢はれた。

三十三年一月一日であつた、然も未明、然も繽紛と降る雪を衝いて、不意に點呼を行つた、何が一月の元日、殊に雪の曉であるから、除夜の酒に醉ひつぶれて、ぐつすり寢込んで居た人達は、非常に周章狼狽した、中に名望ある某將校は丸龜の酒樓で正しからぬ遊びをして居た爲、點呼の期を過つた、嚴格な將軍は少しも假借せず、休職を命じたのであつた。

元日の祝儀は、將軍が正席に坐つて、書生も馬丁も一堂の中に集め、自ら新年の盃を擧げて、一々獻酬するのであつた、公務を除く外は、下賤の者をも卑しめ

ず、極めて同情ある歓待をした。

（三）

歩兵第四十三聯隊第二中隊長越智(茂)大尉は語る。

「私は勝典中尉とは成城學校時代の友人であつた關係から、乃木家へは折々伺ひました、將軍にも度々逢ひました、將軍は我々に向つて、吉田松陰先生のお話をなされた、松陰先生の士規七則は、將軍が神の如く信じて居られた様に思ひます、將軍の邸宅は極めて質素で、靜子夫人は何時も木綿物ばかりを被て在らしッた、吾々へ菓子を下さるにも、別に菓子器へお入れなさる樣なことはなく、夫人自らお持ちになつて、まアお取りなさい、と箸に挾んで下さるのが例であつた、將軍が第十一師團長になられてから、私はそんな縁故で、時々金倉寺の寓居へ伺つた、將軍に御用のある時は、今日は忙しいから話をする譯に行かぬ、又來てくれ、と云はれて歸つた事もあり、お暇な時は、打解けていろ〱お話を

して下された、將軍は折々〳〵讃岐で高い山は何の山か、その山に登つた事があるか、などと問はれた事があつた、高い山に登つて、周圍の地形を案ずるのは、軍人に取つて最も必要な事である、との議論であつた、勝典君が東京から來た時も、すぐ讃岐の地圖を宛つて、大麻山に登らせた、飯時が來ると、どれ飯を遣らうと云つて、將軍自ら大きな鉢に飯を盛り、その上へ肴の刺身に醬油の浸ませたのを並べたのを持て出て、さア遣りたまへと云ふ風であつた、もしその飯が食ひ殘されてゞもあると、若い身で此の位の飯が食へぬか、と叱言を云はれた。

正月元日將軍は有志の將校を集めて、大麻山へ登られたのは有名な話である、その時我々〳〵士官候補生も加はつた、一行はまづ琴平神社の本宮に參詣した、將軍はと見ると、衣囊から財布を取出し、その中の銀銅貨を一摑みばらりと投げられた、誰でも一應は員數を調べた上投げるのであるが、將軍は摑んだまゝをそのまま投げられた。

檢閱の仕方も一寸變つて居た、或る時突然居合せた兵士に向つて、兵卒には

襦袢が幾枚支給されて居るか、と尋ねた、少尉はまごつくばかりで、急に答へが能きなかつた、すると將軍は、部下の兵隊は自分の子も同樣である、その可愛い兵卒が襦袢を何枚持つて居るか位を知らないで撫育することが能きるかと、早速取調べさせた事もあつた、或る時第二十二聯隊(松山)へ行かれた事がある、聯隊長は將校を率ゐて迎ひに出た、將軍は突然聯隊長に向つて、そこに併んで居る士官候補生の姓名は何と云ふか、と尋ねた、處が生憎、聯隊長に記憶が無かつた、將軍曰く「其の位の事は覺えて居て貰ひたいねえ。」

虛言は最も嫌ひであつた、或る時金倉寺からの出勤がけ、下士が一個中隊の兵を引率して居るのに出遭つた、將軍の常として、斯る場合には、必ずその目的地を問ふのである、下士は丸龜へ射擊演習に行く旨を答へた、將軍は、それなら中隊長が居る筈だ、何うしたか、と問はれた、下士は止むを得ず、汽車て行かれましたと、答へた。

之を聞いた將軍は、丸龜へ急行して、停車場に中隊長の下車するのを待つて

居た、中隊長は爾うとも知らず降りて來る、將軍は儼然として、中隊を引率して來たか、と尋ねた、中隊長は有のまゝを答へたら、何樣に叱られるか知れぬと思つて、はい引率して來ました、と答へた、將軍の面色は見る〳〵間に變つた、虚言を云つちや可かん、軍人が僞を云つて何うすると、烈火の如くに怒つた、まことに切腹もさせかねぬ勢であつた、中隊長は恐れ入つて陳謝した、將軍の怒りは僅に收つたが、其の時の訓戒は言々骨を刺す如く物凄かつた。

將軍は僂痲質斯(?)の養生をする爲、丸龜から數丁距てた中津の萬象園へ行つて居られた事があつた、私も附近で海水浴をして居たが、咽喉が乾いて仕方が無いので、思はず茶が一ぱい欲しいと云つた、すると側に居た將軍が聞いて、ナニ茶が要るものか其處に澤山水がある、と云はれた、私は水の衞生に害のある話をすると、ナニ水でも腹の中で十五分經つと湯になるよ、と云はれた。

（二三）

將軍は子供が好であつた、師團へ出勤する途中でも、五六歲の子供がお辭儀をすると、ニコ〱笑つて手を擧げる、或る時、五六人の子供が途の中央に「通せんぼ」をして待つて居ると、其處へ大將が遣て來た、一人の子供は見るより「師團長さん、禮をして下さい、それで無いと通しまへん」と云つた、將軍が笑ひながら手を擧げると、子供は歡んでばつと退いた、金倉寺附近の子供と將軍とは間の好い友達であつた。

將軍は誰が來ても座敷へ通して、貴賤を問はず主客の禮を取り、手づから茶を汲んで出しなどした、曾て善通寺の客殿で篤志看護婦練習會のあつた時、他の將校は臺所門から客殿前の中門外まで馬を乘り入れ、山内の松樹に馬を繫いだが、將軍は臺所門から馬を降り、徒歩で山内へ入つた、その謙讓な仕方には一人として驚かぬものゝなかつた。

將軍が部下に對していかに親切であつたかを知るに足る好話柄がある、自分は少し位病氣に罹つても「ナニ此しきの事」と云つて容易に醫者の診察を受

大將眞筆の二見燒と其箱書

明治四十二年八月廿二日大將伊勢國二見神陵園清水石仙氏の求に應じ同氏手製の陶器に揮毫せられたるものにして「横に行もとや人を思ふらんおのれを知らぬ蟹の心に」の自味あり

ける事をしなかつたが、他の病氣には淺からぬ注意を拂つた、三人の馬丁の中、鎌次郎は女房(夫人の伴れて來た下女のうめが將軍夫婦の世話で夫婦になつたのであつた)持であるから、別の部屋を貰つて居たが、二人の馬丁と書生とは將軍の次の室で起臥した、或る夜一人の馬丁が頻に咳をせいた、すると將軍は翌朝「感冒の樣だ、早く海瀨へ行つて來い」と云つた、海瀨は丸龜衛戍分病院長で私立病院を開いて居た。

馬丁は恐縮して「別に大した事で

同上其二

(伊勢國二見　清水石仙氏藏)

はないから捨てといて好いでせう」と斷つたが「さうぢやない捨て置いてはよくあるまい」と強て診せに遣つた、四五日して「もう全快しました」と申し出ると「それぢや此を持つて行け」と診察料やら藥價やらを與へて禮に遣つた。

將軍は何樣事にも趣味を持ち、又何樣些事にも通じて居た、ある日金倉寺の現住俊雄に向つて「あなた麥味噌の製法を知つて居るか」と訊いた、俊雄は「いえ、それは下男が致します、私は知りません」と答へた、すると將軍は眞面目になつて「寺の味噌は重要な食物である、下男任せにし

て置いちや可かん、味噌は製法に由つて旨くも不味くも食へる」と云つて細に製法を教授した、金倉寺の麥味噌は、將軍の製法に負ふ處が多いさうだ。

靜子夫人は其後三四遍も金倉寺へ來て、二三日逗留した、その時善通寺偕行社の師團婦人會から「是非御出席下さるやう」と云ひ込んで來た、夫人は一應斷つたが、是非といふので出席することになつた。

婦人會の婦人達は、師團長夫人が御臨席下さるといふので、能きるだけ好い衣裳を着飾つて行つた、處が靜子夫人は手束ねの髮に木綿物の衣服を着て、顏だけを剃て居た、婦人連は更に一驚を喫したのであつたが、やがて幹事から左の如き挨拶があつた。

「皆樣へ申し上げます、自今本會へ御出席なさるには、着のみ着のまゝが宜しいと存じます、態々髮を結たり、衣裳を好んだりなさるのに手間が取れては、お子達のあるお方々など、自然不參勝ちになる事がございます、以來はお手輕な服裝で御出席を願ひます」

靜子夫人の出席が如何に無言の教訓を將校夫人に與へたかを知るに足る。

玉木正誼(幼名眞人、將軍の實弟)の未亡人豊子刀自も、一二度金倉寺を訪ねたことがあつた、その時刀自から「倅(玉木砲兵少佐の事、當時は中尉)が東京へ轉任するに付き、家事の世話に來てくれまいかと申しますので」と話すと、將軍は「行て遣るが宜しい、若い者一人ぢや行屆かぬ事が多いでせう」と同意した。

「ですが東京は非常に華美な所ださうで、夫ばかりを苦勞に致します」とやゝ躊躇のさまで云ふと「ナニ他が何と云はうとも、自分は自分だけの暮らしを立てて行けば宜しい、もし笑ふものがあつたら、その笑ひ聲を樂んでお聽きなさい」と云つた。

(二四)

豊子刀自は深く感じた、見ると頭はすり切れ、柄は折れて、折れた處へ他の青竹を束ね添へた古箒が置いてあつた「師團長のお住居でも此でお濟ましなさ

るのだもの、中尉の家庭で何樣事をしたとて他が何と云ふものか」と更に深く感じたといふ事である、將軍は金倉寺寓居中の足掛四年を、この一本の棕梠箒て終ましたのであつた。

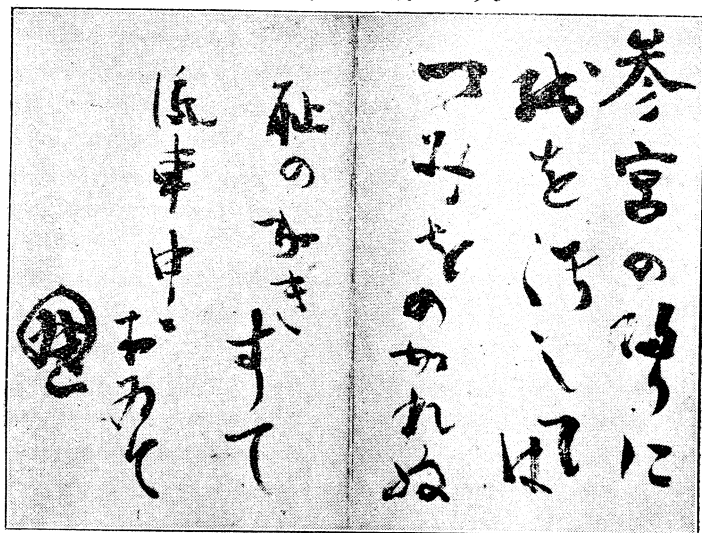
大館集作の訪ねた時は「折角來たのだから、白峰御陵と金刀比羅宮へ參詣して來るが好い」と云つて參拜させた、最も脚袢に草鞋穿であつた。

勝典も保典も二三度來た、一度は霜降小倉の生徒服、一度は木綿着物に木綿袴であつた「木綿を着せるのは私共の家風であります」と靜子夫人は語つた。

保典が暑中休暇で來て居た時である「お父樣お小遣を下さい」と云ふと、將軍は五十錢銀貨を一箇遣つた、それが一月中の小遣である、或る人が「坊ちやん少いぢやありませんか」といふと「お父樣はお小遣を下さらない、學校へ行つて居ても、六十錢ぼつきりだ」と答へた。

善通寺練兵場西南の筆山山麓に遊廓があつて、二階から練兵場が一目に見られた、或る時練兵場で歩兵の部隊教練があつた時、某隊が行進を起さうとし

て中隊長が「中隊前へ、目標は向ふの遊廓」と號令を掛けた、兵卒は齊しく遊廓に目を注ぐ、將軍は不圖この號令を聞いて、教練が終ると共に隊長を呼び付けた「目標を遊廓に取つたは甚だ善くない、自今目標は人家とい

大將狂歌

乃木大將伊勢參宮の途次須原藤三郎氏に與へるもの

ふやうに注意せよ」と云ひ渡した。

その遊廓の二階から首を出して、練兵を見物する遊女もあつた、將軍は堪りかねて「國家の干城が大切な調練するのを、賤業婦共に見させちや爲らぬ」と云つて目隱を作らせようと

したが、板圍も妙でないといふので、遊廓と練兵場との中間に多くの樹木を植え附けた、その樹木は今も青々と繁つて居る、この附近には將軍の舊跡が多くある。

善通寺の伽藍から約六七丁を距る北の方に、仙遊ヶ原といふ古蹟があつた、弘法大師が幼い時分に、遊戯した土地と云ふので、昔から名高い靈地になつて居る、大師幼時の石像と、延命地藏とを安置した堂もあつた、處が十一師團の新設と共に、その地域が練兵場の用地になつたから、堂宇と二軀の石像とは、三十圓の移轉料を得て、善通寺伽藍の一隅に動座の已むを得ざる事となつて、仙遊ヶ原の靈蹟は痕跡もなく取り拂はれた。

將軍は赴任匆々此の事を聞き「それは如何にも遺憾である、師團を設置した爲に偉人の靈蹟を湮滅させるのは遺憾であるから、宜しく原の通りにしたいものである」と云はれた。

處が數日を經てから、その事が事實となつて現れた、技手が人夫を督して、約

三十坪ばかりを小半形に築き上げ、發掘した古い丸石を五つ重ねて五輪塔を作り古蹟の前を流れて居た自然石の橋を記念碑樣に建て、周圍數百坪に樹木を植ゑても差支ない用意まで成きた、これについては出石(猷彦)少將(當時野戰砲兵第十一聯隊長であつた)の與力もあつた。

それに面白い傳說がある。

將軍が師團長として赴任した當時、練兵場を巡視すると、或る處で馬が停まつた、いくら鞭撻しても進まうとせぬ、强て行らうとすると掉立になる、將軍はとう〳〵搖り落された、次の日同じ處を通りかけると、故もなく落馬した、不思議に思つて聞くと、そこが大師の靈跡であると知れた。

斯ういふのである、將軍が此の邊で落馬したのは事實であつたが、この爲に大師の舊蹟を知つたといふのは、例の牽强附會である。

古跡は舊に復したが、唯一の記念物である二基の石佛は、依然善通寺伽藍に取り殘された。

然るに誰が云ふともなく、その石像も元へ還してほしいと云ふ噂があつた、將軍も大いに歡ばれた、そこで有志者が金を醵めて、石垣も築き、玉垣も堂宇も出來て、目下のやうに成就したは土屋師團長の時代であつた。

(二五)

將軍の手に由つて、舊跡の保存されたのは外にもある、三十二年の事であつた、愛媛縣大林區署は金刀比羅小林區署へ通達して、綾歌郡林田村字三十六の舊跡を賣却する事にした、小林區署は入札を取り纏めて、已に價格を發表しようとする時、將軍は靜子夫人を伴れて、突然同村の藥師院へ來り、住職小田耕岳を訪ひ「お聞き及びでもあらうが、三十六の舊跡は南朝正平十七年七月二十四日細川清之の居城高屋を、細川賴之朝驅に襲擊した、清之勇戰したが力及ばず戰死した地で、殉難の勇士三十六士を合葬した、三十六の字はそれから起る、さう云ふ古跡を廢滅させるのは惜いから何とか保存の道が立てられたい」と語

つた、耕岳和尙も原より同感、段々調べて見ると、頼之の部下に乃木備前次郞といふ者あつて、同じ日の戰ひに討死して居る事が知れた、此の乃木備前次郞が、將軍の祖先であつた事まで判明したので、將軍の歡び云ふばかりもなかつた、そこで渡邊書記官に話し、書記官から縣下の有志に議つて、遂に無代價拂下を願ひ出て、林田村の共有墓地の名の下に舊跡を保存することゝなつた。

將軍は石が好きであつた、それも好事家が愛玩するやうな名石奇石ではなく、路傍にごろ〳〵落ちて居る普通の小石である、何處へ行つても記念の爲一箇づゝは拾つて來る、師團への往返にも、態々馬から降りて拾ふとがあつた。

その多くの石塊は、居間の床の飾りであつた、何の奇もなく、何んの面白みもない小石が、將軍に何うい ふ面白味を與へたかは、誰人も解し得ぬ疑問であらう。

或る時友安中將が、勝典に對つて「貴樣の親父は袴があるか」と問ひたるに「いや無い、要る時は僕のを穿く」と答へた。

將軍が金倉寺に寓居して居る中、陸軍大臣としての桂太郎が二度までも訪問した、普通なら門前まで出迎へる處を、將軍は客殿の縁端に立つて迎へた、それから松の間(借りて居る一室)へ案內して、有合せの酒を出し、暫時話をして別れた、歸りも緣側まで送つて、一寸頭を下げたばかりであつた。

將軍は好んで學校を巡視したが、小中學校では決して好きな煙草を喫はなかつた、或人が何故かと聞くと、丁年以下の學生は煙草を吸ふのを禁じられて居る、その前で煙草を吹かすは、餓ゑた人の前で御馳走を食ふにも優した仕業であると、答へた。

三十三年六月十八日、北淸事變に關し丸龜聯隊から、第三大隊(隊長杉浦少佐)を派遣した、これが將軍辭職の一因となつたのである。

其年の冬ちら〳〵と雪が降つて、骨も凍るやうな寒い日、折柄來合せて居た靜子夫人を伴ひ、讃岐國大川郡水主神社(孝靈天皇の皇女百々襲姫を祀る)へ參拜した、將軍は神主の案內に由つて拜殿の前まで進み、こゝで一枚の荒莚を乞

ひ受けて、緣側に敷き、夫人をその上に坐らせ、自分は二度の清め祓ひを受けて內陣へ參向し、更に本社から數丁を隔てた奥の院へ參詣した、此の間殆ど四時間、夫人は整然と荒菰の上に端坐して居た、神官は見るに見かねて「お寒いでありませう、拜殿內へお進みなさい」と云つたが「有難うございますが、女は昇殿を許されぬものと聞いて居ります」と答へて、遂に坐つたまゝで居た。

　三十四年の春、北清事變の分捕問題が喧しくなつて來た、その嫌疑者の中には、丸龜聯隊から派遣された杉浦少佐の名も見えた、善通寺から丸龜方面へ掛けて、忌はしい風が吹き荒んだ。

　齋藤(德明)大佐が屢次將軍を訪問したのは此の時であつた、お成門の扉を叩いて、深夜面會を求めた事もあつた、天明け近くまで何事かを云ひ爭ふこともあつた、將軍の意見としては「部下の將校が忌はしい嫌疑を受くるに至つたのは、自分不德の致す處であるから、責を引いて辭職する」といふのである、聯隊長は少佐嫌疑の事情も知つて居るから「從來多少の功勞あつた人を忌はしい嫌

疑の下に葬むるのは忍びぬから、こゝは宜しく御勘辨下さるやうに」といふのである、聯隊長は最も熱心に、最も同情的に、少佐のため說き且陳じたが、將軍は頑として肯かなかつた。

表面は「僂麻質斯に付き起居自由ならず」との理由の下に、辭表を提出したは、その年四月初旬であつたが、容易に聽許の沙汰がなかつた、將軍は待ち兼ねたやうに湯治へ行つた、依願免職となつたは、五月二十三日であつた。

將軍は湯治場からすぐ師團へ行つて、事務の引繼をし、その歸りに金倉寺へ立ち寄つた。

「院家さん在るか」とつか〳〵老僧の居間へ入つて、一時間ほど物語つた「私も樂になつたから行脚でもするつもりだ」

そして寺へ「御疊修理料」金二十五圓を寄附し、二十六日多度津花菱屋の送別會に臨み、二十七日金倉寺を出發した、同寺に現存して居る將軍の遺物は左の如くてある。

一白木長持　一棹
一延寶板宇津保物語　全三十册
一明治三十二年職員錄　一部
一碁盤石共　一座
一磯部燒小火鉢　四箇
一竹臺ランプ　一對
一彩色田水瀬戸中皿　十三枚
一陶製水鉢　一箇
一硝盃　六箇
外に古軍帽　一

足掛け四年に亙る將軍の十一師團長時代に於て、將軍の偉大な面目を十分に知ることが能きる、この四年間の事蹟を比較的精細に記したも、こゝに意を用ひた爲てあつた。

野の鶴

(二)

途別會の翌日金倉寺を引き上げたが、直ぐ歸京するのではなかつた、歸途姫路から神戸に入り、丹波福知山へ行きなどして、心のまゝの旅をした、その道中の模樣は、半井軍醫に寄せた書狀で盡して居る、面白いからこゝに全文を掲げる。

拜啓　多度津御分袂後愈御健勝大賀大賀出立の節は種々御懇情多謝の至に御座候、小生義海陸無事姫路に立寄り同夜神戸に達し自由亭ホテルに入り久々にて同地の夜景を弄し翌朝微行にて福知山衞戍を探検外出の兵卒に見と應接至極面白く去らんとしての間際山内憲兵司令官宇佐川旅團長に見付けられ、大失敗、同夜は有馬溫泉に浴泊、同地の無趣味なるには一驚仕候乍去夜月光の好き六甲山の北面より見たるの味ひは格別に存候其の翌神戸

歩兵第十四聯隊第三大隊
第一中隊附
陸軍伍長立川文太郎
其方儀本年七月
十六日[illegible]
向国陸地[illegible]
之節[illegible]
[illegible]
能其功ヲ奏ス依テ褒
賞トシテ別紙目録ノ
通金若干ヲ授与ス
明治十年七月廿日
陸軍少将谷干城

西南の役乃木少佐負傷の際、少佐を畚に入れて擔ぎつゝ戰場を馳驅したる立川文太郎の受領したる感謝狀にして、同氏は目下長崎縣北高來郡深海村深海神社の神官たり、同神社の額は乃木大將の筆に成れるものなり(四五七頁參照)

に歸り馬を迎へて夜半に至るまで忙殺し其の翌日は新聞屋に見付けられ朝より俗了午後馬と共に乘船(小樽丸)午後四時出港候間翌日同時迄には横濱に着の事と存居候處豈圖らんや此の船は極めて緩行を取るものにて(速力を用ひず)六月一日の朝横濱へ入港仕候併し客たる者は小生のみにて老將軍の御座船とも申すべく唯我獨尊珍無類の有樣海上は極めて平穩二夜共月明は圓滿の時天色は拭ひたる鏡の如く久々振の太平洋上に此の愉快の極を盡しては詩も歌も息も出ぬ迄に面白く寢衣の儘にて甲板上に夜深し致し候ためなるか上陸の朝より熱氣を覺え上陸後は煙草も好ましからず歸家の夜は殆ど三十九度を示し漸く昨朝(六月六日)に至り一椀の粥を喰ひ參朝の後今日へ掛け大略の巡禮を濟ませ申候東京は已に梅雨に入候間此間北海道に遁れ可申と相定め明後日より北飛可致候彼地は未知の境に候得ば一段と珍敷樂敷事も多かるべく後信は彼地よりと期し申候御禮艸々頓首

六月七日　希典

半井賢兄尊下

（三十四年三月七日青山局の消印あり）

此の手紙にある通り、六月九日から北海道へ旅行した、北海道では何處を何う回つて何日歸つたかよく知れぬのは遺憾である。

それから暫くは閑地に居た、那須野へ行つて耕作地を見るのと、兩子息の成長を見るのと、讀書するのと、戰死兵士の墓標を書くのとが、この間の仕事らしかつた。

陸軍部內でも、將軍如き好軍人を、いつまでも閑地に置くのは惜いといふ議論もあつて、より〳〵就職を進める者もあつたが肯かなかつた、當時の陸軍大臣であつた寺內伯の如きは、同縣出身の關係もあつて、殊に親く交際て居たので、三十五年七月十一日、將軍を官邸に招いて、數時間に亙る勸告的懇談をしたが「陸軍部內に斷乎たる廓淸の爲きぬ間は、いかなる職にも就かぬ」と斷つた爲

め、要領を得ず終つたとの說さへ傳へられた。

(三)

此の休職中の事であつた、二重橋外を馬で通ると、その馬が宮內省の馬車に驚いて荒れ出した、將軍は骨を折て乘り鎭めようとしたが、その甲斐なく落馬して右の手に負傷した、それが中々重傷であつたので、赤十字社病院に入院した、治療中は仕方がないから日本服を着て、繃帶した手を首から吊り、木綿の紋付羽織に、灰色の木綿袴を付け、伊勢のお札配り見るやうな風て居たが、その姿で見舞を受けたさきへ禮に廻つた、某將軍はそれが乃木將軍とは思ひ寄らぬから、無心者と思つて留守を使つた奇談もあつた。

此の傷が少し快復に赴いてから、伊豆の修善寺へ湯治に行つた。

將軍は時世に平かならぬ事があつた、少くも當時の大官閥族に對して慊焉たることが多かつた、この湯治中、東京から見舞に來た勝典に筆取らせて「軍人

軍族の心得」となるべき事十五箇條を筆記させた、將軍には著書と見るべきものがない、自己の意見として發表したものもない、けれど此の「十五箇條」には明かに將軍の意見が出て居る、將軍の不平が微見えて居る、その草稿は現に某休職將校の手に保管されて居る、某將校が將軍から草稿を得た時、

「お說は至極御同感であります、啻に軍人軍族の心得となるのみならず、一般人民の心得ともなる事が多いのですから、世に公にしては何うでせう」と訊いて見た、將軍は聞いて

「今は可けない、私が死んでから公にしろ」と云はれた。

「十五箇條」は近來の快文字である、二十ページに足らぬ短編ではあるが、近來の大文字である(この十五箇條は此の編の最終に掲げる)。

修善寺の湯治で傷は追々快くなつたが、兎角氣分が優れぬので、幼馴染の山川に神心を慰むべく長府へ歸つて、同地海濱字三軒家毛利子爵の別莊へ入つた、子爵家の別莊といふと、さも立派な建築のやうに聞こえるが、景色こそ好け

れ、三間建の疎末な家で、將軍の借り受けたのは三疊敷の一室であつた、將軍はこゝで自炊もし、又起臥もした。

此の自炊時代は餘り長い時日では無かつたが、それでも模範となる行爲が少くなかつた。

臺灣總督として出發する時、手づから忌宮の境内に栽ゑた樟は、三五年の間によく繁茂した、この手栽についても、將軍は好い話の種を殘して居る。

土地の有志から懇願して、將軍に樟を栽ゑて貰ふことにした、從來の例で、手栽と云つても、眞の一鍬入れるばかりで、他は悉く手傳で濟ますのであるから、此の時も「どうか一鍬お入れ下さい、後は此方で始末します」と云つた、すると將軍は色を作して「夫では手栽ぢやない」と云つて總を自分で栽ゑ終つた。

その忌宮は將軍の土産神であるから折折參詣した、神官の某は或る日の午後二時參詣されると聞いて待つて居ると、それより早く參詣した、神官は恐縮して「今日は午後二時お出でと承つて居りましたが」と云ふと、將軍は「いや、私は

大將手簡

明治四十五年一月播州赤穂の大石舊邸保存會幹事赤石蓬仙師より赤穂城大手門の石壘上に建立すべき石柱の揮毫を依頼せし時の返事（赤穂花岳寺藏）

時を極めて參つたことありません」と儼然云つた。

忌宮の寶物に古い繪卷物が一卷ある、將軍の參詣した時に、神官がその話をすると、それは一度拜見したいものだと云つた神官は將軍の希望であるからと思つて、翌朝早く彼の寶物を取り出し、將軍の感賞に預かるつもりで、三軒屋の僑居へ持つて行つた。

「御希望の繪卷物を持つて來ました、御覽になりますか」と云つて差し出した、すると將軍はそのまゝ押し返して、

「あなた怪からんことをするねえ、拜見が願ひたければ此方から參上する、假にも神に仕へる身で居ながら、無斷で神社の寶物を持ち出すといふ事があるか、そんな心で神に奉ずることが爲きるか」と散々に叱散らした、神官は顏の色を失つて歸つた、それでも長府を出發する時、將軍は忌宮に參詣して、金二千疋を寄進した、その包み紙が同社の寶物になつて居る。

（三）

此も將軍が三軒家に養生して居る時であつた、長府町の有志者を始め、附近の町村長郡會議員等が發起して、忌宮の社務所で歡迎會を開くべく、將軍に出席を申し込んだ、將軍も承諾はしたが、休職中であるから軍服は着て出られぬ、さりとて所持の日本服はない、谷山に住んで居る大館集作方へ借りに遣つて、洗ひざらした久留米絣の着物と敝れた小倉の袴とを得た、所が同じ同胞でも集作は小軀、將軍はまづ大軀の方であるから、行も丈も優れて短い、けれど將軍は其様事に頓着する人でなかつた、集作の着物を被、更に集作の古足袋を借つて穿いたが、小軀な人の足袋であるから、將軍の足は半分しきや入らなかつた、將軍は半分ほど踵の出た足袋を穿き、洗ひざらした着物を被て出席した、それに引きかへて、會員は今日を晴と着飾つて居た、フロックコートもあれば、黒羽二重の羽織もあつて、肝腎の賓客と衣服の調和が取れぬので、中には「乃木様も

殊さら彼樣風をなさるに及ばんぢやないか」と不平を云つた者さへあつた。

けれど將軍は心あつて其樣風俗をしたのぢやなかつた、況して殊さら粗野の服裝をする樣の事はなかつた、將軍は衣食住に無頓着であつた、總ての階級を通じて、衣食住に憂身を扮す中で、將軍ばかりは忠義奉公の念にのみ憂身をやつした、洗ひざらした久留米絣も、黑羽二重の羽織も何んの選む所ないのであつた。

膳部などは原よりない、疎末な折詰に日本酒の壜詰が添つて居た、いざ宴會となつてから、會員は交る〴〵盃を貰ひに行つた、將軍はその人達を捕へて「あなたの村には在郷軍人が幾人ありますか、戰死者の遺族は何樣狀態て居ますか、別に困つて居る風はありませんか」とそればかりを問ひかけた、村長や村會議員の肩書を持つて居ながら、明瞭した答へをしかねて、赤面した者もあつた、久留米絣の衣服から淸しい光が射した。

將軍は四月ほどこゝに居て東京へ歸つた。

渡邊豫備中將が、近衞の旅團長をして居る時、千葉邊で機動演習をやつた、旅團長から將軍へ「どうか見に來て下さらんか」と云つたので、將軍は參觀に出かけた。

旅團司令部では、將軍のために宿舍を取つたがそこには寢なかつた、食事の用意もして置いたが、それにも箸を付けなかつた、將軍の馬と腰とには、麥粉と味噌とが付けてあつた、食事の時が來ると、湯で掻き廻して、白布で絞つたのを食ふ、寢る時が來ると、前哨の野中でころりと寢る、毛布も持たねば枕も無い、頭から頭巾を被るのである、一日や二日でなく、十日の演習をそれで遣り通した、或る人が切て夜だけ宿舍へお入りになつちや如何です、と勸めたが、將軍は儼然として「戰爭は斯ういふものだ」

將軍ある時旅團長に對つて「兵に金を使つちや可かん、鄕里から金を取り寄せるなと囂しく叱るものがあるが、兵も人だ、金無しで日は送れぬ、もし必要な金なれば上官から遣るが可い」

眞鍋中將の談に「我々軍人が休職になると、一番に馬を賣るのであるが、乃木將軍は何樣場合にも馬を賣らなかつた、乃木將軍の他に優れた點はこゝにある」とあつた、馬を武具の第一とする將軍は、總てに能きるだけの儉約をして、絶えず四頭の馬を飼つて居た、假ひ休職になつても軍人としての本分を忘れぬのであつた。

三十五年十一月十日より四日間東肥の野に於て大演習を行はれ、先帝陛下の御臨幸もあつた、將軍も陪觀した、この時西南役の古戰場を過つて、感慨措く能はず、

田原一望秋將老、　新戰場荒草木摧
忽見村童三兩四、　砂中拾得彈丸來

と吟じ、更に

その昔討死なせし我友の
血汐染めけん楓葉の色。

と詠んだ、蓋し實情であらう。

（四）

將軍は特に農事に心を用ゐた、那須野へ行くと、夫人共々畑へ出て、鍬や鎌を使つた事も珍らしくない、米は米と云はず「お米」といふ、日本人は米で生きて居る、殊にお米が口へ入るまでには、何れほど手數がかゝるかも知れぬから、疎末にしちや可けない、と意を注けた。

三十五年の末から、翌年の春へかけて、遼東滿洲に風が騷いだ、今にも大事件の湧き起る樣が見えた「三月八日に感あり」と前書して

　埋木の花咲く身にはあらねども
　　こまもろこしの春ぞ待たるゝ

と讀んで夫妻手製の草餅を添へ、石黒男爵に送つたは此の時であつた、閑雲野鶴を友としながら、胸中鬱勃の氣を抑へかね、時に觸れ、物に感じて、最も意味あ

る歌を詠んだ、石黑男爵から返歌として、

埋れ木に咲くは櫻の花ならで

こまもろこしの雪にぞありける

との一首を送つた、すると將軍は又返歌として

雪降ればかれ木も花の咲くものを

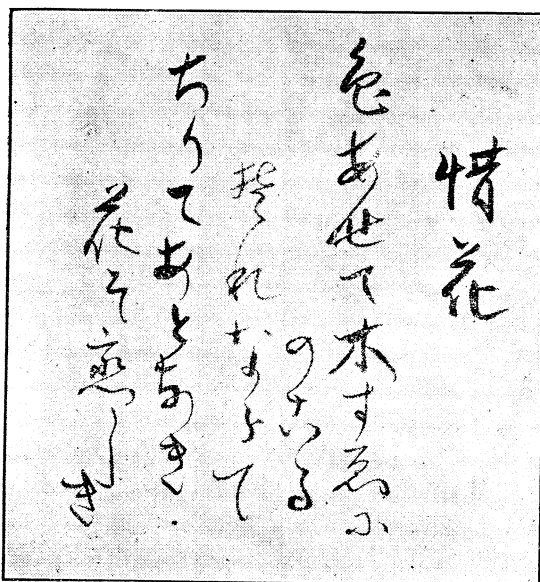
埋れ木のみぞ憐れなりける

の一首を送つた、將軍當時の心情を盡し得て、寧ろ悲痛の極みである。

石黑男爵は、將軍が少しも攝生に心を用ひず、不消化物を食たり、寒天に薄着したりするのを心配して、屢〻養生法を注意した、されど將軍は耳を傾くる樣なかつた、他の者には爲きぬか知らぬが、乃公には爲きるからして居るのだ、と云つた。

その頃、桂彌一から「福祿壽」についての說を聞いて遣つた、すると將軍から左の通り云つて來た。

福祿壽

福祿壽の御説に付き自ら省みれば壽は父祖曾祖其先より皆七十より早きはなく百以上の者も三四人有事故或ひは小生の不養生も六十は越え可申乎此＊壽のみ祿は今日の如く無責任の身にて月々百五十金許りを此日本の貧國民の租稅より受け居るは其罪に於ては可恐程に候得共我身に於て祿とする處なるべし扨福の儀に至つては如何のものかや祿も壽も福の内にありとす

（歩兵第十二旅團長白水少將藏）

大將吟及筆

れば申分も無之候へども三つに分け候上からは精神上の快樂を福とも可申か果して然らば俗に所謂樂天主義にても可有之於此か何分御高說承知仕度渴望の至に候

これにも將軍の意氣が見える。

桂彌一が此年の暮久し振に上京して、將軍の邸を訪れると、內外とも以前に變らぬ質素な構へであつた「相變らずですな」と云ふと、將軍は微笑して「知つての通り、私も粗食で壯健になつたのだから、二人の子供もその流儀で遣つて居る」と云つた、衣食住とも極めて質素で、常食には稗飯を取つて居た、稗の材料は夫人が那須野の耕作地で收穫したのである、然し雇人には一切米の飯を食はせる、來客でもある時は、多く西洋料理店へ出かけた。

壽子の存命中は「假ひ一品でも、家で拵へた物をさし上げないでは、眞の御馳走になりません」といふので、必ず手料理を侑めたが、後には多く西洋料理店へ案內することにした、或る人が「それぢや將軍の節約主義に矛盾するぢやない

ですか」と云つて忠告した、將軍は「至極御有理な御忠告で有難い、自分も客を煩はして西洋料理店へ行く事の不經濟なことはよく承知して居る、故に宅へ取り寄せてお振舞ひした方が好いとは思ふが、それは能きぬ、といふのは子供に贅澤な心が出ちや困るからだ、子供も人間だから旨い物を見りや食ひたくなる、目前には不經濟でも子供の將來には替へられぬ」と答へた、將軍がいかに兩典の教育の心を用ひたるを知るに足る、靜子夫人が善通寺へ行つた時、第一に問うたのは「家では何んな新聞を讀んで居るか」との事であつた。
表面は無頓着に見えても、內實は一切の事に細い注意を拂つて居た。

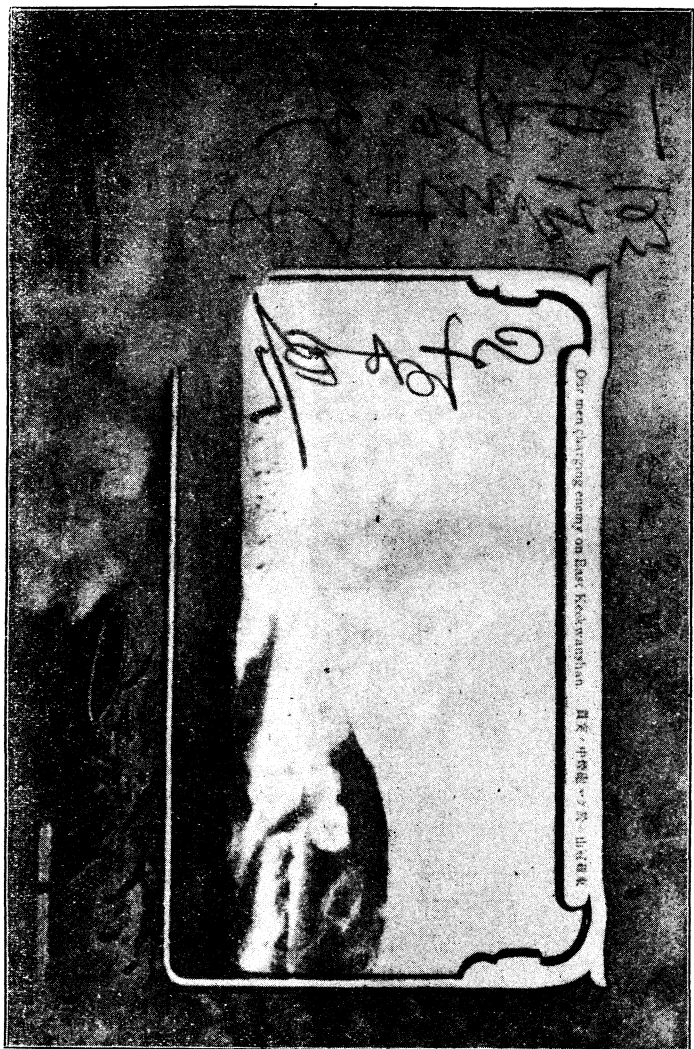
日露役

(一)

三十七年は將軍五十六歳であつた、久しく閑雲野鶴を友として、靜な生涯を送つて居たが、滿洲撤兵問題から遂に干戈を交ふるの止むを得ざるに至つて二月五日動員令の降下となつた、此役はまだ十年も經たぬ最近の事であるから、將軍の行動は人々の腦の底に殘つて居る、けれど一方から云ふと、將軍最後の奮闘であるから、將軍を中心として正確な戰記を作るのは無要の事ぢやなからう。これ實に日露戰記ではなくて、將軍の戰記である。

動員令が下ると共に、留守近衞師團長に補せられた、埋れ木の花は此の時から咲き初めたのであつた。

將軍は那須野の別墅から上京した、年年の一月一日には村民多くを家へ招いて樂しく屠蘇の盃を酌み交すを例にしてから、村民の將軍を敬慕すること、

大將が明治三十八年陣中より鉛筆にて走り書きせられたる繪葉書

宛ら赤子の父母に於けるが如くであつた。

「中將樣が近衞師團へお越しになるぞ、皆がお見立て申し上げろ」といふので、將軍出發當時の那須停車場は人で埋められるほど混雜した。

當時勝典は第一師團步兵聯隊附の中尉であつた、第一師團は奧大將の率ゐる第二軍に編成せられて、四月十六日東京を出發する事になつた。

「勝典もいよく出征する事になりました」

靜子夫人は寧ろ手柄顏であつた、若樣が御出陣なさるといふので、日頃淋しい乃木邸も昨日今日はさすがに人の氣も浮き立つた、馬丁も下女も書生も「さつとお手柄をなさるだらう」と、寄ると觸ると話し合つて居た、將軍が師團から歸るのを待つて、勝典は明日出征の旨を報告した、將軍は頷いたばかりであつた、軍人としての心得、軍人が戰爭に臨んでの覺悟、夫等は平生よく云ひ聞けてあるので、其場になつては何も云はぬ、靜子は淸しい笑を見せ「お上のため立派に命を捨てるやう」と云ひ置き、更に將軍の前へ出て

「私お願ひがございます、お聞き下さるでございませうか」と謹やかに云つた。

將軍は壁にかけた地圖を見て居た、日露戰役の前後は、暇があると地圖ばかり見て居た。

「お願ひがございますが……」と靜子は良人に答へのないのを見て、再び同じことを繰返した。

「何か」と將軍の詞は强かつた。

「勝典も明日は出征致すさうでございます、保典も歸つて居ます、今夜のお食事は親子四人で快く認めたく存じますが、御都合は如何でございませう」と恐る〳〵尋ねた。

將軍は「諾し」と云つた、靜子は嬉しく、手料理の膳部を作つて、いつもの食堂に陳べた、飯は大きな茶碗に盛切一杯、將軍は三合ほどの酒を一息に飲んで、直に茶碗を取るのが例であつた。

靜子が準備をして持つて居ると、將軍は悠々と入つて來た、二人の子息もつ

ゞいて座についた、此の時靜子は

「お願ひがございますが……」と思ひ切つて云つて「勝典も芽出度く出陣を致します、今度は日頃の御教訓を奉じて、花々しく戰死を致すであらうと豫期致します、すれば親子四人團欒で御飯を戴くのも、これが最後と存じますゆゑ平生は兎も角、今夜だけは笑ひ顏をお見せ下さるやうに……すれば勝典も何樣に歡ぶか知れません、又それに越した餞別はあるまいと存じます」

將軍は家庭で笑ひ顏を見せたことがなかつた、戰死を覺悟しての我子の出陣に、父の笑ひ顏を餞別にと賴む靜子の心は、何れほどであつたらう、勝典も保典も垂頭いたまゝであつた、將軍は眞面目になつて

「笑つちや可かん、確乎しろ」

部下の兵に號令する如く云つて、洋盃に注いだ酒をぐつと呑んだ。

靜子は返す詞もなかつた、兄弟は顏を見合せながら、嚴格に食事を終つた。

（二）

勝典が出征すると間も無く、五月二日將軍は留守近衛師團長を免ぜられ、同日第三軍司令官に任ぜられ、同じく二十七日東京を出發する事となつた。次男の保典も、當時留守第一師團第一聯隊附の少尉で、近く出征する事になつて居た、之れに由つて乃木一家は悉く戰線に立つのである。

將軍が家を出やうとする時、家庭へ云ひ遺したのは「三人が戰爭に出るのだから誰が先へ死ぬかも知れんが、假ひ誰が死ぬにしても葬式を一個出しちや可かん、棺桶の三つ揃う迄待て」といふのであつた、靜子は夫さへも唯々として聞いた。

列車が沼津へ進んだ時、南山大捷の報を聞き、二十九日廣島へ着き、直ちに大手町の吉川旅館に入つた、吉川は統監部になつて居た。

吉川では將軍の居間へ、立派な絹の座蒲團を持つて出た、將軍は不用だとも

云はぬが、敷かうともせぬ、座蒲團はちやんと側に置いて、自分は疊に坐つて居た、絹蒲團は入らぬのかも知れぬと思つて、次には疎末な山繭の座蒲團を出したが、將軍はそれをも敷かなかつた。

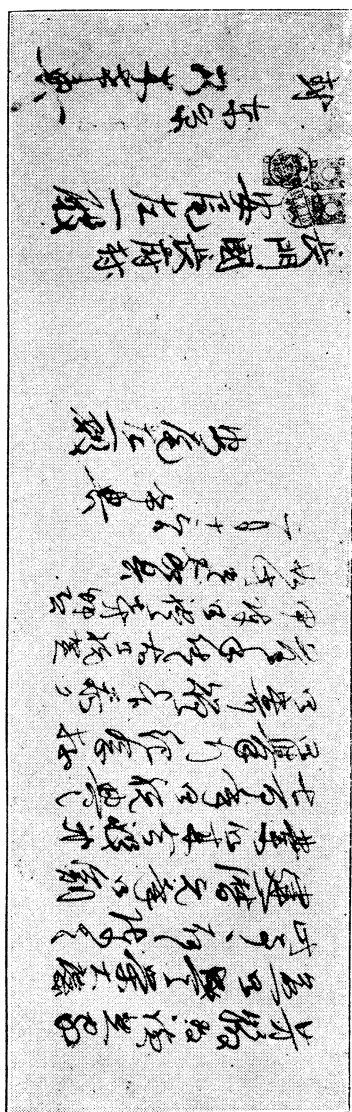
二十九日に廣島へ着いた翌夜うと〱夢に入ると、誰か呼び覺ます者があるやうに覺えて驚き覺めた、額口からは油汗が浸潤り出る、何日になく頭が重い樣で、褥の上に坐つて居ると、そこへ女中のお芳が入つて來た、將軍は見て「今異しな夢を見た、副官は居るか」と訊ねた。

お芳は副官の在否を確むべく坐を立つた、それと殆ど入れ違ひに、南山から勝典戰死の電報が來た、將軍は今の夢に何か不思議な因縁があるかのやうに感じて、一種の感に打たれたのであつた。

まことに勝典は、將軍が東京を出發する前日に傷いて、此日金州の野戰病院に死亡したのであつた、將軍は我子の死を夢に知つたのである、骨肉の情は火よりも熱く、靈魂遙に父の許に飛んで、名譽の戰死を遂げた事を報告したので

あらう。

將軍は記念のため、その日兩子息の寫眞を持つて撮影した、我子の戰死を聞いた將軍の態度、將軍の容貌、一人でもお上のお役に立つたのを歡ぶ笑顏、この

大將手簡（長府町安尾佐一氏藏）

寫眞に對して、將軍が西南役に軍旗を喪失し、死を以て皇恩に報ぜんと覺悟して當時のことを追想すると、人皆一層の感に打たれるである。

六月一日御用船第一八幡丸に搭乘して、宇品港を出帆し、六日鹽大澳に上陸

した、同時に陸軍大將に昇進し、正三位に叙せられた。

その時葦原少佐は野戰兵站部司令官として出征する事になつた、廣島で將軍に對面して「閣下は又旅順攻撃の任にお當りなさるさうです、日清役の當時でさへ、隨分困難を極めた要害の地、殊に露國で幾億圓をかけた世界の大軍港をお攻なさるのは、よほどお骨が折れませう」と云ふと、將軍は微笑して「ナァニ旅順は栗だよ」と答へた。

これは古き歌に「外からは手も當てられぬ要害も、中からはぜる栗の毬かな」といふがある、將軍はそれを云ふのであつた、いかに旅順の要害が堅固でも内輪から破裂する、との意を漏らしたのであつた。

第三軍は第二軍中から、第一（師團長は伏見宮殿下）第十一（師團長は土屋光春）を割いて編成した、七日には日清戰爭に思ひ出多き金州に一泊、翌日は五月二十六日大捷を得た南山の新戰場を視察した序、勝典の墓標も見た。

（三）

將軍が勝典の墓標の前に立たれた時、勝典の戰友であつた青年將校は、つかつかと將軍の前へ進んで、斯ういふ悲しい物語をした。

「私は御令息の御最後まで、お側に居た一人です、今にも黑い死の影が襲つて來やうとする時、御令息は枕頭にあつた一刀をお取りになつて、命は些とも惜くないが、父から授けられた此の軍刀で、一人の敵も切らず倒れるのが殘念だと被仰つて、それを一戰友へお渡しになると共に、御瞑目になりました、眞に立派な御最期、私は謹んで此の事を閣下へ申し上げる光榮を有します」と云つた。

將軍は「うむ、さうか」と云はれたまま、勝典の戰死狀態を問ふ事さへ爲なかつた、彼の

山川草木轉荒凉、　十重風腥新戰場、
征馬不前人不語、　金州城外立斜陽

を作つたのは此の時であつた。

其夜は南山の麓、劉花店に泊つた、宿舍の壁に彈丸の痕が一ぱいあつた、原よりまだ兵站部の設けもないから、民家の軒に天幕を張つて冷い夢を結ぶに過ぎなかつた。

八日は南山から旅順の方面に向つて、五六里進んだ處の北泡子街に一泊した、見る影もない寒村で、數軒の民家があるばかりであつたが、指揮に便利だと云ふので、臨時司令部を置いた、こゝには停車場もあつた。

「下士以下と同樣の食事を持參せよ」と命じて、滯在中は一度も兵士食を缺かした事がなかつた、然し管理部からは司令官相當の食事を持つて來た、將軍は規定以外の食料代」として管理部へ持たして遣つた、管理部でもそんな金を受ける一度もそれに手を着けなかつたが、自分の月給中から、月々百圓づゝを割き「ることは能きず、さりとて返しても受取るやうな將軍ではないから、岩滿管理部長はその處置に困つたそうである。

その司令部は、もと露國の滿洲鐵道監視が住んで居た家で、八疊、四疊、六疊、三疊の四室あつた、司令部員即ち將軍以下の幕僚は、總て二階に起臥して居た。

內地から弗々慰問袋の扇などが着いたのは此の頃からであつた。

將軍はいつも庭前の梨の木の下にある石の卓子に凭りかゝつて、幕僚と共に軍議を凝らすことに餘念なかつた、少しでも間があると、馬を驅つて第一師團、第十一師團の屯して居る方面の視察に出かけた。

六月二十六日、第十一師團が前進を開始した、露軍は最も高い山を占領して居る、然し激戰の後我軍の手に占領したので、將軍は二十七日直にその山の視察をした、絕頂から見ると、旅順砲臺がよく見える、それが恰ど四國の劒山に似て居るので「これから劒山と呼ぶやうに」と命じた。

露軍では早くも、その高山を奪ひ返さんとして、戰鬪準備をする如く見えたが、七月三日の夜、猛烈に夜襲をしかけた、我軍は兼て覺悟の事であるから迎へ戰つた、やがて白兵戰となつて、漸く敵は擊退したが、我軍の損傷も少くなかつ

た。

苦熱、蠅、南京蟲、これが味方の强敵であつた、我軍は强烈な露兵の外に、此等多くの敵と鬪はねばならぬ運命を持つて居た。

その中に、露軍の手で破壞し去つた大連港の修繕も成きる、攻城砲も到着する、第九師團（大島久直中將）も第三軍に加はるべく到着する、之で全軍が三箇師團となつた、その上後備第一旅團（友安少將）第四旅團（竹内少將）も後方に控へる、いよ〳〵軍力が充實したので、此上は少しも早く前進して敵の陣地を攻擊しやうといふことになつた。

そこで七月二十六日から、旅順と大連との中央にある榮城子、凹字形山、鞍子嶺、大白山の攻擊にかゝつた、此時の我軍は、中央が第九師團と後備第一師團、左翼南道が第十一師團、右翼北道が第一師團、後方に後備第四旅團といふ風に編成された。

（四）

此の攻撃は連續二晝夜に渡り、七月二十八日の朝、やつと敵を撃退して、豫定通りの勝利を得た、これが攻城戰の序幕であつた、第三軍苦戰の最初であつた。

將軍は北泡子街から進んで、二里ばかり前方の姜家屯といふ處に滯陣し、小高い山の上に上つて、全軍に號令して居た、晝は燒くが如く暑いから、攻撃は多く夜間に於て行はれた、それが恰ど陰曆の滿月に當つたので、滿望さながら烟るが如く、夜氣冷かに戎衣の袖を襲ひ來る、その中に劍戟は閃き、銃聲は豆を煎る如く聞こえて、何とも云へず悲壯であつた、將軍は望遠鏡を取て見ながら「今夜は兵が悉く元氣だ、悉く元氣に遣つて居る」とさも歡びに堪へぬ如く云ふのであつた。

將軍の二男保典少尉は、此時步兵第十五聯隊（宇都宮）の中隊長で出征して居た。

將軍が北泡子街へ上陸すると同時に、第一師團長であつた伏見宮殿下は、大本營附に御榮轉あらせられ、第一旅團長であつた松村少將が中將に進んで、その後任となつた、松村中將は乃木將軍の心事をよく知つて居る、保典少尉を聯隊附にして置いては、必ず戰死するであらう、勝典中尉已に名譽の戰死を遂げた上は、何とかして保典を助けねばならぬといふ希望から、比較的安全な地位に置かうとした。

そこへ都合好く師團の衞兵長をして居た服部中尉が大尉に昇進して、他へ轉任したから、松村中將は保典少尉を衞兵長の後任にして師團命令を發した、けれど夫は當人の保典少尉が「戰鬪部隊を離れるのは嫌だ」と云ひ、父將軍も「まだ學校を出たばかりて、實戰を經て居ない者を、衞兵長の重任に置く法は無い」と云つて松村中將へ「ナゼ保典を衞兵長などに使ふか」と問ひ合せた、中將は「當人が適任であると信じますから」と答へて來た、すると將軍は押返して「やはり小隊長に使ひ吳れよ、戰線の眞さきに立つ位地に使ひ吳れよ、多くの部下將卒

大將筆蹟

大日出之郷陽氣所發地靈人傑食饒兵足上之人好以生愛民為德下之人以一意奉上為心至其工男武則根諸天性是國體之所以尊嚴也抑所謂 [illegible]

(歩兵第十二旅團長少將 白水淡氏藏)

を亡ひ居れる今日、我子が比較的敵彈に遠い職務にあるは好ましからぬ」と云ひ遣つた、そんなこんなで保典も急に赴任しやうともしなかつた。

七月二十九日部隊の整理を行ひ、三十日直に前進を命じ、右縦隊は旅順街道以西より、中央縦隊は干大山に、左縦隊は土城子南方高地より大孤山東方高地を占領し、こゝに旅順要塞の攻圍線を作つた。

此の時先帝陛下から第三軍に優渥な勅語を賜はつた、總軍の士氣益振ふ。

將軍はそれから榮城子、次で雙臺溝に移つて、攻撃準備の計畫を立てゝ居る中、

到底赤痢病に襲はれた、將軍は毎日兵士同様の粗食をして居た「若い者はそれでも凌がれるが、閣下は已に御老境であるから、成るべく柔かい滋養品を取られては如何です、他の將校連も、閣下が粗食で居らせられる前で、特別の物を食ふことも爲きず、多少困難のさまも見えます」と忠告した者もあつたが、將軍は頑として肯き入れず、他の人は何でも食ふが宜しい、自分は粗食に堪へられるからこれで可い」と云つた。

然し、六十近い老軀がそんな粗食に堪へられる筈はない、その爲めに腸を痛めて、時々下痢することもあつた、赤痢も全くそれに原因したらしい。

最もその頃は、雙臺溝附近に赤痢が甚だしく流行して居た、同地まで進んで居た、第一師團は、そのために多數の患者を出した後であつた、十分に消毒はして置いたが、それでも能く行き屆いたとは云はれなかつた。

おまけに燬くやうな暑さが、八月十日に雨が降てから、急に冷くなつて來た、將軍はそれにも關はず、第一師團の戰況を視察するため、前進して士城子まで

引き返す途中から、頻りに便所へ通ふのを見た幕僚は、將軍獨特の痔疾だとばかり思つて居た處が、歸つて醫者に見せると、意外にも赤痢であることが分つた。

幕僚は頻りに心配の胸を抱いたが、將軍は「ナニ大したことぢやない、少し位下痢をしても、三四日絶食すると快くなるよ」と笑つて居た、餘所目にも苦しさうな樣は見えたが、軍司令官が赤痢病に罹つたなど知れては、軍の士氣に關するといふので、故意と秘して居たのであつた。

然も將軍獨特の療法が効を奏して、數日の中に快くなつた。

此間海軍も活動した、敵の陸軍は我軍の大孤山東方の高地を占領せるに由つて、悉く旅順港内に逃げ入つたが、八月五日鮮生角附近に於て、我艦隊大いに敵艦を擊破してから、敵軍は自ら水師營を燒くに至つた。

(五)

七日から大孤山の總攻擊を開始して、翌日之を占領し、九日小孤山を攻めてその日確實に占領した。

十日は敵艦隊が大擧して、遁げ出した日であつた、それが黄海海戰となつて、露艦隊の運命こゝに決した。

十四日は于大山から北東溝の北方高地及び隋家屯西方高地に亙る線を占領し、十五日は碾盤溝南方及び小東溝東北高地を占領した。

十九日からいよ〳〵總攻擊にかゝる事となつたので、乃木將軍は軍司令官の資格を以て、敵將ステッセルへ降伏勸告の使者を送り、獨逸皇帝が、其臣民にして、包圍内にある非戰鬪員に下せる勅旨を傳へた。

されど將軍の厚意は徹底しなかつた、翌十七日籠城軍軍使から「降伏勸告を拒絕」する旨返答して來た。

さらばといふので、十九日第一回總攻擊を開始した。

敵味方雙方から、二百門以上の大砲をどん〳〵と打合ふので、天地も震撼す

るばかりの物凄さであつた、同時に肉も躍るかと思はれるほど壯烈であつた、將軍は絶えず旅順要塞より見える高山(俗に將軍山と呼んで居た)に立つて指揮をした、その直ぐ下に重砲兵第一聯隊が、盛んに敵を砲擊して居た、敵の砲彈も時とすると飛んで來た。

砲煙白くむら〳〵と立ち塞がる中に、小隊長などが指揮刀を拔いて號令して居る、劒の尖頭が日に閃く、それが目にでも入ると、將軍は聲を擧げて「えらいえらい」と褒めそやし、時に由ると、ひよつくり戰線内へ顏を出して、戰況を視察する事もあるから、他で見ると危險でならなかつた、幕僚は「危いですから」と止めたけれど、將軍は聞かぬ風して、又ひよこ〳〵と顏を出す、この戰鬪の結果、二十日には石橋の北方高さ一四七の高地を占領し、二十一日には盤龍山東西の砲臺を占領した、將軍は戰鬪が終つてから、徐ろに山を降りて、寂しい天幕の中へ入つた、此の時も又眞晝のやうな月であつた。

二十日石橋の高地を攻擊した時であつた、味方の大砲で敵の砲臺を打ち碎

いた後へ、歩兵がどつと突撃した、此の時将軍は幕僚十六名と共に、殘月淡く照る曉の風に吹かれて、鵯越のやうな高山を攀ぢ、敵の戰線に最も近き細谷の底を通つて、團山子の山頂へ着いた、途中はまだ淡暗い、敵からはサーチライトを照らす、火矢の様な物を射る、パッと照らされた時は、脚下の小石までがありあり見える、各砲臺から打ち出す彈丸は、ゴーと音して天空を行き過ぎる、將軍は莞爾々々と笑ひながら「恰ど汽車が通つて居るやうぢやのう」と評して居た。

天が明けると共に、全軍が敵の砲臺に肉薄吶喊する筈になつて居た、由て將軍は山の頂に立つて、もう砲臺の上に國旗が樹つか、と待つて居たが、朝風空しく砲壘の上を吹くばかりて、一向旗の影も映さなかつた、尚よく見ると、數百の日本兵が砲臺下の草原に打伏して居る、將軍は機嫌が快くなかつた。

「彼様卑怯な振舞をしちや可かん、いつまでも草の中に隱れて居るやうなことで、完全な勝利が得られるものか」と憤慨した。

然しそれは日本兵が草原に隱れて居たのではなくて、悉く壯烈な戰死を遂

げて居たのであつた。
けれど夫は一部の滅亡で、大部分の戰線からは、猛烈に砲撃をつゞけて居た、敵も烈しく應戰する、時には將軍の立つて居る山の中腹まで砲丸の來ることもある、不發彈などはコロ〳〵と轉がり落ちる、其樣時には「愉快々々」と云つて歡んだ。
二十二日盤龍山の東西堡壘を占領するまでには、幾十回の激戰を經たかも知れぬ、遂には肉彈も注ぎかけた、さうして要塞の一隅に攻略の基礎を作り上げた、此の戰鬪、兵を損すること實に五千餘であつた。
我軍は此の如く大きな犧牲を拂つて、割に小さい報酬を得た第一回總攻擊はこれで終つて、盤龍山の防禦工事に取りかゝつた。

（六）

第一回の總攻擊は斯くの如くにして終つた、然もその効果は僅かに盤龍山

東西の二砲臺を占領したに止つた、八月十九日から二十二日までの攻擊に於て、我が軍の死傷數實に四千五百六十三(內戰死將校五十七、下士卒四百五十一負傷將校六十五、下士卒二千百五十一、生死不明將校四、下士卒千二百五十名であつた)と註せられる、これに由つて此の强襲のいかに猛烈であつたかゞ想像される、乃木式の果斷極まる强襲は、不幸にも不成績に終つたのであつた。

それも其の筈、第一回の總攻擊は兵と兵との戰ひではなくて、人と武器との戰ひであつた、肉彈と鐵彈と、白刃と壘壁とが、兩々相對して激烈な戰鬪を交へたのであつた、これ然しながら第一次の不成功は、やがて我軍に深く且つ大きな敎訓を與へて、第二回の總攻擊には少くも武器と武器とを以て戰ふことになつた、敵の完全な防禦陣地に對しては、それに相當する適當な攻道具を用ひることになつた

適當な攻擊方法は、彼の電光形の對壕を堀るのであつた、宛ら繪に書いた稻妻の樣な形に地下を堀つて、敵の要塞に薄らうとするのであつた。

この攻撃準備中、將軍は一たん兵を收めて、八月二十四日柳樹屯まで引き上げた、人家四五軒の寒村ではあつたが、柳樹屯と名に呼ぶだけ、こゝにも彼處にも青々と柳が繁つて、その綠陰から涼しい風の吹いて來る處であつた、將軍は小さな民家を借りて司令部に宛て、暫く滯陣する事になつた。

大將咏及筆

（香川縣　小田耕岳氏藏）

此の時であつた、靜子夫人から手紙が來た、將軍は返事を出さねばならぬのであつたが、假令一枚の紙でも、私用のために司令部の備品を使用することをせぬので、側に罫紙や卷紙や半紙やが山のやうに積んであるのに目もくれず、そこに居合せた伊地知參謀長を見返つて「伊地知さん、あなた紙はありませんか」と尋ねた、參謀長は將軍の平生をよく知つて居るので、何故とも問はず、私用の紙を出して渡した。

隨分蚊の甚い處であつたが、將軍は些とも蚊帳を吊らなかつた、大島參謀次長が「ナゼ蚊帳をお吊りになりませんか」と聞くと「第一線に居る兵は蚊帳を吊つちや居ない筈だ」と答へた、兵卒と苦樂を共にするといふ事は、將軍に一貫した主義であつた。

將軍は一日も司令部に引き籠つて居ることをしなかつた、雨が降らうが、風が吹かうが、何樣に惡い天候でも、馬を馳て視察に出かける、然も隙さへあれば地圖を見るので、地理は誰よりもよく知つて居た。

味方は休戰同樣にして居たが、敵は此の間も間斷無く活動した、八月二十七日の午前零時頃から、雷雨が頻に遣つて來た、敵はそれを利用して、同じ二時頃から來襲に來た、同時に激しく砲火を浴せかけたが、大した損害も無く擊退した。

處が翌二十八日、盤龍山の二砲臺に對して、大砲及び野戰砲を配置し、二十九日朝から時々大砲を打ちかけて居たが、夜の十一時頃敵兵百餘名西砲臺へ襲擊して來た、我兵は敵の近づくを待つて急射したから、敵は狼狽遁竄した、こんな狀態で日を送る中、九月三日敵兵急に大小砲を打ちかけたので、折角成功しかけた防禦工事の大部分を破壞された。

けれど各方面に於ける塹壕工事は次第に進んだ、敵は夜に乘じて妨害しやうとするが、勇敢と精勵とを以て鍛はれた我が工兵隊は、少しの緩みもなく工を進める、中にも龍眼北方にあるクロパトキン砲臺に對する坑道は、敵壘を距る五十メートルの處まで達し、東鷄冠山砲臺及び同北砲臺に對する坑道は、敵

壘を距る三百乃至四百メートルの處まで接近した。
坑道工事の進捗するは、敵に取つて此上もなく不利であるから、敵は重砲火を打ちかけて妨害し、更に東鷄冠山の砲臺から、盤龍山の東砲臺へ、我と同じく坑道を掘つて居るやの情報さへ聞えた。
斯う云ふ風に、敵味方の小戰鬪に日を送る中、我軍の坑道工事は次第に進んで、攻擊準備も日を追つて整頓したから、九月十九日第二回の總攻擊に着手した。

（七）

乃木將軍は九月十九日第一第九兩師團に向つて攻擊を開始すべきを命じ、第一師團及び攻城砲兵等をして援助せしめ、且敵を牽制させた。
第二回總攻擊については、右翼團第一師團が二〇三高地、海鼠山及び水師營南方の堡壘を受持ち、中央團が第九師團龍眼北方の角面堡に向ひ、左翼團は牽

制運動に任ずることゝなつた。

そこで右翼團は三縦隊を作つた、右縦隊、中央隊、左縦隊これである、その中右縦隊は二〇三高地へ、中央縦隊は海鼠山へ、左縦隊は水師營南方堡壘に向つて、攻撃の部署に就いた。

中央隊では、決死隊を編成して、屢突撃を試みさせたが、海鼠山及び椅子山の西の端から打ち出す機關砲雨の如く激しき爲め、塹壕の破隙から進んだ一隊は全滅し、攻路より進んだ一隊のみ、蓦地に敵の塹壕内へ突入り、後から續く一隊も又それに踵いで力の限り戰つた結果、やつと塹壕の一部を占領した、けれど敵は怯むさまもなく、射撃を續ける、一寸でも頭を出すとすぐ砲丸の雨を浴びせられるので、その夜は苦境の中に明したが、二十日は何でも海鼠山を占領せねばならぬと云ふので、第二第三の兩隊から、各十人づゝの決死突撃隊を選み、將校二人これを引率して、午後五時三十分、砲兵の打ち出す砲丸の下に突撃した、この勢ひに引き立てられて、各隊の勇士もつゞく、雨霰と降り頻る砲丸の

下を潜り、山作す屍を踏み越えて驀進したのは、物凄くも又勇しく見えた。
流石の敵兵も此の勢に辟易して逃げ去つたから、海鼠山は午後六時遂に我手へ入つた、又一縱隊は龍眼北方の角面堡(クロパトキン堡壘)に向つて、午後一時より砲火を開き、幾多の犧牲を捧げつゝ工兵の爆發藥に援助されて、確實に同堡壘を占領したのは、翌日の午前七時であつた。
さて又右翼團の左翼は十九日午後六時水師營南方の第一壘に突進し、將に敵の散兵濠に達しやうとする時、敵の機關砲に傷められて、不幸にも全滅に近い損傷を蒙り、然もまだ奪取の實を擧ぐるに至らなかつた、由つて二十日朝から猛烈に攻擊を加へ、午前九時四十五分第一壘を拔き、十時四十分第二壘を奪ひ十一時第三壘を取り、十一時四十五分第四壘を乘取つて漸く占領の實を擧ぐるに至つた。
そこで彼の二〇三高地攻擊の地位に立つたは、右翼團の右縱隊であつた、二〇三高地幸ひに我手へ入れば、旅順港內は手に取る如く見られる、この占領が

味方に取て全勝を期すべき土臺であると共に、敵に取つての致命傷である、敵が此の地に全力を注いだのも、無理ならぬ處である。

旅順の要塞は、最初支那政府が、五億圓もかけ、後露國の手に入つてから、二億圓を費して、完全に築造したと云はれるだけ、眞に難攻不落の要害であつた、或る外國人は百年攻めても、陷落することはあるまいとまで評した、將軍はこの要害を引き受けたのである、將軍の部下は此の要害を攻取すべき大切の任務を引受けたのである。

第一第三の兩隊から派遣した四個の斥候隊は、二〇三高地の麓に達して、一部の鐵條網を切斷し、午前七時各隊の攻擊準備成るを待つて、武藤中尉の指揮する決死隊、突擊部隊の先登となり驀進する、そして午後二時半から盛んに大砲を打ちかけたが、敵は一發も應戰しなかつた、由て同六時三十分、突擊部隊は工兵と共に勇進した。

此の時はまだ海鼠山が我手に入らぬ前であるから、側面からも射擊を受け

る、思ふまゝに我兵を引き付けた敵兵は、突然として大小砲を猛射した、その爲に第一線隊は全滅に近い大損傷を蒙つた。二十日にも又突擊、二十一日も又突擊決死の勇士先を爭うて進むのであるが、敵の逆襲も又頻に來り、工兵の大部まづ斃れ、突擊の勇士悉く討死して、腥風滿山に漲つた。

我軍の悲境に引きかへて、二十六日頃から敵の兵力はます〳〵加はり、我兵の密集せる斜面に向つて、鴨湖嘴西方高地から盛んに砲火を集中した、その危險云ふばかりもない、由つて二十三日午前四時、恨みを呑んで舊地位に退却するの已むを得ざるに至つた。

（八）

此の總攻擊も又不成功に終つたが、それでも海鼠山の高地を占領した結果、港內の幾部分を瞰視し得る便宜を得たので、敵の船艦及び市街の要部へ砲彈

を送る場合となつた處へ待ち難ねた二十八珊榴彈砲六門が到着した、これは內地の要塞地に備へ附けてあつたのを取外して送つたのである、內地で据ゑ付けるには、何うしても半年以上の日子を費す、そんな大層な物を戰地へ送つて、間に合ふ時があるであらうかと思つて居た向もあつたが、此の地方は極めて地盤が硬い上へ、工兵部隊が全力を注いで、僅か半月餘の中に厚さ一間有餘の砲床を作り上げたので、團山子、鞠家屯、王家甸に二門づゝを据ゑ付けた、これが味方に取て、何れほど優勢であつたかも知れぬ。

之れと同時に、海軍陸戰重砲隊は、望樓を海鼠山の頂に設けて、十五珊速射砲二門、十二珊速射砲六門をもて盛に敵壘を射擊した。

司令部では今度の攻擊について、愼重に協議を遂げた、第一回總攻擊及び第二回總攻擊の最初に於ける戰鬪は、多くの敎訓を味方に與へた、強襲も比較的功果がない、電光形殘濠を利用しての突擊及び爆發も十分の功を奏しなかつた、それで今度は正面攻擊を行ふ事に決した「攻城の前途は猶遼遠である、此度

の總攻擊で陷落するや否や斷言は爲きぬから、彈藥は務めて節約するやう心掛けよ」と云ふのが、攻城砲兵へ對する訓示であつた。

正面攻擊は松樹山より東鷄冠山までと限られた、即ち松樹山は第一師團が擔當し、二龍山及び堡壘は第九師團で受け持ち、東鷄冠山より同北堡壘に至る間は、第十一師團の攻擊地區と定められた、東鷄冠山以東及び松樹山以西は、單に牽制運動をするのであつた。

この部署が定まると共に、第一師團は松樹山堡壘に對する攻路の掘鑿に着手し、第九師團は龍眼北方堡壘の占領後、直ちに二龍山堡壘に對する對壕作業を始め、第十一師團は東鷄冠山方面に對する作業を續けた。

さうして次第に敵壘へ近づくに從ひ、敵の妨害も甚だしくなる、けれど我軍では、追々要塞戰に馴れても來、要塞戰の呼吸も會得したから、手擲彈、追擊砲、銃眼鐵板などいふ特種の兵器を發明して、懸命に作業の便を圖つた。

兎角するほどに、各方面の準備悉く整つたので、乃木司令官は軍令書を發し、

大將手簡

（山口縣長府町　安尾佐一氏藏）

十月二十六日を期し、松樹山から東鷄冠山に亙る正面攻撃を開くべき旨を達した。

時は午前八時三十分、朝霧漸く晴るゝ頃、榴彈砲、攻城砲、海城砲、一時に砲門を開いて、松樹山、二龍山、東鷄冠山北堡壘へ打ちかけた、攻城砲の鋭く大きな音の中に、豆を煎るやうな榴彈の音が交る、第一回の攻撃には一萬有餘の兵を殺して、僅の報酬を得たばかりであつたが、今度こそは是が非でも目ざす敵地を占領せねばならぬといふので、將校も下士卒も、上下一致の心をもつて當つた。

乃木司令官は毎日攻城山と名けた攻城砲兵の陣地に立つて、敵の地位を展望しながら指揮をして居た。

その結果、第一師團は同日午後五時松樹山の前面なる散兵壕に突入して、占領し、第九師團の右翼、同時に二龍山堡壘斜堤の散兵壕を奪ひ、その左翼は鉢巻山を抜き、第十一師團は二十七日東鷄冠山北堡壘の外岸を破壞して、その一部を奪ひ、同山砲臺前にある鐵條網を切斷した。

「これならもう宜からう」といふので、同三十日司令部は鳳凰山東南一千米突の高地に進んだ、それを相圖に攻城諸砲は朝から射撃を始めた、これは各師團の歩兵が、午後一時を期して、大吶喊大突撃を爲す準備であつた。

（九）

大吶喊大突撃を特に午後一時と定めたのは、第一回總攻撃の時、天の引き明に行つて、不成功に終つた前轍を履むまいとの遠慮に基ゐた、野戰とは違つて、要塞戰は明い中に砲臺を乘取る、それかすぐ夜に入ると、敵の攻撃を避ける利益があるのと、手早く防禦工事を施す事が能きるのとて、重に午後の好い時刻を選むことになつて居る。

豫定の時刻が來ると、攻撃兵は攻路の中から、續々出て行く、その人數が一文字二文字に行列する、第一師團は初め外岸壁の破壞と、外壕の塡塞とを企てたが、敵の打ち出す砲彈に縮められて、遂に目的を達しなかつた、又第九師團の右

翼は外壕に携帶橋を架けやうとしたが、爆發藥のために破壞せられた、又P堡壘に向つた同師團の左翼も、漸と占領した第一線を取り返されて、悄々と退却するの止むなきに至つた。

處が此の報を聞いた左翼隊長一戶少將(今は中將)は無言のまゝ立上つて、續く兵を指揮しつゝ、猛然と第一線に奮進して、再び敵を擊ち攘ひ、遂に堡壘全部を占領した、P堡壘が一戶堡壘と呼ぶに至つたのは此のためである。

又第十一師團の右翼隊は、朝來東鷄冠山の北堡壘へ主力を注いだ、この堡壘も重要な地域であるから、敵は死力を竭して防ぐ、機機砲を隙間もなく浴せかける、それやこれやで容易に望みを遂ぐる事能きなかつた、そこで第二十二聯隊から四十七義士に擬へ、四十七人の決死隊を選み出して、胸墻內に突進したが、外壕が深いのと、うしろから機關砲彈が飛んで來るのとで、瞬く間に殲滅した、然し東鷄冠山砲臺に向つた中央隊は、午後一時突進して、高地中腹に在る散兵壕を略取し、更に進んで堡壘內に突入し、一部は敵の逆襲に由つて退却した

越中小松町に建設の日露役軍人記念碑に揮毫の大將の筆蹟
（千の字は書き直したるもの）

が、一部は瘤山に突進し遂に占領して、直に防禦を施した。

こんな調子で、三十日の突撃も又成功とはいへなかつた、幾多の犠牲を捧げて、一戸砲壘と瘤山とを占領したが、肝腎の二〇三高地には何の影響もないのであつた、旅順で重要な山といふと、二〇三高地と大孤山とである、大孤山は第一回攻撃の時占領したが、そこからは西方の一部より見ることが能きぬ、港内全部と、全市街とを一目に見るには、何うしても二〇三高地を取らねばならぬから、乃木司令官は翌日更に命令を發して、各師團に向ひ、占領位置を固守すると同時に、松樹山、二龍山及び東鷄冠山北堡壘の攻撃動作を繼續すべき旨命令した。

然し難攻不落と謠はれた世界唯一の要塞が、肉彈や勇氣ばかりで奪取せられるものではない、之を完全に占領しやうとするには電光形塹壕を穿つて、爆發藥を裝塡し、砲臺を破壞し盡すか、外圍を取り卷いて彈藥糧食の盡きるを待つか、此の外に策はない、さすがの乃木將軍も、これには屢次頭を惱した。

恰ど此の頃であつたらう、今の大阪遞信管理局長をして居る坂野鐵次郎が、戰時郵便の用務を帶んで、戰地へ出張した時、柳樹房の司令部に乃木將軍を訪れた、將軍は見るより

「內地では三軍の行動を何んと評して居るかね」と訊いた、坂野は少しも臆さず

「皆が不思議がつて居ます、勇敢無比の乃木將軍が指揮して居られるのだから、今日は落ちるだらう、明日は陷落するだらうと云つて居ます、中には今度こそ勝報が來るだらうと、賭をする者が澤山あるが、可愛さうに勝つ方へ賭けるものは皆な取られます」と語ると、將軍は滿面に朱を濺いで

「兵は決して弱くないがなア」と云つた、同時に熱涙をハラ〳〵落した。坂野も感に打たれて、暫くは顔も擡げなかつた。

第二回總攻撃は斯くの如くにして不成功に終つた、幾萬の勇將猛卒が、肉彈を提げて突撃したのであつたが、敵の防備を破るに足りなかつた、旅順の要塞が何日我軍の手に入るかさへ豫期する事は能きなかつた、然も旅順艦隊は港内深く潜んで、自存の策を固持して、浦鹽艦隊の修理も、已に完成したとの報さへ傳へられた。

（十）

將軍の次男保典少尉は步兵第一聯隊附の小隊長で出征し、南山及び旅順最初の戰闘に參加した、處が第一回の總攻撃は不成功に終つて、死傷總數一萬人と云はれたほどであるから、勝典中尉の戰死を知悉せる松村第一師團長は、唯一人殘れる保典少尉を成るべく安全の地に置かうとして、師團司令部の衞兵

長に任じた事は前にも記した、これには肝腎の乃木將軍が反對し、本人の保典も歡ぶさまがないので、師團でも處置に困つたが、師團長が特にこの命令を發したのは、伏見宮殿下の思召しもあり。朝令暮改は師團長の威信にも管はるので、保典は遂に赴任したけれど機會があつたら原隊に復したいとの志望が絕えずあつた、これは將軍も同じ事である、此の事を、後備第一旅團長の友安(治延)少將(今は豫備)が聞いた、少將は東京に居る頃、日ごとに將軍の家を訪ねて、最も親しく交際つて居た、將軍が出征する時「一人死んでも葬式を出すな、二人死んでも同じ事、三人の骨が揃つた時、棺を三箇揃へて出せ、もし一人でも生還したら、その者が施主になるのだ、三人死んだら財產は悉皆宮內省へ返納せよ」と云ひ置いた事も聞いて居る、勝典の戰死した報知が來た時も靜子夫人に會うて、その健氣な狀態を目擊して居る。

それ此の關係から、其のまゝにして置いたら、將軍は必ず保典を殺すだらう、保典が死ねば乃木の血統は絕滅する、どうかして助けたいと思ふので、自分の

幕僚に貰ふことは爲きぬかと云つて遣つた、處が將軍は許可を與へぬ、旅團司令部に居れば、まづ安全と云はねばならぬ。

友安旅團長は再び推しても賴まうとすると、伊地知參謀長が「私から云つて見やう」と云つて、旅團長の希望を取次いだが、將軍はそれでも許さなかつた、後で聞くと、宮殿下から幕僚にとの御所望があつたのを、御辭退申し上げた處だつたといふ事だ。

それよりはずッと前石黑男爵から、勝典と保典とに宛てた手紙が着いた、勝典戰死の後であつたから、保典が返事を出した、その手紙は斯うである。

謹啓　兄弟二人宛の玉章有難く拜誦仕候へども兄勝典は去る南山の戰闘に於て多くの忠勇なる將士と共に空しく相果候間今は唯兄が遺髮の前に於て武運拙く未だ碌々たる小生一人のみにて拜見致す事に相成候扨閣下よりの種々御懇篤なる御教訓有難く拜誦仕候猶故兄に代りて御禮申上候爾後小生儀も決して兄に劣らざる考へに候故他事ながら御放念被

下度候又父も已に當地に到着仕り其後益々壯健に軍務罷在候間是又御安心被下度願上候

短い文字の中に長い意味が籠る、兄の遺髮の前に一人のみで連名の手紙を讀んだ心の中は何うであらう、この手紙は三十七年六月二十五日付で保典が步兵第二聯隊第十一中隊に屬して居た時であるが、それでも「決して兄に劣らざる」覺悟を極めて居たのであつた、一死を以て皇恩の萬分一に報いやうとする鐵の如き覺悟は乃木一家を通じての精神氣魄であつた。

保典は原隊へ歸りたい〳〵と思つて、衞兵長を勤めて居たが、旅順總攻擊に伴ふ損害は、各聯隊の將卒を減じて行く、然も本國から助けは來ぬ、敵情は益々迫る、そんな間で衞兵長の職にあるのは、保典の忍びぬ處であるから、師團長に對つて、幾度も「原隊へ返して下さるやう」と懇請する、司令本部へも願書を出す。

そこで友安旅團長は又考へた。

今原隊へ復歸させては、保典少尉すぐ死ぬる、何とか手段を回らさねばなら

ぬと思ふ折柄、旅團の高級副官某が進級して他へ轉じた、由て旅團長は下級副官を高級副官に昇せて、その後任に保典を迎へやうと考へ、師團へ照會して見ると、軍司令官さへ承知なれば、何時でも遣らうと云つて來た、友安旅團長は、大いに歡んで、乃木司令官へ申請書を出した、然し一應では許可があるまいと思ふから、電話で伊地知參謀長を呼んで、詳しく事情を話したが「軍司令官は友安旅團長と懇意だから、此話は運ぶまい」と答へた。

(十一)

それではと云ふので、友安少將から乃木將軍へ手紙を添へた、將軍は讀んで見て「可けん、こりや可けん」と刎ね付けた、其處へ伊地知參謀長が何も知らん顏で來て「私は至極好いと思ひますが、お遣りになつては何うですか、それには友安少將も條件を付けてお貰ひすると云つて居ます」

その聲の終らぬ中に「いかな條件でも副官には遣られぬ」と云ひ切つた。

それで最初の交渉は不調に終つた、その時、乃木將軍から少將へ送つた返書がある、左に掲げて讀者と共に將軍の面目を偲ぶ。

貴札拜誦益御清武御盡瘁爲邦家大慶此事ニ存候然バ貴團副官ノ御人選ニ付御行示之趣キ當時人少之際御困却御察申候本人之儀是迄ノ行キ掛リ上無腹藏申陳候得ハ實ハ本人之不本意而已ナラズ小生ニ於テモ千萬不可堪之不面目ヲ忍ビ候次第ニテ本人ヨリモ屢原隊へ復歸ノ儀小生迄申越候而已ナラズ聯隊長又ハ第一師團高級副官エモ內願申出候由聞及候就テハ貴團御人少ノ際幸ニ小隊長ニ御採用被下候得バ本人モ稍志願ニ叶ヒ可申小生ニ於テハ數月以來ノ不面目ヲ回復シ死後モ遺憾モ無之事ニ相成候間平常ノ御懇意ニ任セ御盡力ヲ以テ小隊長ニ御採用之儀呉々モ相願候右是迄ノ鬱憂ノ一點ヲ除クノ好機ト存父子ノ內情打明ケ候間御推察被下度御答旁御依賴迄草々如此候敬具

十一月二日　　希典

友安賢臺尊下

けれど友安少將は何うかして保典が助けたいから再び片道四里もある處へ人を遣て話をしたが、將軍は承知をせぬ、友安少將はそれにも屈せず、同じ意

教者成德達材導以行事而不喩以口舌其所為教者簡而易知　為有末氏　典書

乃木大將筆蹟

（山口縣　有末直佐氏藏）

味の口上を齎せて、三たび頼みの使者を出したが、それでも纏まらぬ、四度目に漸く相談が纏つて、友安旅團の參謀に補することゝなつた。

その四度目の手紙には「副官に適當な人物なきに付き、當分の中お頼みする」

といふのであつた、此の「當分の内」と云ふのが第一の條件となつて、將軍の心を動かしたのである、當分の內副官とし、近き將來には戰線の眞さきに立たせるといふのが、此の相談の纏まる種であつた。

友安少將の歡びは云ふばかりもなかつた、これで保典の命を取り止めることが能きるかも知れぬと思つた、處が將軍から保典の馬具を送つて來ぬ、馬具がなくては馬に乘れぬ、そこで旅團長は自分の馬(三頭の中の一頭)に鞍を置いて貸した、馬具を送らぬ將軍の心は、副官としては任務が短いから、そんな物を送るには及ばぬと思つたからであつた。

その中に用があつて、保典を司令部へ使に遣つた、保典は旅團長の馬に乘つて居た、將軍は見るから「貴樣誰の馬に乘つて來たか」と尋ねた、保典は「旅團長の馬を借りて來ました」といつた、すると將軍は心配さうな顏をして「旅團長は馬が必要だ、その馬を借りて何うするか」と云つて、直に馬具を送つて來た。

保典は何時も袴の古いのを穿いて居た、夫が破れると從卒に縫はせて用ひ

る、旅團長が見難ねて「親父に貰つて來い」と勸めても「中々吳れやしません」と云つて平氣で居た、衣服や食物に無頓着な處は、最もよく將軍に似て居た、性質は溫順で、寡言で、まことに好箇の青年將校であつた、將軍と靜子夫人との間で、よき注意と薰陶との下に成長した人とは、誰の目にもよく見えた。

友安旅團長も無理强ひに副官としたのであつたが、勤務の成績が何樣であらうと心配して居た處が、非常の好成績で、何をさせても十分に遣てのける、殊に地圖を作ることが得意で、往々專門家を驚かした、警備の變更などには最もよく間に合つた。

當時の情況は、クロパトキン將軍の配下が、漸々に加はつて來る、それに引替へて大山將軍の統轄する我軍は、不足を感ずるばかりであつた、夫等の關係から、第三軍が一日も早く旅順を落して、その精鋭を北行させて吳れるやうにと切望して居た、同時に露國の太平洋第二艦隊が、進航して來るといふ事實がいよ〳〵判明した、乃木將軍が一世一代の心配したのは此時であつた。

（十二）

敵兵が其樣に增加するといふ事は、我軍に取つて殆ど豫想外であつた、西伯利亞鐵道は單線であるから、その輸送力も知れたものだと高を括つて居た、それが案外にも、敵は列車を送るばかりで、空車を返さんから、結局複線と同樣の結果となるので、見る〳〵中に兵力が增えて來た、敵の兵力が增える割に、味方は一向に增えて來ぬ、此のまゝでは完全の勝を得る見込みがないから、一日も早く旅順を片付けて、此方の加勢に來て吳れるやうと云つて來る、又海軍からは、波羅的艦隊が遣つて來ては、二倍以上の敵を引き受けなければならぬ、夫は兎も角もとして、旅順陷落前に、敵の艦隊が形を現すことになれば、港內に潛んで居る敗餘の艦隊も必ず活動を始めるに違ひない、すると腹背に敵を受ける、萬一我海軍に敗北の不幸を見ることあれば、海上の實權は悉く敵の手に占められて、滿洲にある十數萬の我兵を見殺しにせねばならぬ我軍の危機は實に

繋つてこの一戰にあるのである。

されぱとて、旅順占領の見込みは立たぬ、乃木將軍の苦悶は譬ふるに物がなかつた。

そこで將軍は、何うにでもして二〇三高地を占領して、そこに觀測所を置き、二十八珊の榴彈砲で、港內の軍艦を擊ち沈むべく計畫を立てた。

此の時內閣では、旅順攻擊が餘りに長びくのと、乃木將軍の戰略が多く肉彈主義であるのとが問題になつて、時々軍司令官を交迭させやうかとの議さへ起つた、或る日の御前會議でも、或る閣員の口から此事が持ち出された、御臨席になつて居た先帝陛下が、此事を聞し召されて「乃木を呼び戾してその後を誰に引き受けさせるか」と仰せられたまゝ、忽ち御座を起たせられたとさへ傳へられた事もあつた。

此中に十一月三日が來た、三軍の將卒は陰鬱な土窟の中で鑵詰を開き、冷酒を酌んで、遙に陛下の萬歲を祝した。

然しこんな時には、何うかすると油斷するから、一統懈りなく注意して居ると、各中隊長から「只今乃木軍司令官が巡視せられた」との報告があつた。

此の報告を聞いて、一同は眼と眼を見合せた、平生は參謀が巡視すのであるが、偶の祭日に參謀を煩はすのは氣の毒だと思はれたのか、軍司令官が單騎戰線を巡視せられた、日頃部下を愛すること子の如く思はれる軍司令官としては、さのみ珍らしい事でもないが、その深い心を推量つては、徒らに祝ひ酒を飲んでは居られない、皆が慈愛圓滿勇氣絶倫の軍司令官の前で死ね、彼の司令官の爲に命を捨てるは、長く我々の光榮とすべき事であると、互に勵まし合つて蹶然と起つた。

幾度か多くの犧牲を拂つた結果、友安旅團の手で、一時二〇三高地を奪取したが直に敵に取り返された、夫や此やで味方の苦戰は云ふばかりもなかつた、いつも〳〵無理な戰爭のみてあるから、死傷者も續々出る、然も十分の補充が能きぬ、第三軍は内外に强敵を受けて、然も任務の重いのに苦しんで居た。

處へ恰ど動員を終つたばかりの第七師團(北海道旭川)が、第三軍に屬することとなつて、十一月十二日大迫中將指揮の下に、大阪から船に乘つたが、同十九日から陸續として青泥窪に上陸した、疲れ切つた第三軍の新らしい生命であつた。

この中も工兵隊は毎日坑道を掘つて、同月十七日松樹山と二龍山との間に肉薄し、午後二時大爆發を行つた、まことに開戰以來始めての大爆發で、さしもの露兵も一人の生存者を殘さなかつた、石と肉とが入り交つて、どんよりと鈍い冬空に打ち上げられる光景は、寧ろ凄絶悲絶を極めた、それから續いて二十日には二龍山砲臺の爆破を行つた、これで第一(二龍山堡壘)第二(松樹山堡壘)第三(東鷄冠山北堡壘)と要害された敵の堅壘が、二箇まで破壞されて、今は第三壘を殘すのみとなつた。

(十三)

斯ういふ風に、總ての準備が調きたので、同月二十一日乃木軍司令官は、各師團參謀長、攻城砲兵司令官、野戰砲兵旅團長等を召集して總攻擊の訓示をした、それは其の前日、左の如き沈痛な勅語を乃木軍司令官へ賜つた爲めであらう。

旅順要塞ハ敵ガ天險ニ加工シテ金湯トナシタル所ナリ其ノ攻略ノ容易ナラサル固ヨリ怪ムニ足ラス　朕深ク爾等ノ勞苦ヲ察シ日夜軫念ニ堪ヘス然レトモ陸海軍ノ狀況ハ旅順攻略ノ機ヲ緩ウスルヲ得サルモノアリ斯ノ時ニ當リ第三回總攻擊ノ擧アルヲ聞キ其ノ時機ヲ得タルヲ喜ヒ成功ヲ望ムノ情甚タ切ナリ爾等將卒夫レ自愛努力セヨ

此の勅語に見ても、旅順攻略の機を緩うする事の爲きぬ事情を知ることが能きる、將軍は既定の計畫を變更しても、旅順要塞を奪取せねばならぬのである、直ちに左の如く奉答した。

旅順要塞攻擊ニ對シ勅語ヲ忝ウス臣希典等感激恐懼ニ堪ヘス將卒一般聖旨ヲ奉體シ誓ツテ速ニ軍ノ任務ヲ遂行センコトヲ期ス

謹ンテ奉答ス

此の優詔を賜つた翌日、山縣參謀總長から將軍へ宛て電報で詩を贈つて來た堀内中佐飜譯して將軍の手へ渡した、その詩は斯う云ふのであつた。

乃木大將筆蹟

百彈激來天亦驚、合圍半武萬屍橫、
精神到處固於鐵、一擧竟屠旅順城

夢陷旅順山有作、供乃木將軍一粲　　含雪

將軍は讀み終つて「辱い」と云つた、其面に大決心が見へた、山縣大將の詩は參謀總長の訓電として全軍へ傳達した。

乃木將軍は次て軍令書を發して、いよ〳〵二十六日から總攻擊を開始する旨を沙汰した、この攻擊に先つて優詔を拜受したので、全軍の士氣大に振つた。

そこで攻擊砲兵は前日から松樹山、二龍山、東鷄冠山北堡壘に向つて、破壞射擊を加へ、その他の堡壘砲臺に對しては、制壓射擊を行ひ、更に二十六日午前十一時より野戰砲兵旅團及び各師團砲兵と相前後して、指定目標に對し突擊準備射擊を開き午後一時に至つて、我が砲擊の効果漸く現はるゝや、各師團の突擊隊に一齊に攻擊目標に向つて奮進した。

將軍は戰爭の歇み間々々に單騎戰線〳〵を巡視する司令部には燐寸も煙草も比較的澤山あるが、戰線〳〵に立つて居る兵員は一本の燐寸も手廻りかねることがある、將軍はよくその事を知つて居るので、單騎戰線〳〵を巡視する時、途中に燐

寸の空箱があると、必ず拾ひ取つて歸る、態々馬から降りてでも衣嚢へ納れて歸る、さうして今度出る時は、その空箱へ一ぱいの燐寸を詰めて、兵士の屯して居る處へ、無言のまゝ投げ捨てゝ通るのであつた。

この話を聞いて、將軍の心事に泣かぬ者あらば人とは云へぬ、まことに將軍の部下を愛する心は、他の氣の注かぬ小さい事に現れた。

同じ頃の事であつた、將軍は部下に令して「自今途中に於て敬禮をするに及ばず」と云つた、司令部は十二月の嚴冬中でも、火鉢には螢ほどの火が一つあるばかりであつた部下の一人は餘りの事に思つて「もう少し火をお置きになつては如何ですか」と云つた、すると將軍はきつとして

「今まで莫大の軍費を使つて居る、これからも何れほどの軍費が入るか知れん、一錢も無駄に使つちや可けない」と叱つた。

二龍山、松樹山、東鷄冠山等の攻擊は略豫定の目的を達したので、二十八日から二〇三高地の攻擊にかゝつた、將軍は第一師團であつた高崎隊の奪た高崎

山にあつて部署を定めたが、その夜は柳樹房の司令部に歸つて寢た。

有死無生何足悲、千年不朽表忠碑
皇軍十萬誰英傑、驚世功名是此時

の詩を吟じたは此時であつた。

十二月一日は將軍に取て忘れる事の能きぬ記念が作られた、それは保典の戰死であつた。

保典は友安旅團長の副官として、疊二疊敷ほどの地下室にある旅團司令部に居た、旅團長は午後から書記を呼んで、命令書を書かせて居ると。老鐵山から打た砲彈が、すぐその上で破裂した。

（十四）

老鐵山から打ち出した巨彈は、旅團司令部に大損害を與へた、騎兵も、步兵も一人殘らず死傷した中に、電話手が電話を持つたまゝ微塵に碎けて居たのも

あつた、深く掘つた塹壕が、一發の彈丸に破壞せられて、平地同樣に爲つたのでも、その破壞の程度を知ることが能きるだらう。

友安旅團長は、旅團全部が全滅したかと思つた、只自分一人が九死の中に一生を得たかと思つた、さうして漸と立ち上ると、煙の如な塵埃の中から、書記の一人が「あア豪い芥だ」と云つた、すると次に保典の聲で「何といふ甚い芥塵だらう」と云つた。

旅團長は保典が傷られはしまいかと氣遣つて居た、其處へ保典の聲が聞こえたので「乃木か、何うした」と訊いた。

「閣下も御無事ですか」と沈着いた聲で云つた。

「命は助かつた、その邊の樣子は何樣か」と又訊ねた。

「何處も出る處がありません、傳令の居た處は平地になつて居ます、司令部だけ殘つたやうです」と又誰かの聲がした、實際此の時は破烈彈にそゝられた砂煙で殆ど咫尺も辨へ兼ねる程であつた、旅團長は保典が生き殘つたのを切て

の歡びにして居たが、そのため戰鬪準備に不足を生じたので、師團司令部へ增兵の催促をした。それは友安旅團が眉に火の點く如な命令で、急に戰線に立たねばならぬからであつた。

處が師團司令部からは、急に兵を送つて來ぬ、旅團長は氣が氣でない、幾度も傳令を遣て見たが、少しも効能が無かつたので、村上聯隊長へ談判の手紙を持たせて遣つた、それが恰ど午後の四時で、此の特使に立つたのが保典少尉であつた。

それから聯隊司令部までは、五六里の道程があつたらう、保典少尉は聯隊長に會て總ての要件を終つたが、そこでも敵彈の爲に遣られた坑道の普請を急いで居た、その工事が落着せねば、兵を送ることも爲らぬとあつた。

然も敵は海軍機關砲を置いて、どんどんと彈丸を送つた、一人出れば一人、五人出れば五人、一寸でも塹壕から首を出すと、すぐ打ち殺される、兵を傷けられるばかりで、何の利益もない危險を冐すには忍びぬから、增兵も從つて後れる

事情が判然した。
然し保典は旅團長が急きに急いて居る事を知つて居る、此上機會を失つては、全軍の恥辱と思ふので「是位の事を恐れて居て何うなるものか」と云ひさま、自ら突撃して、地隙のある處へ行つた、そこへは大して彈丸も來ぬ、保典は聲を勵まして「ぐづ〳〵するな、こゝへ來い〳〵」と云つて首を出すが否な、一發の敵彈は魔の如く風を切つて保典の前額を貫いた。
急所の傷手に一堪りもなく倒れた、聯隊長はこれを見て、思はずも指揮刀を拔いた「進め、進め、進んで乃木少尉の仇を返せ」
友安旅團長は待てども〳〵保典は歸つて來ぬ、何うしたであらうかと心配して居る處へ、傳令が歸つて來て「乃木少尉は遣られました」と云つた。
「おゝ」と旅團長も驚いたが「任務を果した後か、それとも前か」と尋ねた、傳令は「任務を終つた後でありました」と答へた。
「すぐ死體を取れ」と命じて、その事を師團司令部へ報告した。

伊豆(凡夫)少將は當時第一師團の參謀であつた、二〇三高地の戰鬪指導の爲め、同高地脚にあつて、軍司令部と、二〇三高地との間に電話を以て報道通信等をして居た處へ、旅團長から保典戰死の事を知らせて來たので、直に軍司令部へ電話した、その時の受話者は白井(二郎)參謀であつた、伊豆參謀は「殘念ながら乃木少尉只今戰死した、將軍に申し上げ呉れよ」と通話した。

(十五)

白井參謀はすぐ將軍の室へ行つた、將軍は椅子に凭れたまゝ假寢をして居たらしかつたが、保典戰死の事を聞いて「うむ、さうか」と一語あつて後、暫くして「私は今小供が副官肩章をかけずに來たから、叱つて返した夢を見て居た」と詞靜かに語つた、處がその翌日伊豆參謀が白井參謀に會つて「保典少尉戰死の事を申し上げた時、軍司令官は何と云はれたか」と尋ねた、白井參謀はそれに答へて

「その時は恰ど暮方であつたから、將軍の居られた處は大變に暗かつた、お顏を見ちや堪るまいと思つたが、幸ひによく見えなかつた、近く寄つて、只今伊豆參謀からの電話で、乃木少尉が二〇三高地の中腹で即死との報告がありましたと申し上げた處が將軍は唯爾うかと云はれたのみであつた、然もその音調が、甚だ滿足らしく聞こえた」と云つた、伊豆參謀は今さらならぬ將軍の態度に感ずること深かつた。

後で副官や主計連中か、保典の死體を棺に納めやうとして、材木を詮議して居る事が將軍の耳に入つた、將軍は氣色を損じて

「一たび死ぬれば靈は其の地に滅するか、もし滅せざれば行く處へ行く死骸を保存して何にするか、殊に我子に限つて棺へ入れるとは何事だ、戰場に屍を曝らすのは男子の本望ぢやないか、況んや幾多の將卒が幾千となく戰死して居る中に、保典のみ棺へ納める法はない、宜しく燒いて一片の骨とせよ」と命じた。

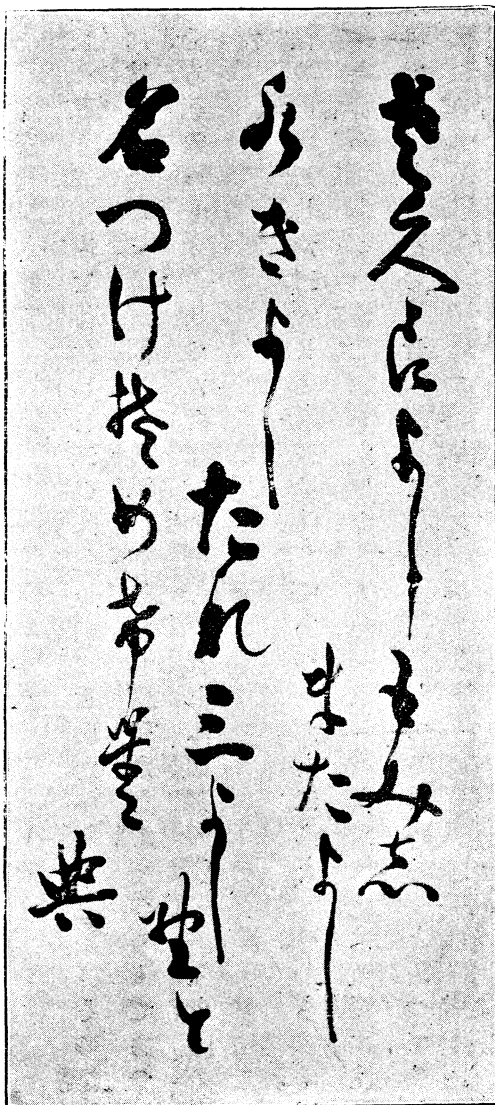
然し友安旅團長は、萬一生命あつて凱旋した時、靜子夫人にも面會するだらう、その時骨位取て來て吳れさうなものだと思はれては困ると思つたから、桐の箱に納れて了つて置いた、すると齋藤少佐が急に東京へ歸る事になつたから、遺骨を靜子夫人の手許へ屆けた。

中尉の遺物處分については、將軍から沙汰があつて、軍服は副官に遣れ、副官が要らなければ誰かに遣れ、貰ふ人が無ければ燒いて了へ、襦袢其の他は保典の世話になつた兵卒に遣れ、と云ふのであつた。

保典は斯うして戰死したのであるから友安中將は「保典は私が殺したも同じことだ」と云つて居る、中將は切て保典だけを助けて、乃木の血統を絕やすまいと努めたが、それが却て仇となつて、保典は戰死した、由て將軍へ慰問をかねた謝罪樣の手紙を送つたが、將軍からは次の樣な返事が來た。

拜啓　如諭時晴明之好時節益御勇健過日來御勇戰之御疲勞も無之大慶此事に存候次に愚息保典之儀に付何角御煩慮却て恐縮に存候實に何の御用

にも不相立候得共彼に取り好死處を得たる耳ならず名譽の班列に加はり

大將詠及筆（明治四十四年十月二十一日書）

（猪原貞雄氏藏）

愚父の面目を聊か相加へ候儀更に遺憾無之存候間御放念被下度候先は御

答旁時下御伺迄草々如此候敬具

四月四日　希典

友安賢兄　尊下

「彼に取り好死處を得たしと云ひ「愚父の面目を聊か相加へ」といふ、その筆の底に、將軍覺悟の光輝が閃めく、將軍は初めから兩子息を殺すつもりであつた、自分も死ぬつもりであつた、父子三人潔く討死して、皇恩の萬分一を報う心で居た。

保典の戰死した三十日の戰況は何うであつたかと云ふと、未明から二〇三高地と赤阪山とへ重砲を打ちかけた、此方の砲擊が熾な間は、敵は塹壕に沒れて居てちッとも姿を見せんから、これから突擊してもよからうと思つて少し砲擊を休めると、直に小銃を亂射して、頑强に抵抗する、それで午前十時から幾回となく突擊を試みたが、容易に成功の見込が無かつた。

（十六）

天の明け放れた頃、乃木將軍は高崎山へ出馬した、兒玉總參謀長、福島參謀も遣て來る、第一第七の兩師團長も來る、さうして伊地知參謀長の周圍を取り卷いて、種々評定をして居た。

未明以後の攻擊で、二〇三高地堡壘掩蓋の大部分を破壞した、此のとき將軍は「早く其處に觀測所を置いて、塞內の要部を攻擊せよ、いくら敵彈が來ても、幾度觀測所を破壞されても、いくら人が死んでも、それを顧慮しては居られない、是非觀測所を作れ、さうして早く敵艦を擊沈せよ」と喧しく云つた、此時は將軍もよほど激昂して居たらしかつた。

由て第七師團が全滅の覺悟を以て突擊を開始したが、忽ち敵彈の爲に打ち惱されて、將校の全部は殆ど死傷した、到る處に屍の山を築き、到る處に血汐の海を漂はして、暗澹たる鬼氣全山に漲つた、然もまだ目的を達するに至らぬ、そ

こで大迫師團長は攻撃隊長に向つて「進め、進め」と號令した。

突撃隊はそれに勵まされて、益々突撃を續行した、日沒前後からは、敵の砲撃が段々甚くなる從つて我軍の損害も加はるのであるが、それには管はず、山頂に向つて奮進した、中にも東北隅に向つた一隊は漸くにして山頂に突進したが敵も又頑强に抵抗して退却せぬ、彼我の間僅に十米突ばかりと爲つて、爆裂彈や石塊を投け合ふに至つたが、敵は次第に新手を加へて、間斷無く逆襲を續ける、流石の攻撃隊もやつと現地位を固守するのみで援兵の到着を待つて居た、又一方西南隅に向つた一隊は、機關砲の彈丸が雨のやうに降る間を突進して、高地(鞍部附近)を占領し、逆襲して來る敵の大部分を鏖にした時は、萬歳の聲天地に響いた、その中に東北隅の一隊へも援兵が到着したので、突貫又突貫、やつと二〇三高地の頂上大部分を占領した。

處が翌一日午前二時頃、優勢な敵兵が手に〳〵爆裂彈を投げながら逆襲して來た、味方は死力を竭して防戰したが、衆寡敵せず、折角幾千の犧牲を捧げて

手に入れた兩頂巓を、空しく敵の手に渡すの止むを得ざるに至つた。
[illegible]まことに殘念至極であつた、師團長は直ちに回復戰を計畫して、僅かに西南部の一隅を取返したが、その時は味方の諸隊も疲勞の極に陷つて居た、二〇三高地攻撃を開始してから、我兵の死傷數七千餘人と註される、生殘の兵も戈を取て戰ふ元氣涸れ、悲慘の狀目も當てられぬ程であつた、殊に増加兵が後から後からと加入するので、何の隊が何處に居るか、それさへ區別が付かなくなつた、甚だしい處では攻路中が死骸で埋つて、足を入れる處もなくなつたから、止むを得ず體力の休養と攻路の掃除を行ふことに決し、現陣地の維持を守る事にして、一日から四日まで攻撃を中止するに至つた。
再攻撃は五日の午前七時から始まつた、諸砲臺は猛火を二〇三高地に注ぎ、掩蓋を破壞し、岩石を粉粹する中から、敵も又猛烈に榴彈を亂射する味方の砲擊漸く効果の現るゝを見て、歩兵第十四旅團長(旭川)齋藤少將は、第一師團の兵を指揮して、猛烈に突撃した處が敵は連日の砲撃に疲れたのか、又は忍耐力が

盡きたのか、意外にも退却を始めたので、一擧西南の頂上を占領し、直に防禦工事に着手し、更に東北隅に突進し、西南隅の占領隊と力を協せて、鞍部附近までを占領した、その勢ひに辟易して、敵は次第に退却を始めたから、翌日の午前八時、さしも難攻不落と謳はれた二〇三高地の要害も、全部第七師團の手に落ちた。

此の時の將軍の歡びは譬ふるに物なかつた、彼の有名な

爾靈山嶮豈難攀、男子功名期克艱、
鐵血覆山山形改、萬人齊仰爾靈山、

の詩は此の歡喜の記念であつた。

その後二〇三高地を爾靈山と呼ぶに至つた、一戸將軍が將軍に會つて、保典戰死の悔みを述べた時も、將軍は無言の儘、此詩を書いて示したといふ事である。

(十七)

爾靈山を占領せられた旅順港は、咽喉を扼せられた人間も同じであつた、敵軍の運命は次第々々に危機に迫つた。

顧みると十一月二十七日初めて同山の攻擊を開始してから、今日に至るまで肉彈に續ぐに肉彈を以てして、有らゆる艱難辛苦を嘗め、一たん占領しても、忽ち敵に奪ひ回され、風雪と戰ひ、飢渴と戰ひ、機關砲と戰ひ、榴散彈と戰ひ、突擊を決行すること前後幾十回なるを知らず、漸くにして旅順要塞の關鑰を握つた、今までの不利は忽ちに有利となつた、今までは暗黑の中に彈丸を打つたが將來は光明地へ彈丸を打つことゝなる、將軍が滿足の笑を湛へたは有理であつた。

爾靈山の頂上から見ると、旅順港內は掌を指す如くである、市街の光景から敵艦の所在まで一目の中に收まる、そこで觀測所の後に攻城砲を据ゑ、どしど

しと砲擊した、六日の正午から敵艦目がけて打ち出す砲彈は、見る〳〵中に有力な船艦數隻を擊沈したが、それでも「セワストポリー號」外二三の砲艦驅逐艦が殘つて居る、この殘艦も打ち沈めて了はねばならぬといふので、九日「セワストポリー」に對する大搜射を行ひ、十日僅に餘喘を保つて居る敵艦を擊ち拂つて、遂に敵の全海軍力を殺いで了つた。

そこで東鄕艦隊は旅順港口の警備を緩めることか能きた、バルチック艦隊が追々に近く來るので、艦隊の靜養と、修繕とを爲すべく、一時佐世保へ引き上げた、東鄕將軍は十二月二十日佐世保を立つて、バルチック艦隊を迎へ擊つべく出動する時、柳樹房の司令部へ立ち寄つて、乃木將軍に挨拶した。

此の時、海軍の陸戰隊が、敵艦全滅の事を逸早く本省へ通報したので、海軍省から前へ公報を出すの奇觀を呈した、それで陸軍側に多少感情を惡くした傾きもあつたが、將軍は一向無頓着であつた、勝た事は何方が前へ出しても、管ふことはない筈だ、といふのであつた。

大將詠及筆

(山本第三師團法官部長藏)

目ざす船艦は全滅する、要塞の敵兵は袋の鼠同様になる、此の上は急くにも及ばぬといふので暫く兵力を養つたが、十二月十八日には第十一師團が北砲臺を爆發し、二十八日には第一師團が二龍山を爆發させ、三十日には同師團が松樹山を爆發させた、これでこの年の戰鬪を終り、こゝに越年といふ事になつた。

この十八日の戰鬪は、隨分猛烈を加へた、敵前百メートルの處へ臼砲を持つて行つて、北砲臺へ彈丸を送つた、敵からは砲彈や小銃彈を雨の

如く射かくる、その間に立つて味方は愼重に任務を盡した、この臼砲は側面大破壞に與つて力があつた、由つて將軍は、この方面に當つた徒歩砲兵第三聯隊第三中隊全員(隊長中尉川上章治、軍曹吉村治吉、伍長有田藤太郎、上等兵久保辰次郎、内田光太郎、一等卒森脇茂作外八名、助卒守谷武外六名)に對し、左の如き感狀を贈つた、全隊員に感狀を贈つたのは、恐らく此の外に無からうといふ事である。

明治三十七年十二月十八日東鷄冠山北堡壘攻擊ノ際敵前約百米突ノ一戸堡壘ニ在テ三面ヨリスル猛烈ナル敵火ヲ浴ビ砲及ビ砲手多ク損傷セルモ克ク長時間有力ナル射擊ヲ以テ敵ノ後方連絡ヲ遮斷シ同砲臺ノ占領ヲ容易ナラシメタリ其動作勇壯功績大ナリトス

こゝに記念すべき三十七年は暮れて、翌れば三十八年一月一日、將軍は五十七歳であつた、一日の朝は九師團から日砲臺が取れたといふ電話が司令部へ來た、十一師團からも望臺の攻擊中であるが、奪れさうでまだ奪れぬとの報告

が來た、續いて午後三時頃に占領を終つたと云つて來た、この時――嗚呼此の時であつた、第一師團から、敵の軍使が白旗を押樹てゝ此方へ來るといふ電話があつた、司令部へは眞の正月が來た、一同飛び上るほどに驚いた。

(十八)

「はて、何の爲に來るのだらう、何を爲に來るだらう」と互に不審の眼を瞠て居た、司令部の人の中では「いよ〳〵開城かな」と推量して居たものもあつた。

處が夕方の五時頃、將軍以下晩餐を遣つて居ると、敵の軍使が要塞地區司令官陸軍中將侍從將官アナトール、ミハイロウヰッチ、ステッセルの手簡を持つて、水師營の南方にある我軍の第一線へ遣つて來て、攻圍軍司令官へ送達されたき旨を願ひ出た事が電話されて來た。

將軍は直に軍使を呼び寄せてステッセルの手簡を受け取つた、ステッセルの降參狀である。

旅順口一九〇四年十二月

第二五四五號

閣下よ、交戰地域全般の形勢を考察するに、今後に於ける旅順口の抵抗は不要也、依て無益に人命を損せざるため、余は開城に關し談判せんことを望む、閣下之に同意せらるゝに於ては、開城の條件順序を討議するため委員を指名し、並に予の委員が、該委員と會合すべき場所を選定せられんことを願ふ

予は此の機會に於て予の敬意を表す

關東要塞區司令官　ステッセル

宛名は將軍になつて居た。

此の時は司令部全員の頭に「こんな事を云つて油斷させるのぢやあるまいか」との疑ひを抱く者もあつたが、將軍は直ちに答書を作つて翌日の朝早く軍使をステッセル將軍の許へ送つた、將軍の答書は左の如くであつた。

旅順口攻圍軍司令部に於て

閣下より予は茲に開城の條件及び順序に關し、談判せんとする閣下の提議に同意するの光榮を有す、之がため予は旅順攻圍軍參謀長伊地知幸介を委員に指名し、尙之に若干の參謀及び文官を隨行せしむ、即ち一九〇五年一月二日の正午水師營に於て、貴軍委員に會合すべし、雙方の委員は調印の後、批准を待たずして直ちに効力を生ずる開城規約に署名するの全權を有すべく其の全權委任狀は、雙方の最上指揮官の署名したるものにして、互に交換すべし、予は此の機會に於て敬意を表す

將軍は一日の夜、大本營に電報して「敵將ステッセル降服狀を送りたる事」を報告した、すると兒玉參謀總長から、聖旨を奉じた左の如き返電を送つて來た。

將官ステッセルより開城の提議を爲し來りたる件、伏奏したる處、陛下には將官ステッセルが祖國のため盡せし苦節を嘉したまひ、武士の名譽を保たしむべき事を望ませらる

右謹んで傳達す

然し、敵に何樣計畫があるかも知れぬので、敵前にある我軍へは、まづ此の事を知らせないで、一層警戒を嚴にすべき旨を達した、處が此事誰から漏れたともなく、沙河方面の我軍に知れ渡つたので、翌日はドシ〳〵と祝電が來た、敵前に在る我軍の青年將校は「何故戰爭をさせぬのかね、敵は大分弱つて居る樣だ、こゝで大吶喊大突撃を遣つたなら、きつと成功するんだがね」と腕を扼して憤慨する向もあつた。

開城委員としては、我軍から伊地知參謀長、山岡、岩村、津野田の各參謀、有賀文學博士、河津通譯官を選定し、敵軍からはレース參謀長、バラショフ赤十字社長「レトヴヰザン」艦長、通譯等數名で、場所を第一師團衞生隊の使用して居た水師營の一民家と定めた、兩國委員は二日午後一時二十分から會見した。

兩國委員は互に委任狀を示し、隨行員を紹介した、次に伊地知參謀長から、豫しめ起草して置いた開城規約及び同附則を交附し、一時間の猶豫を與へ「その中に確答されたき」旨を云ひ置いて退席した。

第二の會見は同二時三十分であつた、露國側からの申出には「本規約には旅順要塞の兵を悉く俘虜とすとあれど、願はくは解放の恩典に浴したし、尤も要塞の兵は大半病傷者なる事、宣誓は我國に先例なきを以て、皇帝陛下の裁下を經べく、電報發送の手續を取計はれたき事、軍旗は悉く燒棄する事、將校には從卒と馬とを引連るゝを許されたき事」其他數箇條であつた。

（十九）

それに對する我委員の答は、兵員全部を解放する事は能きぬ、皇帝への電奏は英文にて認めよ、さすれば直ちに發送の手續きを爲す事、從卒を伴ふは可なれど、馬を連るゝ事は許さぬ、荷物の重量は我將校の携帶量に準ずべき事等であつた。

露軍の委員も、悉く同意したので、同四時三十分談判を終り、同時に兩軍休戰の命を下した、さしもに天下の人心を騒がせた旅順攻圍軍もこれで終つた、將

軍は翌日津野田參謀をして「武士の名譽を保たしめよ」とある大元帥陛下の聖旨を、ステッセル將軍に傳へさせた、ス將軍の喜悅は譬ふるに物無かつた、斯る上は一刻も早く乃木大將に會見して、貴國陛下の大恩を謝し奉らんことを望む、幸に大將の許諾を得ば、日時と場所とを指定せられたし、と要求して來た。

此の要求に由つて、乃木將軍は一月五日水師營にて會見すべき事を通告し、午前十一時三十分、兩司令官の會見があつた、ス將軍は「日本工兵の勇敢な行動は天下に二とあるまじき軍人の龜鑑である」と稱讃し、續いて「大將が二人の愛兒を失はれた」事を哀み弔ひ「記念として己の愛馬が進呈したい」と云つた、將軍はス將軍の挨拶を聞き終り「本官は又露西亞兵の抵抗力の極めて偉大であるのを感じた、殊に防禦法の周密堅固である事は、恐らく旅順要塞に及ぶもの無からうと思ふ、二子が戰場に骸を曝らしたは、武士として最も適當な死處を得たのであるから、本官は滿足に思ひ居る、愛馬を贈らるゝ御芳志は有難けれど、直に受領するは軍規に背く恐れあるを以て、一まづ委員に引き渡されたき」旨

大將手簡

（山口縣防府町　重安政藏氏藏）

を答へた、ス將軍は赤誠を傾けて握手した。

表面の挨拶終つて後、ス將軍は笑を含みながら日本軍が海軍砲を山の上へ引き揚げて、陸戰に應用した悧巧の仕方には、一方ならず驚いたと云つた、將軍は隙さず「本官は又露軍が魚形水雷を爆發用に使つた器用な技倆に感じ入つた」と鸚鵡返しをして、一座大笑ひをしたのであつた、この會談の終つたのは、午後一時半であつた。

すると六日左の勅語を賜はつた。

旅順ハ極東ニ於ケル水陸ノ重鎭ナリ第三軍及ビ聯合艦隊ハ協同戮力久シク寒暑ヲ冒シ苦艱ヲ凌ギ勇戰奮闘克ク其鐵壘ヲ奪取シ堅艦ヲ殲滅シ敵ヲシテ遂ニ城ヲ開キ降ヲ乞フニ至ラシ

ム朕深ク爾將卒ノ克ク其ノ重任ヲ全ウシ偉大ノ功績ヲ奏シタルヲ嘉ス

同時に皇后陛下から令旨を賜はつた。

我第三軍並ニ聯合艦隊ハ水陸協戮旅順ヲ重圍スルコト數閲月激戰數百回堅ヲ破リ鋭ヲ碎キ辛酸壯烈防備無比ノ天險ヲ冒シ頑强不屈ノ勁敵ヲ剿シ遂ニ彼ヲシテ城ヲ開キ降ヲ乞フニ至ラシメタル趣キ皇后陛下ノ懿聞ニ達シ我將校下士卒ノ忠誠義勇克ク偉大ノ功勳ヲ奏シタルヲ深ク御感賞アラセラル

それに續いて滿洲軍總司令官大山巖からも、感狀を送つて來た、一時は將軍包圍攻擊の成功を危んだ內地人も、始めて安堵の胸を撫でた、あはや暗黑に包まれやうとした天の一角に、淸い美しい光輝が見えて來た。

旅順陷落は、第三軍の全部が至誠奉公の念を以て、屈せず撓まず戰鬪に從事した效果の出現である事は云ふまでもないが、取分けて攻城砲兵の働きに目覺しい處のあつたのは、萬人の齊く認むる處である、將軍は一月五日、攻城砲兵

團に對して左の如き感狀を贈つた。

明治三十七年八月旅順要塞攻圍開始以來日夜砲戰ニ從事シ或ハ前進陣地ヲ攻略シ攻路作業ヲ援助シ砲壘軍用建築物ヲ破摧シ或ハ數次ノ總攻撃ニ當ツテ克ク砲兵ノ威力ヲ發揚シ或ハ各種ノ増加砲ヲ以テ新ニ隊伍ヲ編成シ以テ一意要塞ノ攻略ニ努力シ終期ニ至ツテハ又港內ノ殘艦ヲ撃沈シ砲廠ハ其間僅少ノ人員ヲ以テ克ク必要材料ノ補給調度ニ任ジタリ其團ノ功績偉大ナリトス

次には城の受渡し、次には捕虜の輸送、それが終つて、入城式を行つたのは一月十一日であつた、露國兵の居る中に入城式を行ふは、彼等に對して氣の毒との心からであつた。

（二十）

此の時の將軍の心事は何樣であつたらう、將軍が旅順で入城式を行つたの

はこれが二度目であつた、戰勝將校は胸の騷ぐほども愉快を感じた、將軍は當日に先つて入城式の手順を定め、更に入城式の服裝規則を定めた。

將軍は入城式を終ると共に、寺內陸軍大臣へ宛て「多くの人を殺し、多くの時日と、多くの金とを費し、多くの彈丸を使つて、漸く今日あるを得たは、御同慶の至りながら、小生の無智無能を深く耻づ、將軍も根氣負をして、漸と開城するに至つたのであらう」との意味を認めた手紙を送つた、此の手紙の事は將軍も人に語らず、寺內伯も祕密にして過ぎたが、去年九月十三日殉死の日「將軍には斯う云ふ事もあつた」と云つて、或人に語つたさうである、此の手紙の意味を嚙み分ると、その中に自から大將謙讓の光を味はうことが能きる。

翌十四日は水師營東方の高地、要塞本防禦線一帶の大部、爾靈山の高地をも望み得べき形勝の地を祭場にして、戰死者の大弔魂祭を行ひ、終つて祝捷會を開いた、一尺角の白木に「第三軍戰死病歿各位之靈」と記した將軍筆の墓標が、一丈も積み上げた土臺の上に樹てられる、前面の四脚臺には戰病者の名簿及び

旅順役に名譽の戰死を遂げたる

保典氏　勝典氏

玉串が置かれる、大山總司令官の供物料金千圓を始め、造花、酒、餅、魚鳥、野菜果物が供へられる、十二吋彈丸の下に、二株の常磐樹が栽ゑられる、祭壇の用意悉く成ると、將軍を眞さきに、北白川宮恒久王殿下、大山總司令官代理、軍司令部幕僚、通譯官、外國武官、從軍記者、陣歿者遺族等が左手に併ぶと、攻圍軍諸隊は前面から左右兩側に整列した、まことに嚴しく壯な樣であつた、やがて軍樂隊が「國の鎭」を吹奏するを合圖に、將軍はつと靈前に進んで、最も嚴格に、最も沈着いて、弔詞を朗讀した、雪を含む寒風は颯爽たる將軍の鬢髮を吹いて、その音調は悲痛であつた、一同謹んで垂頭れ聞く。

維時明治三十八年一月十四日第三軍司令官男爵乃木希典等謹みて淸酌庶羞の奠を以て我第三軍殉難將卒諸子の靈を祭る曩に我軍の關東半島に上陸せし以來實に二百十有餘日其の間諸子は克く勇往し克く健鬪し或は鋒鏑砲火の下に命を致し或は風餐雨虐の間に病歿せしもの少しとせず而も其の功業遂に空しからず茲に旅順港内敵艦隊の全滅に歸し敵要塞の降伏

を見るに至りしは洵に諸子の遺烈に由る希典等諸子と生死を共にし而も生きて　大元帥陛下より優渥なる勅語を下賜さるゝに會ひ顧みて諸子が遺烈を念へば豈獨り光榮を享くるに忍びんや嗚呼諸子と此の光榮を頒たんとして幽明相隔つ哀哉乃ち我軍の旅順に入るや諸子が忠血を以て染めたる山川と要塞とを下瞰する處を相し先づ地を清め壇を設けて諸子の英魂を招く庶幾くは魂や髣髴として來り饗けよ

將軍が此の弔詞を讀み終つた時は、列座の將卒誰一人涙を流さぬはなかつた、終つて又軍樂隊、將校の拜禮、その間に本派本願寺連枝大谷尊由外從軍僧二十三名の讀經があつた。

それから祝捷會に轉つた、隨分盛んな宴會であつた、宴會の終らうとする時、大迫中將の發聲で「乃木大將の萬歳」を三唱した、歡聲全山を壓する如くであつた。

將軍も此の日は酒量を過した、宴が終つてから、再び招魂祭の祭壇を拜禮し

て、直に柳樹房の司令部へ歸つた。

一萬五千の兵を殺し、二百十數日の日子を費し、懸命に攻め立てた旅順要塞も、遂に我軍の手に歸した「百年攻めても落ちまい」と云はれた難攻不落の要害も、忠勇義烈死を顧みぬ猛將勇士の前には、その力を恣にすること能はず、幾多の堡壘險山も悉く旭日旗の下に伏した、攻圍軍の兵卒は、これで一休み能きるだらうと樂んで居た。

處が北方には尙クロバトキンの大軍が居る、入城式を行はれる前、即ち九日の夜、大山總司令官から「奉天戰に參加すべく、直ちに北進せよ」との命令が來て居つた。

(二十一)

奉天方面の敵情は次第々々に猛勢となる、そこで我軍では旅順攻擊に當つて居た旅順軍が應援に來て吳れるのを待つて居た、旅順軍が來て吳れたら、思

ふまゝの大會戰をしやうといふので、一日千秋の思ひで待つて居た。

其處で將軍は夫々に令を傳へて、北進の準備に取り掛り、一月十六日より漸次進軍を始めた、旅順が陷落してから、急に寒氣が加はつたので、兵卒の困難は一通りでなかつた。

さうして滿洲軍總司令官の希望では、此の第三軍が沙河附近にある滿洲軍の左背なる遼陽の西方に集つて貰ひたいとの事であつた、由て第十一師團は別れて、鴨綠江軍へ參加する事になり、第一、第七、第九の三箇師團と、後備二箇旅團、砲兵一旅團(第二旅團)とを將軍が引率して發足する事になつた。

將軍以下の幕僚、即ち第三軍司令部は一月二十五日久しく住み馴れた柳樹房を立つて、遼陽に向つたが、將軍の乘つた汽車が金州附近で機關車のピストンロッドが破損し、長時間立往生をした事などあつて、二十六日の拂曉漸く遼陽に到着した、數日前から降りつゞく雪は廣き野に滿ち充ちて、寒さ骨に徹する如くであつたが、將軍は螢ほどの火を備へるばかりで、絕えて火鉢を取らな

かつた、幕僚などから「もう少し暖かくなすつては如何です」と勸めても、將軍は兵は皆火無しで居る」と云つて用ひなかつた。

こゝで少しく滿洲軍の狀況を說いて置かぬと、應援軍(第三軍)の働きが分らぬ、應援軍は奉天戰でも非常な働きをしたのであつた。

十月以來、敵軍と我軍とは、沙河を挾んで對峙したまゝ、些とも動かうとしなかつた、然しクロパトキンは斯うして無爲に日を送るのが本意でなかつた、好い機會を見つけ次第、會稽の耻を雪いで、沮喪した母國の人氣を引き立て、地の底へ食ひ入りさうな自分の名聲を盛返さうと考へて居た、此時露の第二軍司令官リッペンベルグ將軍は「旅順の要塞を陷れた勇猛無比の乃木軍が、この主力軍に合せざる前、大會戰を決行しやう」と云つた、ク將軍も同じ意志である、そこで、敵の猛勢は、我軍の左翼沈旦堡方面へ攻めて來た、これが一月二十五日にあつた黑溝臺の戰の初めであつた。

將軍は遼陽へ着くと共に、大山總司令官の許を尋ねて、軍務の打合せをした、

けれど悲しいことにはまだ兵が來ぬ、彼是して居る中に第九師團が黒溝臺へ急行した、さうして我軍に應援して、敵兵と會戰して、旅順包圍戰で幾多苦酸の經驗を嘗めて來た九師團兵は、最も忠實に、最も勇敢に戰つて、遂に勝利を得た、そのために第三軍は漸次目的通りの行動を取つて、やつと勢力を集めることが能きたから、二月中旬戰闘準備をした。

將軍は此の間、遼陽市内の一商店を宿に＊して居た、恰ど一月十一日、露將ミッチエンコ將軍の率ゐる騎兵隊が、兵站部へ襲撃をして、一時大騒ぎをしたのであつたが、第三軍から一旅團を派遣して撃退した、輜重縦列にも自衛兵を置く事にしたのは、此の結果からであつた。

大將筆蹟

士道莫於大義〻因勇行
勇因義長
録士規七則之一節
白井兄之法國行　希典

（宇都宮旅團長　白井少將藏）

第三軍の主力到着に由つて、我軍の内容は美事に調つた、この勢ひに乘じて一日も早く沙河の敵を掃蕩することに決し、遼河渾河に近い小北河に軍を集めて、二十六日から前進を開始した、滿洲軍の總計畫は、第三軍を以て敵の側背に廻し、第二軍(奧司令官)と協同して、敵の左翼を破り、次第に敵を東北の山中に壓迫し、敵の戰鬪準備なき所に於て戰はうと云ふのであつた、此の時第三軍の前には、敵の騎兵と歩兵の一部とがあるばかりであつた、されば前進に些の故障もなく、二十七、二十八の兩日中に敵の背後へ廻つて、右翼全部を包まうとした、大山總司令官は三月一日から本戰を指揮する豫定であつた、さうしてその日敵の最右翼を破つて、奉天大捷の基礎を作つた。

(二十二)

此の時は風や其他の故障で、我軍用電線が悉皆不通になつたので、各軍の總司令部との連絡が取れなくなつた、けれど第三軍は早く已に敵軍の背後に進

んで居たから、今更何うする事も爲きぬ、由つて將軍は堅く決心して、總軍を沙嶺堡に前進させた、奉天から六里餘もある。

此の前進に就ては、第二軍と協力せねばならぬ事もあつたが、電信不通のためそれすら能きなかつた、假令一二軍との間に連絡の道つかずとも、豫定通り背後を扼して輸贏を決しやう覺悟があつた、隨分大膽な計畫である。

幸ひに目的を達すれば、奇功も奏するが、仕損ずれば大敗衂を招る、三萬の兵が悉く骸となるべき大敗を招らねばならぬ、實にこの一戰は敵味方の運命が定まる大事の場合であるから、敵の退却するのを見ては、逐掛けたいのが普通の人情である、將軍の大膽な決心に力を添へたのは、松永參謀長であつた、此の人も又勇壯義烈に於ては、將軍に劣らぬ好軍人であつた。

さうして三月二日沙嶺堡に進んで、遂にクロパトキンの防禦軍と衝突した、味方は兼て期した事であるから少しも騷がぬ、群る敵を擊退して、更に前進を續行した、前進はやがて追擊である、すると東烟臺にある總司令部から、將軍の

許へ特使が來た、其の命令は
「一時前進を待て、第二軍が今敵軍を破りつゝ前進して居る、第二軍が渾河を渡つて第三軍の右に出るまで待ち合せ、協力して北進せよ」と云ふのであつた。
總司令部では第三軍がずん〳〵と前進するのを危んで居るのであつた。
將軍は止むを得ず軍を止めた、此の間に第九師團は第二軍に力を協せ、行く敵を破りながら第三軍に合した、第一軍と第四軍とは奉天を距る六七里の地點、即ち沙河の陣地にあつて、敵と對峙したまゝ動かなかつた。
この情報を知ると共に、第三軍は前進して奉天の停車場に向つた、すると奉天西方約二里の所に、堅固な敵の陣地があつた、沙河對陣中、奉天を固守するつもりで、ク將軍が建造した要害であつた、由て將軍は直ちに兵を派して攻撃したが、敵も頑強に防禦する、加之にどし〳〵兵力を集中した、そのために攻撃は困難を加へたが、少しも屈せず攻め立てた、兎角する中に、第二軍は渾河を渡つて、先登が第三軍に合する事となつた、そこで第二軍に、右翼と正面攻撃を譲り、

第三軍はその夜から北へ折れて、奉天の北に廻るべき運動に取り掛つた。

すると今度は敵の方から攻めて來た、ク將軍は豫備隊全部と、第二軍の正面から退却した諸隊とを集めて、乃木軍を撃破すべき大決心を定めたのであつた。

大將咏及筆蹟

東西南北幾山河
春夏秋冬月又花
征戰歳餘人馬老
壯心尚是不思家

（金澤市能久治氏藏）

その結果、六日には大石橋附近で激戰があつた、然し大した事もなく撃退して、十分に戰鬪準備を整へた、卽ち北方より奉天へ肉薄するのである、將軍は各級の指揮官を集めて一場の訓示をした。

「既に深く敵地に入り、屢〻敵を破るといへど、沙河方面の敵情は依然として勢力を保つて居る、要するに我軍隊に未だ盡さゞる處あるに由る、依つて此際我〻は死を賭して全力を盡し、決戰敵を破る覺悟を要する、我軍の勝利はやがて最後の大捷を意味する、死すべきは今である、各員それ努力あれ」

訓示の意味は斯うであつた、全部隊は此の大膽に且つ勇敢な司令官の訓示を聞いて「よし一命を捨てやう」と決心した、その勇ましい決心を以て奉天戰に加はつた。

七日は轉灣橋、造化屯附近の敵を破り、八日は八家子附近の敵を破つたが、その右翼は奉天の西北田義屯附近まで進んで、盛んに砂彈を浴せかけた、その彈丸は確に鐵道線路に達した、鐵道線路は露軍唯一の後方兵站部であるから、此

の鐵道を破壞することは、最も必要な仕事であつた。處が味方は段々死傷兵が出て敵に對抗するだけの勢力が無くなつた、おまけに前進し過ぎた爲彈藥縱列が續かなかつた。

(二十三)

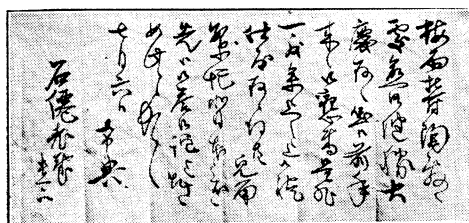
そこで又一策を案じて、北から奉天に向つて居た第九師團を東へ向けて、鐵道線奪取の計畫をした、ク將軍は此の體を見て、全力を鐵道線方面に集めて來た、卽ち沙河の廣漠たる陣地に配置して居たのを引き上げ、狹く長く陣を敷いて、乃木軍に全力を注いだのであつた。

敵が渾河の戰線から退却しかけた時は、攻擊軍が總掛りで追擊して、九日一部を占領した。

總攻擊軍は恁樣風に好況であつたが、第三軍は最も困難の地位に立つた、それを何故かといふと、豫定の退却をした敵の大軍が正面に集中する、田義屯を

攻撃して居た第一師團の一部は、敵の逆襲を受けて、思ひの外の悲境に陷るけれど將軍は屈せず撓まず戰鬪を繼續し、十日には夜襲隊を造つて突撃した結果、遂に北陵を占領するに至つた、これに勢を得て、他の方面も攻撃を續行する、砲聲喊聲間なく響いて、殺氣奉天の天地を覆ひ、漸次その地歩を占めて來たが、敵の砲力はいよ〳〵加はり、彈丸は雨の如く飛んで來る、同時に敵の大縱列がどし〳〵北に向つて遁出すさまが見えた、敵が砲力を集中したのは、全く此の大退却を掩護する爲であつた。

こゝで我軍に十分の彈丸があれば、一擧して退却兵を鏖殺にすることも爲きたが、悲しいかな、大砲の彈丸が甚しく欠乏して居た、將軍は高い屋根の上に登つて、望遠鏡で見遣りながら、切齒扼腕して苛つて居た。

然し夜に入つてから全く鐵道線附近を占領して東から進んで來た第四軍と連絡を取つたから、忽ち優勢となつて確實な勝利を得た、奉天の大戰はこれで幕が閉ぢられた。

翌十一日は更に疲勞兵を勵まして、七里ばかり北方に敵を追擊し、昌圖、金家屯、法庫門の線を占領し、一時鵶鷺樹に兵を送つて敵情を探つたが、早くも退却した後であつた。

大將手簡

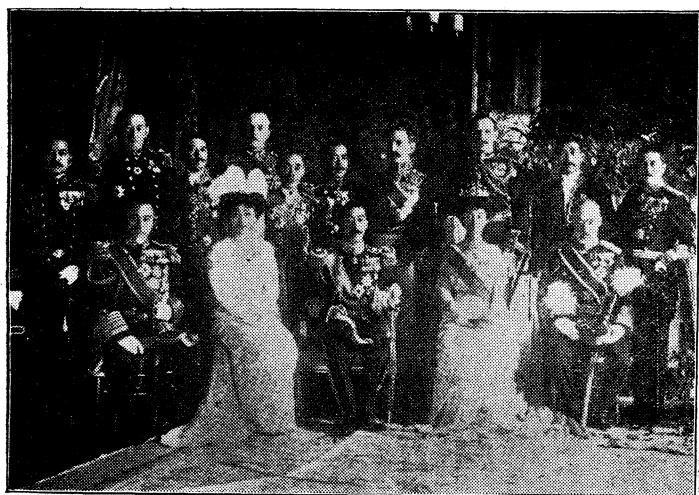
(美濃赤阪 清水石僊氏藏)

要り二月二十六日から三月十一日まで十四日間朝は未明から夜は二時三時頃に至るまで、將軍はいつも司令部員と起居を共にして、燒麪麭、鑵詰で濟まして居た、時には粟飯を食ふこともあつたが、それも偶のことであつた。

奉天城の大捷は總司令部の計畫宜しきを得た爲であること云ふまでもないが、一は乃木軍が大危險を犯して、敵の背後を包むべく進んだからである、露軍もし大兵を以て乃木軍に臨んだら、いかに勇敢な乃木軍も一人殘らず戰死して居たに違ひない、けれど旅順の要塞を陷した勇將乃木の兵と見て、容易に突擊し

なかつたのである、滅多に物を云つたことのない大山總司令官も、此の戰爭の終つた時「乃木どんが、ドシ〳〵進んでくれたでのう」と歡んだ。

その後第三軍は遼河の西岸に滯陣して居たが、五月更に康平附近へ進行した、司令部は六王屯から法庫門に移つて、ここに暫く駐屯したが何でも運動をよくせねばならぬといふので、將軍は徑一尺ばかりの金輪を見付け出し、庭に高い抗を打ち付けて、三四間放れた處から輪投をした、大抵の者は一順遣ると皆な弱るが、將軍はビクともしなかつた、老將軍が重い金輪を投げながら、興に入られた姿が今も目に殘つて居ると、當時の幕僚河西少佐は語つて居た。

法庫門は奉天を距る西北五十哩の處にあつた、將軍は土地第一の富豪が持つて居た廣大な家を借り受けて、そこを當座の旅宿にした、將軍の寢室は稷を納れた穀倉で、二間に二間半の室であつた、その中に寢臺、卓子、椅子などを据ゑ付けて、外套と帽子を掛ける二本の釘が打つてある、將軍自身の荷物と云つては、たつた一箇の支那鞄で、一杯に荷物が詰めてある、重量が七貫九百二十匁あ

(英皇室の貴賓たる東伏見宮殿下と乃木大將と東郷大將)

つた、公使館附の陸軍武官は門外の大家屋に滯在して居た、合衆國の工兵團陸軍少佐ジヨセフ、イークイン氏、シカゴ、デーリー、ニユース特派員スタンレー、ワシコバーン及びコリーヤ週報の通信員であつたリチヤード、バリーの三氏もあつた。

法庫門に滯陣中は、我も〳〵と揮毫を賴んで來た「今までは戰鬪中でさし控へて居ましたが、大分お暇になつたやうですから、是非お願ひします」と迫るものもある、軍事郵便で戰死者の墓碑銘を書いて貰ひたいと云つて來る者もある、將軍はその度ごとに「よし〳〵」と云つて書い

だが、中に不思議な軍曹があつて「閣下印を捺して下さい」と願つた、將軍は何を書いても印を捺したことがないから「其樣物は無い」と斷つたが、軍曹は承知せぬ「では有りませうが何うか此れだけには御印を願ひます」と執拗く云つた、將軍も煩厭く思つたのか「よし捺して遣る」と云つて乃木と彫た檢印を捺して遣つた、陣中に書いたものには、何うかすると實印の捺したのもあつた。

長い滯陣の間には種々の餘興が催された、三萬以上の兵の中には、多くの藝人も交つて居たので、時には演劇も遣り、又時には角力もあつた、落語、講談、浮かれ節、毎日のやうに行はれたが、將軍は耳を傾けやうともしなかつた、只一兵卒が「水戸黄門傳」の浮かれ節を讀む時だけ、樂しさうにして聞かれた、後には「おい、水戸黄門を遣れ」と催促することもあつた、當時の詩に斯う云ふのがあつた。

東西南北幾山河、　春夏秋冬月又花、

征戰歳餘人馬老、　壯心尚是不思家、

その中には演劇にも浪花節にも飽いて、蓄音機の要求が盛んになつた、兵卒

の徒然を慰めるのは、此が最も可いといふので、各軍では我先にと買ひ入れた、將軍の幕僚も、是非欲しいとあつて、二三度も申し出たが、將軍は許さなかつた、けれど「兵の心を慰撫するため」と聞いて、遂に「よし」と承諾した、處がいよ〳〵注文した蓄音機が着くと、自分の懐から代金を支拂はれた、幕僚は「いや軍事費から拂ふ事になつて居ます」と云ふと「慰み物を買ふための軍事費はない筈ぢや、これは私が拂つて置く」と云つた。

(二十四)

前に記したコリーヤ週報の通信員リチャード、バリー氏が將軍薨去の報を聞いて、同週報に「從軍當時の思ひ出」を書いた中に、左の事項があつた、外人の見た將軍の人格を紹介する。

法庫門外の大家屋にはクーン少佐(今は米國フイラデルフイヤで官吏をして居る)も一所に居た、ワッシユバーンと自分とが大將に會つた時、大將は自分

達に向つて云ふ「住居が遠くては君等の仕事に不自由だらう、私の住居に近い處を探しては何うか」と、斯う云つた親切な態度が、我々に對する大將の待遇法であつた。

戰爭も終りに近いた五月の末つ方(併し當時は誰れも講和が締結されやうとは考へて居なかつた)大將はワッシユバーンと私とに使を寄越すことが屢次あつた、それは司令部の後庭で、閑談に耽らうといふ請待であつた、無論夕暮で二人一緒に行くこともあれば、一人で行くこともあつた、大將は英語が話せないし我々は日本語が巧く行けないから、いつも通譯が附いて居た。

斯の如き交際に由つて、我々は大將の爲人を熟知することが能きた、大將の幼時、宗教、及び文學に關する大將の趣味、將來に對する大將の計畫、こんな事柄によく通曉した。

大將が外國の軍事について、深い注意を拂つて居た事は、時々發せられる大將の質問で察せられた、その一例と見るべきは、一夕例の茶談の折、大將は突然

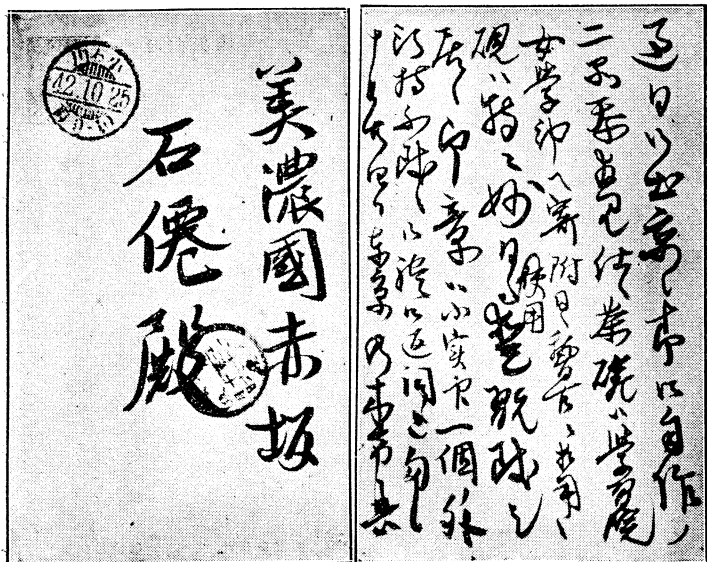
ポーク、エンド、ビーンス（豚肉と豆）とは何ういふことか」と訊かれたことがあつた、察する處、大將が米國の軍隊生活の話を聞いて居た際に、ポーク、エンド、ビーンスといふ詞を聞いたからであつた、それは恰ど日本兵に對する米のやうなものだと、まづ大體を呑込ませてから、細い說明をした、すると大將は「今度馳走して貰ひたい」と云はれた、私は答へた「さア料理人が本統の軍隊的のポークや、ビーンスを拵へることが能きるか知ら、七月四日は合衆國の獨立祭ですから、其の時には本式のを差し上げます、是非御試みを願ひます」といふと「その時まで法庫門に滯在して居たら、御馳走になりませう」と笑ひながら云はれた。

いよ〳〵七月四日の獨立祭となつた、そこで會場に充つべく我々の住家の廣庭に天幕を張るやうにした、土地には支那人の使ふ堅い質の莫蓙を敷いた、その周圍に三間半四方に棒杭を建て、圍ひを拵へ、其上に天幕を張つた、天幕の下には松で拵へたテーブルを置いたが、その周圍には優に十二の席が置き得られる、我々米人が請待したのは、乃木司令長官、一戸將軍、英國公使館附武官バ

ルネット大佐、土耳其公使館附武官ペルテ少佐であつた、實に此日の晩餐會は、國際的の出來事と謂ふべきであつた。

この獻立が頗る振つて居た、勿論手元に獻立表の用紙がない、そこで支那の大工に命じて、棺の蓋を一分位に削らせ、それを四分位に切らせ、やつとの事で獻立表十枚程を作つた。

話は前に戻るが、當日乃木大將は祝辭を陳ぶる筈であつた、その數日前、司令部の山口一等通譯官が、自分の處へ來て云ふには「今日私が參上したのは、乃木大將の命に依る處、實は大將は熱心に當日の演說を考へて居られる、而して何うかして自分の演說が亞米利加の精神と一致するやうにと、それのみを願はれて居る、假令さう云ふ場合の式辭に慣れないと云つて、當日の演說を避けるのは、大將の意志でない、で自分に其旨を質問されたが、自分とてもよく知らぬ、そこで態々お伺ひ申した譯だが、何うでせう、御敎示下さる事は能きないでせうか」と斯うであつた。

大將書簡 (美濃赤坂 清水石僊氏藏)

そこで自分は歡んで、希望通り當日の式辭を書いて與へた、山口通譯官は幾度も禮を述べながら、その場で日本文に飜譯した、大將が當日覺え書なしで演說した原稿が夫であつた。

これは餘談であるが、一戸將軍も當日は「武士道」について演說する筈であつた、山口通譯が來た翌日、今度は後藤通譯が來て、何うか斯る場合に話す正式の言葉を敎へてくれと云ふのであつた、自分は此の注文にも快く應じた。

開會の時刻は午後八時からであつた、乃木大將は一分の相違もなく、正服着用で、天幕内へ入つて來た、此時豫て乃木大將の厚意で派遣されて居た大阪軍樂隊の一隊が、亞米利加の進行歌を鳴らし始めた、斯くて式通りに祝辭は述べられ、獻立表に記した通りの御馳走が運ばれて、芽出度く晩餐會は終つた、正十二時軍樂隊の奏樂中に、大將は卓子から立ち上つて、丁寧に一揖して去つた。

獨立祭があつた翌日、自分は大將と會つた、大將の云はれるには「昨夜は實に面白かつた、丁度外國へ旅行したやうな氣持であつた、前に大問題を控へて居りながら、假令數時間でも、全く實際問題から逃れ得たのは、小生の幸福であつた」と眞心から溫かい握手をされた。

その中に外國新聞通信員の役目も終りに近づいた、自分も行李を收めて自國に歸ることになつた、乃木大將は七月四日の獨立祭に請待されたことを忘れなかつた、自分等が法庫門を去るといふ前夜、大將の副官から留別會を催すからとの通知に接した、當夜は生憎大將は流行性感冒に罹つて、出席すること

が能きないと云つて、代りの將校を代理させた、然し義理に堅い大將は會の果てる時分になつて、咽喉に白布を卷き付けて顏を出した、而して互に別れの盃を酌み交した。

翌日午前八時過ぎ、法庫門の町を去らうとした自分は馬に乘つた、不圖耳に響いたのが、亞米利加の國歌であつた、見ると、遙の彼方に曾て晩餐會を賑せて吳れた大阪軍樂隊が、馬上の通信員一行を目送して居た、一方には十二人ばかりの騎兵が馬に跨つて居る、乃木大將はその先頭に立つて居た、嗚呼その馬上の凛とした雄姿！

自分は見るより直に大將へ近寄つた、大將は自分の手を堅く握つて、日本語で挨拶をして微笑まれた、自分の耳には通じなかつたけれど、多分「左樣なら」とでも云はれたのであらう、大將は山口通譯を傍に呼んで耳語た、通譯は直ちに自分の處へ來て云つた「これは大將の希望ですが、あなた方は此道を眞直に進んで小丘の方へ行つて下さい、而してあなた方が立ち止つて後を向かれたら、

大將は手巾を振つてお別れをしませう」

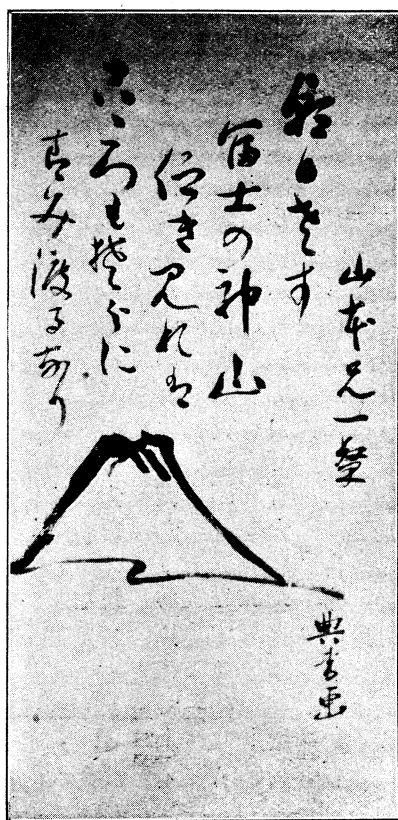
自分はその希望に應じた、小丘の上から振り返ると、乃木大將はステッセルから贈つたアラビヤ馬に跨つて、その雄姿を現された、さうして帶からハンカチを出して打ち振り〳〵別れを惜まれた。

(二十五)

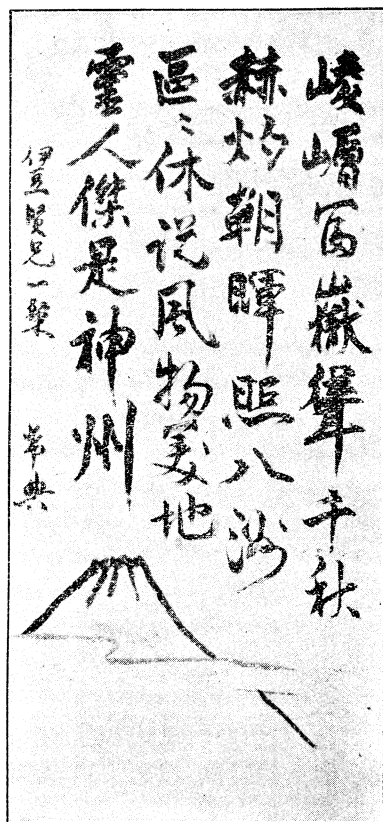
第三軍の參謀であつた津野田中佐は、陣中の將軍に就いて語る。

「私が第三軍の參謀に爲つたのは、三十七年五月一日で、此時初めて將軍のお目に掛りました、それから凱旋するまで、部下に從いて居たのですから、將軍の事に關しては他の知らぬ事まで知つてをります、その執務の有樣は一口に云ふと如何にもむつかしい上官でありました、人は將軍を古武士の面影があつて、融通の利かぬ頑固一點張の人の樣に云ふが、中々さうではありません、事務の才幹は確に歐米式で、我々の作つて出す作戰圖などを御覽になつても、その

コンパスを傳つて、それからそれへと反問されるのが、實に緻密で愼れたものです、これらは多くの將官にも餘り類のないことでありませう、唯その一諾を輕々しうせられなかつた處から、必らず人の說に反對して見られる、右といつたら左といふ、これが如何にも意地惡い樣に聞こえた、そこでその花押（軍中ではいつも花押でした）のある所即ち大將の精神のある處なので、盲判などは藥にしたくとも捺された事ありませぬ、かういふ人であるから會議などの場合に將軍の意見に對して他から賞讃の辭を呈する樣なことがあると、直に將軍の叱咤に會ふ、かういふ時には、何でも大將の提議に反對して見るのです、私などはこの呼吸を知つてゐたのと、一には自分の氣儘から滅多に將軍の意見に服從しなかつたので、何事に由らず頭から反對する、これがまたひどく將軍のお氣に入つたのです。

南山でその長男が戰死されたといふことを、將軍がきかれたのは五月二十六日、まだ廣島に居られた時でした、越えて六月四日鹽大澳に上陸して、六月六

日最初に南山の古戰場を巡視されました、その際わざ〳〵道なき道を通られて、當時の作戰計畫などを批評されましたが、後から考へて見ると、これは全く長男戰死の場所を御覽になつて、人には言はぬ心の中に、その死を弔はれたものであつたらうと推察されます、それから壯泡子街に軍司令部をおいて事務を取りました、その時將軍の有樣が何うであつたかといふと、全く士卒と苦しみを分つといふお考へから、蚊帳もつらねば、また將校としての食物も召し上らない、兵卒同樣の麥飯を食べてゐ

大將筆

（山本第三師團法官部長藏）

られた、それかと云うてこの難事を他の將校に責められるのでもない、つまり自分一人でなさる計りでした、戰線を巡回される時でも、何時の間にやら隨行

大將筆

(伊豆凡夫氏藏)

の參謀や副官を捨てゝ、唯一人さつさと作業中の兵士を見舞はれる、さうしてポケットに入れた菓子やカタパンなどを投げ與へては勵まされた、斯ういふ有樣であるから、士卒は皆將軍の爲に死を思うたけれど前にも申した通り、職務の上には寸毫も假借せられない人でありますから、將校連にはあまり氣受けがよくなかつた、或る時參謀連が

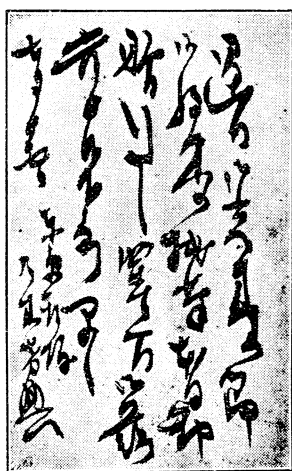
作圖をやつてゐると、例の通りに將軍が出て來られて、色々厭煩いほど干渉されては仕事が出來ませぬ、そんなにヨセつくのは旅團長などの仕事で、軍司令官のなさるべき事ではありますまい、閣下は一旅團長たる人物で軍に將たる器量に欠けて居やしませんか」と云ひました、すると將軍は何の挨拶もなしにプイと立つて自室に歸られました、そのあとで私は參謀長から散々に叱られた、上官に對して敬意を欠いた言葉である、匆々謝罪して來いと云はれたので、畏まつて將軍の室へ參つて「どうも惡うございました」といふと、將軍は嚴格に「貴樣惡かつたのか」と言はれましたので思はず憤いて「イヤ惡いとは思ひませぬ」と云ふと、將軍は却て微笑して「そんな事を伊地知に云ふな」と云はれた、私はこの時始めて將軍に推服しました「自分は何處までも小人であつた、將軍は何うしても將軍である、自分の生死を託すべきはこの人である」と思ひました。

旅順の攻圍中隨分多くの人を殺しました、それを世間の人は悉く將軍の罪

に歸して居る、將軍の軍略が惡い爲めに、多くの人を殺したのだといふ人がありります、また將軍が例の氣性から、陛下の赤子を殺して申譯ないと復命せられた通りに、將軍自ら責を負うてゐられる、然し初から終迄將軍のお側にあつて、親展書なり命令書一切を取り扱つた自分には、將軍の心事が分つて居る、私は實に同情を禁じ得ない、私はこの事について十分責任が明かにしたい、然し私は唯今之れを明言することは出來ぬ、罪を一身に脊負うて逝かれた乃木大將は實に偉人です、英雄です、私はこの偉人の爲に當時の苦衷を世に表はしたいと思うてをります、しかしそれは私の死ぬる前であると御承知が願ひたい。

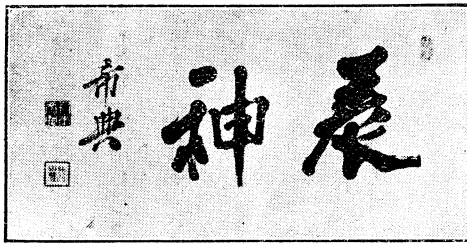
旅順の作戰計畫は彼の十一月十八日「多大の犧牲を拂ふも云々」とある勅語によつて新方面を開きました、夫は二〇三高地の攻擊であります、勅語が下つた後、山縣公から電報で七言絶句を送られた。

百彈激雷天亦驚、包圍半武萬屍横、
精神到處堅於鐵、一擧直屠旅順城、

この詩は決して無意味ぢやない、これは簡單な詩ではない、重大な意味のある命令書である、ですから結句は直に屠る旅順城でなく、直に屠れ旅順城です、敵軍の防禦力は我が軍の攻撃力にも數倍してゐる、難攻不落の要塞を何うしても數旬の間に陷落させねばならぬ、死を見ること歸するが如き乃木大將は、たゞ一圖に命令を重んじた、命令の前には敵がなかつた、山がなかつた、＊

＊機關砲榴彈が無かつた、然し事實に於いて山もあれば敵もゐる、苦しい／＼將軍の胸の内は十分推察せねばならぬ。

大將筆葉書

（伊勢二見清水石仙氏藏）

兎も角も二〇三高地の攻撃ほど苦しい戰爭はなかつたのです、十一月三十日午後三時初めて占領したのであつたが、午後六時に至つて再びの逆襲に由つて取り返された、この時に將軍の二男保典氏は戰死されたのであります、私はこの日柳樹房の司

令部にをりました、やがて將軍が歸つて來られて「貴樣一人だつたか、淋しかつたらう」と云はれた、將軍からこんな言葉を聞くのは初めてあつた、不審に思うて居ますと、高級副官吉岡少佐（後中佐に昇進し奉天の大會戰中李官堡に於て花々敷戰死を遂げられたり）がやつて來て次男保典君が戰死せられしとの電話ありしゆゑ、將軍に御悼みを申上げる樣傳へられた、そこで將軍の室に入つて見ると毛の外套を着たまゝ、帽子も長靴も脱がず寢臺の上に仰向きになつて居られた「洵に御氣の毒千萬、痛悼の極で御座います」と申上しに將軍は「よく死んで吳た是で世間に申譯が立つ」と云はれて他には何も云はず再び仰向になられた、後で聞くと

大將筆

（東京 石塚正治君氏藏）

二〇三高地が一旦我が軍の手に歸した時、やゝ滿足して司令部へ歸られる途中、保典君の馬丁が冷たくなつた保典君を引つ擔いで狂氣の樣に「殺されぬ、ど

うしても殺されぬ」と野戰病院をさして驅けて行くのに出逢はれたのだと云ふことです。

二〇三高地が容易に落ちぬと決つた時大將は自ら戰線〳〵に立つといふ大決心をなさいました、第九師團から五百の兵を借り受けて自ら指揮官となつて何うしても落して見せる」と猛然と言ひ切られた、この計畫を聽いて、各攻擊軍は悉く奮起した、人間の偉大な力がこゝに現れて、一擧二〇三高地を奪ひ取つたのであつた、奪れたことは無論喜ばしいことでありますが、然しこれには多大な犧牲が拂はれてをります、この一事は深く將軍の心を苦しめられた事で、去年九月十三日の御決心は此の時に決いて居たらうと察しられる、二〇三高地はやつと占領したが、それでも敵の殘兵があちらこちらでバチ〳〵と銃丸を放つてゐた、此の時大將はズン〳〵進んで、散兵壕を視察された、死を決した人でなければこんな亂暴なことは出來ぬのであります。

開城となつて將軍が水師營でステッセルと會見された時の喜びは、何うし

ても包み切れなかつたやうてした、この時撮影された寫眞によく滿足が現はれてをります。

これはズッと後の事でありますがステッセルが軍法會議に附せられた當時、私は佛蘭西に居りましたが、將軍はかくと聞いて態々手紙を下さつて、力の限り庇護してやれとの事でありました、私は直に一文を草して佛蘭西の新聞に投書をしました、斯くと知つたステッセルは私に手紙を呉れて、その恩を謝し、乃木將軍は眞の英雄であると賞讃しました。

乃木大將は旅順の戰爭が終むとすぐ北進されました、名高い法庫衙門の戰爭て敵軍を驅逐したが、その後こゝて招魂祭を行ひました、それは質素な乃木將軍一流の祭典でした、僧侶を一人招くてもなければ神官を呼ぶのでもない、將軍自らの祭主て將校が僧侶と神官である、供物は大將自ら捧げるといふ風てありました、これを見た支那人などは何れも感嘆して大將の德をたゝへました。

劫餘風物不堪酸、處々炊煙暮色寒、
往事茫々渾似夢、百年誰記招魂壇、

この詩はこの招魂祭の時に作られたものでありますが、この詩によつて支那人が感激の餘り三萬圓の寄金をあつめて立派な石碑を立てました。

私は戰爭後も殆ど親子の如き親密な關係を續けて居りました、それ故私は人よりも多く大將の人格を認めて居ります、丁度中耳炎で入院をしてゐられた時でした、私がお見舞をしますと斯ういふ歌を下された。

こゝに消えかしこに結ぶ水の泡の浮世にめぐる世にこそありけれ
げにや人目には見えね、心に重き小夜衣のうら見んかたもなき袖を、かたしきわぶる思ひかな

今日になつてからこの歌を見ると將軍の眞意が知られます、また故あつて將軍から私に次の如き歌を下されて戒められた事があります、これを封筒に入れて書留郵便で下さつたことは、大いに乃木式を發揮して居ます。

國のため力の限りつくさなん身の行く末は神のまに〱

ありあけの月影氷る雪の上に獨ゆかしき梅が香ぞする

それもこれも今は昔を偲ぶ記念となつたのは殘念なことであります。

凱旋

（一）

平和の風が滿洲に吹き滿ちた、日露兩國の間に最後の調印を終つたは、三十八年九月五日であつた。

滿洲軍も遂に引き上げる事となつた、大山總司令官は年の中に凱旋した、司令部もやがて引き拂つた、二年近くも故鄕の月花に遠ざかつて居た遠征の將士は、指折り數へて凱旋の日を待つて居たが、乃木將軍は「成るべく日本へ歸りたくない」と云つて居た「もし旅順港に守備隊を置かるゝやうなれば、いつまでもその司令官になつて居たい」と滲々云つた、いよ〳〵凱旋と定つて後も「面でも包まなければ日本の地は踏まれない」とまで云つたが、その年を思ひ出多き滿洲に送つて、三十九年一月二日法庫門を出發し、同月六日大連に着き、七日御用船鎌倉丸に搭乘して、正午十二時纜を解いた、同船したのは、一戶、牟田、伊知地

日露主將の歡會

(向つて大將の右はステッセル將軍左はレース參謀長)

の三將軍を始め、落合軍醫監、吉田主計監、今澤工兵大佐外十數名であつた。

この鎌倉丸は旅順開城當時、ステッセル將軍を乘せて、長崎に送つて來た船であつた、老船長スエィン氏はこの事を將軍に物語つた、將軍の感想は何樣であつたらう。

船では將軍の爲に三鞭を拔いて萬歲を唱へなどした、船は九日正午馬關海峽を通過した、關門兩地の官民は、歡迎船を花の如く艤つて、鎌倉丸の左右に列ぶ、沖には無數の煙火

が揚る、浪はちら〳〵と花が碎く、長府の有志も多數出迎へる、大將以下甲板へ出て、快く人々の厚意を受けた。

斯くて十日午前八時半檢疫を終つて、十時宇品に到着した、軍人、地方官、貴婦人團體から浴せかける萬歳萬々歳の聲の中に、棧橋から上陸して、幄舍前に記念の寫眞を撮り、十一時廣島に入つて、吉川旅館に投宿した、當時凱旋兵の謠つた「凱旋軍歌」は大將の作である。

我日本の軍人。強き敵とて何恐るべき。弱き敵とて侮りはせぬ。勝て驕らぬ此の心こそ。強きを挫くの力と知れや。強きを碎くの力を持てば。弱きを扶くる情もござる。我日の本の軍人。千歲萬歲萬々歲。其名を世界に輝せ。

我日の本の軍人。君と國とに捧げし身には。家も命も何思ふべき。心は石か黑鐵なるか。五條の勅諭を唯守るなり。日本魂を勅諭で磨き。日本魂を勅諭で守る。我が日の本の軍人。千歲萬歲萬々歲。其の名を世界に

輝せ。
我が日の本の軍人。討死なせし其の戰友の。功名手柄を無にしちやならぬ。國の譽も我身の幸も。命捨てたる其の戰友の。骨を碎きし響きときけよ。鮮血に染なす色とも見よ。我日の本の軍人。千歲萬歲萬々歲。其名を世界に輝せ。
我か日の本の軍人。軍役終れば故鄉に歸り。農工商業皆それ〴〵に。正しき道に努むることは。戰するのも心は同じ。家を富せば國亦榮ゆ。和合一致の尙武の心。我日の本の軍人。千歲萬歲萬々歲。其名を世界に輝せ。
他の將校は顏の色も晴々と、名譽ある凱旋を光榮としたが、將軍のみは苦り切つて「戰爭には大體參加したが、至極壯健で、今度も又死損つた、內地では盛んに歡迎會が開かれるさうに聞くが、實は隱れ蓑でも被りたい、露助の彈丸よりも、歡迎の拍手と萬歲の聲が恐しい」と云つた。

廣島には一日逗留した、吉川旅館で蠣飯を十三杯も食つて壯者を驚かせたりなどしたが、十二日午前七時十分東上の途についた。

大阪へ着いたは、十二日午前一時十五分であつた、寒い月が中天から光りを投げて、誰かの魂を見るやうに動いて居る、第四師團から特に派遣せられた軍樂隊は、嚠喨たる樂を奏する、多少の官民はプラットフォームに整列して、嚴肅に出迎へる、山下市長は將軍一行を食堂へ案內して三鞭を侑めた。

此の列車は十四日午前十時三十九分新橋に着いた、歡迎の各團體幾萬といふ數を知らぬ、盛んに萬歲を唱へ出した、大將は默々として居たが、驛外へ出ると幾萬人の群集が狂する如く叫び立つる聲を滿足氣に聞いて、擧手の禮をしつゝ參內した。

(二)

新橋から直に參內車寄から伊藤式部官に導かれて、御座に進み、先帝陛下に

拜謁(大山參謀總長、寺內陸相參列)し第三軍作戰の經過を奏上した、全文は左の如くである。

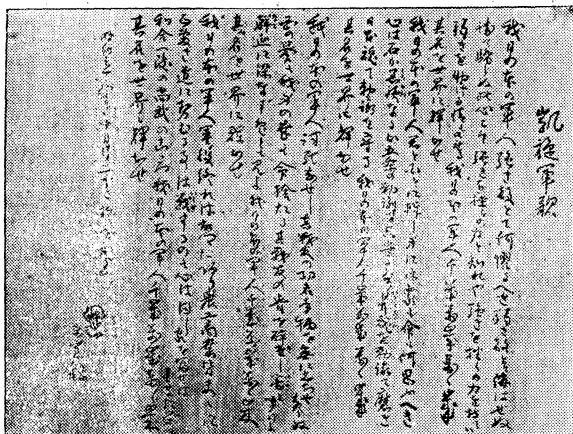
復命書

明治三十七年五月第三軍司令官たるの大命を拜し旅順要塞の攻略に任じ六月劍山を拔き七月敵の逆襲を擊退し次て其の前進陣地を攻陷し鳳凰山及び于大山の線に進み以て敵を本防禦線に壓迫し我海軍の有力なる協同動作と相竢つて旅順要塞の攻圍を確實にせり八月大孤山及び高崎山等を陷れ次て强襲を行ひ東西盤龍山の二壘を奪ひ爾後正攻を以て攻擊を續行し逐次要砦に肉薄し十月下旬より十二月上旬に至り二百三高地を力攻して終に之を奪取し港內に蟄伏せる敵艦を擊沈せり既にして攻擊作業の進捗に伴ひ其正面の三永久砲壘を占領し直に望臺附近一帶の高地に進出し將に要塞內部に突入せんとするに當り三十八年一月一日敵將降を乞ひ茲に攻城作戰の終局を告げたり時に北方に於ける彼我兩線の主力は沙河附

近に相對し戰機正に熟し軍の北進を竢つ事急なり依て一月中旬行進を起し二月下旬遼陽平野に集中し直に運動を開始して奉天附近の會戰に參與し全軍の最左翼に在りて繞回運動を行ひ逐次敵の右翼を擊破し奉天西北方に邁進して其の退路に迫り轉戰十餘日尙敵を追躡して心臺子石佛寺の線に達し一部を進めて昌圖及び金家屯附近を占領せしめたり五月各軍と相連り金家屯康平の線を占め次で敵騎大集團我が左側背に來襲せしも之を驅逐し茲に軍隊の整備を了り戰機の熟するを待ちしが九月中旬休戰の命を拜するに至れり。

之を要するに本軍の作戰目的を達するを得たるは

陛下の御稜威と上級統帥部の指揮並に友軍の協力とに依る、而して作戰十六箇月間我が將卒の常に勁敵と健鬪し忠勇義烈死を視る事歸するが如く彈に斃れ劍に殪るゝもの皆

陛下の萬歲を歡呼し欣然として瞑目したるは臣之を伏奏せざらんと欲す

るも能はず然るに斯の如き忠勇の將卒を以て旅順の攻城には半歳の長日月を要し多大の犧牲を供し奉天附近の會戰には(以下二十六字を抹殺したが、意味は「兵力と彈藥とが缺乏せしため」といふのであつた)又敵騎大集團の我が左側背に行動するに當り之を擊摧するの好機を得ざりしは臣が終世の遺憾として恐懼措く能はざる所なり。

大將自作

凱旋軍歌

自筆の凱旋軍歌

今や闕下に凱旋し戰況を伏奏するの寵遇を擔ひ恭しく部下將卒と共に天恩の優渥なるを拜し顧みて戰死病歿者に此の光榮を分つ能はざるを傷む。茲に作戰經過概要死傷一覽表並に給與及び衞生一般等を具し謹で復命す。

明治三十九年一月十四日

第三軍司令官男爵　乃木希典

陛下は此の復命を聞召され、いと御滿足の體に見えさせられたが、別殿に於て酒饌を賜はり、正午退出、直に參謀本部へ出向いた、當時

一御紋附金時計　一箇
一御目錄　一封

の恩賜があつた、同時に左の勅語を賜はつた。

卿第三軍ヲ指揮シ堅固ナル旅順要塞ヲ攻略シ且同港ニ據レル艦船ヲ擊沈シ爾後各地ノ戰鬪悉ク偉功ヲ奏シ克ク其ノ軍ノ任務ヲ達シ洵ニ朕カ望ニ副ヘリ朕今親シク作戰ノ經過ヲ聞キ更ニ卿ノ勳績ト將卒ノ忠勇ヲ嘉尙ス

大將の復命書には、部下の忠勇義烈を說いて、自己の戰功を少しも說かぬ、さうして作戰計畫の失策を寸毫も秘密にせぬ、幕僚中には「それまでに爲さらずとも宜くはありませぬか、唯戰利を得た事のみを御復奏になれば、お上は御滿

足あらせられませう」と云ふたが「總て事實を奏上せねば、眞の復命ではない」と云つて、終に悉くを記述した。
夫から參謀本部に至り午後二時東宮御所に參り、最後に赤坂の自邸へ入つた。

（三）

大將が自宅へ入る前から、赤阪區長代理詫摩武彥、奬武義會員、府市名譽職員百餘名、樂隊を先頭に旗幟を押立て、邸前に立つて居た。大將の通行せられる道の兩側には、青山小學校を始めとし、附近の小學生徒が數千名堵列して、萬歲を呼び立てた、大將が邸內に入つた時は、玄關前石段の右側に一門の乃木高之湯地定基、靜子夫人の順序に整列し、左側には親戚知己の人々立つて出迎へた、大將はつか〳〵と門へ入つて、此等の人々に擧手の禮を爲しつゝ、式臺に就かうとして、石段に右の一步をかけた時、振り返つて靜子夫人に一瞥を與へた、靜子

夫人は俯伏き勝に兩手を疊んで立つて居た、大將の一瞥は眞の一瞬間であつたが、清しい目に夫人の顏を見入つた後、ずッと式臺へ進み入つた、此の一瞥は眞の一瞬の間であつたけれど「永の間留守をさせて、さぞ苦勞したであらう、二兒の戰死を聞いて、さぞ悲嘆に呉れたであらう」との深い情が霞の如く罩つた、此を見た人々は何れも大將の心を察して、涙に暮れぬ者もなかつた。

凱旋軍人の家庭では、此處でも彼處でも、歡迎の準備に忙しかつた、知己親類一門の人を集めて、園遊會に類似した催しをする者もあれば、座敷の粧飾、庭園の手入、それ夫に趣向を凝らす向もあつた、そこで或る人が靜子夫人に向つて「お宅では何樣にして大將を御歡迎になりますか」と尋ねた、すると靜子夫人は宅では何の趣向も致しません、只廐の掃除をして良人の歸りを迎へるつもりでございます」と答へた。

靜子夫人は大將の心を知つて居た、大將と共に苦闘惡戰の場數を經て來た馬を迎ふべく廐を掃除するのは、此上もない好い術であらうと思ひ付いた、金

閑院宮殿下と乃木大將

銀珠玉で座敷を飾るよりも、名花奇石て庭を作るよりも、好い酒を調へるよりも、甘味い料理を盛るよりも、眞心から馬を迎へるのが、大將の心に協ふ事を知つて居た、大將の歡迎として、廐を淸く掃除するのを、第一の方法として居た大將の居間には、勝典保典の遺骨が祀つてあつた、座敷一ぱいの客に向つて「今日は好い下物があるから、十分呑でくれたまへ」と大將は云つた、さうして一升德利の酒をすすめた、好い下物といふのは二兒の遺骨の事であつた、併居る人々は大將夫妻の胸の中を察して、流石杯を取る者もなか

つた、大庭中佐は「何うも此の席でお酒は戴きかねます」と云つた、大將は笑つて弱いことを云ふのう」と云つたが後は一言もなく默して居た。
大庭中佐は遂に席に堪へずして辭し去つた、大將は疲れたからとて午後七時伏床に入つた。
旅順開城の時、ス將軍から贈つた白馬「壽」栗毛「紫」の二名馬は、夫人の心盡しで清く掃除せられた廐に入つた、大將當時の詩に

皇師百萬征「强虜」、野戰攻城屍「作」山、
愧我何顏看「父老」、凱歌今日幾人還、

これにも大將の面目が窺はれる。
各宮殿下からお見舞の使者を遣はされたに對し、大將は翌日午前九時家を出て、伏見宮、有栖川宮、閑院宮、山階宮、久邇宮、梨本宮、北白川宮等の御邸を訪問した。
凱旋後第三軍司令部は、陸軍戸山學校内に置かれた、復員の終るまで、深く部

下を戒め、戰地にあると同様の心得で事務を執れと命じ、大將自身も毎朝八時出勤して事務を取つた。

その年一月十八日參謀本部定員外配屬となり、同じき二十六日軍事參議官となる、戰功に由つて功一級金鵄勳章(年金千五百圓)を賜はつたは、四月一日であつた、七月六日第五、第六、第十二師管の特命檢閲使を命ぜられ、八月二十五日宮内省御用掛となり、九月八日普魯西國皇帝からフーハ、ル、メリット勳章を贈られた。

凱旋後は戰死者の遺族を訪問して、能きるだけ慰めもし、又戰死兵の墓に詣でて、心から冥福を祈つた「必竟お前等の子弟は此の乃木が殺したやうなものである、腹を切つて辯解をせねばならぬのであるが、今は時機でない、やがて乃木の一命を君國に捧げる時があらう、その時はお前達に對して乃木が大罪を謝する時である」と誠を盡して物語るのが常であつた。

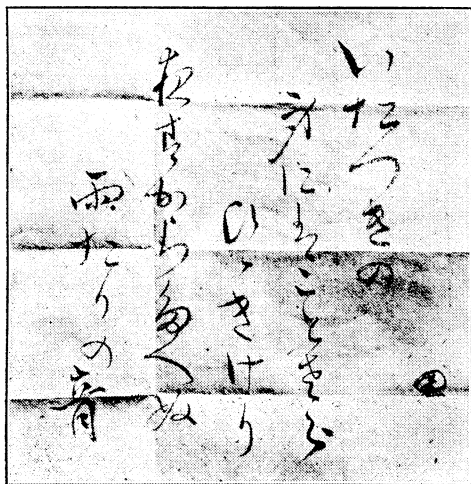
（四）

その年の十月であつた、功山寺山の紅葉色づき、外浦の葦の葉西風に戰ぎて、秋氣壇の浦の全面を覆ひ盡す頃、大將は鄕里長府へ歸省した、凱旋以後初めての歸鄕と云ひ、功勳一世を蓋ふ大將軍が錦を衣て歸るのであるから、長府町は云ふに及ばず、附近の有志者數百名幟を樹てゝ出迎へたが、如何な場合にも大袈裟な歡迎沙汰を歡ばぬ大將は、孤劍飄然と停車場を出で、直に俥を命じたが、途中に中學生の整列するのを見て、思はずも俥から飛んで降り、叮嚀に擧手の禮をした後、自ら號令して分列式を行ひ、そのまゝ毛利子爵の邸へ入つた。

大將の歡迎會は、大將に思ひ出多き二の宮神社を境內で開かれた、二十五錢の折詰に、正宗の一合壜一本といふ獻立に、遺憾なく乃木式は發揮された、大將は定刻に會場の神社前へ遣つて來たが、正面に歡迎の大綠門が樹られてあるのを見、土地の有志者を近く呼んで「此の綠門は何ですか」と尋ねた、有志者は聲

に應じて「閣下を歡迎する意味に於て建てたのであります」と云ふと、大將は顏を蹙めて「それは困る、私のために作つた緑門を神社正面に樹てる筈はない」と云つて、その下を潜らなかつた、有志は慌てゝ作りかへた。

大將は嚴格な中に、何んとも云へぬ溫味と、何とも云へぬ趣味とをもつて居た、こ*

大將詠

（伊勢二見　清水石仙氏藏）

*の時長府から東京へ歸るまでの消息は修善寺の旅館から桂彌一へ贈つた消息に盡されて居る、こゝに揭げて大將の半面を窺つて見やう。

拜呈　先般參府ノ節ハ諸事御懇情多謝多謝午後白根少佐ノ介抱相受三田尻着候處巡査來リ曰ク署長不在云々ト答ヘ署長サンヨリハ赤帽入用故呼ビ吳レヨト申候

處彼レ頗ル撫然タリ又曰ク上等旅店申付置キ候ト答フ夫ハ甚ダ迷惑ニ存ズト直ニ停車場直前ノ小店ニ入リ障子ノ破レニハンケチヲ押シ込ミ湯豆腐トドブロクヲ命ズドブ無シ飲食シ了ッテ兩人共軍服ノ儘蒲團ヲ破リ二時間許リ眠リ又々廣島驛ニテ最近ノ一小店ニ飛込ミ朝食シ呉ニ至ルヤ朝早キ故鎭守府ヨリ中佐副官ノミ出迎ヘ直ニ江田島ニ渡ル同學校ニテハ始業式ニ小生ヲ迎ヘラレ飛雪粉々中學生隊ノ出迎ヘ其後諸式施行ニ參列午後三時間各授業ヲ見ル立チ詰メニテ四時ニ至リ吹煙一プク夫ヨリ書類ノ點檢校內ニ一泊校長ト談ジ十一時ニ至リ候明朝ハ早ク脫出シテ生徒ノ未ダ起キザル前ヨリ大小便ノヤリ方ヨリ視察シ飲食堂ノ模樣ヲ見、其後自分朝食ヲ終ヘ八時ヨリノ授業巡視昨日午後ノ如シ午食後告別シテ呉ニ渡リ各工場ヲ巡覽司令官ノ案內ニテ五時半ニ至リ直ニ停車場ニ參リ梅田驛ニテ又湯豆腐ヲ命ズ白根少佐、御堀少尉此マデ來ル且蠣飯ヲ命ジテ大ニ食セントス壯士等我ニ及バズ十一時ノ汽車ニテ出發セリ是ヨリ先キ田中大臣

ノ事ヲ新聞ニテ知リ是非京都ニテ面會ノ要アリ大阪ニテ電話ヲ利用シ京都驛ニテ目的ヲ達ス故ニ大阪ニテノ希望ヲ達セズ名古屋ニ至リ土曜日ナレドモ午後一時直ニ幼年校ニ飛入リ四時半迄視察ヲ遂ゲ又停車場前ノ小店ニ湯豆腐最中、中將少將其他來リ唯々湯豆腐ノミニテ十一時過ル迄飲ミ且談ジ昨夕旅費盡キタル故修善寺マデ送ルベキヲ命ズ十三日夕修善寺ニ至レバ愚妻之ヲ持チ來リ居ル此ニテモ又俗了極リ清閑ノ望ミヲ達スル能ハズ之ヨリ以後ハ如何ナル明案ヲ得ベキヤ先ヅ當惑ト申迄ニ候

十月十五日　希典

桂彌一兄尊下

大將の面目躍如たるを見るではないか、途中に旅費の缺乏するは、前にも記した如く、囊中の勘定は其方除にして、病傷兵や軍人や遺族にばつばと惠み遣るからであつた。

時に由ると、洗ひざらしの飛白の綿服に兵兒帶をして、地方の村役場や郡役

所へ顔を出す事がある、さうして軍人遺族の有無生活の狀態などを尋ねて、相應の金子を與へるのが例であつた、神社へ參詣する時も同じ態度で、好んで金子を獻納するが、絕えて姓名を告げる事をしない、中には大將の容貌を見知つて居る者があつて「あなたは乃木閣下ぢやありませんか」と尋ねると「只無名氏として取扱つてくれ」と答へるのであつた。

學習院長時代

(一)

大將が學習院長を兼任したは、四十年一月三十一日の事であつた、此時先帝陛下から

いさをある人を敎への親として
　　おほし立てなん大和撫子

の御製を賜はつた。

さうして八月三十日從二位に叙せられ、九月二十一日勳功に由つて特に伯爵に陞せられた。

第三軍司令官に對する恩賜金を以て金時計約三ダースを天賞堂に注文し「頒恩賜」と彫刻して、幕僚であつた將校達へ贈與した、それも他の手を煩はす事はせぬ、自らその人の家に尋ね行き、玄關口から内を覗いて「御主人はお宅かね」

と問ひ、在宅なれば對面の上手渡し、不在の時は「これを渡して置いて下さい、乃木です」と簡短に云ひ置いて、飄然と歸るのであつた、「乃木さんの金時計配達」と云ふ事は、當時の佳話として軍人界に喧傳された。

その頃の學習院は四谷見付の外にあつた、大將は每朝自邸から騎馬で通勤したが、雨の降る日は徒步であつた、頭巾も外套もビショ濡になつて通ふことが屢次あつた、晴た日は徒步しても、雨の日は騎馬か俥に乘るといふのが、まづ普通の人情であるべきに、乃木大將は反對である、全體何ういふ理であらうと云ふので、或る人がその事を聞いて見ると「ナニ深い理由は無い、雨の日に乘て出るのは、馬が不憫さうだからさ」と答へた、將軍が生物を愛するのは殆んど天性と云ふべきであつた。

その年七月二十一日、生徒を連れて相州片瀨の海岸に出向き、こゝに始めて天幕生活を行つた。

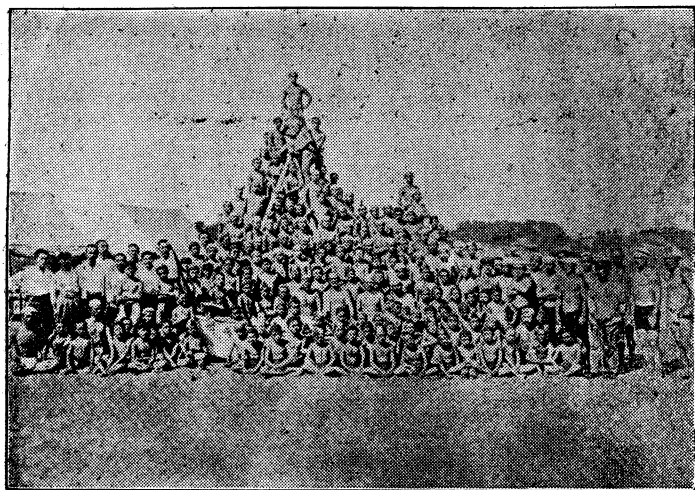
大將の景慕して居る山鹿素行に贈位のあつたは、その年十月の事であつた、

飛驛吉城郡上寶村大字岩井戸にある五十丈の巨巖に
彫りつけたる大將揮毫の文字（一字の大さ二尺四方）

大將は自費を擲つて贈位祭を行ひ、且つ自ら祭文を讀んだ、大將は素行の祥月命日(九月二十五日)に必ず素行の墓(牛込早稻田辨天町の宗參寺にある)へ詣で、眞心から禮拜した、素行會が組織されたのも大將の力である。

大將が生徒全體に對する愛情は、宛ら慈父の子に於けると同じであつた、時には生徒を引率して演習見物や野外演習に出る事がある、大將の美しい慈愛は斯る場合に遺憾なく流露するのが例であつた。

旅宿は成るべく、生徒と同じ家に定めるのであつたが、土地の狀況でさう行かぬ事に屢次あつた、旅舍とは云つても、原より十分な設備があるのではないから、蒲團も、夜具も、不完全な物ばかりであつたが、大將は夜の二時頃——何んなに寒くても、必ず起きて生徒の寢所を見廻る、假へ旅宿が異つて居ても、雪や霰が降つて居ても、徒步で旅舍を訪問して「風邪を冒いちや可けない、溫にしなくちや可けない」と氣を注け、幼年の生徒に對つては「草臥れやせんか、足が痛みはせんかね」と手を取つて慰め尋ねる事もあつた。

相州片瀨に於ける學習院水泳部の裸體の大將と學生（二列目の中央に大將を見る）

大將の辨當は例の乃木一流の握飯であつた、生徒の宿舍へ遣て「一所に飯を食はう」と云つて、腰から竹皮包を取り出すのが例であつた、就眠の時學生等が「お床を取りませう」と云ふと「蒲團なんぞは要らない、演習は實戰も同じことだ」と云つて、床の框を枕に寐る、極寒の夜も外套を掛けるばかりであつた。

（二）

大將は酒が好きであつた、同時に草が好きであつた、決して良い品

は用ひなかつたが、酒と煙草とは大將の寂しさを破る唯一の道具であつた、その大好物の酒煙草も場合に因るとすぐ廢める、學習院が目白の新築校舍へ移つて、自分も院內生活をするやうになつた日から、斷然酒と煙草とを禁じて了つた、記者の所持して居る「桂彌一宛」大將の書簡には「學校生活を始めてから、禁酒禁煙を斷行したので、身體も健康になつた」と書いて居る、大將の克己心は何れほどの力があつたかも知れぬ。

此の院內生活中には、他の模範とすべき事が多くあつた、大將は絕えて院長室へ入らなかつた、一般に學生と共に寄宿舍生活をして、學生と同じ物を食ひ、學生と同じ夜具を用ひ、朝起きるとすぐ鎌を採て、構內の草を苅るのであつた、大將の朝起は有名なもので、天のほの〳〵と明けかゝる頃、もう單獨で草苅を初めて居る、多くの寄宿生中でも「院長の何時起きるか」を知つたものは多くなかつた。

四十一年五月二十七日御用有之、滿洲へ差し遣さる旨の沙汰があつた。

この内命は早くから受けて居たので、夫となく準備をして居た、此の時は靜子夫人も同伴する事になつて居た、夫人は海を越えて、兩子息の戰死した土地へ行くのである、その時の感慨は何樣であつたらう。

大將揮毫の團扇

準備中に斯樣事もあつた、旅行用の大トランクを三越へ注文した、三越からは大將出發の前日(六月一日)に屆けて來た、見ると K. Nogi. と記してあつた、副官が見て「これは可けない、大將の名はキテンと讀むのぢやなく、マレスケと讀むのであるから M. Nogi でなくては可けぬ、時日がないからすぐ書きかへて來いと命じた、すると大將がそれを聞いて「それでよい〳〵、Kは長男勝典の頭字になる、

恰ど戰沒者紀念碑の除幕式に臨むのだから、そのトランクを勝典の物と思ひ、勝典の靈を伴つて行くと思へば差問へない」と云つた。大將が兩子息に對する愛情の濃かなことは、此の一事でよく知れる。

越えて二日大將は夫人同伴、松木副官、參謀本部詰靜間工兵中佐を從へて、午前七時二十五分新橋を發した、カーキ色の軍服に鐵の眼鏡をかけて、絕えず本を讀んで居た。

三日午前九時神戶へ着いて、大阪商船會社支店の樓上に休憩し、大連航路の新造船天草丸を一見した上、楠公社へ參詣して、午後一時半出發、四日午後馬關着、同二時出帆の神戶丸に乘り込んで大連に向つた。

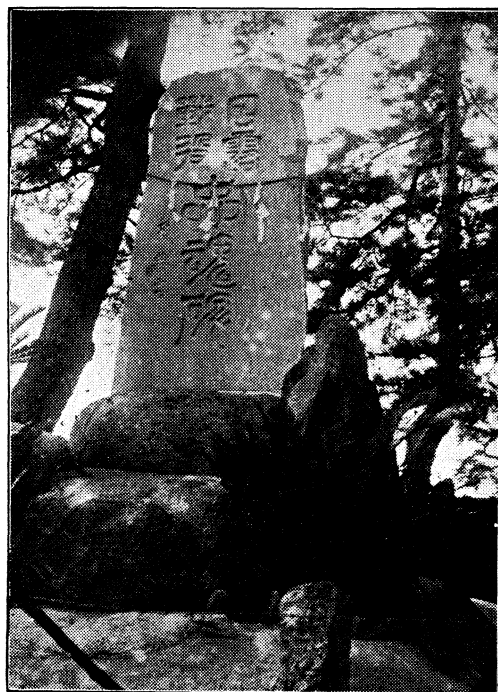
大連に着いたのは六日朝であつた、一たん大和ホテルへ入つて、午後六時半の列車で旅順に向ひ、旅舍に宛てられた都督府將校集會所に入つたが、翌日は隨行員を伴つて、老鐵山下田家屯に露國の墓地を見た、三年前には幾萬の健兒を率ゐて、砲烟彈雨の間に驅逐した處、今は朝日の光に裹まれて、折柄初夏の風

に薫る青葉の色が涼しく見えた、大將は暫くそこに立つて居た、昨日を思ひ、今日を偲んで、云ひ知れぬ感にも打たれた。

それから直に白玉山頂の納骨堂に詣で、工事中の忠魂碑も見た。

八日は除幕式場から、二度までも經た戰場の跡を弔つた、當時の狀態とはまるで變つた山や町や野や丘やを過ぐるごとに、大將は當年苦戰の跡を追思せざるを得なかつた。

大將揮毫の忠魂碑

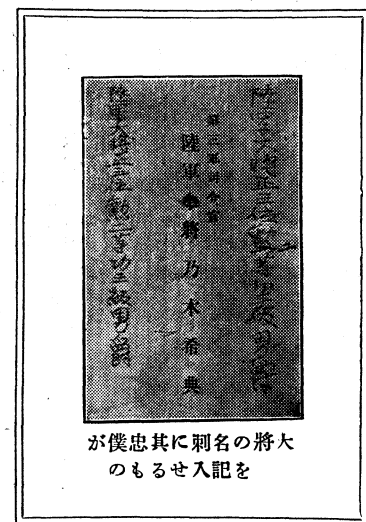
十日には除幕式があつた、これは戰沒露兵の爲めに、日本が建てたのであつ

たから、露國西伯利亞軍團長ゲルングロス中將も參列した、露國からの希望もあつて、祭典は總てを露國の儀式に取つた。

式は十時から始まつた、大島都督の式辭につづいて、税所建設委員長の報告があつた、終つて都督の除幕となり、引續き祭典に移るのであつた、大將以下露國陸海軍代表者の參拜があつた。

ゲルングロス將軍は二三歩を進んで、日本帝國及び日本皇帝陛下の萬歳を叫ひ、彼彼の參列員悉くこれに和して、ウラー〳〵の三唱もあつた、次には大將が二三歩進んで、露國及び露國皇帝陛下の萬歳を三唱して式を終つた。

正午から食堂に入つて紀念の寫眞を撮た、立食の後、日露兩國の將校は馬車を列ねて白玉山に登り、我が納骨堂に參詣して、一たん宿舍に引き上げ、午後七時から階行社で晩餐會、九時から夜會を開くことになつた。

此の時ゲングロス將軍は大將に向つて「貴國が露軍戰死者のために、此の壯麗なる墓碑を樹てられたるを感謝す」との意味を述べた、大將はそれに對して

「貴官の御挨拶を聞いて此上もなく滿足致す、貴國陣沒將士の墓前に對する本官の心情は、實に云ふに堪へざるものあり、前に旅順開城の砌、ス將軍に會して共に麾下幾萬の精靈を傷んだ事があつた、本官はス將軍に向ひ、斯く多數の死體を整理するは、短日月に於てよく爲し得べき事ではない、されど本官は誠意を以て完成を期する事を誓はう、もし夫について貴官*に希望あらば何なりとも聞き置きたしと云つた時、ス將軍は、いや別に希望とてはないが、只露國人の建設した永久の墓に改葬されよと云はれた、將軍もし此處にあらば、必ず滿足せらるゝであらう」と云つた。

大將の名刺に其忠僕が
を記入せるもの

此の夜會の闌になつた時、大將は寺內陸軍大臣へ向け「本日の祝典は露國側大滿足の中に結了せり、此段上奏を乞ふ」との電報を發した。

大將は極めて元氣であつた、露國の將校に對しては殊に愉快に話をしたが、その中にヴアーネーフといふ大尉が居た、旅順籠城中には一方の指揮を司つて奮闘した結果、四十餘所の重輕傷を負ひ、我軍の捕虜となつて松山の收容所に居た事があるから、日本語を巧に操る、大將は見るより駈け寄つて「おう〱」と云ひながら強く握手をした、ヴ大尉も歡んで幾十度となく盃を交したさうである。

十二日午後三時から大島都督の告別晩餐會に招かれ、六時四十分發の列車で大連へ引き揚げた。

そして大連では市内小學校を參觀し、正午出帆の鐵嶺丸に搭乘、十五日午後八時下の關に着、翌日長府を訪問、十七日午後出發、十九日新橋へ着いて、午前十一時參內、御座所に於て上奏、午後一時半退出した。

學習院時代の大將には記すべき事が澤山ある、けれど夫は他日に讓つて、直に殉死當時の事に移らう。

殉死

(一)

明治四十五年七月十九日、大將は學習院生徒を率ゐて相州鎌倉へ水泳練習に行て居ると、突然陛下御病惱との報知があつた、此の報を聞くと共に、大將の面上には一むら雲がさつと掛つた、全生徒及び全職員に渡つて、誰の面にも雲のかゝらぬは無かつたが、殊に大將の面上には濃い雲が被さつたのであつた。

その日急ぎ東京へ歸つて直ちに參内御見舞ひ申し上げた後、晝夜宮中に詰め切つて、御容體を伺ひ奉り、赤誠を罩めて御平癒を禱つた、實に御發病以來、崩御に至るまで、崩御より御大葬當日まで、都合五十六日の間に、百三十回の參内をして居る、普通の奉伺者は宮內省備付の帳簿に姓名を記すだけで、すぐ引き返すのであつたが、大將は謹んで御座所を拜して、一時間ほどづゝ、眞心から御惱平癒の御禱を捧げ、さて侍從武官の詰所へ入つて、御容體を詳しく問ひ、然る

後つゝましやかに退出するのであつたが、崩御の後は、まづ殯宮を拜したる後侍從武官の詰所へ入つて、御惱當時の御有樣から、崩御前後の事態を問ひ、時には自らも聖德海の如かりし事などを語り出で、愁の雲に鎖されながら退出するを例とした。

大將が早く殉死の覺悟を極めたのは、崩御後三日目に自邸の標札を取り外したのでも知れる、然もその標札は何處へ遣られたのか、誰の目にも着かなかつたさうである。

九月一日宮內省の掛り官からコンノート殿下の接伴掛を勤めらるゝやうと內談をした時、大將は困じ果てた面地で「私は先帝陛下の御供をする心だから、或は十分に職責を盡すことが絕きぬかも知れぬ」と云つた、掛官は御大葬の御供に加はらるべきお心であらうと推量して「その位の差繰は何の樣にも付けます」と云つた、すると大將は滿足したやうに「さらば謹んでお受けをしやう」と承諾した。

人未嘗無思其父祖既有念
其父祖則未嘗無念所其由
出故遠乃思其本始近乃慕
其父祖而祭祀之禮起況本
始之有大功父祖之有大教
乎　中朝事實　源希典謹書焉

大將が江州沙々貴神社へ奉納のため小堀鞆音畫伯に佐々木高綱畫像揮毫を乞ひ之に高綱の旗印「蜂起」と「中朝事實」中の語を自書し三幅對として表具の竣成を急ぎ居たるが昨年九月九日之を自邸の床の間にかけ令弟大館集作氏を招き鞭を以て詳細に説明し終つて氏に奉納のことを託されたるものなり(沙々貴神社藏)

九月八日であつた、大將は山縣公を目白の椿山莊に訪問して、美濃野紙五枚ほどに認めた漢文の冊子を取り出し「恐れながらこれを今上陛下に獻らせたく思ふ、どうか御配慮を願ひます」と云つて、更に細長い白封筒に入れたのを手渡した、公は委細承知の旨を答へて、右の書類を受け取たが、大將はその擧動に何となく誠意の足らぬ様な感じがした、山縣公に託して置いて、御手許へ屆かぬ事があつては、切角の苦心も水の泡に

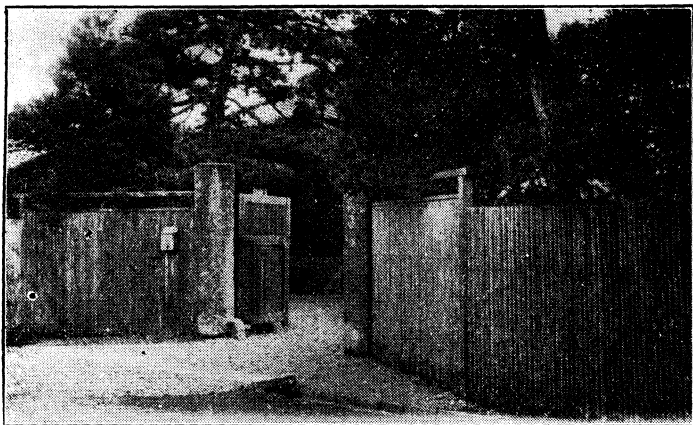
なる、と思つたのか、御大葬當日の朝夙く、殯宮に御別れを告ぐべく參內した。

此の時はこれが現世の御別れと思ふので、暫時の間御前に跪いて、一心に何事をか申し上げて居た、そして一たん詰所へ退いて後山縣公に託したと同じ物を丁寧に帛紗包みとし、日頃から親しくする某侍從に面會し「此の一書をお上御手許へ奉らんと思ふ、願くば足下上奏の手續をして下さらんか」と頼んだ。某侍從はよく大將を知つて居た、同時に忠義硬骨の人であつた、大將の氣色の常ならぬを見て「宜しい、一身を賭して御手許へ獻らせませう」と答へた、大將は滿足の體で退出した。

此の上書には何樣事が認めてあつたか分らぬ、されど大將の誠忠、大將の人格、大將が皇室に盡す一片の眞心、やがて一字々々に籠つて、陛下日常の御心得となるべき事に注がれて居たらうと推察される。

（二）

自刃當日の大將邸（赤坂新坂町）

盛んなる大將の葬儀

此よりさき、大將は江州沙々貴神社へ奉納すべく、小堀鞆音に先祖佐々木四郎高綱の像を描かせ、自ら高綱の旗標と、中朝事實の一節とを認めて、これを

三幅對に表裝させた、常には餘り催促などせぬ人であつたが、此ばかりは急きに急いて「表裝はまだ成きぬか」と時々催促せられる事があつた。

表具屋から表裝の出來上つたのを持て來たのは、九月十日の午後であつた、大將はそれを二階の居間の壁に掛けて見て居る處へ、御大喪拜觀を名として呼びに遣つた弟の大館集作が到着した、集作は大將の末弟である長府在の谷山で桂彌一の經營して居る殖林事業に與つて居た。

「好い處へ來た、お前に見せるものがある」と云つて三幅對の前へ伴れて行き、鞭を取て文章の意義を講義し、且つ先祖の偉功を語り聞かせた上「お前が長府へ歸る時、この掛物を沙々貴神社へ奉納するのだ」と吩咐けた。

集作は何の氣も付かずに大將の詞を聞いたが、薨去の後、初めて心付いて、自ら沙々貴神社へ持つて行た、さうして先祖からの氏神へ献納した。

その十日には、迪宮裕仁親王殿下が陸海軍少尉に御任官あらせられた、大將は午前十時迪宮御側へ參候して、親しく拜謁を願つた上、まづ御任官の御喜び

を申し上げ、自費で飜刻した中朝事實を献上し、やがて詞を改めて「此書の要點には希典自ら朱點を付けて置きました、將來御位に即かせらるべき時、御參考となるべき事多かるべきを確信仕る、何卒御精讀あらせらるゝやう」と言上し、續いて雍仁、宣仁兩親王殿下にも拜謁し、一時間餘に亘つて、さま〲御爲になるべき事を言上して退出した。

十二日心靜に遺書を認めて後、長く副官をして居た山田龍雄(今の少佐)に遺すべく「熟慮斷行」の四大字を書いた。

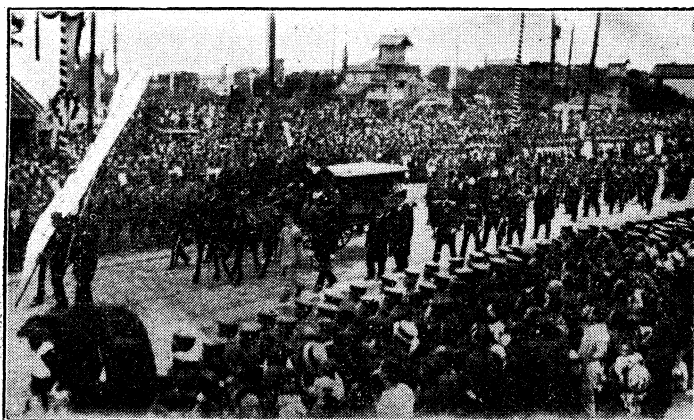
山田副官はその日の朝コンノート殿下が御歸國の途次、旅順を御檢視あらせらるゝにつき、同地方の地圖に英文を記入すべき用事あれば、午後四時頃に來てくれよ」との命令を受けて居た、由て副官は時刻を違へず訪問すると、大將は例より元氣よく莞爾して「地圖は陸軍省へ委托したから、後で熟く聞き取てくれ、今日は郷里から舍弟も來て居る、何もないが蕎麥會を開くつもりだ、君も付き合つてくれ」と云つた、副官はこれが長い離別を告ぐる爲めの酒宴とは心

付かぬから、委細を心得る旨答へて、そのまゝ同邸に止ると、間もなく白須關東都督府參事官も來る、大將夫妻、それに集作など四方八方の話をして待つて居ると、暫くして蒼麥も來た、大將も靜子夫人も、始終笑を含んで、眞心から來客を饗應た、副官は大將に膝を向けて

「閣下に御示教を乞ふことがあります、外ではありませんが、私は旅順激戰の實驗から見て、人間の勇氣には先天的と後天的との二つあるを知りました、先天的の勇氣はその人特有の至寶として大切にすべきは勿論でありますが後天的の勇氣は各自の修養に由て得られる事を、旅順攻擊の際死生の間に覺悟しました、修養の方法は思慮斷行にあります、由て私は家の壁にも、劍の柄にも、悉く此の四文字を記して、夢寐の間も忘れないやうにして居ります、閣下のお考へは如何でせう」と云つた。

すると大將は「良い考へぢや、日本一の考へぢや、人間はその勇氣が無くちや可けない」と力を籠めて云つて「然し私も西南戰爭で軍旗を失つた、これも日本

盛なる大將の葬儀（其二）

同上（其三）

一ぢやねえ、は、、、」と大笑した、けれど今の今、その人の爲めに認めた「熟慮斷行」の事は曖氣にも語らなかつた。

（三）

いよ〳〵

九月十三日が來た。

大將が朝早く參內(此時は夫人同道)して、殯宮に御別れを告げ奉つた事は前に記した、長の年月奉伺した宮中も、これが現世の見納めと思つたのか、午前八時から九時頃までゞあらうと思ふ所を拜觀し、更に十二時近くまで宮中に留つて、交際ある大官に餘所ながら暇乞ひをした。

服喪中に剃刀を採るのは、武士の禮にないと云つて崩御後一度も剃らなかつた髭は蓬々と面の半を埋めて居る、殊に先帝御惱の當時から、深い〳〵苦勞をしたのが自らに現れた、それや此やが目に入つたのであらう、正午過ぎ大將が歸邸すると間もなく、寺內伯から電話が掛つて「痼病の痔疾が惡いのぢやないか、それを押して長い御道筋を奉送するのは、定めて苦痛であらうと思ふ、殊にコンノート殿下接待掛を勤めて居らるゝ事ゆゑ、同殿下と共に先着ある方宜しからん」との旨を云つて來た。

大將からは厚意を謝する旨返答した、けれど日頃の氣質を知つて居る寺內

伯は押して奉送するかも知れぬと思つて、更に書面で前の意味を云ひ遣つた、大將からは「諸君から同樣の御忠告を受けても居るから、御厚意に從はう」との返事をした。

然も大將は長い御道筋のそれよりも、まだ遠い御跡を追ひ奉つた、寺内伯は嘆息して「乃公には乃木の心が見えなかつた、兒玉が生きて居たら、或は看破して居たかも知れぬ、乃公は遂に及ばなかつた」と云つたさうである。

宮内省から歸るとすぐ大將は兩手にカステーラを持つて厩を見舞た、二頭の馬は高く嘶いて、大將を迎へるやうにした、大將は心を籠めた名殘の糧を平等に與へて、その鼻づらを撫でゝ遣つた、初秋の風は庭木の繁みからおろして來て、言はぬ馬の鬣を吹いた、馬は前足を幾度も鳴らした、大將は思ひ切つて厩を去つて、つか〳〵と玄關口へ歩みかけたが、復た振り返つて、しみ〴〵と馬を見た、馬は悲げに嘶いた。

大將が最後の寫眞を撮たのは此の日の朝であつた。

赤坂の寫眞師秋尾新六は、前日からの依賴に由て、七時前に出て來た、靜子夫人が髮を結はれたのはそれよりも前であつた、多年出入した髮結は、夫人の爲めに髮を取り上げた、夫人は結ひ立てのお下を鏡に映しながら「今日は御所へ上つて、夕暮から御大葬のお見送りをするんですが、どうか持て吳れりや好いがね」と云つた。

大將は陸軍大將の正服、靜子夫人は、白襟の黑の裲衣袴を穿いた姿「コンノートト殿下に獻上するから注意して吳れ」と云はれた。

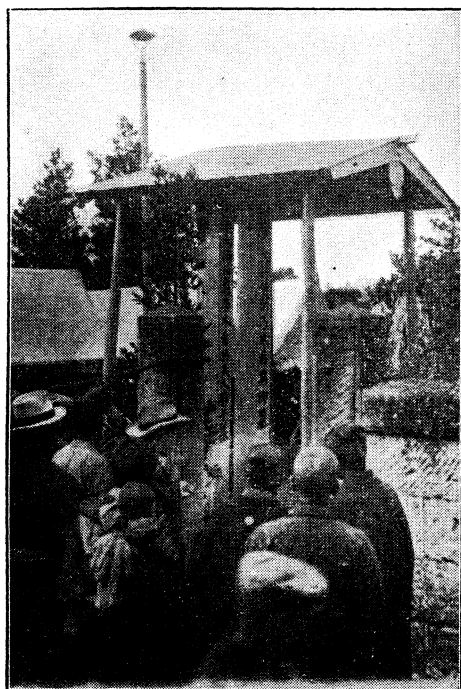
大將夫妻は此だけで止める心であつたが、寫眞師が「室內の御用だらうと思つて、室內撮影の用意をして來たのですが」と云つたのを聞いて「それなら室內でモー一枚撮らう」と云つて、自殺を遂げた二階の西洋室で、大將は正裝のまゝ、圓卓の前の椅子にかゝり、眼鏡を掛けて新聞を讀んで居る所、夫人はその左手に立つて居た、卓子の上には、烟草盆と卷烟草の袋(大將が日頃用ゐられる朝日)とが載せてあつた、違ひ棚に、一口の短刀が置いてあつたといふのは、夫人の用

ゐた月山の刀ではなかつたらうか。

此の寫眞の間、大將は例の如く泰然とした態度であつた、夫人も靜淑に、ニコニコと笑を含んで居たが、レンズに入つた夫人の眼は何處かに腫れぼつたく見えて居たのであつた。

＊

大將墓標

＊

此の撮影中に宮内省の白自動車が廻された、大將夫妻は同乘して參内した。

（四）

乃木邸には多くの客があつた、郷里その他から御大葬拜觀を名として呼び寄せたのであつた、宮中から歸ると、大將夫妻は夫等の人と共に食事をした、大

將も夫人も平生よりは晴々としたさまで、例になく戲言なども云つた。

此の時大將は少量のパンを採つた、夫人は「御飯の方が勝手ですから」と云つて何も食べなかつた。

やがて時刻が迫つて來た、客は皆な出て行つた、夫人は殘りの參入證を馬丁や女中に與へて

「早く御飯を食べて、お前方も拜んでお出で」と自ら給事をして食事させて、機嫌よく出して遣つた。

後は寂寞とした世界であつた、陽は次第に傾いて、淡ら寒さが夜と共に襲つて來た、六千萬同胞の哀傷が雲の如く天を蔽つた。

午後八時十分、轜車の御出門を知らせる第一の砲聲が聞こえると間もなく、赤坂新坂の暗を破つて、二團の靈火が漾ひ昇つた、轜車の前を距る數十間の處から西に折れて、白く蒼く、更に紅く、一直線に京都の方面へ去つた。

乃木家二階の一間（八疊の日本間）に、小さい花模樣のある絨氈を敷いて美し

い文臺を置き、その上に明治天皇の尊影を飾り奉り二基の神酒瓶子を左右に供へて、間に恩賜の金盃を置き、銀製の香爐に香を薫らせて、唐紙に書いた辭世の一首を供へた。

かしこくも慕ひまつらん天津日の
　かけりしみちを只一すぢに

そしてその次の間に、六通の遺書を置いて、更に二首の辭世を認めた。

うつし世を神去りましゝ大君の
　みあと慕ひて我は行くなり

神あがりあがりましぬる大君の
　みあとはるかにをろがみまつる

靜子夫人の辭世

出でまして還ります日のなしときく
　今日の御幸に逢ふぞかなしき

尊影から四尺ばかりを離れて、大將夫妻は立派な最後を遂げて居た、大將は陸軍大將の大禮服の上着を脫いで疊み、白い紐を輪にして首から足へ掛け、體の伸びぬ用意をした後、傳來の一刀大兼光(二尺三寸)を臍の下へ突き立て、左から右へ一文字に切つて、刀の止つた處から一寸ほども上へ切り上げ、更に刀を持ち直して、刃を內へ咽喉を貫き、柄を絨氈で支へるやうにして、其上へ俯伏になつて居た、尖頭が後頸へ五六寸も現はれて、黑い血が一面に流れて居た、面には美しい笑が見え、刀が長かつた所爲であらう、正座した右の足が少し伸びるやうになつて居た。

夫人は白襟に無紋の黑服、鈍色の袿衣に、柑子色の帶を締め、膝をしかと綁つた上、第一に胸を刺したが、肋骨が堅くて思ふやうに刺されなかつた、由つて第二にそのすぐ下部の處を刺したが、十分に尖頭が屆かなかつた、これでは爲らぬと思ふので、第三には左の心臟部を強く刺して、その上へ押し掛つた、髮の毛一筋も亂れず、正座したまゝやはり笑を含んで居た。

押併んで伏俯に倒れた態度は、さながら尊影を伏拝むやうに見えた。

あはれ日は落ちた、あはれ月は落ちた、骸はこゝに殘つて、靈魂高く御跡を慕ひ行く、此の報一たび傳はつて、天下の人悉く泣いた、草木禽獸悉く露に濕つた。

遺言條

第一　自分此度御跡を追ひ奉り自殺候處恐入候儀其罪は不輕存候然る處明治十年役に於て軍旗を失ひ其後死處を得度心掛候も其機を得ず皇恩の厚に浴し今日迄過分の御優遇を蒙り追々老衰最早御役に立候時も無餘日候折柄此度の御大變何共恐入候次第茲に覺悟相定候事に候

第二　兩典戰死の後は先輩諸氏親友諸彥よりも度々懇諭有之候得共養子弊害は古來の議論有之目前乃木大兄の如き例他にも不尠特に華族の御優遇相蒙り居實子ならば致方も無之候得共却て汚名を殘す樣の憂へ無之爲め天理に背きたる事は致す間敷事に候祖先の墳墓の守護は血緣の有之限り

は其者共の氣を付可申事に候乃ち新阪邸は其爲め區又は市に寄附し可然方法願度候

第三　資財分與の儀は別紙の通り相認め置き其他は靜子より相談可仕候

第四　遺物分配の儀は自分軍職上の副官たりし諸氏へは時計メートル眼鏡馬具刀劍等軍人用品の內にて見計の儀塚田大佐に御依賴申置き候大佐は前後兩度の戰役にも盡力不少靜子承知の次第御相談可被成候其他は皆々裁談に任せ申候

第五　御下賜品(各殿下よりの分も)御紋付の諸品は悉皆取纒學習院へ寄附可致此儀は松井猪谷兩氏へも依賴仕り置き候

第六　書籍類は學習院採用相成候分は成可寄附其餘は長府圖書館へ同斷不用の分は兎も角もに候

第七　父君祖父曾祖父君の遺書類は乃木家の歷史とも云ふべきものなる故嚴に取纒め眞に不用の分を除き佐々木侯爵家又は佐々木神社へ永久無限

に御預け申度候

第八　遊就館へ出品は其儘寄附致し可申乃木の家の記念には保存無此上良法に候

第九　靜子儀追々老境に入り石林は不便の地病氣等の節心細くとの儀尤もに存候故集作に讓り中野の家に住居可然同意候中野の地所家屋は靜子其時の考へに任せ候

第十　此方死骸の儀は石黒男爵へ相願置候間可然醫學校へ寄附可致墓下には毛髪爪歯(義歯共)を入れて充分に候(靜子承知)

○恩賜を頒つと書きたる金時計は玉木正之に遣はし候筈なり軍服以外の服裝にて持つを禁じ度候

右の外細事は靜子へ申付置候間御相談被下度候伯爵乃木家は靜子生存中は名義有可之候得共呉々も斷絶の目的を遂げ候儀大切なり右遺言如此候也

大正元年九月十二日夜

希典

湯地定基殿
大館集作殿
玉木正之殿
靜子どの

系圖

乃木家の系圖は前編の始めに大略を記したが、江州安土村の沙々貴神社に大將の寄附した自筆の乃木系圖と、玉木正之の書いた乃木玉木兩家の系圖とがある、それに據ると兩家の關係が明かに分る、記者は一時此の記事を終るに當つて、乃木家及び兩家の系統を詳記する。

乃木家は人皇五十九代宇多天皇に出て居る、天皇第八の皇子敦實親王の子雅信始めて源氏の姓を賜つたが、宇多源氏（一に近江源氏）の祖先である、雅信の子扶義から成頼、章經、經方、秀實、秀義を經て、四郎高綱に至る、高綱の子光綱が出雲國乃木（一に野木村）に住んだ緣故から、始めて乃木姓を名乘つた、通稱は次郎左衛門尉といふ、後に隱岐守淸養の養子となつた、これが雅信九代の後である。その子左衛門尉泰綱、太郎景光、源次左衛門尉高範、次郎信行、源三郎綱俊、源太左

衞門高常、二郎兵衞高壽、出雲守季綱、孫四郎賴綱、源五郎希綱、七郎賴玄、兵部爲綱三郎幸綱、三郎左衞門利綱、源太夫高利、源次左衞門淸高(畠山尾張守に仕へて明應二年四月河内正覺寺に討死)次郎左衞門秋綱(土岐左京太夫家來)次左衞門高家(美濃稻葉山の城主齋藤左京太夫に仕へて永祿五年十一月小牧山の戰ひに加はり、故あつて自害)三太夫高春(古田兵部へ召し出され、文祿元年朝鮮國で戰死)三太夫高泰を經て九郎兵衞冬繼に至る、それまでは多く佐々木の姓を用ひて居たが、冬繼から乃木姓に改めて、松平越後守及び毛利刑部少輔に仕へ、後お暇を賜はつて生涯を浪人で送つた。

その長男助左衞門段政が藤堂和泉守へ仕へ、三男瑞榮(幼名龜太郎、通稱を傳庵といふ)が旗本平野丹波守の取成を以て、長州長府の城主毛利甲斐守に召出された、これが長府乃木家の祖先である。

傳庵の傳記は詳かでないが、醫術を以て召出されたのは確である、この傳庵の長男春政(通稱金右衞門)が本藩毛利大膳太夫へ召出されて綱廣公五男監物

(元重)のお側役を命ぜられた、乃木家から出た春政が何うして玉木姓を名乘つたか、これには理由がある。

傳庵の妻はお染と云つて京都加茂の神職西村の娘である、若い時から萩毛利家の奥女中を勤め、綱廣公の生母昌壽院附の年寄役を勤め、玉木の局と呼ばれて居た、その總領が若君のお側役に召出されたのであるから、母の勤功を思召されて特に玉木の姓を下されたのである。

春政が召出されたのは、無論江戸の邸であつたが、綱廣公入府の時御供して萩の城下へ入つた玉木家が長く萩毛利家の忠臣として重きを置かれたのは此のためであつた。

乃木家はこれから兩家に別れるから、系圖も極めて複雜になつて來る

傳庵の實子春政は玉木の姓を賜つて、毛利本家へ仕へる事になつたから、乃木家は惣領女おそのに、宗對馬守家來打它壽庵の二男六千代(後に瑞庵)を養子して家を繼がせた、隨安と云ふは此の人である、次の希和(道伯とも)は醫道にも

武術にも長じて居たので、遂に本藩毛利家へ召出されて、知行二百五十石を下され、お手廻組へ加へられた。これで乃木も兩家に別れて、本家は長府家に留り分家は萩の家臣になつた。

此の希和は寶曆二年の生れで、寛政八年九十二歳で死んで居る、二世希健(通稱次郎右衛門)も又長命で、澤山の子供があつた、長男高藏が家を繼ぎ、二男希幸(通稱惣吉)が本家の乃木周久(通稱龍玄)方へ養子に行つた處が希幸は短命で死んだので弟の希次(希健の三男)が跡を繼いだ、これが初名季十郎、後に十郎となつた人で、大將の父である。

されば十郎は本家たる長府乃木家は相續したが、生れたのは萩であつた、萩の乃木家は武人として仕へたが、長府の乃木家は傳庵以來代々醫道を以て事へた、それが十郎、生來武道に心掛厚く、如何にもして武を以て世に立ちたい志願から、文化十三年二月二十八日江戸深川の三十三間堂に於て、六百八十餘の通し矢をした、その事が一家中の評判となり、遂に格別御吟味を以て醫業を免

ぜられ更めて御馬廻に召出されたのであつた、大將は實にその三男(長男源太郎、次男次郎)である。

こゝに人々の注意せねばならぬのは、十郎が少壯の頃は、長藩一方の雄として實學派の首唱者と云はれた村田清風(吉田松陰の師)の盛時で、彼の玉木文之進(松陰の叔父)とは殆ど年齢を同うした一事である。

(終)

乃木大將續編（畢）

乃木大將景慕記念署名錄

（第八團）

所有者

信條

我等は大將の人格を崇仰し、大將の精神を以て修身處世の信條とす。

我等は行住座臥常に大將の精神を自らの心に奉安し、言行一致よく其精神に背かざらんことを努む。

我等は衆に先ちて一身を修養し、一家を肅清し、相依りて漸次社會の健全を圖り、國家の進運に寄與するところあらんとす。

大阪府 伊東佐三郎
大阪市 井上吉松
大阪府 石川敏雄
和歌山縣 生駒國次郎（三十五）
岡山縣 岩崎伊勢一（三十歳）
京都市正親尋常小学校長 泉本宗三郎
京都 服田政治郎
大阪府 伊藤信進 十七歳
大阪市 市川源三郎 四十五才
旅順 池田重雄（三十三）
山形縣 伊藤猪之吉

石原久吉（二十八才）
大阪市 井畑典三郎 二十二才
大阪府 稲垣兼次
大阪府 岩田條助 二十一年
富山縣 井上久三郎 三十年
滋賀縣 稲本喜三朗 二十七年
京都府 池永三治
兵庫縣 今林高太郎 四十四才
大阪府 文字彦一郎（十七歳）
岡山縣 池畑久志 二十七年
京都 飯野恩治

熊本縣 井上大九郎 三十五歳
三重縣 稲田寅太郎 二十七年
島根縣 出川敏親 十九年
京都市立尋常小学校 保護 阪
京都府 伊藤義郎 廿九才
岐阜縣 伊藤良二（二十歳）
奈良県 飯田貞次
大阪市 岩井松吉 三十八年
京都府 岩崎信吉（十六歳）
奈良縣 岩本亮夫 五十二年
京都市 井上麟吉

滋賀縣人 石河勝男
池田文雄
京都市立文尋常小学校長 今村幹
兵庫縣 石橋宗次郎
兵庫縣 今西常太郎
兵庫縣 稲田鮭三郎
大阪府 井上作太郎（二十三歳）
京都府 石井德藏（三十五）
香川縣 石川定吉（四十歳）
京都市 今井貞次郎 三十九才
廣島縣 岩佐清太郎

石川縣 飯田鉄太郎（五十八歳）
兵庫縣 池田馬山（三十歳）
和歌山縣 井上縫之助（十三歳）
鹿児島縣 伊集院彦亮（十四歳）
岐阜縣 伊藤祐三郎（三十歳）
熊本縣 飯富治雄 二十九歳
鳥取縣 板倉良 二十四歳
京都府 岩田富三 十九歳
京都市 市京ぶ之助 四十九才
滋賀縣 今西千代吉 五拾五年
三重縣 石橋喜一（十三歳）

京都市 今岡準三郎
兵庫縣 市場庄介
岐阜縣 磯貝謙造（三十歳）
兵庫縣人 今尾德次郎
京都府 糸井福次 二十五歳
静岡縣 伊藤文一郎（三十九歳）
大阪市 勇萬三郎（三十三歳）
秋田縣 石田文五郎（五十三歳）
次男 勇太郎（九歳）
島根縣 今岡定吉郎
千葉縣 石川照勤

滋賀縣 井上岩太郎（二十九歳）
稲葉宥覺 拜
福岡縣 石松寛（四十四歳）
大阪府 井川源一郎
京都府 飯田俊之助（三十四歳）
兵庫縣 石井菜太郎 四十歳
東京府 石黒清秀（廿五歳）
伊尾秀花
初子
伊藤雄一
大阪市 井上亀吉（二十四歳）

滋賀縣 伊庭慎吉
大阪市 池田一三郎 廿六年
大阪府 泉貞一（十五歳）
京都市 井上仙一郎（十七歳）
石川縣 泉藤藏 二十八歳
大阪府 礒谷李（四十三歳）
大分縣 岩尾惠六（三十六）
兵庫縣 生田元七（四十九歳）
福岡縣 士族 井上龜之助 廿二才
山口縣豊浦郡長府町外浦海岸 礒山部豊作
静岡縣 石川善平 五十五年

西陣尋常小學校長小林幹

滋賀縣 西伊兵衛 [illegible]

高知縣 西脇幸次郎 三十二年

京都府葛野郡西院尋常小學校

京都市 日本活動写真株式會社 撮影部

兵庫縣 錦順 四十才

兵庫縣 西原熊雄 十九才

京都府 西村美津子

京都市仁和尋常小學校長中定次郎

岡山縣 新谷梅香 廿九才

兵庫縣 西田彌兵衛

徳島縣 細川才藏

大阪府 西尾之助 [illegible]

大阪市 堀長重郎

石川縣 堀孝信（二十五歳）

滋賀縣 堀井彌太郎（三十三才）

兵庫縣 細見太郎吉（元）

兵庫縣 北條稔 十八 [illegible]

京都市 平安中學校

兵庫縣 土居新之祐 二十五年

鳥取縣 徳田佐則（二十九歳）

大阪府 土井の収

大阪市 堀芳太郎（十三歳）

大阪市 堀福太郎 二十九年

兵庫縣人 細井喜代松

大阪市 堀川正（三十五歳）

和歌山縣 堀田重三郎 三十二年

高知縣 友村格

熊本縣 中田作造（五十九）

香川縣 徳田源一

岡山縣 徳田愛治 四十二年

香川縣 藤堂政太郎（三十五歳）

朝鮮 友末善一 二十四年

兵庫縣 細見伊佐久 [illegible]

岡山縣 堀口福彦（三十六歳）

京都市初音小學校 堀内文吉

大阪市南區櫻川町五丁目 豊永源七 三十三年

大阪府 土井徳太郎 二十七年

広島縣 東野仲孫 春りユウ

京都市 鳥井清造

愛媛縣 十亀勘一（三十歳）

滋賀縣 鳥居五三郎 三十八歳

佐賀縣 中原勘市

奈良縣 土井利顯（四十五歳）

兵庫縣 大村弘毅 十五歳
京都市 吉家 小野吉家
京都 若林郁文
京都市 渡邊淨[illegible] 三十三年
大分縣 渡邊德太郎 三十九年
大阪府 和田安蔵
滋賀縣 服利（二十歳）
函館 函渡邊久雄八歳
大阪府 和田嘉吉（四拾六歳）
岡山縣 服坂晋松 三十一年
三重縣 和田光次郎（三十一歳）

兵庫縣 大西精一（二十歳）
山口縣 大津閏太郎（十八歳）
大阪府 岡寛一
大阪市 岡田良一
同 修二
同 誠三
京都府下 渡邊玄林
兵庫縣 脇本市郎（拾九年）
兵庫縣 味田陽三
兵庫縣 和田長兵衛
兵庫縣 渡邊定太

鳥取縣 大島武代 二十八歳
三重縣 岡義之助 六十六歳
大阪市東區 小林竹之門
奥野吉三郎
大阪市東區北久太郎町一丁目 百般印刷處 和樂堂 揚新藏
滋賀縣 渡邊喜兵衛 四十二歳
山口縣 渡邊孝 二十四歳
富山縣 渡邊權次郎
大分縣 渡邊藤吉（三十四歳）
島根縣 和崎義路 五十歳

兵庫縣 片岡留吉
愛媛縣 渡邊クラ（三十三歳）
岡山縣 河本正二
京都市 片山定治郎 廿四才
佐賀縣 蒲原儀一郎（三十八歳）
兵庫縣 和田磯一（十七歳）
兵庫縣 加茂良
兵庫縣 壁谷友太郎
廣島縣 神田兼太郎
京都府何鹿郡桂常高等女學校
福井縣 加藤春夫 六十六歳

石川縣 辰野徳松

京都府北葛野郡第三高等小學校長 森市太郎

京都市第二錦林尋常小學校長 南井金兆郎

高田似瀧 五十三歳

兵庫縣 谷延昌（三十五歳）

兵庫縣 高橋武二郎 廿八才

大阪府 瀧本清一郎（三十歳）

香川縣 高橋松齊

和歌山縣 田原丹藏太郎（十八歳）

京都府 田村常有（五十七歳）

廣島縣 高橋吉之助（五十四歳）

大阪府 直崎儀右 四十七年

竹内繁藏（六十一歳）

島根縣 妻 イワ（六十一歳）

次男 榮藏（二十七歳）

妻 春子（二十一歳）

關東州 里栄山子 二十四歳

仝 父 宗軒 五十四年

仝 母 葉子 四十歳

東京府 高橋昌（五十一歳）

同 妻 精子（三十歳）

同 長男 太郎（十九歳）

關東州 谷村益三郎 三十二歳

京都市 留里あさ 四十五年

京都市 竹本蓮一 四十七歳

妻 慶 二十五歳

竹本巍一郎 二歳

竹村新蔵 三十一年

京都府 妻 久エ 三十年

長男 常雄 六年

兵庫縣 園田種吉 三十一歳

兵庫縣 園田遂 文久三年一月二十三

滋賀縣 塚本茂右衛門 四十九年

大阪市 辻おさこ（三十一歳）

廣島縣 土屋宣夫 廿歳

神戸市 櫻井八平太

山口縣 塚本小治郎（三十八歳）

香川縣 辻市之助

京都市 沖田雅吉 三十一年

大阪府 辻村伴吉（四十歳）

京都府 辻 巖 五十七

愛媛縣 妻島律太 二十七歳

大阪府 辻川昌三（六十四歳）

大阪市 津田傳彦

兵庫縣 沐田矢須 五十五年

大阪府 辻田計三（二十一歳）

滋賀縣 辻村太次 四十三年

鳥取縣 山本通松
大阪府 山本淳志 二十九才
滋賀縣 山田虎太郎（四十六歳）
山口作藏 三十四歳
神戸市 山田近慶
大阪市 矢野雄
兵庫縣 山崎禰磨
兵庫縣 山本常中
大阪市 藥王小彌太
大阪府 山口正太郎 十五才
大阪府 山口清一（二十才）

和歌山縣 山口憲雄 二十八才
兵庫縣 山西勘雄 三十才
廣島縣 山陰鈴雄
福井縣 山下慎太郎
山上茂樹
神奈川縣 安間幸太郎 廿六才
大阪市 山松友次郎
兵庫縣 山中藤兵衛
滋賀縣 矢野平四郎 五十年
兵庫縣 山本永太郎
大阪市 山口郡治
山口信之郎

兵庫縣 山口賢治郎
大阪府 安井喜之助 二十一歳
山口縣 妻 キサ 廿九才
長男 善太郎 六才
長府町 安尾左一 廿九才
滋賀縣 山内孫右衛門（六十八歳）
長男 宣一（十五歳）
和歌山縣 山野井俊章（三七）
長男 潔（七）
二男 洋（五）
三男 三良（三）
長女 八千代（九）
大阪市 安井武藏 五拾九年
兵庫縣 山本常治郎

大阪市 山本安太郎 三十八才
大阪市 矢代信治郎 二十九才
山形縣 山口清太郎（二十八歳）
大坂府 八尾猪五郎（廿五歳）
函館 矢代幸次郎
京都府 矢田常次郎（四十三歳）
京都府 山縣萬吉（三十四歳）
兵庫縣 山西德之兵衛
大阪府 安汀居翠香
山本延次郎 四十九歳
京都府 長男 彌太郎 廿貳歳
次男 昌彌 拾貳歳

大阪市 福嶋藤吉

京都市 藤井芳秀 三十三才

滋賀縣 福地喜兵衛 三十五歳

大阪府 福田進之助

佐賀縣 古賀小太郎（[illegible]）

兵庫縣 小西代一 十九年

廣嶋縣 兒玉一美（三十歳）

広嶋縣 兒玉亮巳 十九年

大阪府 小泉宗一

岡山縣 小林隆知

大阪府 小林義信 三十七歳

大分縣 小林勝之 五十一歳

大阪市 近藤健蔵 十一才

兵庫縣 小林俊吉

[illegible] [illegible]三男

大阪府 小池幸次郎 三拾貳歳

香川縣 小西雅次郎

長崎縣 小西巳代次 二拾歳

徳島縣 小畠兵平

長崎縣 駒田要人（五十歳）

廣嶋縣 小林藤松

兵庫縣 後藤富三郎（二十五歳）

大阪市 甲和隆之郎

兵庫縣 小山含二

大分縣 兒島基一 三十七歳

愛知縣 兒嶋清隆（廿二歳）

大阪府 近藤秀男（十三歳）

長野縣 小林省三（四十歳）

岡山縣 鳴澤清一（六十歳）

和歌山縣 小林作助（[illegible]歳）

兵庫縣 小西九二

大阪府 小山徳太郎（二十三歳）

大阪 島麗清之郎

兵庫縣 小池[illegible]

兵庫縣 小林茂雄

兵庫縣 小林幸治郎

香川縣 湖崎武吉 四十五歳

大阪府 近藤恒三

兵庫縣 児嶋源衛

鉄道院西部神戸駅 駅友会々長 児島秀次郎

岡山縣 小林豊治郎

兵庫縣 後藤新太郎（五十歳）

廣嶋縣 兒玉良亮（五十六歳）

同 長男利郎（二十歳）

大阪府 酒井直信

岐阜縣高等女學校

新潟縣 坂上彰吾（三十才）

和歌山縣 澤井忠雄

三重縣 北村謹太郎 拾九歳

大阪府 木村房治郎

山口縣佐波郡右田村 木梨幹 明治七年生

兵庫縣 木下佐市

兵庫縣 木村仲藏 十六年

佐賀縣 北川秀次 二十八歳

大阪市[illegible]第二[illegible]中學校 岸聖四郎

兵庫縣 木谷三之助

赤穂 木村清七 三十九才

香川縣 木村長十郎（五十二歳）

佐賀縣 木下隆（二十九歳）

岡山縣私立金光中學校寄宿舍圖書部

東京市 北村一郎（二十歳）

兵庫縣 岸本利吉

京都市京極尋常小學校長 建部[illegible]

大阪府 木村幸次郎

大阪市 木下常吉（三十四歳）

大阪府 木津川景

愛知縣 木下芳太郎 廿七歳

三重縣[illegible]郎 廿二[illegible]

貴田常次郎

兵庫縣 岸田軒造

兵庫縣 岸本信太郎

兵庫縣 木原藤太郎 三十七才

大阪市 岸田玉三郎 三十四歳

滋賀縣 北川善市 二十七年

赤穂 清原虎吉 五十四歳

大阪府 水谷億隣

山田市古市木村岩吉

廣島縣 木峯鹿之助

京都 岸野大吉

京都市 北中源三郎

京都府北[illegible]郡[illegible]義

兵庫縣 北之間政治郎

兵庫縣 菊本德松

兵庫縣 木山幸吉

熊本縣 北里雄平（三十歳）

同 妻 富美（二十歳）

同 長男 龍夫（三歳）

滋賀縣 北川元太郎（二十九歳）

同 妻 節子（二十[illegible]）

兵庫縣 東野桐三郎
福井縣 久貫修助 四十一才
大阪市 檜山宥藏
伊勢國二見浦 書河才助
兵庫縣 平尾光玄
島根縣 日森眞臣（二十六歳）
兵庫縣 平井光之臣
兵庫縣 兵庫島等國寶青年會
京都市 廣瀬市造
神戸市 樋上勇造
大阪府 廣野啓之助（四十四歳）

兵庫縣 廣岡富藏
大分縣 樋口安治（三十歳）
兵庫縣 平井學俊
廣島縣 廣瀬泰吉（四拾七年）
京都東山中學校
兵庫縣 樋口信雄
京都府 廣瀬五郎助（貳拾五歳）
大阪市 平野平兵衛 廿才
京都市 久田榮次郎（三十五歳）
兵庫縣 樋上與吉
大阪府 檜垣萬次郎 二十四歳

大阪府 平野信郎（三十三歳）
千代（三十三歳）
噴（三十四年）
京都西仁門 平田佐藏
岡山縣 森熊太郎（四拾歳）
島根縣 森脇村次郎
高知縣 森田葆光辭
大阪市 森川庄之助（四十才）
兵庫縣 森義之助
大阪市 森川仁助 三十八歳
高知縣 森本好太郎

高知縣 森下藏言
京都府 本咲尚之助（三十歳）
福岡縣 森可也（三十三歳）
大阪府 森義之 廿歳
大阪市桃園第一尋常小學校
大阪 森林（四十五才）
廣島縣 森永連作（三十歳）
兵庫縣 森垣千代子
鳥取縣 森井芳治（二十四歳）
高知縣 森瀧太郎 四拾貳歳
大阪府 森川留太郎

新潟縣 鈴木伊十郎
愛媛縣 杉 岩次郎
愛媛縣 菅 秀一 (二十二歳)
兵庫縣 澗屋久平
神戸市 諏訪山尋常小學校
兵庫縣 菅 音次郎
兵庫縣 鈴木平一
大阪府 末吉增孝 四十六年
岐阜縣 杉下元次郎 (廿七歳)
神戸市 澄川稲太郎
愛知縣 住田光一 (三十二歳)

石川縣 鈴木政吉
岩代 杉山儀助
箱根村 杉本六一
山形縣 須貝八郎
甲斐 諏訪忠郎
京都市 鈴木喜三郎 廿五年
兵庫縣 鈴木房太郎
日向國 鈴木愛助
越前 菅原福次
滋賀縣 鈴木鉄次郎
兵庫縣 杉原信三郎

兵庫縣 杉生安造 二十三年
備後 隅谷元勝
大阪府 簀川潛匿 (廿歳)
兵庫縣 杉本 憂
大阪府 鈴木和三郎 六拾参年
北海道 須賀秀一
東京府 巣飼權十
京都府葛野郡朱雀野尋常小學校
京都府 杉本啓次郎 (二十歳)
京都府葛野郡 朱雀野尋常小學校 中溝寿助
兵庫縣 鈴木毅一郎

青森縣 鈴川喜吉
京都府 杉野傳七
相模國 杉山萬七
静岡縣 杉山吉三郎
土佐國 角谷秀一
香川縣 鈴木金次郎 (四十七歳)
兵庫縣 須磨種司
兵庫縣 杉村勇次郎
兵庫縣 鈴木平次郎 (四十四歳)
岡山縣 杉井亮善
大阪府 末吉增孝 四十六年

相模國 桃田重一郎

北海道 橋本市助

岩代 伊藤深稲

大阪市 宮川仁吉 四十八年

愛知縣 吉田三太郎

大阪市 森長之郎

神奈川 青山三平

磐城國 安田久松

石川縣 齋藤仁助

大阪市 [illegible]

福岡縣 松村一郎

釜山港 左光村薫一

大阪市 小泉鶴之助

茨城縣 元村常八

臺湾 安村六三郎

青森縣 紫村徐平

岐阜縣 天野源二

兵庫縣 谷口晋 四拾弐歳

小樽国 恒河代助

宮城県 長田五郎

京都府 古田源八

大阪市 中谷徳太郎

山口縣 増田權三

兵庫縣 和田市良右エ門

兵庫縣 兵宅文良右エ門

大阪市 中来田錦太郎

秋田縣 尾野秀一

山梨縣 鷲山友助

大阪市 高麗清次郎 六十年

大阪市 中崎清太郎

木崎愛吉

神奈川縣 志村撰藏

大阪市 井上和三郎

神戸市 入江一雄 十二年

大阪市 馬場國太郎

兵庫縣 南崇太郎

新潟縣 猪苗代軍次

日向国 半田十兆 (十七才)

大阪府 河井榮一

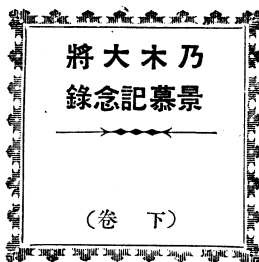
滋賀縣 小野拾次郎

福井市 谷田事三

兵庫縣 増田龍二

兵庫縣 田井與之助

兵庫縣 白崎潤藏

大正二年六月十二日印刷
大正二年六月十五日發行（第八版）

乃木大將景慕記念錄

（卷　下）

編輯兼發行者　乃木大將景慕修養會
右代表者　岡本定吉
東京市京橋區南鍋町一丁目六番地

印刷人　佐久間衡治
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京市京橋區南鍋町一丁目六番地
乃木大將景慕修養會
振替貯金東京一六九〇六番
同　大阪一九四六七番
電話新橋千七百八十二番
同　三千四百三番

（植木製本所釘）